

---

# 遊戯王5D's-本当の支配者

a-k-c

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王5D's - 本当の支配者

### 【Nコード】

N8832T

### 【作者名】

a - k - c

### 【あらすじ】

遊戯王5D'sの93話、WRGP戦からが物語の舞台となる。

突如チーム5D'sの前に現れた謎の男、ストーム。

ただの男にないように見えるが、その正体は、一体？

そして、チーム5D'sはチームニューワールドを倒し、この世に平定をもたらす事ができるのか？

また、イリアステルは、本当の敵なんだろうか？

この作品は、遊戯王5D'sのオリジナルキャラクターを多数含めています。ストーリー自体は全く別物であります。

## 第1話・奇抜な格好の男

遊星「今日から俺たちは、チーム5D・sだ！」  
チーム5D・s「おーっ!!」

遊星達のガレージで、遊星、ジャック、クロウ、アキ、龍亞、龍可、ブルーノは手を合わせ、そう叫んだ。

間もなくWRGP、ワールドライディングデュエルグランプリが始まる時期であった。

彼らチーム5D・sは、イリアステルの野望を打ち砕くためにチームを結成したのであったが、

彼らにとって、いや、人類にとって、本当の敵は、イリアステルではなかったのだ。

一方、イリアステルの三皇帝、プラシド、ルチアーノ、ホセは例によって異空間にてまた3つのイスに座り、サーキットが完成するのを今か今かと待ち構えている。

ルチアーノ「あーあ。いつになったら完成すんのかね、サーキットって？」

ホセ「焦るでない、ルチアーノ。神は…。」

そう言いかけた瞬間、ホセの口がいきなり止まった。

ブラシド「ん？どうしたホセ？」  
ホセ「こいつを見る…。」

ホセは現実世界を映している画面のようなものを指さし言った。その画面のようなものには、20歳前後と見られる男の姿が映っている。

彼は銀色のマントを着用し、白のチノパンツをはいていて、真っ白の、奇抜な格好をしていた。

ブラシド「こいつがどうしたんだ？」

ホセ「こいつは…。」

今まさに、その奇抜な格好をした男が、ポツポタウンの噴水広場を通り抜けて行ったところだった。

コンコン

クロウ「ん？誰だ？」

ジャック「チーム5D・Sが結成した瞬間だというのに、客か。」

ブルーノ「はい。」

ブルーノが扉の鍵をあけて、取っ手を押すと、目の前に、奇抜な格好をした男が立っていた。

チノパンツの上に見える黒いTシャツを除けば、ほぼ真っ白な格好であった。

チーム5D・S「……………」

ブルーノ「あ…あの…どちら様で…？」

？「どうも、こんにちは！俺の名前はストーム！」

クロウ「押し売りか。お断りだぜ。これやるから、帰りな。」

押し売りには冷たいクロウ。いつも押し売りを追っ払うのはクロウの役目なのだ。クロウは、ストームと名乗った男に「押し売りゴブリン」のカードをあげて、追いつ返そうとしたが…

ストーム「ちよつと待てクロウ！」

クロウ「ゲッ!?俺の名前を知ってやがる!?こいつは厄介な押し売りだぜ。」

ストーム「俺は押し売りしにきたんじゃねえ！」

クロウ「違うのか？」

龍可「クロウ!疑いすぎよ!失礼でしょ！」

龍亞「おーっ、龍可、かつこいいねえ〜っ！」

龍可「龍亞！」

双子である龍亞と龍可。双子ではあるのだが、龍可の方が龍亞よりずっと大人っぽく見えるものである。

ジャック「それで?貴様は何の用だ？」

ストーム「俺は、不動遊星!お前に用がある！」

遊星「俺に？」

ストーム「ああ。ちよいとライディングデュエルしようぜ！」

遊星「ライディングデュエルだと？」

ジャック「なるほど。貴様、WRGP予選で当たる相手だな?所属

チームはどこだ!?小賢しい真似をしておって！」

ストーム「ちげえよ!俺はチーム部門には出ねえよ！」

遊星「チーム部門には…?ということは、個人出場か？」

WRGPは、チーム戦だけでなく、個人戦とキッズ戦も設けている。キッズ戦はDホールを所持していな子ども達のために設けられたもので、スタンディングリーグとDボードリーグが設けられている。

一方個人戦は、その名の通りチームを組まず、個人で戦うデュエリのリーグ。もちろん、こちらDホイラーでなければ出場することはできない。

チーム戦と個人戦もしくはキッズ戦を両方出場することも可能だが、両方出場するデュエリストは各チーム1人だけとなっている。

ストーム「そうだ。これが証拠よ。」

龍亞「あ。出場登録控え。」

クロウ「なんで遊星とデュエルを…?」

クロウは不思議そうにストームを見て聞いた。先ほどの興奮していた時とは違い、少し真面目な雰囲気だった。しかしストームはそれに気圧されずに笑って答えた。

ストーム「どうしてもさ。WRGPが始まったら忙しくてそれどころじゃなくなるだろうしな。」

クロウ「…。」

ネオ童実野シティの郊外にある割と小さなサーキットを借りて、2人はデュエルを行うことにした。

他のチームの人たちは、観客席から2人のデュエルを見ている。

2人「フィールド魔法、スピード・ワールド 2、セット・オン！」

エンジンを吹き鳴らす2台のDホイール、赤色のシグナルも目に見える。

ブルーノ「ストームのDホイールって、派手だなあ。」

龍亞「でもパワーなら、遊星のDホイールの方が上だよ！絶対！」

ストーム「いくぜ遊星…。」  
遊星「ああ…。」

今、シグナルが青に変わった。

2人「ライディングデュエル・アクセラレーション！」

遊星の赤色のDホイール、ストームの金色のDホイールが同時にスタートした。

マニュアルモードでライディングデュエルをする場合、第一コーナ―を制した方が先攻を取れる。  
非常に重要な駆け引きとなる。

遊星「フツ…。」

ストーム「させんぞ！」

遊星のDホイールが先にコーナーに差し掛かったが、ストームのDホイールが、遊星より内側にラインを取り、遊星のDホイールを内側から抜かした。

アキ「遊星！」

ジャック「あの男、やるな。」

ストーム「遊星！先攻は貰ったぜ！」

遊星「くっ…。」

2人「デュエル！！」

不動遊星：LP4000

ストーム：LP4000



ストーム「俺のターン！」（6） これ、手札枚数です。

遊星「奴は一体どんな戦術を…？」

ストーム「俺は仮面竜マスケドドラゴンを守備表示で召喚！」

仮面竜：守備力1100

ストーム「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

遊星「仮面竜。ドラゴンデッキか？俺のターン！」（6）

不動遊星：SPC1

ストーム：SPC1

遊星「俺はスピード・ウォリアーを攻撃表示で召喚！」

スピード・ウォリアー：攻撃力900

遊星「スピード・ウォリアーで、仮面竜を攻撃！さらにスピード・ウォリアーは、召喚に成功したターンのバトルフェイズ時のみ、攻撃力が2倍になる！」

スピード・ウォリアー：攻撃力900 攻撃力1800

遊星「ソニック・エッジ！」

ストーム「フツ。だが、仮面竜が戦闘で破壊された時、自分のデッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。仮面竜自身も攻撃力1500以下！よって俺は、デッキから仮面竜を特殊召喚！」

仮面竜：攻撃力1400

遊星「カードを1枚伏せて、ターンエンド!」(4)

スピード・ウォリアーの攻撃は確かに成功したものの、新たに仮面竜を召喚されたのでは、遊星は劣勢に立たされているということはチーム5D'sのメンバーと遊星自身、理解していた。

スピード・ウォリアー：攻撃力1800 攻撃力900

ストーム「俺のターン!」(4 5)

不動遊星：SPC2

ストーム：SPC2

ストーム「俺は仮面竜で、スピード・ウォリアーを攻撃!」

遊星「ぐああつ!スピード・ウォリアーっ!」

不動遊星：LP4000 LP3500

龍亞「遊星っ!」

遊星「ぐっ...」

ストーム「おいおいどうした遊星?そんなものじゃ俺は倒せないぜ?ターン終了。」(5)

遊星「俺のターン!」(5)

不動遊星：SPC3

ストーム：SPC3

遊星「俺はチューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚!」

ジャンク・シンクロン：攻撃力1300

遊星「ジャンク・シンクロンの召喚に成功した時、自分の墓地のレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する事ができる！蘇れ、スピード・ウォリアー！」

スピード・ウォリアー：守備力400

龍亞「なんだかスピード・ウォリアーって忙しいよね。攻撃したりやられたり蘇ったり…。」

ジャック「それだけ信頼されているということだ。」

遊星「レベル2のスピード・ウォリアーに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

集いし星が、新たな力を呼び起こす。光射す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャンク・ウォリアー！

ジャンク・ウォリアー：攻撃力2300

遊星「ジャンク・ウォリアー！仮面竜を攻撃！スクラップ・フィスト！」

ストーム「へっ。だが仮面竜の効果があるんだぜ？戦闘で破壊された時、攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを1体特殊召喚できる！」

ストーム：LP4000 LP3100

ジャック「だが、攻撃力1500以下なら、さっきのようにはなら

ないハズだ！」

ストーム「本当にそう思ってたのかい？俺はデッキから、神竜 ラグナロクを特殊召喚！」

神竜 ラグナロク：攻撃力1500

アキ「神竜 ラグナロク？」

龍亞「なんだよ。通常モンスターじゃん！」

遊星「…。ターンエンド。」（4）

遊星の額から滴る汗。遊星にはなんとなくわかっているのだろう。なぜ、ストームが、神竜 ラグナロクを特殊召喚したのか…。

ストーム「俺のターン！」（6）

不動遊星：SPC4

ストーム：SPC4

ストーム「俺はこの時を待っていたぜ。S p・スピード・フュージョンを発動！自分のスピードカウンターが4つ以上ある時、手札がフィールドから、融合素材モンスターを墓地に送り、融合モンスターを自分のエクストラデッキから特殊召喚する！俺は手札のロード・オブ・ドラゴンと、フィールドの神竜 ラグナロクを融合！」

ジャック「融合だと？」

2体のモンスターが交わり、1つの渦となって消えた後、カードイラストから、モンスターが飛び出てきた。

ストーム「出でよ、竜魔人 キングドラグーン！」

竜魔人 キングドラグーン：攻撃力2400

ストーム「さらに竜魔人 キングドラグーンの効果により、手札からドラゴン族モンスターを特殊召喚する！来い、タイラント・ドラゴン！」(3)

タイラント・ドラゴン：攻撃力2900

観客席から「おおっ」という声が聞こえた。しかしそれはどちらかと言えば喜びの方ではなく、戦きの方だった。

遊星「くっ！」

ストーム「さあ遊星。ドラゴンの息吹をくええ！タイラント・ドラゴンで、ジャンク・ウォリアーを攻撃！」

遊星「ぐあつ。」

不動遊星：LP3500 LP2900

ストーム「まだまだ！くええ、キングドラグーンの攻撃！トワイライト・バーン！」

遊星「そうはいかない！畏発動！ガード・ブロック！戦闘によって発生する自分へのダメージを0にし、カードを1枚ドロウする！」

(4 5)

ストーム「なんとかダイレクトアタックを受けずに済んだな。俺はこれでターンエンドだ。」(3)

遊星「俺のターン！」(6)

不動遊星：SPC5

ストーム：SPC5

ジャック「遊星。」

2体の上級モンスターを前に、チーム5D'sの面々は手に汗握る  
思いだった。

だが、どんなピンチも遊星は切り抜けてきたとも、みんなは思っ  
ていた。

遊星「Sp・エンジェル・バトンを発動！スピードカウンターが2  
つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロし、手札を1枚墓地  
に送る！」

ストーム「来たなエンジェル・バトン。」

遊星「さらに手札から、デブリ・ドラゴンを守備表示で召喚！」

デブリ・ドラゴン：守備力2000

遊星「このカードの召喚に成功した時、墓地から攻撃力500以下  
のモンスターを特殊召喚できる！」

ストーム「お前が召喚したモンスターの中に、攻撃力500以下の  
モンスターはいない。ということは！」

遊星「そう。俺が復活させるのは、今エンジェル・バトンの効果で  
墓地に送ったモンスター。蘇れ！レベル・ウォリアー！」

レベル・ウォリアー：攻撃力300

遊星「さらに俺は手札から、ワンショット・ブースターを特殊召喚  
！」(4)

ワンショット・ブースター：攻撃力0

観客席から「おっ！」という声が聞こえた。今度は先ほどの驚愕の方ではなく、歓喜の方に聞こえる。

ストームはその一方で、この展開は！と、驚きの声を上げていた。

遊星「ワンショット・ブースターは、モンスターの召喚に成功したターン、手札から特殊召喚する事ができる！レベル1のワンショット・ブースターと、レベル3のレベル・ウォリアーに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

集いし願いが、新たに輝く星となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

遊星「さらにSp・パワー・ブースター発動！」

ストーム「パワー・ブースター!?」(3)

遊星「パワー・ブースターは、スピードカウンターが5つ以上ある時、シンクロモンスター1体は、バトルフェイズ中に2回攻撃できる。そして2回目の攻撃では、攻撃力が1000ポイントアップする！」

ジャック「これで2体のモンスターを殲滅できるぞ！」

遊星「行け、スターダスト・ドラゴン！キングドラグーンを攻撃！シューティング・ソニック！」

キングドラグーン「うおああああ！」

ストーム「チッ！」

ストーム：LP3100 LP3000

遊星「そしてスターダスト・ドラゴン！2回目の攻撃！シューティング・ソニックッ！！」

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500 攻撃力3500

ストーム「ぐあっ！…やる！」

ストーム：LP3000 LP2400

龍亞「やったーっ！2体のドラゴンを倒したーっ！」

アキ「さすがだわ、遊星！」

ブルーノ「やっぱり遊星は強いよ！」

だが、遊星には見えていた。遊星の前を走るストームの薄笑いを浮かべた顔が。

遊星「…。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(2)

薄笑いといっても、決して気味の悪い笑い方とは言えなかった。まるで、口にこそしていないが、「ありがとう。そいつを倒してくれ。」と言っていたようだった。そして、

残念ながら、その予感は的中した。

ストーム「この瞬間、エンドフェイズ時に…トラップカード発動！

エクストラ・レガシー！」

遊星「エクストラ・レガシー！？」

ストーム「エクストラデッキから特殊召喚されたモンスターが破壊



されたターンに発動できる。自分フィールドに2体のレガシートークンを特殊召喚する！」

レガシートークン：守備力0

ストーム「俺のターン！」（4）

不動遊星：SPC6

ストーム：SPC6

アキ「2体のトークンを召喚？」

龍可「一体何のために？」

ジャック「おそらく、リリース要員だろう。」

ストーム「ご名答！そして俺が呼ぶモンスター、見て驚けよ…。」

ストームはワザと勿体ぶっているのは皆がわかっていることだった。しかし、その勿体ぶり方の上手さから、皆が必ず驚愕するであろう。上級モンスターを呼ぶことはわかった。

ストーム「2体のトークンを生け贄に！出でよ！ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍！！！」

遊星「なんだと!?!」

ジャック「バカな！」

ブルーノ「ブルーアイズ・ホワイトドラゴン!?!」

青眼の白龍：攻撃力3000

（次回につづく）

次回の最強カード：ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍



## 第2話・戦慄のストーム（前書き）

第2話より、〈今日の最強カード〉と、〈次回の最強カード〉を紹介しようと思います。

最強カードによって、次回の内容の想像するのもありでしょう。

## 第2話 - 戦慄のストーム

不動遊星 vs ストームの続き

不動遊星

- ・ LP 2900
- ・ 手札 2枚
- ・ (モンスター) スターダスト・ドラゴン (ATK 2500)
- ・ (魔法・罫) 1枚
- ・ SPC 6

ストーム

- ・ LP 2400
- ・ 手札 3枚
- ・ (モンスター) ブルーアイズ・ホワイトドラゴン 青眼の白龍
- ・ (魔法・罫) なし
- ・ SPC 6

ストーム「出でよ、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍！」

青眼の白龍：攻撃力3000

ジャック「なんだと!?!」

クロウ「バカな!?!青眼の白龍だと…!?!」

今遊星の目の前に立ちはだかる青き瞳の白き龍は、紛れもなく青眼の白龍だった。青眼の白龍は伝説のデュエリスト、海馬瀨人のみが所有するはずのカードであり、ストームが所有していることに、チーム5D'sのメンバーは驚きを隠せずにした。

ストーム「急に静かになったなあ！」

ジャック「貴様！俺はレッド・デーモンズをコピーした連中と戦っているのだ！貴様、コピーカードだろうっ！？」

ストーム「生憎、俺はコピーカードは嫌いだな！行くぞ！ブルーアイズの攻撃！」

遊星「…！」

青眼の白龍が遊星の方に目を向け、口を開け、そこに光線が溜まり始めると、遊星は戦慄を覚えた。

ブルーアイズの戦慄を…。

ストーム「滅びのバースト・ストリーム！」

遊星「スターダスト！」

スターダスト・ドラゴンの攻撃力は2500。ブルーアイズには太刀打ちできない。

遊星「ぐわっ！」

バースト・ストリームによって、激しく横に揺れる遊星のDホイール。

不動遊星：LP2900      LP2400

ストーム「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」(1)  
遊星「くっ。俺のターン！」(3)

不動遊星：SPC7  
ストーム：SPC7

ジャック「本物なのか…。あのブルーアイズは…？」

アキ「ブルーアイズが出た事も驚きだけど、状況的にまずいわね。  
ここに来て攻撃力3000のモンスターが出ちゃうなんて。」

遊星「俺はシールド・ウイングを守備表示で召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(1)

シールド・ウイング：守備力900

ストーム「俺のターン！」(2)

不動遊星：SPC8  
ストーム：SPC8

ストーム「シールド・ウイングか…。あいつは確か1ターンに2度までバトルでは破壊されないんだっただが俺はそういうのが好きでね…。」  
遊星「的…？」

的という言葉の方が、遊星に嫌な予感をさせた。

クロウ「あいつ、シールド・ウイングを的って…。」

ストーム「永続暴発動！竜の逆鱗！」  
遊星「なんだと！」

龍亞「なんなの、あのカード!?」  
龍可「竜の逆鱗は、ドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時に、貫通ダメージを与えるカードよ。」

貫通ダメージとは、一般的に守備モンスターを攻撃した時、攻撃モンスターの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていた時に、その超過分のダメージの事である。  
もちろん通常の攻撃では発生せず、そのような効果を持ったカードが現れた時にのみ発生するダメージだ。

ストーム「さらに俺は、アックス・ドラゴニートを攻撃表示で召喚！」

アックス・ドラゴニート：攻撃力2000

ジャック「まずい！あのモンスターもドラゴン族だぞ！」

ストーム「アックス・ドラゴニートで、シールド・ウイングを攻撃！」

持っている斧を勢いよく振り下ろすアックス・ドラゴニート。しかし、ガキーンという音がして、シールド・ウイングの攻撃が弾かれただけだった。もちろん、竜の逆鱗により、ダメージは通るのだが…。

ストーム「アックス・ドラゴニートが攻撃した場合、ダメージ計算終了後に守備表示となるが、そんなことは関係ねえな。」

不動遊星：LP 2400 LP 1300

アックス・ドラゴニユート：守備力1200

ストーム「そしてとどめだ！滅びのバースト・ストリーム！」

遊星「畏発動！スピリット・フォース！戦闘によって発生する自分へのダメージを0にし、自分の墓地に存在する守備力1500以下の戦士族チューナー1体を手札に加える！俺は、ジャンク・シンクロンを手札に加える！」（2）

ストーム「ほう。避けたか。だが畏発動！ツイン・トリック！レベル7以上のモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊できなかったバトルフェイズ終了時、同名のモンスターを自分のデッキから特殊召喚できる！」

ブルーノ「同名のモンスター！？」

クロウ「まさか…。」

今ストームのフィールドに存在するモンスターはアックス・ドラゴニユートと青眼の白龍の2体。

しかしアックス・ドラゴニユートはレベル4のモンスター。さらに攻撃は成立した。

つまり、ストームの召喚するモンスターは決定していた…。

ストーム「出でよ、ブルーアイス・ホワイトドラゴン青眼の白龍！」

クロウ「2体目だとお！？」

龍可「これじゃ、耐えられないわ！」

龍亞「遊星…負けちゃうの…っ！？」

遊星の前に現れた2体のブルーアイス。先ほどの戦慄が、さらに深く感じられた。



だが、そびえ立つ2体のブルーアイズを前に、遊星は燃えていた。これが、あの伝説のデュエリスト、武藤遊戯が戦ったブルーアイズ。目の前にいるデュエリストは海馬瀬人ではないが、ブルーアイズである事には変わりなかったのだ。

遊星「…フツ。」

ストーム「遊星。デュエルを楽しんでんのか？」

遊星「ああ…。ブルーアイズが2体出てくるなんて。まるであの遊戯さんにでもなったかのようなだ。」

ジャック「遊星。何を呑気なことを…。」

遊星「俺の…ターン！」(3)

不動遊星：SPC9

ストーム：SPC9

遊星「スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを4つ取り除く事で、手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！」(Sp-ダッシュ・ピルファー)

不動遊星：SPC9 SPC5

ストーム「フツ、苦し紛れだな。遊星。」

ストーム：LP2400 LP1600

ストーム「だが知ってるんだぜ？お前の手札には、ジャンク・シンクロンがいる。けどたとえ召喚しても、もうシンクロ召喚はできねえだろう？」

遊星「俺の今見せたスピードスペルを見ていなかったのか？ストーム？」

ストーム「今見せたスピードスペル……！しまっ……」  
遊星「Sp・ダッシュ・ピルファーを発動！スピードカウンターが4つ以上ある時、相手フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体のコントロールをターン終了時まで得る！俺はアックス・ドラゴニユートのコントロールを得る！」

ストームがふと後ろを向くと、遊星はメットの下で笑っていた。純粹にデュエルを楽しんでいるから笑っているようにも見えるが、勝利を確信して笑っているようにも見える。

こういう状況では不思議なもので、嫌なように解釈すればする程、それが現実味を帯びてくる。

ストーム「くっ。」

遊星「そして俺はジャンク・シンクロンを召喚！レベル4のアックス・ドラゴニユートに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光射す道となれ！シンク口召喚！吼えろ、ジャンク・バーサーカー！

ストーム「ジャンク・バーサーカーだと。」

ジャンク・バーサーカー：攻撃力2700

遊星「ジャンク・バーサーカーの効果発動！自分の墓地のジャンクと名の付くモンスターを除外して、そのモンスターの攻撃力分だけ相手モンスターの攻撃力を下げる！俺はジャンク・シンクロンを除外！」

ストーム「バカな！」

青眼の白龍：攻撃力3000 攻撃力1700

ジャック「おお！これで青眼の白龍が倒せるぞ！」

龍亞「いっけー、遊星！」

遊星「行け！ジャンク・バーサーカー！」

ストーム「うおおおっ！」

ストーム：LP1600 LP600

遊星「さらに罠カード発動！シンクロ・デストラクター！」

ストーム「なんだと！」

遊星「シンクロモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分の半分のダメージを与える！お前の青眼の白龍の攻撃力は1700だった！よって、850ダメージを受けてもらう！」

ストーム「なっ…ぐわああああ！」

ストーム：LP600 LP0

ストームのDホイールが急停止した。大半のDホイールは、ライディングデュエルで敗北すると、自動で停車する仕組みとなっている。ストームはメットを外し、頭を素早く振ってから、微笑んだ。

ストーム「楽しいデュエルだったぜ、遊星！」

遊星「ああ、俺もだ。」

ストーム「見事だな、2体のブルーアイズがいても、焦らずに俺のライフポイントを0にしてくるなんてな。」

遊星「いや、俺はあのターンでできることをしたまでだ。」

観客席に近いところでDホイールを停車させた2人だったので、チームのメンバーが観客席の最前列に来て、2人に話しかけた。

クロウ「おいストーム！」

ストーム「おう、クロウ。どうした？」

クロウ「どうしたじゃねえよ！どうしてお前、ブルーアイズ・ホワイトドラゴンを持ってんだよ！？」

いきなり単刀直入に質問されたストームだったが、この質問が来ることは、ストームにも当然わかっていた。一般的に、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍は伝説のデュエリスト、海馬瀬人しか持っていないカードと認識されているから、それを自分が持っていることに、何の疑問も持たれないなんてことはあり得ないだろうと、思っていたのだ。

ストーム「そりゃ…ペガサス会長からもらったからだよ。」

チーム5D's「はあっ!？」

ペガサス・J・クロフォード。デュエルモンスターズの生みの親であり、「インダストリアルイリミュージョン社」の名誉会長。

その彼から直々に青眼の白龍をもらったと聞けば、驚かずにはいられない。

龍亞「いいな〜っ！」

遊星「だが、今ペガサス会長は病気で療養中の身だというが…。」  
ストーム「ああ。だから俺が幼い頃にもらったのさ。」

アキ「幼い頃!？」

ストームはフィールドにあったブルーアイズと、デッキの中のブルーアイズを取り出し、合計3枚のブルーアイズをチーム5D・sに見せた。自慢げな顔と共に…。

ストーム「どや!」

龍亞「うわー、かつこいい!」

龍可「3枚持つてるなんて…。ってことは、まさか…?」

ストーム「へっ、察しがいいな。俺はあのカードも持つてるんだぜ。」

彼はデッキフォルダの横に取り付けてあるエクストラデッキに手を伸ばし、その中から青眼の究極竜というカードを取り出した。

ブルーノ「アルティメットドラゴンも持つてるの!？」

クロウ「これもペガサス会長からもらったのか？」

ストーム「そうよ。」

ジャックがフツ!と鼻で笑って言った

ジャック「攻撃力3000のモンスターを3体持つてるだけでどうなるというのだ、ストーム?今の世の中では、攻撃力3000のモンスターなどごまんというわ!我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴンを見るがいい!」

ストーム「へっ、わかってねえなあジャック。格好良さが大事なんだよ!なんだレッド・デーモンズ・ドラゴンって?略せばレモンじやねえかつ!」

ジャック「貴様!おのれ取り消せ!謝罪しろっ!」

アキ「ちよつと、2人とも…!」

ジャックをからかうとすぐにやけになってジャックと2人で揉めあう。これ自体はよくある構図なのだが、からかう側がいつもはクロウ。今回はストームとなっている。

慣れてはいる事だが、毎度毎度、遊星やアキは呆れているのだった。

ジャック「フン！」

ストーム「ハン！」

ジャック「貴様…。」

ストーム「まあまあ！…おっと、俺はそろそろ戻らないとな、俺はこう見えても仕事があって忙しいからな！」

仕事をしていないジャックにとって、一番聞きたくない台詞だった。

龍亞「ちょっと！どうやってペガサスからもらったのさ？」

ストーム「その話はまた今度な！」

と言って、ロクな挨拶もせず、颯爽とサーキットを出ていった。

ブルーノ「また妙な奴が出てきちゃったね。」

龍亞「でも悪い人じゃないんだからいいじゃんいいじゃん！」

遊星「いや、そうとは限らない。」

クロウ「なんだよ遊星、疑ってんのか？」

遊星「いや、俺も奴を悪い奴と決めつけている訳じゃない。ただ…これが…。」

遊星が右腕のライディングスーツの袖を捲ると、赤い光がともっていた。

そう、赤き龍の痣である。

アキ「赤き龍の痣!？」

と言って、同じく赤き龍を持つジャック、クロウ、アキ、龍可が右腕を見ると、やはり赤き龍の痣が光を放っていた。

遊星「ストーム、あいつは一体…。」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍

通常モンスター

レベル8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻撃力3000 / 守備力2500

高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。

どんな相手でも粉碎する、その破壊力は計り知れない。

<次回の最強カード>

サファイア・ソルジャー

効果モンスター

第3話・WRGP開幕！ チーム5D・S VS チームラゲジュアリー（前書

実を言うと自信があまりなくて、会話の前に誰が台詞を言ったかを  
書いていたのですが…。

それがなくても誰が言ったかわかるという意見をいただきました。

そのため今回はなしにしてみようと思います。

感想をくださって、ありがとうございました。



第3話・WRGP開幕！ チーム5D・S VS チームラグジュアリー

遊星達のガレージ。中にいるのは遊星、ジャック、クロウだけである。

まだ朝日も昇っていない頃、遊星が一人、机の上でデッキを編集している。

「遊星。」

「クロウ…。」

「眠れねえのか？」

「まあな…。」

クロウは寝ぼけ眼で自室から出て来て、食器棚に手を伸ばし、ガラスのコップを取り出し、水道水を一杯飲んでから遊星に言った。

「まあ、明日が初戦だからな。緊張しちまうのはわかるけどよ、寝といた方がいいぜ？」

「ああ…わかつてるんだが…。」

「チームラグジュアリーは強豪チームだぜ？」

「ああ。」

遊星の目を見れば、遊星がまたイリアステルの事を考えているというのは、クロウにとって容易にわかったが、それを敢えて聞かず、「あんま根つめんなよ」とだけ言って、自室に戻った。

「…。」

「さあ！第一ワールドライディングデュエルグランプリ！いよいよ開幕だ！」

雲一つない空を見れば、まるでお天道様が打ち合わせをしたかのようだと感じる人は多いだろう。

控え室で緊張しているチーム5D'sとは打って変わって、チームラグジュアリーはデュエルグランプリには数回出場しているためか、笑みを浮かべている者もいる。

ジャックは一つ疑問を覚えた。ここはメモリアルサーキット、デュエルオブフォーチュンカップが行われたスタジアムだが、遊星が以前にデュエルした時と比べ、3倍程の大きさがあるように見える。自分が緊張しているから、大きく見えるのかと初めのうちは思っていたが、それにしても大きすぎるようであるが…。

「おい遊星。メモリアルサーキット、こんなに大きかったか？」

「メモリアルサーキットは東と西があったんだが、一つに統合されたらしい。」

「なんだと!？」

そこで龍亞が口をはさんだ。

「でもささ、どうしてこんな大きいサーキットにする必要があったのかなあ？これじゃ、5人や6人くらいでデュエルできちゃうよ！」

(5人や6人!？まさか…!？)

「ではルールの説明をしよう！WRGPは知つての通りマニュアルモードで行う、3対3のチーム戦！しかし、それは勝ち抜き戦ではないぞーっ！」

「えーっ!？」

会場からどよめきが聞こえる。3対3のチーム戦と言われれば、まさか6人でもってデュエルレーンでデュエルするとは思えない。さらに、この事実は今言われたものであり、試合形式についてはお楽しみ、とDホイラーは言われたのだ。

「それぞれのチームメンバー3人全員、つまり6人がそれぞれのコースにセット。そしてライディングデュエルを行う!システムとしては負け抜けシステムであり、負けてしまったDホイラーは退場!」

と、長々とMCがデュエルの説明をしていたが、箇条書きにすればこんな様になる…。

- ・先攻を取れるのは第一コーナーを制したメンバーのいるチーム。
- そのチームの順番はチームエントリー表に登録していた先発 中堅 大将の順。
- ・全てのプレイヤーは一巡目に攻撃することはできない。
- ・スピードカウンターが溜まるのは二巡目以降。
- ・スピードカウンターはチームで12個。各々のプレイヤーで12個ではない。
- ・ピットインしているDホイールがいる場合、相手のスタンバイフェイズ時に乗るスピードカウンターの数は、その台数だけ増加する。

それ以外はほとんど正規のライディングデュエルと同じ。

「それでは選手の入場と行こう!予選切つての好カード!チーム5

D・s！圧倒的パワーで敵を薙ぎ払う元キング、ジャック・アトラス！疾風の如く駆け、敵を狩る、クロウ・ホーガン！そして、フォーチュンカップ優勝者、ニューキング、チームリーダー、不動遊星！」

3人がスモッグの中から現れ、観客に向かって手を振っていた。ジャックはこの類のパフォーマンスには慣れてはいる（最近はやってもいないが）ものの、遊星とクロウは初めてである。

一応パフォーマンス指導のスタッフから教授されるのだが、それも2人はぎこちない。

しかし、もちろんというべきか、会場とピットブースからは歓声が聞こえる。

「遊星ーっ！」

「クロウーっ！」

「アトラス様ーっ！」

会場にはサテライトの子どもや、ラリー、氷室や矢薙のじいさん、深影やカーリーやステファニーと言った面々が並んでいた。

「ではチームラグジュアリーにも入場してもらおうっ！チームラグジュアリーは、ヨーロッパ大会、南アメリカ大会に出場し、優勝を遂げたチーム！個人戦にも出場している、トパーズ！赤き輝きで見るとの全てを魅了し、誘惑する、ルビー！青き輝きで全ての敵を粉碎する、チームリーダーサファイア！」

チームラグジュアリーの面々もスモッグの中から現れ、観客に向かって手を振った。まるでチーム5D・sに見せつけるように、自慢げな顔で…。サファイアに至っては観客に投げキッスをしている。

と、女Dホイーラーのルビーが遊星の目の前に立ちはだかった。

「あなたが不動遊星さんかしら…。」

「ああ…、お互いの持てる力を全て出し切ってぶつかり合おう！」

「フツ、そうね…。楽しみにしているわ。」

その様子を見ていたジャックが鼻で思い切りフン！と言った。

「チームラグジュアリーだか何だか知らんが、俺のレッド・デーモンズで粉碎してくれる！」

スタートラインに着いた6台のDホイール。まるで運動会で行う徒競走のようなポジションだ。

シグナルが今…赤から青に変わったところ…つまりWRGP開幕である。

6人「ライディングデュエル・アクセラレーション！」

不動遊星     : LP 4 0 0 0  
ジャック     : LP 4 0 0 0  
クロウ       : LP 4 0 0 0

V S

サファイア   : LP 4 0 0 0  
ルビー       : LP 4 0 0 0  
トパーズ     : LP 4 0 0 0

「各車一斉にスタート！」

「へっ、これがチーム戦よっ！」

サファイアがそう言うと、Dホイールをジャック側に傾け、ジャックの動揺を誘った後、クロウ側にもDホイールを傾けた。

「うおっ！」

「うわっ！」

「ジャック、クロウ！」

今度はルビーが遊星の妨害にかかった。

「ぐっ！」

「お仲間の心配してる余裕があんのかい？」

サファイアがジャックとクロウの妨害を、ルビーが遊星の妨害をした。つまり、まだチームラグジュアリーには第一コーナーを制することのできるDホイールが残っているのだ。

トパーズが、Dホイールが揉めあっているところから抜けて行った。

「よっしや！」

「チッ、そういう事か…。」

「チーム・タクティクスという訳か。」

6人「デュエル！」

「チーム・ラグジュアリーが先攻を取った！さあ、混沌としたデュ

エルフィールドで、この第一戦を制するのは、果たしてどちらか！？」

「すごい！こんな試合見た事ないよ、オレ！」

「俺もプロのDホイラーだったが…こんな試合はやったことがないぜ。」

矢雑のじいさんと天兵に関しては言葉が出ず、ラリーと氷室は少々興奮気味だ。

「俺のターン！（6）俺は手札から、サファイア・ソルジャーを召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

サファイア・ソルジャー：攻撃力1800

「俺のターン！（6）俺はダーク・リゾネーターを、守備表示で召喚！さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

ダーク・リゾネーター：守備力300

ダーク・リゾネーターは守備力300のモンスターだが、1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されないという特殊能力を持っている。単純な効果だが、単純である方が、デュエリストにとっては使いやすいことには間違いないだろう。

「あたしのターン！（6）あたしは、ルビー・バンブーを攻撃表示で召喚！ターンエンドよ…。」（5）

ルビー・バンブー：攻撃力1600

チームラグジュアリーのDホイールは全てとどこどこに宝石が散りばめられている。

確かにDホイールはDホイラーにとって命の次に、いや、命の次のデッキの次に大事なものかもしれないが、その魂を垣間見ることが出来るだろう。

「鉄砲玉のクロウ様のターンだぜ！ドロー！」（6）俺はBF - 階段のツイストを守備表示で召喚！」

BF - 階段のツイスト：守備力2000

「階段のツイストの効果で、召喚・特殊召喚に成功した時、手札のBFと名の付くカード1枚をデッキに戻して、カードを1枚ドローする！俺はBF - 激震のアブオロスデッキに戻して、カードを1枚、ドロー！さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

「俺のターン。俺はモンスターを守備表示でセットし、ターンエンド！」（5）

トパーズは無口な奴だが、遊星にはわかっていた。性格が見えない人であればあるほど、怖い敵であると…。

「俺のターン！」（スピード・ウォリアー）

（スピード・ウォリアー…。召喚したターンのバトルフェイズ中に攻撃力が倍になる効果を持っているが、1ターン目は攻撃ができない…。それでは効果が無駄になってしまう。ならば…。）

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（5）



「…!?!」

チーム5D'sのピットブースがどよめく。

「遊星!?どうしたの?」

「まさか、手札事故!?!」

「そんな、遊星に限ってそれはないわ。」

「へっ、チームリーダーがそんなんでいいのか!?俺のターン!」

(5)

「このサファイアのターンから、お互いにスピードカウンターが溜まるぞーっ!」

5D's : SPC1

ラグジュアリー : SPC1

「俺はサファイア・ソルジャーの効果を発動!スタンバイフェイズ時に表側攻撃表示で存在する場合、500ライフを払って自分のデッキからサファイア・ソルジャーを攻撃表示で特殊召喚する事ができる!」

「なんだと!?!」

サファイア : LP4000 LP3500

「だが、この効果で特殊召喚したサファイア・ソルジャーの攻撃力は半分となり、効果は無効になる。さらにこの効果を使用した場合、

このカードの攻撃力も半分となる。」

サファイア・ソルジャー：攻撃力1800 攻撃力900

「そして俺はサファイア・ソルジャー2体をリリースし、サファイア・デーモンをアドバンス召喚！」

サファイア・デーモン：攻撃力2800

「サファイア・デーモン!？」

「おーっと、チームラグジュアリーはいきなり上級モンスターを召喚したぞーっ! さあ、どうするチーム5D's!？」

「さあ、手札事故を起こしているチームリーダーに攻撃だ! サファイア・デーモン! ジュエリー・バレット!」

「遊星っ!」

チーム戦では、まずは倒せる人から倒していくのが勝負の鉄則。しかし、一回目のWRGPであり、運営側も失敗を恐れているためなるだけ「見せるデュエル」をするように促しているというのが…。容赦のない一撃が遊星に向かう。

それをメモリアルサーキットの展望席から見ているイエーガー副長官は盛り上がり欠けるのではないかと危惧しているのだったが…。

「ひい〜。」

杞憂だった。

「罨カード発動！くず鉄のかかし！相手モンスター1体の攻撃を無効にし、このカードをフィールドに再セットする！」

「なんだと！？くず鉄のかかし！？」

その攻撃が通らなかったことにより、おおーっと、会場が盛り上がった。

ドローフェイズから始まりこのバトルフェイズで最高潮に達するドラマの積み重ねこそがデュエル。

それを信じている観客にとってみればこのような展開は必要不可欠だった。

「サファイア。まだまだデュエルはこれからだぜ！」

「へっ、おもしれえ！」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

サファイア・ソルジャー

効果モンスター

レベル4 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力1800 / 守備力900

このカードが自分のスタンバイフェイズ時に表側攻撃表示で存在する場合、1ターンに1度だけ、500ライフポイントを払う事で自分のデッキから「サファイア・ソルジャー」1体を表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効となり、攻撃力は半分になる。また、この効果を使用したターン、このカードの攻撃力は半分となる。

< 次回の最強カード >

クイーン・オブ・ルビー

シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻撃力2800 / 守備力3000

「ルビー」と名の付いたチューナー + チューナー以外のモンスター  
1体以上

?

第3話・WRGP開幕！ チーム5D・S VS チームラゲジュアリー（後書

やっぱりWRGPが始まると、台詞の前に誰が言ったかという奴、  
わかり辛かったでしょう？

場合によっては、また以前のようなやり方に戻そうかなとも思っ  
ております。

もちろん台詞の前に登場人物の名前が無い方が格好はいいのでし  
ょうが…。

#### 第4話・チーム戦に潜むもの（前書き）

昨日、この小説を読んでいたという友人から電話がありました。  
…。

「2話までは誰が台詞を言ったかを表示してんのはださいと思ったけど…WRGPが始まっちゃうとアニメと違ってカメラがあるわけじゃないからどこから誰がしゃべってんのかわかりにくいから誰が台詞を言ったか表示した方がいい。」

とか

「確かに小説自体の格好良さは落ちるけど、それがお前らしさならいいんじゃないね？」

などと言われまして、

結局、台詞の前に誰が言ったかを付けることにしました。

意見の方、ありがとうございました。

## 第4話・チーム戦に潜むもの

チーム5D's VS チームラグジュアリー

チーム5D's

・SPC 1

ジャック・アトラス

・LP 4000

・手札 4枚

・(モンスター) ダーク・リゾネーター (DEF 300)

・(魔法・罫) 1枚

クロウ・ホーガン

・LP 4000

・手札 4枚

・(モンスター) BF - 階段のツイスト (DEF 2000)

・(魔法・罫) 1枚

不動遊星

・LP 4000

・手札 5枚

・(モンスター) なし

・(魔法・罫) 1枚

チームラグジュアリー

・SPC1

サファイア

・LP3500

・手札4枚

・(モンスター) サファイア・デーモン(ATK2800)

・(魔法・罫) 1枚

ルビー

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター) ルビー・バンブー(ATK1600)

・(魔法・罫) なし

トパーズ

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター) 裏側守備表示モンスター

・(魔法・罫) なし

遊星「罫発動！くず鉄のかかし！モンスター1体の攻撃を無効にし、フィールド上に再セットされる！」

サファイア「やるじゃねえか。まあ、そうでなくっちゃデュエルは面白くねえがな。俺はもう1枚伏せカードをセットして、ターン終



了!」(3)

あっさりと攻撃が通らなかつたことに安堵するチーム5D・SとW  
RGP運営側。

ここで攻撃が通るものなら、一気に遊星のライフポイントが120  
0となつて、虫の息に近い状態となつてしまうのだ。

ジャック「俺のターン!」(5)

5Ds:SPC2

LUX:SPC2

ジャック「俺は手札から、パワー・インベーターを召喚!」(4)

パワー・インベーター:攻撃力2200

ジャック「このカードは、相手フィールドに2体以上のモンスター  
が存在する場合、手札からリリースなしで召喚できるのだ!レベル  
5のパワー・インベーターに、レベル3のダーク・リゾネーターを  
チューニング!」

王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい!シン  
クロ召喚!我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン!

レッド・デーモンズ・ドラゴン:攻撃力3000

MC「おおーっと!早くもジャック・アトラスのエースモンスター、

レッド・デーモンズ・ドラゴンの登場だーっ！」

紅蓮の炎の中から現れた、真紅色の龍、レッド・デーモンズ・ドラゴン。フォーチュンカップでは、圧倒的なパワーを観客に見せつけ、ジャック・アトラスのパワーの象徴となり、今もその輝きを失うこととはなく、会場が割れんばかりの歓声を受けている。

サファイア「ほう…。」

ジャック「行くぞサファイア！レッド・デーモンズ・ドラゴンよ、森羅万象、全てを突き貫け！アブソリュート・パワー・フォース！」  
サファイア「ぐああっ！」

灼熱を纏った龍の拳が、サファイア・デーモンを粉碎した。だが、その展開は、既に読んでいたというのが、サファイアの…いや、チームラゲジュアリーの心中だった。

サファイア：LP3500 LP3300

ルビー「おいおいサファイア。序盤から無理しすぎじゃないの？」

サファイア「無理なんかしてねえな。これは勝つための必要経費さ

！サファイア・デーモンの効果発動！サファイア・クラッチ！」

ジャック「なに！？」

サファイア「サファイア・デーモンは、相手モンスターの攻撃もしくはモンスター効果で破壊された場合、そのモンスター1体を手札に戻す能力を持つのだ。さあ消えろ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

吼え猛っていたレッド・デーモンズ・ドラゴンだったが、サファイア・デーモンが後ろから現れて羽交い絞めにし、そのまま2体とも消えてしまった。

ジャック「レッド・デーモンズ・ドラゴン！」  
クロウ「やべえ…。レッド・デーモンズが…。」

ジャック「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」（3）

ルビー「あたしのターン！」（6）

5DS：SPC3

LUX：SPC3

ルビー（遊星の場にはくず鉄のかかしが伏せられている。あれじゃ  
ルビー・バンブーの攻撃は成立しない…だったら！）

ルビー「S p - スピード・サイクロンを発動！このカードは2つの  
選択肢の中から1つを選んで発動する効果よ。」

龍亞「2つのうちから1つを選ぶ効果!？」

ブルーノ「1つは、スピードカウンターが6つ以上ある時に、相手  
の魔法・罠カードを1枚破壊する効果。そしてもう1つは…。」

ルビー「もう1つは、手札を1枚捨てて、相手の魔法・罠カードを  
1枚破壊する効果。当然私は後者を選ぶわ！消えなさい！遊星の場  
の伏せカード、くず鉄のかかし！」（4）

遊星「なにっ!？」

遊星の防御カードの代表格であるくず鉄のかかしが、早くも破壊さ  
れてしまった。遊星は1ターン目はくず鉄のかかしを伏せてターン  
を終了していたため、遊星の場には、今現在、カードは1枚もない。

ところが、そんながら空きの遊星を狙うルビーではなかった。

ルビー「さあ、ルビー・バンブーで、ジャックにダイレクトアタックよー！」

クロウ「ジャックだと!？」

ジャックも、自分に攻撃が向かうだろうと、ある程度は予想できていた。遊星の場にカードがなくなろうとも、ジャックの場にも伏せカードは2枚あっても、モンスターは存在しない。さらに、

次のジャックのターンが来るまでには、チームラグジュアリー3人全員はジャックに攻撃を仕掛ける事ができる。

遊星の場合、ルビーとトパースは攻撃ができるが、サファイアが攻撃する前に遊星のターンが回ってくるため、3人全員は攻撃できない。まず倒せるプレイヤーから倒していくのが、チーム戦の定石と、チームラグジュアリーは思っているのだ。

ジャック「罠カード発動!闇の呪縛!モンスター1体の攻撃を不能にし、そのモンスターの攻撃力を700ポイント下げる！」

ルビー「!?!？」

ルビー・バンブー：攻撃力1600 攻撃力900

ジャック「さらに対象となったモンスターは、表示形式の変更ができなくなる！」

ルビー「カードを1枚伏せて、ターン終了よ！」(3)

ジャックは自分がキングであった時代から、よく己のピンチを演出し、鮮やかな反撃を以て観客のカタルシスを掴むのが自分のデュエルと口にしていた。

キングでなくなっただけから、ジャックのデュエルはジャックのデュ

エルなのだろう。

クロウ「さすがだぜジャック。」  
ジャック「フツ、あの程度の攻撃を受けるジャック・アトラスではないわ！」

クロウ「俺のターン！」（5）

5Ds：SPC4

LUX：SPC4

クロウ「俺は手札から、BF - 黒槍のブラストを特殊召喚！」

BF - 黒槍のブラスト：攻撃力1700

クロウ「このカードは俺のフィールドにBFと名の付いたモンスターがいる場合、手札から特殊召喚する事ができるぜ！そして俺はBF - 黒槍のブラストで……。トパーズ！お前の守備表示モンスターを攻撃だ！」

トパーズ「俺のモンスターを狙ってきたか。」

クロウ（サファイアの場にはカードが伏せてあるし、レッド・デーモンズにやられることは計算済みだったんだろな。ルビー・バンブーは、遊星に任せて、ここは確実にトパーズの伏せモンスターを見た方がいいぜ！）

クロウ「デス・スパイラル！」

黒槍のブラスト自身がクルクルと回転し、槍のようになってトパーズのモンスターを突き刺したが、トパーズのモンスターを貫くことはできなかった。

HQ - substance : 守備力1000

トパーズ : LP4000

クロウ「: 守備力1000なのにどうして倒せねえ!? しかも黒槍のブラストは、守備モンスターを攻撃した時、守備力を攻撃力が超えていけば、相手に戦闘ダメージを与える効果も持つてるってのに、ライフも減ってねえ!？」

トパーズ「甘いなクロウ。HQ - substanceはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されず、レベル4以上のモンスターとの戦闘によって受ける戦闘ダメージは0になる効果を持つてるんだよ。」

クロウ「チクショウ: やられたぜ。だが俺のターンはまだ終わっちゃいねえ!俺は手札から、BF - 陽炎のカームを、守備表示で召喚し、ターンエンド!」(3)

BF - 陽炎のカーム : 守備力1800

トパーズ「俺のターン!」(6)

5Ds : SPC5

LUX : SPC5

トパーズ「俺はカードを2枚伏せて(4)HQ - substanceをリリースし、ジュエリー・スナイパーをアドバンス召喚!」

ジュエリー・スナイパー : 攻撃力1400

遊星「…。」

ジャック「レベル5で攻撃力1400だと？」

トパーズ「当然こいつには効果がある。ジュエリー・スナイパーはフィールドにセットされたカード1枚につき攻撃力が200ポイントアップするんだよ！」

基本的にセットされているカードと言えば魔法・罠カードだが、モンスターも裏側表示でセットされているならば、それも枚数に数える。

MC「今フィールドにセットされているカードは7枚！よって攻撃力は1400ポイントアップするぞーっ！これでやっと上級モンスターの攻撃力だーっ！」

ジュエリー・スナイパー：攻撃力1400 攻撃力2800

トパーズ「さあ、攻撃力2800の威力を受けてみるジャック・アトラス！」

ジュエリー・スナイパーの構えた銃の銃口が、ジャックに向けられる。会場からは女性のファンからの叫び声が多々聞こえる。

ステファニー「ジャックーっ！！」

深影「アトラス様ーっ！！」

カーリー「ジャックーっ！！！！」

ジャック「くっ…。」

ジャックはジュエリー・スナイパーの放った宝石の弾丸が自分に当たると思い、少し目をつむったが…ジャックはバーチャルシステムによって発生する風圧も感じなかった。

ジャック「…？」

トパーズ「何っ!？」

サファイア「こいつは!」

ジャックの目の前で、かかしのようなものが弾丸を浴びている。彼らは「くず鉄のかかし」は破壊したはずだと思っただが…。

フツ、と遊星が微かに笑ったのが見えた。

クロウ「…遊星!」

遊星「速攻のかかしの効果を発動していたのさ!」

ジャック「遊星。」

遊星「速攻のかかしは、手札から墓地に捨てることで、直接攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる効果を持つ! (4)」

サファイア「くっ…こんなド素人に俺らが…？」

遊星「確かに俺たちは素人かもしれない!だが俺は、いや、俺たちチーム5D'sは、たとえチーム戦に関しての素人の集まりであっても、チームだ!結束の力がある事に、変わりはない!」

トパーズ「ほう…。」

その台詞は、確かにチームラグジュアリーの心に響いたのだろう。トパーズの目の色が、若干興味というものを帯びてきたように、同じチームメイトのサファイアには見えた。



トパーズ「サファイア。そんなに近くで走ると、クラッシュするぞ。」  
サファイア「あ…ああ。」

遊星「俺のターン！」(5)

5DS：SPC6

LUX：SPC6

遊星「俺は手札から、スピード・ウォリアーを召喚！俺はスピード・ウォリアーで、攻撃力900となったルビー・バンブーを攻撃！」  
ルビー「ちっ！」

遊星「スピード・ウォリアーは、召喚に成功したターンのバトルフェイズ中のみ、攻撃力が倍になる！」

スピード・ウォリアー：攻撃力900 攻撃力1800

遊星「ソニック・エッジ！」

ルビー「やったわね…。でもね、ルビー・バンブーには特殊能力があるのよ。戦闘で破壊された時、ライフポイント500を払って、デッキから同名モンスターを特殊召喚できるのよ！」

ルビー：LP4000 LP3100 LP2600

ルビー・バンブー：攻撃力1600

遊星「カードを2枚伏せて、ターンエンド!」(2)

サファイア「よくもやりやがったな。俺のターン!」(4)

5 D s : S P C 7

L U X : S P C 7

チーム5D・sのライフポイントの合計はジャック4000、クロウ4000、遊星4000の12000。

対するチームラグジュアリーのライフポイントの合計はサファイア3300、ルビー2600、トパーズ4000の9900。

差は2100ポイントと、まだ大した数値ではないが、まだ3人もライフポイントが残されていることを考えると、必要になるのはいかに場を万全にするか、その意味では、チームラグジュアリーはチーム5D・sより一歩リードしているようである。

サファイア「俺は手札から、サファイア・ヴェーラーを守備表示で召喚!」(3)

サファイア・ヴェーラー：守備力600

サファイア「さらにトラップ発動!ミラージュ・サモン!このカードは、自分フィールドにモンスターが召喚された時、同名のモンスターを相手の場に特殊召喚する!」

ジャック「相手だと...?」

サファイア「さあ、サファイア・ヴェーラー、ルビーの場に特殊召喚だ!」

ルビー「ありがたく受け取るよ、サファイア!」

その瞬間、龍亞が大きな声でえっ、なんで!?!とブースから叫んだ。

龍可「なんですって、どうしたの、龍亞？」

龍亞「どうしてどうして!？」

龍可「だから何が？」

龍可は呆れながら聞いた。

龍亞「だってミラージユ・サモンって相手の場に特殊召喚する効果なんですよ?どうして味方の場に召喚するのさ!？」

龍可はますますあきれ果てた。

龍可「龍亞。チームの一員なのに大会規則を読んでないの？」

龍亞「だってあんな分厚い本読んで暇はないよ。」

龍可「龍亞はいつだって暇でしょ!」

鋭い突っ込みが龍亞を襲う中、アキが口をはさんだ。

アキ「この大会では、チームメイトも相手プレイヤーとして効果を  
使う事ができるのよ。」

龍亞「へえ〜。だからチームメイトのルビーも相手とみなされた訳  
なんだ。」

ブルーノ「でも、わざわざ下級モンスターをルビーの場に召喚した  
のには、訳がありそうだけど。」

サファイア「取るべき戦略は、フォア・ザ・チーム!俺がアトラン  
ティック大会で大敗を喫したチームユニコーンの先鋒アンドレはよ  
く言ってるぜ!俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」(2)

ジャック「俺のターン!」(4)

5 D S : S P C 8  
L U X : S P C 8

ジャック「俺はデーモン・ソルジャーを召喚！」(3)

デーモン・ソルジャー：攻撃力1900

ジャック「貴様にシンクロ召喚はさせん！俺はデーモン・ソルジャーで、ルビー！貴様の場のサファイア・ヴェーラーに攻撃！デーモンズ・クロウ！」

トパーズ「カウンター発動！攻撃の無力化！モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる。」

MC「おおーっと！今度はトパーズの罠だ！チームラグジュアリー  
の布陣は、そう簡単には崩せない！だが、下級モンスターをわざわざ  
ざ守った理由はなんであるのかーっ!？」

MCの言う通りである。トパーズの発動した攻撃の無力化は、先の  
ターンにセットされたカード。

つまりその次の遊星のターンのスピード・ウォリアーの攻撃を防げ  
たはずだった。

もちろん、ルビー・バンブーの効果を考慮して、スピード・ウォリ  
アーの攻撃時に発動しなかったということも考えられるが…  
それを防がず、今の攻撃を防いだということは……。

ジャック「くっ…。そこまでするか。俺はカードを1枚伏せて、タ  
ーンエンド！」

ルビー「さあ、いよいよアタシのターンね！ドロー！」（４）

5 D S : S P C 9  
L U X : S P C 9

観客席の半分ほどはいつの間にか静まっていた。いよいよチームラグジュアリーの反撃だと思い、切り札モンスターを召喚したところで一気に盛り上がるという応援の仕方なのだ。

ルビー「アタシはチューナーモンスター、ルビー・キャットを攻撃表示で特殊召喚！」

ルビー・キャット：攻撃力450

クロウ「チューナー！？」

ジャック「来るか！？」

遊星「…。」

ルビー「ルビー・キャットは私の場にレベル4のモンスターとレベル2のモンスターが1体ずつ存在する場合、手札から特殊召喚できる。レベル4のルビー・バンブーと、レベル2のサファイア・ヴェーラーに、レベル2のルビー・キャットをチューニング！」

紅色を帯びた光よ、今ここに降り注ぎ、女王の輝きを照らし出せ！  
シンクロ召喚！現れよ、クイーン・オブ・ルビー！

ルビーが散りばめられた紫のローブを着て、錫杖を持った女王と言えるモンスターが空から降臨した。

クイーン・オブ・ルビー：攻撃力2800

観客席からは大きな歓声が湧き起こる。これを待っていたと言わんばかりの歓声である。

ルビー「クイーン・オブ・ルビーの効果発動！1ターンに1度だけ、自分のデッキからルビーと名の付くモンスター1体を手札に加える！私はルビー・トルーパーを手札に加え、守備表示で召喚！」

ルビー・トルーパー：守備力1200

ルビー「クイーン・オブ・ルビーで、スピード・ウォリアーを攻撃！ルビー・サンクション！」

クロウ「そうは行かぬえぜ！畏発動！BF・アンチバリアを発動！俺の場にBFが3体以上いる場合、モンスターが攻撃対象に選択された時、その攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させて、俺の場のBFのモンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手に与えるぜ！」

ジャック「おお！」

遊星「攻撃力の合計は…0 + 1700 + 600で、2300か。」  
クロウ「くらえ！ルビー！」

ルビー「甘いわね。クイーン・オブ・ルビーのもう一つの効果発動！相手のカード効果によるダメージを無効にして、その数値だけ相

手のライフを削る！この効果に対して、相手は魔法・罠・モンスター効果を使用できない！」  
遊星・ジャック・クロウ「なに！？」

BF・アンチバリアのカードから出た突風がクイーン・オブ・ルビの錫杖によつて、クロウに跳ね返つてきた。

クロウ「ぐああああっ！」

クロウ：LP4000 LP1700

MC「チーム5D・sがライフポイントでは優勢と思われたが、クイーン・オブ・ルビの一撃は重いぞーっ！！！」

龍亞「一気に2300ダメージ！？やばいよ！！！」  
アキ「でも、バトルフェイズ自体は終了するわ！」

ルビ「さあ…少しは足掻いたら？チーム…5D・s！」

<今日の最強カード>

クイーン・オブ・ルビ

シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻撃力2800 / 守備力3000  
「ルビ」と名の付いたチューナー+チューナー以外のモンスター  
1体以上

1ターンに1度だけ、自分のデッキから「ルビ」と名の付いたモンスター1体を手札に加える事ができる。また、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手のカード効果によるダメージを無効にし、その数値分のダメージを相手に与える。この

効果の発動に対して、他のカードの効果が発動することはできない。

<次回の最強カード>

シンクロ・ストライク

通常罫

シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたモンスターの数×500ポイントアップする。



## 第5話・勝利への焦り

チーム5D's VS チームラグジュアリー

チーム5D's

・SPC9

ジャック・アトラス

・LP4000

・手札4枚

・(モンスター)デーモン・ソルジャー(ATK1900)

・(魔法・罫)3枚

クロウ・ホーガン

・LP1700

・手札3枚

・(モンスター)BF-階段のツイスト(DEF2000)/BF

-黒槍のブラスト(ATK1700)/BF-陽炎のカーム(DEF1800)

・(魔法・罫)1枚

不動遊星

・LP4000

・手札2枚

・(モンスター)スピード・ウォリアー(ATK900)

・(魔法・罫)2枚

チームラグジュアリー

・SPC9

サファイア

・LP3300

・手札3枚

・(モンスター) サファイア・ヴェーラー (DEF600)

・(魔法・罫) 2枚

ルビー

・LP2600

・手札3枚

・(モンスター) クイーン・オブ・ルビー (ATK2800) /ル

ビー・トルーパー (DEF1200)

・(魔法・罫) 1枚

トパーズ

・LP4000

・手札3枚

・(モンスター) ジュエリー・スナイパー (ATK3600)

・(魔法・罫) 2枚

光り輝くクイーン・オブ・ルビーの錫杖。雲一つない空とは打って変わってチーム5D'sには芳しくない状況となっていた。

ルビー「あたしはこれでターンエンド。」(3)

遊星「大丈夫か、クロウ？」

クロウ「ああ、なんとかな。少スキいたぜ。このダメージ、倍返しにしてやるぜ！俺の…ターン！」(4)

5Ds：SPC10

LUX：SPC10

クロウ「…。」

クロウはチームのスピードカウンターが10個になったのを見て、このデュエルの前日にチームメイト同士で話し合ったことを思い出した。

遊星「スピードカウンターはチーム単位だ。個人単位ではないため、乱発は避けた方がいい。」

クロウ「わかつてんのか、ジャック？」

ジャック「何をっ……………？」

アキ「まあまあ…。」

遊星「だが、使わなければならないと思った時は、使って構わないからな。」

クロウ(あのシンクロモンスター、倒さねえとやばそうだが。)

クロウには、ジャックと遊星がうなずいたのが確認できた。

クロウ「スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを10個取り除いて、フィールド上のカードを1枚破壊するぜ！俺

は、クイーン・オブ・ルビーを破壊！」

5Ds：SPC10 SPC0

ルビー「残念ね！ルビー・トルーパーの効果発動！守備表示のこのカードをリリースすることで、自分フィールド上のルビーと名の付いたモンスター1体の破壊を無効にする！」

クロウ「そんなーっ！」

MC「おおーっと！チーム5Ds痛恨のプレイ！クロウが大ダメージを受けてしまった上に、スピードカウンターを無駄に消費してしまったー！このデュエルの流れは、チームラグジュアリーに傾き始めているのかーっ!？」

スピード・ワールド 2の効果発動はカードの消費こそないものの、スピードカウンターを取り除く。スピード・ワールド 2の効果は相手も使用できるため、スピードカウンターによる駆け引きは、非常に重要である。

ジャック「ちいっ！」

クロウ「この埋め合わせをしねえとな！BF - 銀盾のミストラルを召喚！」

BF - 銀盾のミストラル：攻撃力100

クロウ「レベル4の陽炎のカームに、レベル2の銀盾のミストラルをチューニング！」

漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風を巻き起こせ！シンクロ召喚！BF - アームズ・ウィング！

B F - アームズ・ウイング：攻撃力2300

クロウ「ジュエリー・スナイパーの攻撃力は3600だから…狙うのはあのモンスターしかねえ！BF - 黒槍のブラストで、サファイア・ヴェーラーを攻撃！」

サファイア「させるか！永続罨発動！シンメトリー・シールド！このカードは発動後装備カードとなり、自分のモンスターに装備される。装備モンスターを守備表示にすることができる！装備モンスターが攻撃を受けた時、攻撃したモンスターの攻撃力と同じ攻撃力にすることができる！」

サファイア・ヴェーラー：守備力600 守備力1700

クロウ「じゃあBF - アームズ・ウイングの攻撃！」

サファイア「くっ…。」

クロウ「アームズ・ウイングは、守備表示モンスターを攻撃する場合、攻撃力が500ポイントアップするぜ！」

B F - アームズ・ウイング：攻撃力2300 攻撃力2800

サファイア「ぐっ！…やってくれるぜ。」

サファイア：LP4000 LP3100

シンメトリー・シールドの効果により、何とかダメージを900まで軽減する事ができた。

もし逆の順序で攻撃を受けていれば、戦闘ダメージはアームズ・ウイングの効果発動タイミングとシンメトリー・シールドの効果発動

タイミングの関係上、2200ダメージとなっていたため、彼にとつてみれば、安堵の溜息をつける所ではあった。

クロウ「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(2)

トパーズ「俺の…ターン！」(4)

5Ds：SPC1

LUX：SPC11

トパーズ「クロウ。お前がさらにカードを伏せたことで、サファイアがトラップカードを使っても、ジュエリー・スナイパーの攻撃力は3600のままだぞ。と、いうことは、その伏せたカードに何かあるのか…？」

チームラグジュアリーのスピードカウンターは11個であり、チーム5Dsより10個多い状態となっている。しかしこのターンでスピードカウンターを使用しなければスピードカウンターの最大値が12であるため、3対12となり、差が縮まってしまう。

このターンで、トパーズはスピードカウンターを使用するつもりではある。

トパーズ（だが、ジャックの伏せカードは3枚、クロウは2枚、遊星も2枚。たとえその内の1枚を破壊したとしても、攻撃が通るかはわからない。だからと言ってモンスターを破壊するのは本末転倒どのモンスターもジュエリー・スナイパーで倒せるからな。…まあいい。あちらの出方を見るか。）

トパーズ「俺は手札から、ジュエリー・スネークを攻撃表示で召喚！」

ジュエリー・スネーク：攻撃力1300

トパーズ「さあ遊星。この2体の攻撃で、お前を終わらせてやる。  
ジュエリー・スネークで、スピード・ウォリアーを攻撃！」

体のところどころが宝石で光っているスネークが、スピード・ウォリアーに巻きつき、首元に噛みついた。

遊星「スピード・ウォリアー！」

不動遊星：LP4000 LP3600

トパーズ「とどめだ。ジュエリー・スナイパー！」

遊星「そうはさせない！トラップカード発動！ガード・ブロック！  
戦闘によって発生する自分へのダメージを0にし、デッキからカードを1枚、ドロウする！」(3)

チーム5D'sの伏せカードは全部で7枚であり、それだけの罠カードがあつて何もできないハズはないという程度程度予想はできるものだが、それでもジュエリー・スナイパーの構えた銃口から放たれた弾丸が遊星に向かった瞬間は、会場から叫び声が多々聞こえた。

ジュエリー・スナイパー：攻撃力3600 攻撃力3400

氷室「おお……。危ないな、遊星。」

矢矧「大丈夫じゃよ。あんちゃんがあんなところでやられる訳ないじゃろ！？」

ラリー「そつだ！遊星は絶対勝てるよ！」

トパーズ「なに？ちつ。だがまだ俺のターンは終わっていない！スピード・ワールド 2の効果発動！」

ブルーノ「まずい！」

アキ「来るわ！」

龍可「でも、このタイミングで！？」

トパーズ「スピードカウンターを4つ取り除く事で、手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！俺の手札のスピードスペルは1枚、S p - アクセル・ドロ！よって800ダメージ。くらえクロウ！」

L U X : S P C 1 1 S P C 7

クロウ「なっ！そっちか！」

遊星「これを受ければ、クロウのライフが900に！？」

ジャック「そうはさせん！畏カード、リベンジ・ランサーを発動！トパーズ「リベンジ・ランサーだと？」

ジャック「俺の場のカード1枚を除外する事で、効果ダメージを無効にし、モンスターを除外した場合、モンスターを、魔法カードを除外した場合、魔法カードを、魔法カードを除外した場合、魔法カードを除外した場合、魔法カードを除外した場合、魔法カードを除外する！俺はモンスターカード、デーモン・ソルジャーを除外する！」

トパーズ「モンスターカードを除外しただと！？」

ジャック「そうだ！よって、ジュエリー・スナイパーを除外する！」

トパーズ「ちつ！ジュエリー・スナイパーが…！」

クロウ「サンキュー、ジャック！」



トパーズ「くっ…。これ以上余計なことをするのは危険か…。ターンエンド！」(3)

サファイアが減速し、トパーズの隣に並んだ。サファイアは皺を寄せていて、しかめっ面をしてトパーズを睨みつけた。

トパーズ「なんだ？」

サファイア「スピードカウンターを勝手に使うなよトパーズ。これはチーム戦だぜ。」

トパーズ「別にいいだろ。クロウに2回スピード・ワールド 2をお見舞いして、残りライフを100にしようと思ったただけだ。」

トパーズは冷めた表情で、別に自分は悪くないというような意味合いの言葉を投げかけた。

サファイア「トパーズ！」

ルビー「やめなよ！仲間割れしてる場合じゃないだろ！？ア…アタシらが…あんな奴らに負けるはずが…ないじゃないか。」

サファイアのDホイールのディスプレイにルビーの姿が映り、怒鳴った。

もちろん大声で怒鳴っているため、会場内ではチームラグジュアリーが仲間割れを起こしているのがはつきりと見えていた。こういう場合に突っ込みを入れるのもMCの役割である。

MC「おーっと！チームラグジュアリー！仲間割れかーっ！？」

サファイア「チツ…無様な。」

遊星「俺のターン！」(4)

5 D S : S P C 2  
L U X : S P C 8

遊星「俺は手札のモンスターカード（カード・ブレイカー）を1枚墓地に送り、チューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚！」（2）

クイック・シンクロン：攻撃力700

遊星「さらに俺は手札からチューニング・サポーターを召喚！」

チューニング・サポーター：攻撃力100

遊星「チューニング・サポーターは、シンクロ召喚の素材となる場合、レベルを2として扱う事ができる！レベル2となったチューニング・サポーターに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

集いし思いが、ここに新たな力となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！燃え上がれ、二トロ・ウォリアー！

二トロ・ウォリアー：攻撃力2800

遊星「チューニング・サポーターがシンクロ素材となって墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドロ―する！（2）そして二トロ・ウォリアーで、トパーズ・スネークを攻撃！ダイナマイト・ナツクル！」

トパーズ「ぐっ！」

トパーズ：LP4000 LP2500

MC「ニトロ・ウォリアーの一撃で、大きくライフが減ってしまっ  
たぞっ！」

遊星「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（1）

サファイア「俺のターン！」（4）

SDS：SPC3

LUX：SPC9

サファイア「永続罠、リビングゲッドの呼び声を発動！自分の墓地  
に存在するモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！蘇れ、サフ  
アエア・ソルジャー！」

サファイア・ソルジャー：攻撃力1800

遊星「墓地からモンスターを復活させただと？」  
ジャック「まさか…。」

サファイア「そう！お前らはあのクイーン・オブ・トパーズに気を  
取られすぎなんだよ！俺はチューナーモンスター、サファイア・ウ  
イザードを召喚！」

サファイア・ウイザード：攻撃力400

サファイア「俺はさらにSp・チューンアップ123を発動！スピ  
ードカウンターが4つ以上ある時、サイコロを1回振り、出た目に

応じて、チューナーモンスター1体のレベルを変化させる！」

サイコロ：2

サファイア「2が出た場合、レベルは1アップする。よってレベルは4！レベル4のサファイア・ソルジャーに、レベル4のサファイア・ウィザードをチューニング！」

青藍色を帯びた光よ、今ここに降り注ぎ、一流の輝きを照らし出せ！シンクロ召喚！降臨せよ、エース・オブ・サファイア！

エース・オブ・サファイア：攻撃力2700

サファイア「取るべき戦略は、フォア・ザ・チームだけ。よく見てください！5D's！勝ちを急いだプレイングほど、愚かなものはないんだぜ！俺はまずエース・オブ・サファイアの効果を発動し、手札のサファイアと名の付くモンスター1体を墓地に送って、デッキからカードを2枚ドロウする！俺はサファイア・ドラゴンを墓地に送り、カードを2枚ドロウ！」（2 3）

クロウ「手札交換の能力だと!？」

サファイア「いくぜ！俺はまず、墓地のサファイア・ウィザードの効果を発動！このカードと、墓地のサファイアと名の付くモンスターを1体、合計2体のモンスターを除外し、相手モンスター1体を守備表示にする！」

彼は「俺が選ぶのは…」と言いながら、ゆっくり指を前方の遊星のDホールの方に向けた。

サファイア「ニトロ・ウォリアー！」

ニトロ・ウォリアー：攻撃力2800 守備力1800

遊星「なんだと!？」

エース・オブ・サファイアの攻撃力は2700であり、壁モンスターにのいないジャックを攻撃すれば大ダメージを与えられ、クロウのBF-階段のツイストや、BF-アームズ・ウィングも倒せるといのだが、ニトロ・ウォリアーの攻撃力には及ばないために、ニトロ・ウォリアーを攻撃することにしたのだ。

サファイア「エース・オブ・サファイアで、ニトロ・ウォリアーを攻撃！」

遊星「ぐあああつ！」

守備表示のモンスターが戦闘で破壊されても戦闘ダメージは受けないが、遊星は壁モンスターを失った。

サファイア「ターンエンド！」(3)

ジャック「俺のターン！」(5)

5DS：SPC4

LUX：SPC10

ジャック(奴らのスピードカウンターが再び10に…。ここは速攻あるのみ!)

ジャック「永続罨、強化蘇生！俺の墓地に存在するレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備する！蘇れ、ダーク・リゾネーター！」

ダーク・リゾネーター：攻撃力1300

ジャック「装備モンスターは、攻撃力・守備力が1000ポイント上昇し、レベルも1上昇する！」

ダーク・リゾネーター：攻撃力1300 攻撃力1400/レベル3 レベル4

ジャック「そしてリベンジ・ランサーの効果発動！」

龍亞「えっ？リベンジ・ランサーって、さっき効果ダメージを防ぐためにジャックが使ったカードだよな？」

アキ「そうよ。リベンジ・ランサーにはもう一つ効果があって、除外したカードは、モンスターの特殊召喚に成功すると、手札に戻ってくるのよ。」

龍可「勉強になったわね、龍亞。」

龍亞「な！お…俺が…チームメイトのカード知らない訳ないじゃん！まったく…。」

龍亞は自分以外の全員がチームメイトのカードを知っていたのを見て、自分だけ知らなかったのを恥ずかしく思ったのか、顔を赤らめつつそっぽを向いていた。

ジャック「デーモン・ソルジャーを手札に戻し、再び召喚！そしてレベル4のデーモン・ソルジャーに、レベル4となったダーク・リゾネーターをチューニング！」

王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を、見るがいい！シンク口召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！

レッド・デーモンズ・ドラゴン：攻撃力3000

レッド・デーモンズ・ドラゴンの登場により、しばしの静寂が訪れかけていた会場に再び割れんばかりの歓声が巻き起こった。

もちろんジャック・アトラスも人気があるが、ジャック・アトラスを見るならレッド・デーモンズ・ドラゴンも見なくてはと思うファンも多いのだ。

その期待に応えられるジャック・アトラスは、やはり誇り高きDホイラーだろう。

MC「おーっ！再び現れたレッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ジャック「もう貴様らの好きにはさせん！俺はレッド・デーモンズ・ドラゴンで、トパースにダイレクトアタックだ！アブソリュート・パワー・フォース」

深影「この攻撃が通れば、アトラス様の勝ちよ！」

ステファニー「いつけーっ！ジャックーっ！」

カーリー「ちよつと！それはアタシの台詞なんだから！」

サファイア「無駄だ！エース・オブ・サファイア、効果発動！相手モンスターの攻撃宣言時、攻撃対象をこのカードに変えて、守備表示にする！」

エース・オブ・サファイア：攻撃力2700 守備力3000

サファイア「へっ！」

青色のマントを着た若い剣士がレッド・デーモンズ・ドラゴンの前に出て、背中から抜いた剣でアブソリュート・パワー・フォースを防いだ。

ジャック「だが、レッド・デーモンズ・ドラゴンが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算終了後、相手の守備表示モンスターを全て葬る！デモン・メテオ！」

灼熱の拳を防いでいるエース・オブ・サファイアに、今度は口から吐かれた炎が襲い掛かる。

ところがエース・オブ・サファイアはその炎を、天高く飛び上がり、紙一重の差で避けた。

ジャック「なに！？」

サファイア「エース・オブ・サファイアは、守備表示の状態なら、モンスター効果では破壊できないんだよ。」

ジャック「なんだと！？くっ…小賢しい真似を！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」(4)

ルビー「まどろっこしいデュエルね…。全く…。一気に決着を着けてやるわ！」

ルビー「アタシのターン！」(4)(ルビー・マント)

5Ds・SPC5

LUX・SPC11



サファイア「とりあえずは奴らの高い攻撃力のモンスターを順番に潰していくぜ、ルビー。」

ルビー「…スピード・ワールド 2 の効果発動！スピードカウンターを10個取り除き、レッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊するわ！」

ジャック「甘いわ！リバースカード、オープン！レッド・デーモンズ・コート発動！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの周囲を、赤い膜のようなものが覆った。

ジャック「このターン！レッド・デーモンズ・ドラゴンが存在する場合、お互いのモンスター全ては戦闘及びカード効果では破壊されない！」

ルビー「なんですって!?!」

LUX : S P C 1 1 S P C 1

トパーズ「チツ！無駄撃ちだぞ！」

サファイア「くっ…ジャックめ…。」

MC「今度はジャック・アトラスの罠カードで、チームラグジュアリーのスPEEDカウンタを無駄に消費させたぞーっ！やはり勝負の行方はまだまだわからない！」

ルビー「クイーン・オブ・ルビーの効果発動！デッキから、ルビーと名の付くモンスター1体を手札に加える！アタシはルビー・ソルジャーを手札に加え、守備表示で召喚！」(4)

ルビー・ソルジャー：守備力1200

ルビー（チツ…勝ちを急ぎすぎたわね。手札のスピードスペルが使えない…。でも今のアタシは焦ってない！私は負けるわけにはいかないのよ！）

ルビーの目を見ると、そこに焦りの文字がある事は、サファイアにはわかった。

彼女の勝利に対する執念は並みのものではない。そんなことはチームメイトにとつてはとくに知れた事実だったが、その執念が、時に自分の足を引っ張る事にもなるのだった。

サファイア「ルビー！冷静に…！」

トパーズ「バカ野郎！冷静に…っていうのは、禁句だろうが！」

サファイア「だが…ルビーは…！」

自分の手が震えていることに、ルビーは気づかない。もちろんルビーの後方を走るサファイアとトパーズはそれには気づいている。もう彼女には目の前の事があまり見えていない。

ルビー「この一撃で葬ってあげるわ！ルビー・マンタの効果発動！手札から墓地に送ることで、クイーン・オブ・ルビーの戦闘で発生するダメージは2倍になる！ただしエンドフェイスに、そのモンスターは攻撃力は1000ポイントダウンするけどね。」（4 3）

龍亞「ダメージが…倍!?」

ルビー「さあ、覚悟なさい不動遊星！クイーン・オブ・ルビーで、ダイレクトアタック！ルビー・サンクション！」

クイーン・オブ・ルビーの錫杖が、モンスターのいない遊星に向かう。このターンで遊星を倒すつもりなのだ。ところがジャックの場にはまだ1枚、クロウの場にも2枚、遊星の場にもまだ2枚、合計5枚の伏せカードがある。

そんなことはルビーにとってわかりきった事で、畏カードが発動するだろうというのは目に見えていた…。発動するだろうというのは…。

遊星「くっ…。」

ルビー「畏カードかい!? 来るなら来な!」

クロウ「だったらやらせてもらうぜ! 畏発動! BF - フォーメーション! 攻撃対象を自分のBFに変える! これで遊星への直接攻撃はねえぜ…。」

錫杖から放たれた光が、BF - アームズ・ウイングへ向かう。攻撃対象をアームズ・ウイングに変更したのだ。

ルビー「だったらアンタが500ポイントの倍のダメージ、1000ポイントのダメージを受けな!」

遊星「畏発動! シンクロ・ストライク! シンクロモンスターの攻撃力は、素材モンスターの数×500ポイントアップする!」

サファイア・トパーズ「なに!?!」

ルビー「なんだって!?!」

BF - アームズ・ウイング：攻撃力2300 攻撃力3300

サファイア「ルビー!」

ルビー「黙ってなサファイア! アタシがそんなことを計算していな

い訳ないだろう!? サファイア・ソルジャーを墓地に送って、ルビーと名の付くモンスターの、戦闘での破壊を無効にする!」

しかしルビー・マンタの効果は諸刃の剣。ダメージが倍になるのは、自分が与えるダメージだけではない。万が一戦闘に負けるような事があれば、受けるダメージも倍になってしまう。

その上、対象となったクイーン・オブ・ルビーの攻撃力は1000ポイントダウンしてしまうのだ。

クロウ「お前が倍のダメージを受けてな!」

ルビー「くっくっくっくっ!」

ルビー：LP 2600    LP 1600

ルビー「アタシは負けらんねえんだよ! ターンエンド!」 (3)

クイーン・オブ・ルビー：攻撃力2800    攻撃力1800

BF - アームズ・ウイング：攻撃力3300    攻撃力2300

サファイア「ルビー!」

トパーズ「まずい! ルビーは冷静さを欠いている! これでは…狙われるのは、ルビー!」

クロウ「俺のターン!」 (3)

5DS：SPC 6

LUX：SPC 2

クロウ「俺はBF - 東雲のコチを召喚!」

B F - 東雲のコチ：攻撃力700

クロウ「レベル4の階段のツイストに、レベル4の東雲のコチをチ  
ューニング！」

黒き疾風よ！秘めたる思いをその翼に現出せよ！シンクロ召喚！舞  
い上がれ、ブラックフェザー・ドラゴン！

ブラックフェザー・ドラゴン：攻撃力2800

トパーズ「ブラックフェザー・ドラゴン！？」

クロウ（ピアスン：お前のくれたブラックフェザー・ドラゴンで、  
俺はどこまでも飛んでみせる！チームメイトと共に！）

クロウ「ブラックフェザー・ドラゴンで、クイーン・オブ・ルビー  
を攻撃！ノーブル・ストリーム！」

ルビー「うあああっ！」

ルビー：LP1600 LP600

ジャック「そしてこれで終わりだ！農カード発動！シンクロ・デス  
トラクター！シンクロモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊し  
た場合、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！」  
クロウ「つまり、900ダメージだぜ！」

ルビー「そんな、私はまだ負けられないのにつ！！！」

ルビー：LP600 LP0

MC「おおーつと!!ここでルビーが敗北!負け抜けを喫してしまった!だがこのターンの終了時までルビーのデュエルは続行されるっ!」

クロウ「やったぜ!遊星!お前のシンクロ・ストライク!ジャック!お前のシンクロ・デストラクターで、アイツを倒したぜ!!」  
遊星「3人の力で、残り2人を倒すぞ!」  
ジャック「ああ!」

サファイア「ルビー!」

失速していくルビーのDホイール。奥歯を握りしめたルビーの表情は、悔しさに満ち溢れていた。

サファイアはルビーに並んで走行し、軽く微笑んだ。

サファイア「お前は頑張ったぜ。後は俺らに任せな。」

ルビー「サファイア…アタシは…バカだったね…。勝ちを急がなければ…。…!!」

とルビーが冷静さを取り戻した瞬間、ルビーの場に伏せてあるカードに彼女は気が付いた。

そして勢いよくそのカードに手を伸ばした。

ルビー「畏カード発動!」

チーム5D's「!?!」

ルビー「ルビー・マテリアル!前のターンに墓地に送られたルビー

と名の付くモンスターを全て、次の相手ターンのスタンバイフェイズで、相手フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができるのよ。」

前のターンに墓地に送られたルビーと名の付いたモンスターはルビー・マンタとルビー・ソルジャーの2体。

ルビー「さあ、トパーズ。次のアナタのターンに、2体のモンスターは現れるわよ。」

トパーズ「フツ…。役目を果たした…か？」

ルビーのDホイールがコースを外れ、ピットに入っていく。

クロウ「冗談じゃねえ！それだったら、トパーズを攻撃するぜ！アームズ・ウィングの攻撃！ブラック・チャージ！」

トパーズ「無駄だ！畏発動！リミット・リバーズ！攻撃力1000以下のモンスターを墓地から特殊召喚する！蘇れ、H Q - s u b s t a n c e !」

H Q - s u b s t a n c e : 攻撃力600

クロウ「またそのモンスターか！」

トパーズ「そしてこのモンスターはレベル4以上のモンスターとの戦闘では破壊されず、戦闘ダメージも0になる。」

岩の塊のようなモンスター、H Q - s u b s t a n c e が、B F - アームズ・ウィングの攻撃を弾き返した。

クロウ「ターンエンド。」(2)

アキ「まだまだ油断はできないわね。」

龍可「2人になっても、あのチームワークはさすがだわ。」

トパーズ「俺のターン！」(4)

5 D S : S P C 7

L U X : S P C 3

そしてこのスタンバイフェイズ、俺のフィールドにルビー・ソルジャーとルビー・マンタが特殊召喚される！」

ルビー・ソルジャー：レベル2

ルビー・マンタ：レベル1

トパーズ「そして俺はチューナーモンスター、トパーズ・ギアを召喚！」(3)

トパーズ・ギア：レベル2

クロウ「チューナー!?!」

遊星「しまった!」

トパーズ「エース・オブ・サファイアが出た時も言われなかったか? お前は目の前の上級モンスターに目を奪われすぎだな。レベル3のH Q - s u b s t a n c e、レベル2のルビー・ソルジャーとレベル1のルビー・マンタに、レベル2のトパーズ・ギアをチューニング!」

黄金色を帯びた光よ、今ここに降り注ぎ、王者の輝きを照らし出せ! シンクロ召喚! 舞い降りろ、キング・オブ・トパーズ!



キング・オブ・トパーズ：攻撃力2400

クロウ「なに!？」

観客やチーム5D'sの予想しなかった展開と言っても過言ではなかった。なぜなら、トパーズに限っては、サファイアやルビーと違い、自分の名前が入った宝石のモンスターを使わずに、デュエルを進めていたからであり、ここに来てトパーズモンスターが、しかも上級モンスターが来るとは誰も予想していなかったのだ。

だが、これこそがチームラグジュアリーの戦術なのである。

トパーズ「驚いたか?これがチームラグジュアリーだ。俺たちの本気を見せてやる。お前らみたいな素人に負ける事はないことを教えてやるぞ！」

(次回へ)

<今日の最強カード>

シンクロ・ストライク

通常罫

シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたモンスターの数×500ポイントアップする。

<次回の最強カード>

キング・オブ・トパーズ

シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力2400 / 守備力3000

「トパーズ」と名の付いたチューナー + チューナー以外のモンスター

1体以上

?

## 第6話・素人とプロと（前書き）

リタイアしたDホイラーは基本的にはデュエルに参加できませんが、フィールド上にモンスターと魔法・罠カードが残った状態でデュエルが終了した場合、そのカードはフィールド上に残り続けます。

## 第6話・素人とプロと

チーム5D's VS チームラグジュアリー

チーム5D's

・SPC7

ジャック・アトラス

・LP4000

・手札4枚

・(モンスター)レッド・デーモンズ・ドラゴン(ATK3000)

・(魔法・罫)1枚

クロウ・ホーガン

・LP1700

・手札3枚

・(モンスター)BF・アームズ・ウィング(ATK2300)/

ブラックフェザー・ドラゴン(ATK2800)

・(魔法・罫)なし

不動遊星

・LP3600

・手札1枚

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)1枚

チームラゲジュアリー

・SPC3

サファイア

・LP3300

・手札3枚

・(モンスター)エース・オブ・サファイア(DEF3000)

・(魔法・罫)なし

ルビー

・LPO

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)なし

トパーズ

・LP2500

・手札3枚

・(モンスター)キング・オブ・トパーズ(ATK2400)

・(魔法・罫)1枚

トパーズ「お前らみたいな素人軍団には：負けられないんだよ。俺はキング・オブ・トパーズで、遊星にダイレクトアタック！トパーズ・レイン！」

白髭を生やし、金色の王冠を被ったキング・オブ・トパーズの錫杖

が天に向くと、トパーズの大雨が遊星に向かって降り注いできた。

遊星「ぐああああっ!!」

MC「おおーっと!不動遊星、直撃だ!」

龍亞「やばいよ、遊星!!」

ブルーノ「無理もないよ。みんな相手を倒すために罠カードを使うから、ここに来て切れちゃったんだ。」

不動遊星：LP3600 LP1200

トパーズ「ここまで来ればお前らを倒すなど容易い。ターンエンドだ!」(3)

ジャック「遊星、大丈夫か?」

遊星「あ…ああ。」

5台のDホイールが、ホームストレートに差し掛かったところで、遊星のターンが回ってきた。

ホームストレートは、モニターを見ずとも直接見る事ができるので、盛り上がる場所である。

遊星「俺のターン!」(2)

5DS：SPC8

LUX：SPC4

遊星「俺はデッド・ガードナーを、守備表示で召喚!」

デッド・ガードナー：守備力1900

サファイア（遊星め：スピードカウンターを10個まで溜めて、俺らのエースモンスターを破壊しようって作戦か？）

遊星「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（0）

サファイア「俺のターン！」（4）

5Ds：SPC9

LUX：SPC5

サファイア「俺はエース・オブ・サファイアの効果を発動！手札のサファイア・ソルジャーを捨てて、デッキからカードを2枚ドロップ！」（4 5）

サファイア「……来たか。俺はサファイアドラゴンを召喚！」

サファイアドラゴン：攻撃力1900

サファイア「俺はSP・スピード・エナジーを発動！スピードカウンターが2個以上ある時、自分のモンスター1体の攻撃力を、スピードカウンターの数×200ポイントアップさせる！つまり、サファイアドラゴンの攻撃力は、1000ポイントアップする！」（3）  
ジャック「なに！？」

サファイアドラゴン：攻撃力1900 攻撃力2900

遊星「新たなモンスター！？」

サファイア「そしてエース・オブ・サファイアで、BF・アームズ・ウイングを攻撃！サファイア・グランド・セイバー！」  
クロウ「ぐあああ！」

クロウ：LP1700    LP1300

サファイア「そしてサファイアドラゴン！ブラックフェザー・ドラゴンを葬れ！サファイアスパーク！」  
遊星「そうはいかない！デッド・ガードナーの効果発動！モンスターの攻撃宣言時、攻撃対象をこのカードに変更する！」

デッド・ガードナーの効果は自分の場のみ有効だが、攻撃対象を変更する効果の場合、仲間のモンスターから自分の場へのモンスターに対象を変更できる。

だが当然、デッド・ガードナーは粉々に砕け散った。

サファイア「ちっ…。」

遊星「そしてデッド・ガードナーを破壊したモンスターの攻撃力はエンドフェイズまで1000ポイントダウンする！」

サファイアドラゴン：攻撃力1900

クロウ「サンキュ遊星。俺のブラックフェザー・ドラゴンを守ってくれたんだな。」

遊星「ああ。ブラックフェザー・ドラゴン。朋友との絆のカード…。」

「  
サファイア（そういえば、一通りBFのカードは調べてきたが…ブラックフェザー・ドラゴン…？あれはなんだ？奴の新たなカードなのか？）



サファイアがブラックフェザー・ドラゴンについて疑問を抱いているのをトパースは察知したようで、トパースが横から話しかけてきた。

トパース「おい、サファイア。気にするな。ブラフの可能性も、あるんだぞ。」

サファイア「ブラフだと……？バカな。奴にはきつと何か効果があるに決まっている。」

トパース「冷静になれサファイア！今の状況、遊星は別段変わった戦術を取ったわけじゃない。デッド・ガードナーで、攻撃力の高いブラックフェザー・ドラゴンをフィールドに残しただけだ。」

サファイア「……くっ。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（2）

ジャック「俺のターン！」（5）

5DS：SPC10

LUX：SPC6

ジャック「エース・オブ・サファイアは、この俺が倒す！Sp-ハイスピード・クラッシュを発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、自分の場のカード1枚と、フィールドのカードを1枚ずつ破壊する！」

ジャックはハイスピードクラッシュによりエース・オブ・サファイアを撃破し、キング・オブ・トパースは、スピード・ワールド2の効果で撃破しようとしているため、スピードカウンターを10個まで溜めたまま、ハイスピードクラッシュを発動した。

ジャック「俺の場の伏せカード（プライドの咆哮）と、エース・オブ・サファイアを破壊！」  
サファイア「それを待ってたんだよ！畏発動！サファイア・デッド・フォール！サファイアと名の付くモンスターが相手のカード効果で破壊される場合、代わりにフィールド上の最も攻撃力の高いモンスターを破壊し、コントローラーに、そのレベル×300ポイントのダメージを与える！」

ジャック「なんだと！？それでは、俺のレッド・デーモンズが！！  
ぐああああっ！」

ジャック：LP4000      LP1600

クロウ「ジャックのライフが一気に1600に！？」

ジャック「だが俺はまだ負けてはいない！」

サファイア「ちなみに、サファイア・デッド・フォールの効果により、お前はこのターンのエンドフェイズまで俺の場のカードを破壊する事はできない。」

ジャック「なに！？ならば…俺はランサー・デーモンを、守備表示で召喚！」

ランサー・デーモン：守備力1400

ジャック「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」（0）

MC「チーム5D'sで唯一、4000ポイントのライフを余していたジャックのライフポイントが、一気に1600となってしまった！しかも、レッド・デーモンズ・ドラゴンも破壊されてしまったぞ！」

深影「そんな！アトラス様が！」

カーリー「しかもレッド・デーモンズ・ドラゴンもいなくなった…。

」

ジャックのターンが終了したが、ルビーがデュエルから離脱したため、ジャックのターンの次は、クロウのターンとなる。

相手のチームメンバーを1人倒したチームは2連続でターンが回ってくるが、連続でターンが回ってきても、状況はあまり芳しいものにはなっていないのが、現状である。

クロウ「俺のターン！」（4）

5 D S : S P C 1 1

L U X : S P C 7

クロウ（よっしゃ！S p -スピード・フォース！スピードスペルを引いたぜ。これで俺の手札にスピードスペルは2枚！スピード・ワールド 2の効果でダメージを与えてやるぜ！）

クロウ「スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを4つ取り除き、手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！俺の手札のスピードスペルは2枚！さあ、1600ダメージをくらえ！トパーズ！」

5 D S : S P C 1 1 S P C 7

クロウは、やったと思って効果を発動したが、その直後、キング・オブ・トパーズの効果は何であるか、そういえばまだ発動していないのではないかと思い始めた。

嫌な予感が頭を過る…。そして…。

トパーズ「キング・オブ・トパーズの効果発動！」

クロウ「ゲツ！」

トパーズ「ダメージを与える効果が発動した時、その効果によって受ける自分へのダメージを全て無効にし、その数値分だけ、このカードの攻撃力をアップさせる！」

3人「なに!？」

キング・オブ・トパーズ：攻撃力2400 攻撃力4000

トパーズ「この効果でアップした攻撃力は、次にこのカードが攻撃するまでこのままだ。」

クロウ「な…。」

トパーズ「そしてこの永続畏カードも発動させてもらったぜ。」

トパーズの黄色のDホイールが、チーム5D・Sの3人の間を通り過ぎた。3人は自分のDホイールのディスプレイを見ると…そこには、永続畏、ダメージ・チャージャーが発動しているのが表示されている。

遊星「ダメージ・チャージャーだと！」

ジャック「まずい！」

ダメージ・チャージャーの発動に、焦りを隠せないチーム5D・Sの3人。

ピットブースでは、龍亞が「何々!？」と叫んでいる。

龍亞「何それ!?!ダメージ・チャージャー!?!」

龍可「ダメージ・チャージャーは、相手が効果ダメージを発動した時に使える永續罫よ。」

ブルーノ「自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に送ること、その数値分のダメージを与える効果を持っているんだ。」

アキ「つまり、ダメージは受けなかったけど、1600ダメージをクロウに与える事ができるの。」

龍亞「それじゃ、クロウは負けちゃうじゃん！」

龍可「しかもキング・オブ・トパーズの攻撃力は4000。それで壁モンスターのいない遊星を攻撃されたら……。」

手札を見つめるクロウ。いくら見つめても手札は変わることはない。しかしルビーを倒しても、ここから一気に逆転する可能性があるかと、ひしひしと感じていたのだ。

クロウ（こうなったら、こいつの能力に全てを賭けるぜ。）

ブラックフェザー・ドラゴンを見つめながら、心の中で呟く。

キング・オブ・トパーズの効果は1ターンに1度ではないため、チーム5D'sはもはや効果ダメージを封じられたも同然であり、ここからはモンスターを強化するか、相手モンスターを弱体化させて勝つしかない。クロウは、いや、チーム5D'sは考えていた。

クロウの手札にあるカードはSp・スピード・フォース、Sp・アクセル・ドロー、BF・マイン、BF・逆風のカストの4枚。守備表示モンスターがやられても通常、ダメージは発生しないため、できる限り壁を固めて、守備表示にしてこの場を凌ごうと決めた。

クロウ「俺はブラックフェザー・ドラゴンを守備表示にし、BF・逆風のカストを守備表示で召喚！」

ブラックフェザー・ドラゴン：守備力1400  
BF - 逆風のカスト：守備力1400

クロウ「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」(2)  
トパーズ「さあ、覚悟しろクロウ。俺のターン！」(4)

5DS：SPC8  
LUX：SPC8

トパーズ「このスタンバイフェイズ時に、ダメージ・チャージャーの効果発動！1600ダメージを受け、貴様は終わりだクロウ！」

遊星・ジャック「クロウ！」  
クロウ「ブラックフェザー・ドラゴンの効果発動！カード効果によるダメージを無効にし、このカードに黒羽カウンターを1つ置く！」

黒羽カウンター：0 1

トパーズ「なんだと？」

クロウ「だが、黒羽カウンター1つにつき、ブラックフェザー・ドラゴンの攻撃力は700ポイントダウンする！」

ブラックフェザー・ドラゴン：攻撃力2800 攻撃力2100

遊星「クロウ！」

龍可「ブラックフェザー・ドラゴンには、そんな効果があったのね！！！」

トパイズ「くっ。調子に乗りすぎたか…このターンでクロウと遊星を葬る予定だったが、お前のブラックフェザー・ドラゴンによって、計算が狂った。だがお前の敗北に変わりはない、クロウ！」  
クロウ「なに!？」

トパイズ「俺はS p -ディフェンス・バスターを発動!スピードカウンターが3つ以上ある時、相手モンスター1体を攻撃表示にする!俺は貴様のブラックフェザー・ドラゴンを攻撃表示にする!」

ブラックフェザー・ドラゴン：守備力1400 攻撃力2100

クロウ「なに!？」

ジャック「なんだと!」

トパイズ「そしてキング・オブ・トパイズ、ブラックフェザー・ドラゴンを葬れ!トパイズ・レイン!」

クロウ「遊星、ジャック!俺はここまでだ…。一抜けしちまっていますまねえ…。」

遊星「クロウ!」

ジャック「安心しろ!お前の敵は、俺たちが討つ!」

クロウ「ぐあああああ!」

クロウ：LP1300 LP0

ブラック・バードが減速し、コースを外れていく。

トパイズ「バトルフェイズ終了時に、キング・オブ・トパイズの攻撃力は元の2400に戻るが…。」

キング・オブ・トパーズ：攻撃力4000 攻撃力2400

トパーズ「これで2対2になった。しかも遊星、ジャック。貴様らの場に強力モンスターはいない。一気に決着を着けてやる。カードを1枚伏せ、ターンエンド！」(2)

遊星「俺のターン！」(1)

SDS：SPC9

LUX：SPC9

遊星「Sp・エンジェル・バトンを発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロシー、手札を1枚、墓地に送る！」

サファイア「ここでエンジェル・バトンか。まだ完全に運に見放された訳じゃなさそうだな？」

遊星「俺はチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚！」

デブリ・ドラゴン：守備力2000

遊星「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、自分の墓地の攻撃力500以下のモンスター1体を特殊召喚する事ができる！蘇れ、チューニング・サポーター！」

チューニング・サポーター：攻撃力100

遊星「さらに俺は畏発動！チェーン・サモン連鎖召喚！モンスター効果によって、自分の墓地からモンスターが特殊召喚された時に発動できる！デッキから、レベル3以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する！」



来い！アーマー・ヘッジホッグ！」

アーマー・ヘッジホッグ：守備力300

遊星「レベル3のアーマー・ヘッジホッグと、レベル1のチューニング・サポーターに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

トパーズ「ほう。とうとう仕掛けてきたか。」

集いし願いが、新たに輝く星となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

遊星のDホイールの下から、光の柱が立ち、スターダスト・ドラゴンが姿を現した。

ジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンも有名かつ人気だが、スターダスト・ドラゴンも決して負けていない。

唸る観客席。湧き起こる歓声。しかしチーム5D'sには、その歓声に礼を返している余裕などなかった。

MC「とうとうでたーっ！！スターダスト・ドラゴン！不動遊星のエースモンスターー！！」

遊星「チューニング・サポーターの効果で、カードを1枚ドロ！」

(1)

ラリー「とうとう遊星の反撃だっ！！」

氷室「だが奴らも相当のDホイラーだ。そう簡単に反撃を許すか……。」

天兵「現にスターダスト・ドラゴンの攻撃力じゃ、2体のモンスター、どつちにも及ばない。」

遊星「そして俺はアーマー・ヘッジホッグの効果も発動！シンクロ素材となった時、そのシンクロモンスターに装備する事ができる！装備モンスターが攻撃する間、装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！」

遊星「さらに畏発動！メテオ・ウェーブ！シンクロモンスター1体の攻撃力を300ポイントアップさせる！」

スターダスト・ドラゴン：攻撃力3300 攻撃力3600

サファイア「一気に攻撃力3600だと!？」

トパーズ「チッ。」

遊星「スターダスト・ドラゴン！キング・オブ・トパーズを攻撃！シューティング・ソニック！」

ルビー「!!！」

ピットブースに戻ったルビーには、元々スターダスト・ドラゴンの攻撃力がキング・オブ・トパーズより高いのだが、さらに攻撃力を上げた理由がわかった。

しかし慌てずとも、2人はわかっているだろう、と黙っていた。

案の定であったが…。

サファイア「なるほど、エース・オブ・サファイアの効果を見越して攻撃力3600にしたのか。エース・オブ・サファイア、効果発動！攻撃対象をこのカードに変更する！」

トパーズ「さらに永続罨発動！トパーズ・バリア！このカードは1ターンに1度、手札を1枚捨てる事で、相手の場のカード1枚と、俺の場のカード1枚はこのターン、戦闘及びカード効果では破壊されない！」(1)

サファイア「おお！ナイスだぜ、トパーズ！」

エース・オブ・サファイア：守備力3000

トパーズ「相手の場、そう。エース・オブ・サファイアの事よ。」

遊星「だが、メテオ・ウエーブの効果で、俺の場のモンスターが守備モンスターを攻撃した時、貫通ダメージを与える！」

サファイア「へっ…。」

サファイア：LP3300 LP2700

トパーズ「貫通ダメージは戦闘ダメージ扱い。キング・オブ・トパーズの効果は発動しないが、バトルフェイズ終了時にスターダストの攻撃力は戻るぞ。」

スターダスト・ドラゴン：攻撃力3600 攻撃力2500

ジャック「くっ。エース・オブ・サファイアが、フィールドに残ったままか…。」

遊星「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」(0)

サファイア「俺のターン！」(3)

5Ds：SPC10

LUX：SPC10

サファイア（奴の場にはスターダスト・ドラゴンがいる。あのモンスターはフィールドのカードを破壊する効果を、自身をリリースして無効にする効果を持っている。だが奴が無効にできるのは、カードの発動。既に発動しているフィールド魔法の効果で破壊が行われなくても、それを無効にして破壊する事はできない。だったら。）

サファイア「トパーズ！俺がとどめを刺すぜ。安心しな。」  
トパーズ「そうか…。」

サファイア「スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを10個取り除く事で、フィールド上のカードを1枚破壊するぜ！」

LUX：SPC10 SPC0

サファイア「消える、スターダスト・ドラゴン！」

ジャック「そうはいかん！トラップ発動！デモン・ストーム！自分フィールドのモンスター1体を破壊し、カードを1枚ドロ―した後、相手に700ポイントのダメージを与える！」

龍亞「どういう事!？」

ブルーノ「自分フィールドのモンスターって、ランサー・デーモン…?」

遊星（ジャック。なるほど、そういう事か!！）

遊星「スターダストの効果発動！フィールドのカードを破壊する効果を持つ魔法・罠・モンスター効果の発動を無効にし、それを破壊する！ヴィクティム・サンクチュアリ！」

サファイア「なんだと!？」

スターダスト・ドラゴンは自身をリリースして効果を発動し、エンドフェイズにはフィールドに戻る。

つまりサファイアの思惑では、スターダスト・ドラゴンをスピード・ワールドの効果で破壊して、復活させないつもりだった。

だが、ジャックの罠カードにより遊星はスターダストの効果が発動し自身の効果で墓地に送られたことにより、エンドフェイズにフィールドに戻る事ができるのだ。

サファイア「リリース・エスケープか…。味な真似をするぜ。」

トパーズ「おい、このターンに決着を着けるんじゃないのか？」

サファイア「まだ俺のターンは終わってねえ！遊星。お前の場にモンスターはいない。これで終わりだぜ。エース・オブ・サファイアを攻撃表示にし…。サファイアドラゴンで、遊星にダイレクトアタック！サファイア・スパーク！」

遊星「罠発動！スターダスト・フラッシュ星屑の残光！」

サファイア「なんだと!？」

遊星「このターン、自身の効果でリリースされ、墓地に送られているスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

サファイア「サファイアドラゴン！攻撃中止！」

攻撃をした後、相手の場のモンスターの数が変化した場合、「巻き戻し」が発生し、攻撃を続行するか否かを選択できる。

WRGP特別ルールでは巻き戻しが発生しても別の相手のフィールド

ドに攻撃することはできないため、サファイアドラゴンの攻撃は、中止せざるを得ない。

サファイア「だがエース・オブ・サファイアの攻撃力は2700。たとえこのターンでお前にとどめはさせなくとも、スターダスト・ドラゴンを倒せばお前は倒したも同然！くらえ！サファイア・グラウンド・セイバー！」

不動遊星：LP1200 LP1000

確かに遊星のライフポイントは減り、エース・オブ・サファイアの剣が、スターダスト・ドラゴンを貫いたように見えたのだが…。スターダスト・ドラゴンは苦しそうに鳴いてはいるものの、破壊はされていない。

ジャック「さすがだな。遊星。」

遊星「俺は墓地からシールド・ウォリアーを除外し、その効果を発動した！このカードを墓地から除外する事で、モンスター1体の戦闘での破壊を無効にする！」

サファイア「シールド・ウォリアーだと!?!？」

MC「おおーっと！Sp・エンジェル・バトンを発動した際、遊星はシールド・ウォリアーを送っていたようだーっ！さすが不動遊星！抜かりはないぞーっ！」

サファイア（チツ。だがトパーズの場に、トパーズ・バリアがある。トパーズの手札は1枚残っている。申し訳ねえが、これで守ってもらうしかねえか…。）

サファイア「これで俺は、ターンエンド！」（3）

遊星「アーマー・ヘッジホッグは、装備状態で破壊されたターンのエンドフェイズに、相手のシンクロモンスター1体に装備できる！装備モンスターの攻撃力・守備力は500ポイントずつ下がる！俺はエース・オブ・サファイアに、アーマー・ヘッジホッグを装備！」

鋼の鎧を纏ったかわいらしい顔をしたハリネズミのモンスターが、エース・オブ・サファイアにのしかかった。エース・オブ・サファイアは重そうに唸っている。

エース・オブ・サファイア：攻撃力2200  
エース・オブ・サファイア：守備力2500

サファイア「チツ、生をッ！」  
ジャック「俺のターン！」（1）

5DS：SPC11  
LUX：SPC1

ジャック「このカードは…。」  
遊星「…？」

ジャック（今俺の場に伏せてあるカード。これは本来、レッド・デーモンズに対して使うハズのカード。だが…今の俺に必要なものは…。仲間を守るべき力！）

ジャック「遊星。ようやく俺も貴様の言うことを聞くことができそうだ…。」

遊星「ジャック。まさか、あのカードを!？」  
ジャック「ああ…いくぞ！」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

キング・オブ・トパーズ

シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力2400 / 守備力3000

「トパーズ」と名の付いたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度だけ、自分の墓地に存在する光属性モンスターを3体除外し、手札が2枚になるまでデッキからカードをドロウすることができる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手のカード効果によるダメージが発生した時、それを全て無効にし、その数値分だけ、このカードの攻撃力をアップさせる。このカードが攻撃を行った場合、この効果によってアップした攻撃力は元に戻る。

<次回の最強カード>

ブラック・ゲイザー・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻撃力2800 / 守備力1800

チューナー+チューナー以外の闇属性モンスター1体以上  
?



第7話・希望を繋げる！ブラック・ゲイザー・ドラゴン（前書き）

ターンエンドって言ってないのにターンが終了していることがあります、

それはアニメをモチーフにしているからです。

私は、ガチガチのOCGプレイヤーではなく、アニメリスpektプレイヤーなので…。

第7話・希望を繋げる！ブラック・ゲイザー・ドラゴン

チーム5D's

・SPC11

ジャック・アトラス

・LP1600

・手札1枚

・(モンスター)ランサー・デーモン(DEF1400)

・(魔法・罫)1枚

クロウ・ホーガン

チーム5D's

・SPC11

ジャック・アトラス

・LP1600

・手札1枚

・(モンスター)ランサー・デーモン(DEF1400)

・(魔法・罫)1枚

クロウ・ホーガン

・LPO

・(モンスター)BF・逆風のガスト(DEF1400)

・(魔法・罫)1枚

不動遊星

- ・LP1000
- ・手札0枚
- ・(モンスター)スターダスト・ドラゴン(ATK2500)
- ・(魔法・罫)1枚/アーマー・ヘッジホッグ(+)

チームラゲジュアリー

- ・SPC1

サファイア

- ・LP2700
- ・手札3枚
- ・(モンスター)エース・オブ・サファイア(DEF2500(+))
- ・(魔法・罫)なし

ルビー

- ・LP0
- ・(モンスター)なし
- ・(魔法・罫)なし

トパーズ

- ・LP2500
- ・手札1枚
- ・(モンスター)キング・オブ・トパーズ(ATK2400)

・（魔法・罨）トパーズ・バリア（）

サファイア（ジャックは何をドロ―した…？だが、トパーズのトパーズ・バリアがある限り、1回だけ、エース・オブ・サファイアは破壊されねはず…。まさかスピード・ワールド 2の効果でトパーズ・バリアを破壊するつもりじゃ…？）

ジャック「フツ！俺が引いたカードを見て、おののくがいい！」

観客席から「何を引いた…？」という声がジャックにも聞こえた。それを聞いたび、ジャックはエンターテイナーとしての快感を覚える。

ジャック「俺は、このモンスターを特殊召喚する！」

すると、トパーズのフィールドにあったトパーズ・バリアが大きな紫色の口を持った青いモンスターに食べられてしまった。

トパーズ「バカな！？これは…！？」

ジャック「トラップ・イーターを特殊召喚！」

トラップ・イーター：攻撃力1900

矢雑「どうしてモンスターを特殊召喚しただけなのに、罨カードが墓地に送られたんじゃ？」

氷室「いや、特殊召喚して罨カードを墓地に送ったんじゃない。召喚するために墓地に送ったんだ。」

ラリー「え…っ？」

氷室「トラップ・イーターは通常召喚ができないモンスターで、相手の場の罨カードを墓地に送った場合のみ特殊召喚ができるモンスターなんだ。」

矢薙「へえ〜。」

ジャック「遊星。あのカードを使うハメになりそうだな。」  
遊星「ジャック…。」

(回想)

ポツポタウン、遊星のガレージ。そこに、ジャックの怒鳴り声が響き渡る。

ジャック「何！？このモンスターをエクストラデッキに入れるだど！？？」

龍亞「うん。これ、この前デュエルアカデミアの課外授業で旧モーメントの近くにいったんだ。それで自由時間になったからさ、ボブとかと一緒に旧モーメントに行ったんだ〜。」

龍可「ちよっと！あそこは行っちゃダメってマリア先生に言われたでしょ！？？」

龍亞「だってしょうがないじゃん。旧モーメント旧モーメントって言っても、何があんのか知らないからさ〜。」

クロウ「まあな。人間ってのは行っちゃダメって言われると、行きたくないから、仕方ねえよな！」

クロウのそのセリフを流し目の状態で聞いていた龍可が口をはさんだ。

龍可「クロウ！余計な事は言わないの！」

クロウ「へへっ…。すまねえっ。」

口では謝っているが、半分以上は笑ってごまかしている。だが、その和んだ雰囲気はジャックの罵声が打ち砕いた。

ジャック「龍亞ッ!!」

龍亞「ひーっ!?何、ジャック!?!」

ジャック「旧モーメントに行つて、これを拾つたんだな!?!」

龍亞「そそそ…そう!そんな怒らないでよ。ボブには内緒で、持つてつちやつた!」

ジャック「フン。」

ブルーノ「でも、何でそんなに意固地になるの?」

ジャック「このモンスターの効果をよく見る!こんな効果を持つモンスターが、この俺ジャック・アトラスのデッキに入るものか!」

クロウ「どれどれ…?へえー。チューナー以外の闇属性モンスターが必要なのか…。」

龍亞「クロウのブラックフェザーも闇属性だけど、このモンスターはブラックフェザーじゃないからさ…。」

クロウ「いいんじゃないか?ジャック。」

ジャック「フン!」

ジャックは1人で椅子に腰かけていて、他の皆は立ってジャックに説得をしているが、ジャックはパイと斜め上を向いてしまった。

遊星「ジャック…。」

皆が黙りこくってしまったが、そこで十六夜アキが少々呆れつつ、口をはさんだ。

アキ「使いたくなくても、入れときなさい。ジャック。いいじゃない。使いたくなきゃ使わないで。」

遊星「アキ…。」

ジャック「…。」

アキ「ジャック。せっかく龍亞が持ってきてくれたカードなのよ。今はジャックの美学より、チームの事の方が大事でしょ？それに…」

そこまでアキが言ったところでジャックは机を叩き、「ええい、もういい！」と怒鳴って立ち上がった。すると、叩いた手を、龍亞の持ってきたカードの上に置き、素早くエクストラデッキに入れたのが皆にはしつかりと見えた。

龍亞「ジャック！使ってくれんだね！？」

ジャック「フン！こいつを使う時は来ないと思うがな。」

(ここまで)

ジャック「レベル4のランサー・デーモンに、レベル4のトラップ・イーターをチューニング！」

迫り来る王者の胎動。光を貫く、一閃の闇となれ！シンクロ召喚！現れる、ブラック・ゲイザー・ドラゴン！

ブラック・ゲイザー・ドラゴン：攻撃力2800

サファイア「ブラック・ゲイザー・ドラゴンだと！？」

トパーズ「！？」

ルビー「なんだい、あのモンスターは！？」

天から舞い降りた闇の柱の中から現れたのは、鋭い鋼色の角を持つ黒龍だった。

体中に電気が走っているようであり、その漆黒の体を雷電が駆け巡り、雷電が駆け巡る音すら聞こえるのが皆にはわかった。

会場がざわつき、あのモンスターは？という声がところどころで聞こえる。無理もない話であり、ジャックが公の前でブラック・ゲイザー・ドラゴンを召喚するのは初めてなのだ。

チーム5D'sのピットブラスからは龍亞が叫んでいる。もちろん他のメンバーも、ジャックがブラック・ゲイザー・ドラゴンを召喚した事には、驚きを隠せなかった。

龍亞「ジャックー!!」

深影「ねえ…アトラス様って、あんなモンスター使った事…あったかしら？」

カーリー・ステファニー「ないと思う…。」  
ステファニー「って…。」

深影「あんたらはそんな事気にしなくていいの!!!」  
カーリー「うわっ！それはこっちの台詞なんだから！」

ジャック（フオア・ザ・チーム…か。）

ジャック「ブラック・ゲイザー・ドラゴンで、エース・オブ・サファイアを攻撃！ブリッツ・ストーム！」

ブラック・ゲイザー・ドラゴンの大きな口から、電撃を帯びた黒い光線が、エース・オブ・サファイアに向かう。

サファイア「エース・オブ・サファイアッ！ぐあああッ！」

ジャック「これで終わりではない！スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを10個取り除き、貴様のキング・オブ・トパーズを破壊する！」

トパーズ「なんだと!?!」



5 D S : S P C 1 1    S P C 1

M C 「ジャック・アトラスの新たなエースモンスター、ブラック・ゲイザー・ドラゴンにより、サファイアのエースモンスターが倒され、スピード・ワールド 2 によってキング・オブ・トパーズも倒された!! 遊星とジャックはそれぞれシンクロモンスターを1体ずつ持っているが、チームラグジュアリーの場合はから空きだぞーっ!」

トパーズ「俺たちのシンクロモンスターが破壊されただ。チツ。俺のターン!」(2)

5 D S : S P C 2

L U X : S P C 2

トパーズ「俺はトパーズ・ガーディアンを守備表示で召喚!」

トパーズ・ガーディアン：守備力2000

トパーズ「リバーズカードを1枚セットし、ターンエンド!」(0)

遊星「俺のターン!」(1)

5 D S : S P C 3

L U X : S P C 3

クロウ「よっしゃ。サファイアの場合にはカードが1枚もねえ!」

龍亞「やつちやえ遊星!」

遊星「俺はスターダスト・ドラゴンで、サファイアにダイレクトアタック! シューティング・ソニック!」

サファイア「な!ぐあああっ!」

サファイア：LP2700 LP200

ブルーノ「あと一息だ！」

アキ「頑張つて！」

遊星「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」(0)

サファイア「調子に乗りやがって…。俺のターン！」

サファイア（だが俺の場にはカードがない…手札は3枚、あるいはあるが、ジュエリー・スナイパーは召喚するためにはリリースが必要。罫カード、最終突撃命令…これは場のモンスター全てを攻撃表示にするカード。そしてもう1枚は、カウンター罫、リアクション・サモン反応召喚。ちよつと待て、墓地はどうだ…何かいなかったか？）

サファイアはドローをせず、墓地の確認を行っている。トパーズに言わせればサファイアは見切り発車することが多く、墓地で発動する効果モンスターの効果などにすぐには忘れるから入れない方がいいとの事。

トパーズ「サファイア。何をやってる！？カードをドローしろ！」

サファイア「あ？…ああ。ドロー！」(4)

SDS：SPC4

LUX：SPC4

サファイア（SP・ソニック・バスター。こいつであいつらにダメージを与えてもいいが…。どうせなら、スピードカウンターはトパーズのために取っておくほうがいい。どの道800ダメージじゃ、あいつらのどつちも倒せねえ。）

サファイア「カードを3枚セットし、ターンエンド。」(1)

MC「おおーっと！サファイア！畏か！？それとも手が尽きてしまったのか！？手札を1枚残して伏せたーっ！」  
ジャック「何のつもりか知らんが、俺には通用しない！俺のターン！」(1)

5Ds：SPC5

LUX：SPC5

ジャック「俺はブラック・ゲイザー・ドラゴンで、サファイア！貴様の息の根を止めてくれる！ブリッツ・ストーム！」

サファイア「俺は墓地の、サファイア・ヴェーラーの効果を発動！遊星・ジャック「なんだと！？」

トパーズ「フツ。」

ルビー「ようやく気付いたかい。サファイアの奴。」

サファイア・ヴェーラーは、BF・アームズ・ウィングとの戦闘で、かなり前に墓地に送られていた。  
忘れてしまった人は第5話に戻ろう。

サファイア「直接攻撃を宣言された場合、墓地のこのカードを除外して、自分の場のカードを3枚除外する事で、自分と相手は、デッキからカードを2枚ドローすることができる。」

ジャック「自分と相手！？まさか！？」

サファイア「そう…相手つてのは、当然、トパーズ。」

トパーズ「フツ。じゃあ遠慮なく、2枚ドローするぞ。」(02)

サファイア「うおおおおっ！」

サファイア：LP200 LP0

ジャック「くつ。最後にチームの手助けを…。ターンエンド！」  
（1）

サファイアのDホイールが減速し、ピットへと入っていく。だがサファイアは、チームの勝利を信じているのか、堂々としていた。フオア・ザ・チームの精神をリスペクトするデュエリストである。

一方、トパーズは…

トパーズ「フツ…俺のターン！」（3）

5 D S : S P C 6

L U X : S P C 6

トパーズ「さあ、これでとどめにしてやろう。スピード・ワールド  
2の効果発動！スピードカウンターを4つ取り除く事で、手札の  
スピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与  
える！俺の手札にスピードスペルは…2枚！」

L U X : S P C 6    S P C 2

龍亞「2枚のスピードスペル!？」

ブルーノ「それじゃ、1600ダメージ!!」

トパーズ「俺はお前らのどちらでも倒せるが…遊星。お前のスター  
ダスト・ドラゴンは、俺にとって邪魔な存在だ。ヴィクティム・サ

ンクチュアリは、少々厄介だ。遊星！お前に消えてもらおう！」  
遊星「！！！」

トパーズのDホイールの先端から放たれた光線が、遊星に向かう。

ジャック「遊星。お前はどこまでも世話を焼かせる奴だな。ブラック・ゲイザー・ドラゴンの効果発動！」

トパーズ「ブラック・ゲイザー・ドラゴンのモンスター効果だと！？」

ジャック「このカードをリリースする事で、ブラック・ゲイザー・ドラゴンの攻撃力の半分の数値だけ、自分か相手のライフポイントを回復させる！」

トパーズ「なんだと？ブラック・ゲイザー・ドラゴンの攻撃力は2800……。」

ジャック「つまり、遊星のライフポイントを1400ポイント回復させる！」

遊星「ジャック！……ぐああっ！」

不動遊星：LP1000    LP2400    LP800

ジャックの決死の効果発動により、遊星のライフポイントは残ったが、ジャックの場にはモンスターがいなくなってしまった。

トパーズ「ジャック・アトラス。お前から倒してもいいんだぞ。永続暴発動！トパーズ・リバース！自分のフィールド上のトパーズと

トパーズ・ガードリアン

名の付いたモンスター1体をリリースし、俺の墓地からトパーズと名の付いたモンスターを特殊召喚し、このカードを装備する！蘇れ、キング・オブ・トパーズ！」

上空から、白鬚、王冠、錫杖がトレードマークのキング・オブ・ト  
パイズが舞い降りた。  
先ほどよりも輝きを増しているように見える。

トパイズ「この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は500ポ  
イントアップする！」

キング・オブ・トパイズ：攻撃力2400 攻撃力2900

トパイズ「さあとどめだ。ジャック・アトラスにダイレクトアタッ  
ク！トパイズ・レイン！」

ジャック「ぐっ…ぐあああああつ…あ…後は頼むぞ、遊星。」

遊星「ジャック…！」

深影「アトラス様…！」

ジャック：LP1600 LP0

MC「おおーっと！ジャック・アトラスも敗北したーっ！チーム5  
D'sとチームラグジュアリーの対決も、いよいよ1対1までデュ  
エリストが減ってしまったぞーっ…！」

しかし人数的には1対1だが、遊星のスターダスト・ドラゴンでは、  
キング・オブ・トパイズに太刀打ちはできない。

トパイズ「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」(2)

遊星「俺のターン！」(1)

5DS：SPC7

LUX：SPC3

遊星「俺はカードを1枚伏せ、スターダスト・ドラゴンを守備表示にし、ターンエンド！」(0)

トパーズ「フツ、俺のターン！」(3)

5Ds：SPC8

LUX：SPC4

龍可「またスピードカウンターが4つに…。」  
アキ「でも、遊星の伏せカードは3枚あるわ。絶対何かあるに決まってる！」

ピットブースでそう言っていた皆の所に、ホイール・オブ・フォー  
チユンがやってきた。

敗北を喫してしまったジャックである。

ジャック「当然だ！俺が授けた希望を、ここで繋げられないあいつではない！」

トパーズ「さあ遊星。今度こそお別れだ。スピード・ワールド 2  
の効果をくらえ！」

LUX：SPC4 SPC0

遊星「そうはいかない！罨発動！シンクロ・バリアー！」

スターダスト・ドラゴンがフィールドから消え去り、シンクロ・バリアーのカードがオープンした。

トパース「くっ…シンクロ・バリアー。あのカードはシンクロモン  
スターをリリースし、次のターンのエンドフェイズまで、自分が受  
けるダメージを全て0にするカード。」  
遊星「そうだ。」

トパース「だがいくらダメージを防ぐためと言えど、シンクロモン  
スターをリリースするだ?!？」

遊星「確かにスターダストを失うのは惜しい。だが、リリースしな  
ければ俺は負けてしまっていた!俺は最後まで諦めてはいけないん  
だ!クロウとジャック、チーム5D'sのためにも!」

トパース「勝手にしろ。諦めても諦めなくても結果は変わらないか  
らな。ターン終了だ。」(3)

遊星「俺はここで罫カードを発動!トウルース・リインフォース!  
自分のデッキから、レベル2以下の戦士族モンスターを特殊召喚!  
現れよ!スピード・ウォリアー!」

スピード・ウォリアー：攻撃力900

トパース「なるほど。壁モンスターを召喚できる。だから諦めなか  
った訳か。」

遊星のターン。そつとデッキの一番上のカードの端に指を置く遊星。  
そしてそつと目をつむる。

風と一体化したいからと言って目を閉じてDホイールを運転するの  
は危険だが…。

遊星(あのカードを引かなければ、俺は負けてしまう。キング・オ  
ブ・トパースを倒す事はできない。頼む、カード達よ…)



俺の声に………答えてくれ。)

遊星「ドロー！」(1)

5 D S : S P C 9

L U X : S P C 1

遊星「来たか…。」

トパーズ「!?」

遊星「罫カード発動！ロスト・スター・デイセント！墓地のシンクロモンスター1体を特殊召喚する！蘇れ、スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン：守備力2000 守備力0

遊星「この効果で特殊召喚したモンスターの守備力は0となり、表示形式を変更する事はできず、レベルは1つ下がり、効果は無効化される！」

トパーズ「何のつもりだ？やはり壁か？」

遊星「俺はあの日からデュエルに対する新たな可能性を探し求めてきた。アクセルシンクロの謎は、まだ解き明かせてはいない。だがこれが、今の俺の達した結論だ！」

遊星「S p ・スピード・フュージョン！」

トパーズ「スピード・フュージョンだと？」

遊星「自分用スピードカウンターが4つ以上ある時、手札またはフィールドから、融合モンスターによって決められた融合素材モンス

ターを墓地に送る事で、モンスターを融合召喚する！」

トパーズ「なんだと？今お前の手札は0で、お前の場には2体のモンスターが…」

遊星「スピード・ウォリアーと、スターダスト・ドラゴン！お前たちの力を1つに！融合召喚！現れる！波動竜騎士・ドラゴエクイテス！」

波動竜騎士・ドラゴエクイテス：攻撃力3200

クロウ「波動竜騎士…」

ジャック「ドラゴエクイテス？」

会場とチーム5D'sの反応からして、遊星が今までに召喚した事のないモンスターのようである。

ジャベリンを持ち、青き胴体、薄赤い尾を持った竜騎士。それだけで驚く事だが、遊星が融合召喚を行った事は、今までに1度としてないのだ。

ブルーノ（遊星。シンクロモンスターとモンスター1体を融合させる…。これが、進化なのか？）

トパーズ「な…なんだ。このモンスターは!？」

遊星「ドラゴエクイテス！キング・オブ・トパーズを攻撃！スパイラル・ジャベリン！」

トパーズ「ぐああああっ！」

トパーズ：LP2500 LP2200

MC「不動遊星見事融合召喚したモンスターでトパーズにダメージを与えたーっ！」

トパーズ「ぐっ……。こうなった以上、遊星の残りライフが800とは言え、スピード・ワールド 2の効果で勝つのを考えるのは危険すぎる。なら……トラップカード発動！ヘイト・リボーン！」

サファイア「ヘイト・リボーン！」

ルビー「トパーズ。あのカードをデッキに入れてたんだね。」

遊星「……ヘイト・リボーンだと？」

トパーズ「ヘイト・リボーン。こいつは俺のレベル6以上のモンスターが戦闘で破壊された時、自分の手札を1枚墓地に送り、相手の伏せカードを1枚破壊し、そのモンスターを特殊召喚する！」（2）  
遊星「伏せカードだと？」

龍亞「遊星の場には伏せカードがないよ？」

クロウ「いや、俺の場にはある……。」

ブルーノ「ジャックの場にもある……。」

基本的にデュエルから脱落したプレイヤーはカードを使用することはできないが、まだ参加しているプレイヤーは、脱落したDホイラーのフィールド上にあるカードを効果の対象としたりする事は可能である。

トパーズ「俺はクロウの場の伏せカードを破壊して、復活せよ！キング・オブ・トパーズ……！」

だが、クロウの場の伏せカードを破壊した瞬間、トパーズのライフポイントが1200となってしまうていた。

トパーズ「なんだと？どういう事だ？」

クロウ「引っかかりやがったな。お前が破壊したカードは、BF -  
マインだよ!」

クロウはピットブースにあるマイクを取り、大声で説明をし始めた。  
こういう時のために、ピットブースにもマイクがあるのだ。

クロウ「BF - マインはフィールド上で破壊された時、自分の場に  
BF がいる場合、相手に1000ポイントのダメージを与えるカー  
ドさー!」

クロウは既に脱落しているが、クロウの場にあるカードは残り続け  
ている。つまり、BF - 逆風のガストがクロウの場に残っている事  
により、トパーズに1000ダメージを与えられるのだ。

トパーズ：LP 2200    LP 1200

トパーズ「だが、ヘイト・リボーンの効果は発動する! 蘇れ! キン  
グ・オブ・トパーズ!」

キング・オブ・トパーズ：攻撃力2400

遊星「スピード・ワールド 2の効果発動! スピードカウンターを  
7つ取り除く事で、デッキからカードを1枚ドロウする! (1) 俺  
はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」

5Ds：SPC9    SPC2

トパーズ「俺のターン!」(3)

5 D S : S P C 3  
L U X : S P C 2

トパーズ「俺はカードを1枚伏せ、トパーズ・スターズ召喚！」

トパーズ・スターズ：攻撃力100

トパーズ「こいつをリリースし、キング・オブ・トパーズの攻撃力を、エンドフェイズまで1000ポイントアップさせる！」

キング・オブ・トパーズ：攻撃力2400 攻撃力3400

トパーズ「そして俺はキング・オブ・トパーズの効果を発動！時分の墓地に存在する光属性モンスターを3体除外して、手札が2枚になるまで、カードをドローする！」(2)

除外したカード：H Q - s u b s t a n c e、トパーズ・ガーディアン、トパーズ・ギア

遊星「そんな効果も持っているのか！」

トパーズ「俺はさらに、トパーズ・ゴーレムを特殊召喚！」

トパーズ・ゴーレム：攻撃力2000

トパーズ「このモンスターは、俺のフィールド上にトパーズと名のついたモンスターがいる場合のみ、特殊召喚できる。」

遊星「攻撃力2000だと。」

トパーズ「キング・オブ・トパーズで、ドラゴエクイテスを攻撃！」

遊星「そうはさせない！トラップ発動！くず鉄のかかし！」

ボロボロのかかしがフィールドに現れ、ドラゴエクイテスの前に立ちはだかり、キング・オブ・トパーズの巻き起こしたトパーズの雨を防いだ。

会場からは歓声が巻き起こる。遊星の使うトラップカードの代表格が、くず鉄のかかしであり、1ターンに1度、攻撃を防げるという性質であり、その強力さ故、これもなかなか人気のあるカードだ。

遊星「このカードは相手モンスター1体の攻撃を無効にする！そしてその後、フィールドに再びセットされる！」

MC「ここでまさかのくず鉄のかかしーっ！！不動遊星の代表格トラップだーっ！」

トパーズ「チツ。ターンエンド！」（1）

龍亞「やった！トパーズ・ゴーレムの攻撃力は2000だから、これで遊星の勝ちだ！」

龍可「でもトパーズの場合には伏せカードがあるわ。」  
アキ「…。でも、遊星ならきつと…。」

遊星「俺のターン！」（1）

5DS：SPC4

LUX：SPC3

トパーズ（確かにトパーズ・ゴーレムの攻撃力は2000だ。攻撃を受ければ俺は負ける。だが、俺のフィールドには…ヘッ。俺はド素人なんかに負けるわけがねえのさ。）

遊星「波動竜騎士 - ドラゴエクイテス！トパーズ・ゴーレムを攻撃

！スパイラル・ジャベリン！」

MC「この攻撃が通れば、チーム5D・Sの勝利だーっ！」

アキ「お願い、通って！」

ブルーノ「遊星……。」

トパーズ「よく頑張ったが、お前はここで終わりだ。畏カード発動！トパーズ・バスター！」

遊星「トパーズ・バスター！？」

トパーズ「自分フィールド上に存在する光属性モンスターが攻撃された時、その攻撃を無効にして、相手に2000ポイントのダメージを与える！」

アキ「2000ダメージ！？」

ジャック「なんだと！？」

サファイア・ルビー「やった？」

トパーズ「くらえ遊星！」

トパーズ・バスターのイラストの部分から、黄色の光線が、遊星のDホイールに向かう。

だが、ドラゴエキテスが、Dホイールの前に立ちはだかり、手をかざしていた。

トパーズ「な……？」

遊星「波動竜騎士・ドラゴエキテスの効果発動！ウェーブ・フォース！相手のカード効果によるダメージは、相手が受ける！」

トパーズ「ヘッ。焦らせるなよ。カード効果ダメージを俺に跳ね返すだど？だったら、キング・オブ・トパーズの効果で攻撃力を20

00ポイント上げるぜ！」

龍亞「そうだ遊星！あいつに効果ダメージは通用しないんだ！」

遊星「確かにキング・オブ・トパーズの効果により、お前は完全に効果ダメージをシャットアウトしているように見えるが………ウエーブ・フォースの効果は無効にできないぞ！」

トパーズ「なんだと!？」

遊星「キング・オブ・トパーズが無効にできるダメージは、相手が発動した効果ダメージ。ドラゴエクイテスの効果は、相手の効果ダメージを、代わりにお前に受けさせるというものだ!！」

トパーズ「という事は……まさか……？」

遊星「そう。俺は効果を発動していない。お前のダメージを跳ね返しただけという事だ!！」

ウエーブ・フォースで跳ね返した光線が、トパーズのDホイールに向かう。

効果ダメージを防ぐ効果を持つキング・オブ・トパーズだが、その跳ね返ってきた光線に、ただ目を向けているだけで、何もしようとはしなかった。

トパーズ「ぐっ……くああああああ……!！」

トパーズ：LP1200 LP0

(次回へ)



<今日の最強カード>

ブラック・ゲイザー・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻撃力2800 / 守備力1800  
チューナー+チューナー以外の闇属性モンスター1体以上

自分のライフポイントが3000ポイント以上の場合、手札を1枚捨てる事で、ライフポイントを1000回復する。この効果は1ターンに1度しか使用できない。また、自分フィールド上に存在するこのカードをリリースする事で、このカードの攻撃力の半分の数値だけ自分が相手のライフポイントを回復する。この効果は相手ターンでも使用できる。

<次回の最強カード>

スピード・ウォール

永続罫

?

第7話・希望を繋げる！ブラック・ゲイザー・ドラゴン（後書き）

一閃の闇って、矛盾してますが、ごめんなさい。

## 第8話・灼熱の決闘！チームヴォルケーノvsチームフォビドゥン（前書き）

実は自分、大学生でして……。最近テストなもので、なかなか投稿できずにすみません。まだテストは終わった訳ではありませんが、頑張って投稿します！！

## 第8話・灼熱の決闘！チームヴォルケーノvsチームフォビドゥン

トパーズのDホイールが失速し停止。遊星が1人でサーキットを走行している。

MC「遂に決着ーッ！！チーム5D・S！WRGP、第1回戦を勝利したーッ！」

WRGPの予選はリーグ戦であるため、ここで敗北してもチームラグジュアリーはもうWRGPから脱落した訳ではないが、それでももう後は残されていない。

会場からは歓声が沸き起こり、リズムが微妙だが、「5D・スコール」も起こっている。

遊星がホームストレートに戻ってくると、チーム5D・Sの面々が、笑顔で迎え入れた。

アキ「やったわね、遊星。」

龍亞「やったねっ！」

ジャック「見事、俺の希望を繋げてくれたな、遊星。」

クロウ「何言ってたんだよ。俺のBF・マインが無かったらあのターンじゃ決着がつかなかったんだぜ？希望を繋げたのは、俺もだぜ！」  
ジャック「…フン！」

クロウ「フンって何だ、フンって!?!」

遊星「ジャック、みんな…。」

遊星が微笑んでいると、奥からチームラグジュアリーの間々がやってきたのが見えた。

サファイアとルビーは微笑んでいた。トパーズは…。

遊星「チームラグジュアリー。」

サファイア「遊星、ジャック、クロウ。ド素人なんて言っただけ悪かったな。俺らの方が、素人かな…？」

ルビー「恐れ入ったよ…。」

ジャック「フツ。このジャック・アトラスのパワーがわかれば、それでいいんだがな。」

サファイア「いや、お前はパワーだけじゃない…。」

ジャック「サファイア…。」

トパーズ「敗北…か…。俺は…。」

クロウ「トパーズ。」

クロウが頂垂れているトパーズの所にやってきて、手を差し出した。それぞれのチームの健闘を称える握手だろう。トパーズは最初、差し出された手を見ているだけだったが、周りからの視線からか、しぶしぶ握手をした。

クロウ「へへっ…。」

トパーズ「お前らのチーム、個人戦に出場する奴はいるのか？」

遊星「いや、俺たちは、WRGPのチーム優勝に全力を注ぐ。個人出場はしないが…。」

トパーズ「そうか。」

少し落胆したトパーズを見て、トパーズがシングル戦に出場し、チーム5D'sへの雪辱を晴らしたいと思っているのが遊星にはわかった。

MC「では会場みんな！このチーム5D・sとチームラグジュアリーの健闘をたたえ、あたたかい拍手を送ってくれーっ！！！」

その拍手を合図としたのか、2チームは両方とも、それぞれのブラスへと歩き始めた。

ところが、そこでサファイアがチーム5D・sの方に振り向いた。

サファイア「おい！」

遊星「…？」

サファイア「決勝で会おうぜ、チーム5D・s！」

遊星「…ああ！」

この会話がフラグか否かを信じるか信じないかはあなた次第。

ブラシド「フツ。いいぞ不動遊星。その調子で勝ち上がってこい。」

ホセ「チームニューワールドとチーム5D・sが決勝戦で戦う。そして我々がチーム5D・sを倒す事で…。」

ルチアーノ「僕たちの目的は達成される訳だね？」

ブラシド「フツ、楽勝だな。」

ホセ「だが…。」

ホセが逆説の接続詞だけを口にしたのが気になったのか、ホセの話にあまり関心を持たないブラシドが、ホセに疑問を投げかけた。

ブラシド「ストームという奴の事か？」

ホセ「うむ…。」

ルチアーノ「いいじゃんあんな奴、放っておけば…。」

ホセ「…。」

現在、午後2時45分。3時からWRGP予選リーグ第2試合、「チームヴォルケーノ」vs「チームフォビドゥン」の戦いが始まる。

他のチーム同士の戦いと言えど、チーム5D・sにとっては戦う可能性のある相手。その第2試合を見ない訳にはいかない。チーム5D・sの面々は出場者用の特別室のモニターで試合を見る。

特別室がある理由は他チームのデュエルを見ながら、周りにばれないうように作戦を立てる事ができるからだ。

遊星「ここが、俺たちの部屋か。」

龍亞「おおーっ！広い！」

クロウ「しかも海が見えるぜ！」

アキ「ってか、これって、バルコニー？」

部屋の入口から見て右側にバルコニーがあり、そこからは海も見える。さらにそのバルコニーのちょうど反対側には50インチ程の液晶モニターが付いており、これで次のデュエルを観戦する事ができる。

バルコニーと液晶モニターの間にはベージュ色のフカフカのソファーが備わっている。

奥にも別の部屋があるようで、こんな部屋をチーム分用意しているのなら、どれだけの資金を消費しているのだろうかと考えてしまう。

ブルーノ「こんな豪華な部屋を…チーム分だけ用意…してるのかな？」

ジャック「フツ。なるほど。トップルームと言っただけの事はあるな。」

ジャックのその言葉に、お金にうるさいクロウが食いついた。

クロウ「おい、ジャック。それ…どういう意味だ？」

ジャック「まさか全てのチームにこんな部屋を用意している訳がなかるう？それでは破産だ、破産。」

龍可「じゃあこれって、チーム5D・sだけのために作られた特別な部屋？」

ジャック「残念だがそれは違うな。」

龍亞「え？どういう事？もったいぶらないで早く言つてよー！」

ジャック「俺は登録の際、普通の部屋よりグレードの高いこのトゥブルームを選んだのだ！」

ブルーノ「なるほど。じゃあ、ホテルで言えばスイートルームだね。」

一瞬、空気が凍りついた。その後、クロウが「ん…待てよ？」という言葉を発した。

クロウ「普通の部屋よりグレードが高いんだったら、それだけ多くの金がかかる訳だよな？」

ジャック「ああ。どれくらい高いかは覚えておらんが…。」

クロウ「ざけんじゃねーっ！お前、その金はどっから出んだよ！？お前働いてないくせに何勝手な事してんだよーっ！！！」

ジャック「そんなもの、WRGPで優勝し、賞金をいただければ余裕で払える額だろう！？俺たちはWRGPで優勝するために参加した！これは当たり前のことだ！クロウ！貴様、WRGPで優勝する自信もないのかーっ！？」

何とも滅茶苦茶な考え方ではあるが確かにWRGPで優勝しないわ



けにはいかないという覚悟でこの大会に臨んでいるのは事実。

クロウ「俺が言ってるのはそういう事じゃねえっ!!金の管理もできない奴が、勝手に俺たちの金を使うなって事だよっ!」

ジャック「貴様も気づいてなかったのなら同じだ!金の管理がなっていない!!」

クロウ「何を!？」

2人がお互いに文句を言いあっていると、意外な事に遊星が仲裁に入った。

遊星「2人とも、次の試合が始まるぞ。」

クロウ「ゆ…遊星。」

ジャック「あ…ああ。」

クロウ・ジャック「フンッ!!」

遊星がリモコンのスイッチボタンを押すと、MCの顔が画面に張り付いていた。

龍亞「うわあああっ!ビックリしたーっ!」

MC「さあ、WRGP第2試合!チームヴォルケーノvsチームフォビドウン!いよいよ開幕だーっ!それではチームメンバーの紹介だ!チームヴォルケーノ、紅蓮の炎で全てを燃やす、ヴァルカス!」

肌が真っ黒でガツチリした体の男が会場に手を振った。浜辺に出没しそうな感じである。

MC「真紅の魂を持つ男、ムーチョ!」

こちらにも肌が真っ黒だがヴァルカスとは違い、ガリガリの体で情け

ない顔をしている。

なんだか自信がなさそうに、チョコチョコと手を振る。

ヴァルカス「ムーチョ！もっと手を振れ！」

MC「そしてチームリーダーのノヴァ！」

ノヴァは先ほどの2人とは違い、平均的な体格をしている。チームヴォルケーノは、ちょうど大・中・小の体の持ち主がいるのだ。こういうバランスになるように鍛えたのではないかという説もある。

ノヴァ「ハローみんな！チームヴォルケーノ、応援よろしくな！」

MC「さあチームフォビドウンの紹介だが…これはチームフォビドウィン側から申し出があったため、チーム3人分の紹介を一気にやっってしまうぞ！」

会場が一気に冷めた。中には「は？なんで？」と言い始める者もいる。その空気をまずいと思ったのが、MCはすぐに次につなげようとする。

MC「あ…全てが謎につつまれた、禁断のデュエルを行う、伝説のデュエリスト、エービ、シーデ、イーフだ！」

エービ、シーデ、イーフ、3人とも漆黒のローブのようなものを身にまとっていて、一見ダークシグナーのようにも見える。何はともあれ、不気味であるように見える事に変わりはなかった。

クロウ「何だあいつら？気味わりいな…。」

アキ「3人とも同じに見えるわ…。」

龍亞「ゴーストかも…！」

ブルーノ「あり得ない話ではないね。イリアステルが何を考えてるのかはわからないし…。」

と話している時に、ドアをコンコンとノックする音が聞こえた。

ジャック「ん？」

ドアの一番近くにいた遊星がドアを開けると、シルバーマントにシルバーチノのストームが立っていた。

ストーム「おう、チーム5D、s！」

龍亞「ストーム！」

ストーム「1回戦勝利、おめでとう！ほら、差し入れ。」

差し入れと言って、遊星に手渡したのは、ドミノドーナツのチョコファッションドーナツ人数分と、コーヒー豆の入った箱だった。

遊星「ドーナツか。わざわざすまない。」

ジャック「フン、コーヒー豆だと？このジャック・アトラスの好むコーヒーがわかるか…って…これは…！！！」

ジャックが、いや、チーム5D、sの皆が目を丸くした。そのコーヒー豆の袋には「ブルーアイズ・マウンテン青眼の山200g」と書いてあったのだ。

ブルーアイズ・マウンテンはコーヒー屋で飲んで一杯3000円するコーヒーだ。

たまに、ブルーアイズ・マウンテン三杯で4500円になるというサービスを行っている店もある。

クロウ「ブルーアイズ・マウンテン…！！！」

ストーム「そうそう。ジャック。俺はこう見えてもお前のファンで

よ！」  
ジャック「よくわかってるなストーム！」  
アキ「でも、いいの？自腹切ったんでしょ？200gって、一体いくらしたの？」  
ストーム「気にすんな気にすんな。これは友達から貰ったもんだから。」

龍可（どんな友達かしら…。）

ストーム「じゃあ…俺、ここで一緒にデュエル見ていい？会場、暑いからさア…。」  
龍亞「いいよいいよ！一緒にみよーぜ！チームヴォルケーノと…つて！もう始まつてるじゃん！」  
ブルーノ「ホントだ…。」

もう既にライディングデュエルが始まっていた。先攻はどうやらチームフォビドウンが取ったようである。

ストーム（チームフォビドウン…まさか…あいつらって…？）  
遊星「…。」

エービ「私のターン！（6）私は伏せカードを1枚セットし、ターンエンドだ。」（5）  
ヴァルカス「俺サマのターン！（6）俺はプロミネンス・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」（5）

プロミネンス・ドラゴン：攻撃力1500

プロミネンス・ドラゴン

効果モンスター

レベル4 / 炎属性 / 炎族 / 攻撃力1500 / 守備力1000  
自分フィールド上にこのカード以外の炎族モンスターが存在する場合、このカードを攻撃する事はできない。自分のターンのエンドフェイズ時、このカードは相手ライフに500ポイントダメージを与える。

ヴァルカス「俺はこれでターンエンド。だが、プロミネンス・ドラゴンの効果を受けてもらうぜ？ファイヤーツ！！！」  
シーデ「うおあっ！…ええい…。」

シーデ：LP4000    LP3500

龍亞「いきなり500ダメージ!?」  
ストーム「プロミネンス・ドラゴンは自分のターンのエンドフェイズ時に相手に500ダメージを与える。なかなか強力なモンスターだな。」

ヴァルカス「さあ、ちったあ目え覚めたか？チームフォビドゥン！」  
シーデ「私のターン。(6)私は手札からパワー・デーモンを攻撃表示で召喚！」

パワー・デーモン  
効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2300 / 守備力0  
自分のターンのスタンバイフェイズ時に発動する。このカードを守備表示にして、相手フィールド上の表側守備表示モンスター1体を表側攻撃表示にする。この効果を使用したターン、このカードの表示形式を変更する事はできない。

シーデ「私はカードを3枚セットし、ターンエンドだ。」(2)  
ムーチョ「次は僕だ！僕のターン！」(6)僕はチューナーモンスター、ネオフレムベル・ヘッジホッグを守備表示で召喚！」(5)

ネオフレムベル・ヘッジホッグ

効果モンスター／チューナー

レベル3／炎属性／炎族／攻撃力800／守備力200

このカードが戦闘によって破壊された場合、相手の墓地に存在するカード1枚を選択してゲームから除外する。フィールド上に存在するこのカードがカードの効果によって破壊された場合、自分の墓地に存在する「ネオフレムベル・ヘッジホッグ」以外の守備力200以下の炎属性モンスター1体を選択して手札に加える。

イーフ「私のターン！」(6)私は機動砦のギア・ゴーレムを守備表示で召喚し、カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(4)「

機動砦のギア・ゴーレム

効果モンスター

レベル4／地属性／機械族／攻撃力800／守備力2200

メインフェイズ1でのみ発動する事ができる。800ライフポイントを払う。このターンこのカードは相手に直接攻撃する事ができる。

ノヴァ「俺のターン！」(6)俺はヴォルカノン・ザウラーを攻撃表示で召喚して、ターンエンド！」(5)「

ヴォルカノン・ザウラー

効果モンスター

レベル4 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻撃力1800 / 守備力1600

?

ストーム「あつという間に一巡目が終わったな。」

流れが早いのは別に変な事ではないが、チームフォビドゥンには、何か違和感を感じていた。

MC「さあ、一巡目が終わった！ここから両チームにスピードカウンターが溜まる！どのようなデュエルを見せてくれるのか！！」  
エービ「私のターン！」(6)

フォビドゥン：SPC1

ヴォルケーノ：SPC1

エービ「畏カード、強欲な瓶を発動！自分のデッキから、カードを1枚ドロウする！」(7)  
「  
ヴァルカス「強欲な瓶だけ伏せてターンエンドしたのか。いい度胸してやがるぜ。」

だが、炎属性デッキを使うが冷静さを持っているチームヴォルケーノのリーダーノヴァはエービが引いたカードを見て笑っているのが見えた。

エービ「さらに私はカードを3枚伏せて、ターンエンド。」(4)

ノヴァ(恐らくあの3枚のリバースカードに、何かキーカードが…。  
)

ヴァルカス「オレサマのターンだ。ドロー!!」(6)

フォビドウン：SPC2

ヴォルケーノ：SPC2

ヴァルカス「俺はもう1体、プロミネンス・ドラゴンを召喚するぜ。

」

プロミネンス・ドラゴン：攻撃力1500

ヴァルカス「さあくらえ!エービ!まずはお前からだ!オラァ!プロミネンス・ドラゴンの攻撃!」

ムーチョ「トラップがあんなにあるのに!!」

ヴァルカス「トラップが怖くて飯が食えるかよ!くらえ!」

エービ「永続罠発動!スピード・ウォール!相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる!手札を1枚捨てる事で、その攻撃を無効とし!スピードカウンターを1つ、このカードに乗せる!」(3)

ヴァルカス「スピードカウンターを!乗せるカードだと!?!」

SPC：1

エービ「私たちのチームがスピード・ワールド 2の効果を使用する場合、このカードから必要な数を取り除く事で、効果を発動する事ができる!」

会場がざわつく。「あれって限定カードじゃ!?!」や「なんであんなレアカードを持っている?」という言葉が聞こえる事からスピード・ウォールを使用した事に対してというよりも、スピード・ウォール



ールを持っているという事に驚きを覚えているのだ。

それもその通り、スピード・ウォールは「月刊デュエルだあ」の一年間定期購読に応募しなくては手に入らないカードなのだ。

ライディングデュエルでしか使用できないカードを付録にした事に、物議を醸した人物は多かつたようだが……………。

ヴァルカス「……………」

スピード・ウォールによってスピードカウンターを溜める事が目的だとすると、なるべくエービに攻撃するのは避けたいと思うヴァルカスだが、シーデの場には攻撃力2300のパワー・デーモン。さらにイーフの場には守備力2200の機動砦のギア・ゴーレムが存在する。

しかし、攻撃をやめるような男ではなかった。

ヴァルカス「そんなにスピードカウンターを溜めたいんだったら溜めさせてやるぜ！さあ、プロミネンス・ドラゴンでダイレクトアタック！」

エービ「私は再び、スピード・ウォールの効果を発動する！」（2）

SPC：2

ヴァルカス「そうまでして、スピードカウンターが欲しいかい。」  
エービ「フツ……………」

遊星（奴らは一体何を考えているんだ？）

（次回へ）

<今日の最強カード>

スピード・ウォール

永続罫

相手モンスターが直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。手札を1枚捨てる事で、その攻撃を無効にし、このカードにスピードカウンターを1つ置く。自分が「スピード・ワールド 2」の効果が発動する場合、このカードに乗っているスピードカウンターを取り除く事ができる。「スピード・ワールド 2」がフィールド上に表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

<次回の最強カード>

スピード・ワールド 2

フィールド魔法

スピードスベル

「Sp」と名のついた魔法カード以外の魔法カードをプレイした時自分は2000ポイントのダメージを受ける。お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズ時に1度、自分用のスピードカウンターをこのカードの上に1つ置く。(お互い12個まで)自分用スピードカウンターを取り除く事で、以下の効果を発動する。

4個：自分の手札の「Sp」と名のついたカードの枚数×800  
ポイントのダメージを

相手ライフに与える。

7個：自分のデッキからカードを1枚ドローする。

10個：フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

## 第9話・見えざる戦術

チームヴォルケーノ vs チームフォビドゥン

チームヴォルケーノ

・SPC2

ヴァルカス

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター)プロミネンス・ドラゴン(ATK1500)/プロミネンス・ドラゴン(ATK1500)

・(魔法・罫)なし

ムーチョ

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター)ネオフレムベル・ヘッジホッグ(DEF200)

・(魔法・罫)なし

ノヴァ

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター)ヴォルカノン・ザウラー(ATK1800)

・(魔法・罫)なし

チームフォビドゥン

- ・ S P C 2

エービ

- ・ L P 3 5 0 0
- ・ 手札 2 枚
- ・ (モンスター) なし
- ・ (魔法・罫) 2 枚 / スピード・ウォール ( ) ( S P C : 2 )

シーデ

- ・ L P 4 0 0 0
- ・ 手札 2 枚
- ・ (モンスター) パワー・デーモン ( A T K 2 3 0 0 )
- ・ (魔法・罫) 3 枚

イーフ

- ・ L P 4 0 0 0
- ・ 手札 4 枚
- ・ (モンスター) 機動砦のギア・ゴーレム ( D E F 2 2 0 0 )
- ・ (魔法・罫) 1 枚

ヴァルカス(あいつ…スピードカウンターを溜めて、デュエルの展開を有利に進めようってのか?)  
ヴァルカス「へっ…。カードを1枚伏せる!(4)そしてこのター

ンのエンドフェイズ時に、500ダメージを与えるぜ！さあ、まずはエービ。てめえから脱落させるぜ！」

エービ「ぐうっっ！」

プロミネンス・ドラゴンがエービのDホイールに近づく。もちろんソリットビジョンだが、モンスターの中には温度効果付きのモンスターもいる。プロミネンス・ドラゴンがエービの白いDホイールに近づき、天を仰いで吼えているだけだが、エービは暑そうにしている。

エービ：LP3500 LP3000

エービ「だがここで畏カード発動！苦痛の宝札！効果ダメージを受けた場合、デッキからカードを1枚ドローする！さらに、このターンに効果ダメージを受けることに、追加で1枚カードをドローする！」(3)

ヴァルカス「チツ…ドローされるんだったら、何もお前じゃなくてもいい訳だな。じゃあくらえ！シーデ！2体目のプロミネンス・ドラゴンの効果をよオツ！」

シーデ「ぐうっっっ！」

シーデ：LP4000 LP3500

ヴァルカス「ヘッ。ターンエンド(4)」

シーデ「私のターン！」(3)

ヴォルケーノ：SPC3

フォビドウン：SPC3

シーデ「私はこの瞬間、パワー・デーモンの効果を発動する。自分

のスタンバイフェイズに表側攻撃表示で存在する場合、相手の守備表示モンスターを攻撃表示にして、このカードを守備表示にする。私はお前の、ネオフレムベル・ヘッジホッグを攻撃表示にする！」

ムーチョ「ええーっ!!」

パワー・デーモン：攻撃力2300 守備力0

ネオフレムベル・ヘッジホッグ：守備力200 攻撃力800

ジャック「だが、パワー・デーモンはこのターン、表示形式を変更する事はできない。奴が1ターン目にパワー・デーモンを召喚したのは、ただの壁モンスターとしての目的なのか？」

シーデ「私はパワー・コングを攻撃表示で召喚！」

パワー・コング：攻撃力2000

パワー・コング

効果モンスター

レベル4/地属性/獣族/攻撃力2000/守備力500

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分フィールド上のモンスターは攻撃をする事ができない。また、このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手はカード

を1枚ドロウする。

シーデ「パワー・コングで、ネオフレムベル・ヘッジホッグを攻撃

「！」

青いゴリラが棍棒をブンブン振り回し、ネオフレムベル・ヘッジホッグに向かう。驚いて目を丸くしたネオフレムベル・ヘッジホッグだったが、すぐにペチャンコにされてしまった。

ムーチョ「わあああっ！」

ムーチョ：LP4000 LP2800

ムーチョ「でもここで、ネオフレムベル・ヘッジホッグの効果を発動！戦闘で破壊された時、相手の墓地のカードを1枚除外する！僕はエービさん！あなたの、強欲な瓶を除外！」

エービ「フ……。」

強欲な瓶を除外したからといってどうという事はないと言わんばかりの顔である。

シーデ「そしてパワー・コングの効果で、相手は1枚ドロ！。私は、エービを選択する。」

ムーチョ「そうか！WRGPでは、チームメイトも相手に含めていいんだっ！」

ノヴァ「やるな。それを利用したコンボか。」

エービ「フツ……。 (4) 」

シーデ「そして畏カード発動！生血の交換！」

## 生血の交換

### 通常罾

自分フィールド上に攻撃力2000以上のモンスターが2体以上存在し、自分フィールド上のモンスターが相手に戦闘ダメージを与えた時に、以下の中から1つを選択し、発動する事ができる。

・相手はデッキからカードを2枚ドローし、このターンバトルフェイズ中のみ、自分フィールド上に存在する全てのモンスターはもう1度だけ攻撃する事ができる。

・相手は手札からレベル5以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する事ができる。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

シーデ「私は相手が2枚ドローする代わりに、もう1度攻撃を行う効果を選ぶ！さあ、エービ、カードを2枚ドローするがいい！」

エービ「それでは、ドロー！(6)」

ノヴァ「またドロー…。」

シーデ「さらに私は、パワー・コングで、ムーチヨにダイレクトアタック！」

ノヴァ「ムーチヨ！」

ムーチヨ「わあああ！」

ヴァルカス「そうはいくか！罾カード発動！！ブレイズ・ゲイザー！」

ブレイズ・ゲイザー

### 通常罾

モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃を無効にし、直接攻撃を受けたプレイヤーの墓地のモンスター1体を表側攻撃表示で特殊召喚し、そのモンスターの攻撃力を500ポイント



トアップさせる。

シーデ「チツ。攻撃が無効になったか。」

ヴァルカス「さらにブレイズ・ゲイザーの効果で、ムーチョ！お前の墓地のネオフレムベル・ヘッジホッグを攻撃表示で特殊召喚し、攻撃力を500上げる！！」

ネオフレムベル・ヘッジホッグ：攻撃力800 攻撃力1300

ムーチョ「ヴァルカスさん。ありがとう。」

ヴァルカス「おう！チームで勝つぜっ！」

チームヴォルケーノも、互いに信頼し合い、チームみんなが生きた状態でデュエルに勝利する事を目的としている。チーム5D'sとは少し違った戦い方ではあるものの、互いを信頼し合う事に変わりはない。

シーデ「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（1）

ムーチョ「僕のターン！」（6）

ヴォルケーノ：SPC4

フォビドウン：SPC4

ムーチョ「僕は手札から、フレムベル・グルニカを召喚！」（5）

フレムベル・グルニカ

効果モンスター

レベル4 / 炎属性 / ドラゴン族 / 攻撃力1700 / 守備力200

このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×200ポイントダメージを相手ライフに与える。

ムーチョ「フレムベル・グルニカで、パワー・デーモンを攻撃！」  
エービ「罠カード発動！絶体絶命！」

絶体絶命

通常罠

相手ターンのみ発動する事ができる。このターン相手モンスターの攻撃は、全てプレイヤーへの直接攻撃になる。

エービ「これにより、攻撃は私へのダイレクトアタックとなる！」  
ムーチョ「ええっ!？」

エービ「さらに私は、スピード・ウォールの効果で攻撃を無効にする！」

ノヴァ「だが、その効果を発動するには、手札を捨てるんだっただな!？」

イーフ「そうだ…。だが…このカードによってそのリスクは軽減される、罠カード発動！ブロック&チェンジ！」

ブロック&チェンジ

通常罠

自分フィールド上に表側表示で存在する守備力2000以上のモンスター1体をリリースして発動する。このターンのエンドフェイズまで、自分もしくは相手が、「手札を1枚捨てる事によって発動する効果」を発動した場合、その効果処理後にデッキからカードを1枚ドロウする。

イーフ「私は機動砦のギア・ゴーレムをリリースする！」

守備表示でフィールドに置かれていたら、ソリットビジョンシステムによって青く表示される。青く表示されたギア・ゴーレムが機械なので嫌がりもせず、光の粒となって消えた。

遊星「守備力2200のモンスターをリリースしてまで、発動した効果が…。」

龍亞「微妙だね。あれなら俺のパワー・ツールの方が強いよ!」

龍可「あのさ龍亞。比べるものが違うでしょ。」

ドーナツをほおばりながら、龍亞が自慢げに答える。だが龍可のツコミは適切。パワー・ツール・ドラゴンはシンクロモンスター、ブロック&チェンジは罠カードである。

エービ「私は手札を1枚捨て、スピード・ウォールにスピードカウンターを乗せた後、カードを1枚ドロウする!」(6)

SPC:3

エービ「さあ、もう1体のモンスターでダイレクトアタックをするか?」

ムーチョ「あいつの狙いはスピード・ウォールにスピードカウンターを溜める事。だとしたら、その手には乗りませんよ!ネオフレムベル・ヘッジホッグで、パワー・デーモンを攻撃!」

ヴァルカス「おい、バカ!」

ムーチョ「へっ…?」

ネオフレムベル・ヘッジホッグの一撃が、エービに向かう。絶体絶命の効果が、エンドフェイズまで続いている事に、気づかなかつた

のである。

特にチーム戦なので、1人でもカードの知識が不足している場合、チーム自身の敗北に直結しかねない。自分の使うカードはもちろん、あらゆるカードの知識がなくてはならない。

そして再びエービは、同じようにして、スピード・ウォールにカウンターを溜めつつ、手札の入れ替えを行った。

SPC：4

ムーチョ「ああつ。すみません！」

ノヴァ「大丈夫。気にするなムーチョ。」

チームリーダーノヴァは、寛大な心を持った男でもある。ムーチョがミスをしても、優しく、教えてきた。何でもかんでも厳しくすればいいというものではないと、思っているのだ。

ムーチョ「ぼ：僕はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

イーフ「私のターン！（5）」

ヴォルケーノ：SPC5

フォビドゥン：SPC5

イーフ「私は異次元トレーナーを守備表示で召喚。」

異次元トレーナー

通常モンスター

レベル1/闇属性/悪魔族/攻撃力0/守備力2000

異次元に吸い込まれてしまった哀れなゴブリン。しかし、今新たな

目標に向かって日々努力している。

アキ「異次元トレーナー。」

ブルーノ「さつき召喚した機動砦のギア・ゴーレムといい、このモンスターといい、守備力が高いモンスターばかりだね…。」

ジャック「フツ。消極的なデュエルだ！」

クロウ「俺たちと戦ったらジャックのレッド・デーモンズで一撃だな！」

イーフ「さらに私はSp・サモン・スピダーを発動！自分用スピードカウンターが4つ以上ある時、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚する！」

ヴァルカス「一気にモンスターを展開する気が…。」

イーフ「私は、冥界の使者を守備表示で特殊召喚する！」

冥界の使者

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力1600 / 守備力600

このカードがフィールド上から墓地に送られた時、お互いに自分のデッキからレベル3以下の通常モンスター1体を選択し、お互いに確認して手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

このモンスターの登場に、モニター越しに見ていたチーム5D'sは驚いた。

クロウ「冥界の使者…？あのモンスターは、通常モンスターデッキ

に入れるモンだろ?」

龍亞「え?だつて異次元トレーナーは通常モンスターだから、不思議じゃないんじゃない?」

そこに立ちながらブルーアイズマウンテンを一口すすったジャックが突っ込む。

ジャック「だがさっき奴が使ったギア・ゴーレムは効果モンスターだぞ。相性が良いとは言えないだろう?」

遊星「奴らの狙いは、一体?」

イーフ「私はさらに、カードを1枚伏せて、ターンエンド!」(1)  
ノヴァ「やばそうだな: 畳み掛けた方がいいか。俺のターン!」(6)

ヴォルケーノ: S P C 6

フォビドウン: S P C 6

ノヴァ「俺はヴァルカノン・ザウラーの効果を発動!次のドローフ  
エイズ時にカードをドロेशない代わりに、このカードに貫通能力  
を付与し、攻撃力が300ポイントアップする。」

ヴァルカノン・ザウラー: 攻撃力1800 攻撃力2100

ノヴァ「さらに俺は手札から、ヴァルカノン・ブラキオスを攻撃表  
示で召喚!」

ヴァルカノン・ブラキオス

効果モンスター

レベル4 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻撃力1900 / 守備力1300

自分のターンのメインフェイズ1で発動することができる。このカードはこのターンのバトルフェイズ中、2回攻撃することができる。この効果を発動した場合、次の自分のターンのバトルフェイズをスキップする。

ムーチョ「じゃあここで罫カード発動！ハイ・ブラスト・サモン！」

ハイ・ブラスト・サモン

通常罫

炎属性モンスターが召喚に成功した時に発動することができる。お互いのプレイヤーは手札からレベル4以下の炎属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ムーチョ「僕は手札から、ガード・オブ・フレムベルを守備表示で召喚！」

ガード・オブ・フレムベル：守備力2000

ムーチョ「さあ、ノヴァさんも！…あればですが…。」

ノヴァ「あるぜ。サンキュー、ムーチョ！俺は手札から、ヴァルカノン・ゴドンを特殊召喚！」(4)

ヴァルカノン・ゴドン

効果モンスター

レベル4 / 炎属性 / 恐竜族 / 攻撃力1600 / 守備力1400  
自分フィールド上にこのカード以外の炎属性・恐竜族モンスターが表側表示で存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在する炎属性・恐竜族モンスターの攻撃力は400ポイントアップする。

MC「おーっとここでノヴァ、怒涛のモンスター召喚！3体のモンスターは、ヴァルカノン・ゴドンの効果で400ポイントずつ上がるぞーっ！！」

ヴァルカノン・ザウラー：攻撃力2100 攻撃力2500  
ヴァルカノン・ブラキオス：攻撃力1900 攻撃力2300  
ヴァルカノン・ゴドン：攻撃力1600 攻撃力2000

ノヴァ（まだシーデの場には3枚、イーフの場には1枚カードが伏せられてる。ここは慎重にいくか…。）

ノヴァ「俺はヴァルカノン・ブラキオスの効果を発動し、このターンのバトルフェイズ、2回攻撃を行わせてもらおう！」

しかし3体の恐竜族モンスターが並んだものの、チームフォビドゥンは怯みもしない様子。

自分たちの勝利を確信しているという余裕の表情もなく、無表情と言った方がいいか…。

ノヴァ「いくぞー！ヴァルカノン・ザウラー！パワー・デーモンを攻撃！フレイム・ペブル！」  
シーデ「ぬっ！」



シーデ：LP3500 LP1000

パワー・デーモンは守備表示であったが守備力は0であり、攻撃力2500の貫通能力を得たヴァルカノン・ザウラーの攻撃で、ダイレクトアタックに等しい量のダメージを受けてしまった。

シーデ「だが畏カード発動！ヘイト・スターロード！」

ヘイト・スターロード

通常畏

自分が戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができる。このターン自分が受けた戦闘ダメージ300ポイントにつき1つ、フィールド上に表側表示で存在するスピードカウンターを乗せる事ができるカード1枚に、スピードカウンターを乗せる。

シーデ「私は、スピード・ウォールにSPCを8個乗せる！」

SPC：5 13

クロウ「何！？12個より多くスピードカウンターを！？」

ジャック「あれだけスピードカウンターを溜めて、何を…。」

ノヴァ「まだまだ！ヴァルカノン・ブラキオスで、パワー・コングを攻撃！フレイム・テイル！」

炎を帯びた尻尾の一撃が、青いゴリラの胸部に当たり。仰向けに倒れた。

シーデ：LP1000 LP700

シーデ「だが、ヘイト・スターロードの効果で再びスピード・ウオ  
ールにカウンターを乗せるぞ！」

SPC：13 14

ノヴァ「ヴァルカノン・ブラキオスは、バトルフェイズ中にもう1  
回攻撃ができる！異次元トレーナーを破壊しろ！フレイム・テイル  
！」

ゴブリンがペットとした異次元の狂獣にクリティカルにフレイム・  
テイルが当たり、ゴブリンと共に飛ばされてしまった。

ノヴァ「シーデ！お前はこれで終わりだ！ヴァルカノン・ゴドンで、  
ダイレクトアタック！フレイム・レンジ・キック！」

シーデ「罠カード発動！鉱山の審判！」

鉱山の審判

通常罠

相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。その攻撃を無  
効にし、お互いのプレイヤーは、自分のデッキの上からカードを3  
枚墓地に送る。

ノヴァ「なるほどな。だったら、3枚墓地に…」

シーデ「いや、私とお前ではない。」

ノヴァ「何？」

シーデ「私とエービが、デッキの上から3枚墓地に送る…。」  
エービ「ほう…。」

お互い、というのはプレイヤーが誰かを選ぶことができる。相手と  
いうのと似たようなところだろう。

ノヴァ「すまん。誰も倒せなかった。」

ヴァルカス「大丈夫だぜリーダー！」

ムーチョ「次のターンがあります！」

ノヴァは知らず知らずのうちに自分が焦っている事に気づいた。だ  
がそれを気づかせてくれたのがチームメイトの言葉だったことを考  
えると、その分だけチームメイトに申し訳が立たなかった。

ノヴァ「お前ら…。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(3)

エービ「私のターン！」(7)

ヴォルケーノ：SPC7

フォビドウン：SPC7

モニターの前で、十六夜が不意に呟いた。

アキ「でも、あれだけのスピードカウンターで、何をしようってい  
うのかしら…。」

ブルーノ「1ターンキルかもしれない…。」

ブルーノの発した言葉に、チーム5D'sとストームが目を見くろ  
して驚いた。

1ターンキルというのは基本的に、1ターンで相手のライフポイン  
トを初期値から一気に0にする事である。

決まれば必ずしとめる事ができる反面、コンボパーツを集めたりしなくてはならないので、思うようにパーツが集まらず、手も足も出ない場合もある。

ジャック「1ターンキルだと!？」

ブルーノ「今、チームフォビドウンのスピードカウンターは7個。

しかもスピード・ウォールに溜まっているのを加えると21個…。」

と言いかけたところで龍亞が「そうか!」と言って横から割り込んだ。

龍亞「スピード・ワールド 2の効果で、手札のスピードスペル1枚につき800ダメージを与えられる!という事は…!」

ジャック「エービの手札に、4枚以上スピードスペルがあった場合、確かに1ターン3キルが成立する。」

龍可「なるほど。まず1回スピード・ワールド 2の効果を使って3200ダメージ。さらにもう1回使う事で、1人を倒せる。しかもムーチョさんのライフポイントは2800だから、1回で倒せる!」

遊星「必要なスピードカウンター数は…4個×5回で20個。」

クロウ「やべえじゃねえか!!!」

ストーム「だが、あっさり1ターンキルが成立するか?」

ストームの発した疑問に、龍亞が更なる疑問文で答えた。

龍亞「え?どうして…?」

ストーム「このWRGPで、恐らく最もと言っていいほど注意しなけりゃいけないのは、スピード・ワールド 2のダメージ効果だろう。手札にスピードスペルがあって、スピードカウンターが4つあれば、800ダメージだぜ?」

遊星「つまり、チームヴォルケーノもその対策をしていないとは考え難いという事が、ストーム…？」  
ストーム「ああ…。」

モニターの前でそのデュエルを見ているチーム5D'sは、ノヴァがターンの終わり際に、伏せカードを1枚セットした事に気づいた。

ノヴァ（俺はチームのリーダーだ。2人は守る…今伏せたカードはリフレクト・ネイチャー。こいつで…。）

リフレクト・ネイチャー  
通常罠

このターン、相手が発動したライフポイントにダメージを与える効果は、相手ライフにダメージを与える効果になる。

ノヴァ（さあ…来い！）

シーデ「罠カード発動！ハイ・ブースト！」

ハイ・ブースト

通常罠

スタンバイフェイズ時に発動する事ができる。手札が7枚あるプレイヤーは、デッキからカードを2枚ドローする。

エービ「私はカードを2枚ドロー！（9）」

ヴァルカス「またドロー…？」

エービ「そして、スピード・ワールド 2の効果発動！」

遊星「遂に来たか！」

ノヴァ「さあ…来い！」

エービ「スピードカウンターを7つ取り除く事で、デッキからカードを1枚ドローする！」(10)  
チームヴォルケーノ「な!？」

フォビドウン：SPC7 SPC0

MC「おおーっと！何枚カードをドローするんだエービ!？ダメー  
ジを与えるのが目的ではなかったのかあーッ!？」

エービ「さらに私は、スピード・ワールド 2の効果を使用する！  
スピード・ウォールに乗っているカウンター、7個を取り除き、カ  
ードを1枚ドロー！そしてもう7個取り除き…ドローする！」(1  
2)

エービの手札は12枚となり、会場はどよめいている。12枚も手  
札があるのは珍しい事であり、Dホイールに装着されている手札フ  
ォルダに入りきらないのではないかというほどの量だ。

SPC：14 0

龍亞「スピード・ワールド 2の効果で、3枚もドロー!？」  
ジャック「さつきから見えていれば、奴はカード効果によりドローし  
続けている…。モンスターで攻撃するような気配もない…。」  
アキ「そんなデュエルで勝てるのかしら…?」

イーフ「罠カード発動!デストラクト・ポーション!」

デストラクト・ポーション

通常罠

自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。  
選択したモンスターを破壊して、そのモンスターの攻撃力分のライ

フポイント回復する。

イーフ「私は冥界の使者を破壊し、1600ポイントのライフポイントを回復する！」

イーフ：LP4000 LP5600

ムーチョ「今さらライフポイントが増えたからって…！」

イーフ「違うな！」

ムーチョ「えっ？」

イーフ「私は冥界の使者の効果を発動させるために、デストラクト・ポーションを発動したのだ。冥界の使者は墓地に送られた場合、お互いのプレイヤーは、デッキからレベル3以下の通常モンスター1体を手札に加える！」

ムーチョ「なに…？」

チームフォビドワンのリーダー、エービがデッキからモンスターを手札に加えたのを見たチームヴォルケーノは、ヘルメットの影からわずかに見える、エービの不敵な笑みに戦慄を覚えた。

ノヴァ「あ…。」

ヴァルカス「ま…さ…か…。」

戦っているのはチームヴォルケーノだけではなかった。今やっと、多くのデュエリストが、チームフォビドワンの意味深な行動の意図に気づいたのだ…。

序盤からカード効果による大量ドロ、モンスターでの戦闘は行わない、さらに通常モンスターを手札に加える。この3つが揃うデッキと言えば、チームヴォルケーノが思いつくのは、アレしかなかった。

エービ「私は、封印されし者の左腕を手札に加える！」  
ノヴァ「まさか!？」

ムーチョ「エ…エクゾディアパーツ!？」

エービ「チームヴォルケーノよ、しかと見るがいい!今ここに、全てのエクゾディアパーツが揃った!このエクゾディアパーツがもたらすもの。それこそが…封印を解く力だ!!降臨せよ!封印されし…エクゾディア…!!」

遊星「エクゾディア…だと…?」

クロウ「その特殊勝利を狙ってやがったってのか…?」

封印されしエクゾディア

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力1000 / 守備力1000  
このカードと「封印されし者の右足」「封印されし者の左足」「封印されし者の右腕」「封印されし者の左腕」が手札に全て揃った時、デュエルに勝利する。

サーキット上に魔法陣が描かれ、そこから四肢を1つ1つ、ゆっくりと出し、最後にその首、顔を出していくエクゾディア。

エービ「怒りの業火 エクゾード・フレイム…!!」

チームヴォルケーノ「うわああああ…!!」



ヴァルカス：LP4000 LP0  
ムーチヨ：LP2800 LP0  
ノヴァ：LP4000 LP0

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

スピード・ワールド 2

フィールド魔法

スピードスヘル

「Sp」と名のついた魔法カード以外の魔法カードをプレイした時自分は2000ポイントのダメージを受ける。お互いのプレイヤーはお互いのスタンバイフェイズ時に1度、自分用のスピードカウンターをこのカードの上に1つ置く。(お互い12個まで)自分用スピードカウンターを取り除く事で、以下の効果を発動する。

4個：自分の手札の「Sp」と名のついたカードの枚数×800ポイントのダメージを

相手ライフに与える。

7個：自分のデッキからカードを1枚ドローする。

10個：フィールド上に存在するカードを1枚破壊する。

<次回の最強カード>

封印されしエクゾディア

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力1000 / 守備力1000  
このカードと「封印されし者の右足」「封印されし者の左足」「封印されし者の右腕」「封印されし者の左腕」が手札に全て揃った時、デュエルに勝利する。



## 第10話・チームのための美学

怒りの業火 エクゾードフレームが、チームヴォルケーノを襲う。先頭を走っていたノヴァは炎から逃れる事ができたが、後ろにいたヴァルカスとムーチョは炎に飲まれてしまった。

もちろん炎はソリットビジョン。しかし炎に包まれた2人は、爆風により飛ばされ、Dホイールごと、宙を舞った。

エービ「フツ…。」

ヴァルカス・ムーチョ「うわあああ！」

Dホイールが勢いよく地面に叩きつけられ、2人はDホイールから投げ出されてしまった。

ノヴァ「ヴァルカス！ムーチョ！」

ヴァルカス「お…俺は平気だ…。」

ヴァルカスのごつい体は大抵の衝撃から身を守る。見かけ倒しではない。だが、ムーチョもある意味では見かけ倒しではなかった。

ノヴァ「ムーチョ！」

ムーチョ「ううう…。」

地面に打ち付けられてさらに一回転したムーチョは、左足を抑えようとしているが、抑えると痛いことがわかっていてのか、抑えずに唸っている。

MC「医療班！医療班！！担架を頼むーっ！！！」

5人1チームの医療班が素早く登場し、ムーチョを担架に乗せ、素早く運び、退場していった。

MC「2回戦を制したのは、チーム・フォビドウンだーっ!!!」

勝利宣言も聞かず、ノヴァとヴァルカスはムーチョについて行った。

ノヴァ「大丈夫か!？」

ヴァルカス「ムーチョ!!!」

その映像をモニターで見ていたチーム5D'sのアキは「痛そう...」  
と思っ  
て見ていた。しかし遊星は違った。

遊星「あれは...現実のダメージ？」

龍可「ええっ!？」

ジャック「奴らの表情を見る...」

モニターは、チームフォビドウンの表情を捉えていた。

チームフォビドウンのメンバーは誰一人として心配している様子はなく、それぞれが、チームリーダーのアービに関しては、薄ら笑いを浮かべている。

ブルーノ「ゴ...ゴーストかもしれない!？」

クロウ「こんなところにまでゴーストが?」

遊星「考えられる。俺たちを狙って、イリアステルが刺客をよこした可能性がある。」

ストーム「...」

チームフォビドウンには、何の御咎めもない。ソリットビジョンはデュエリスト達に実際にモンスターがいるかのような気持ちでデュエルをしてもらう用にできているため、烈風が吹き付ける事がある。

その烈風によつて2人が吹き飛んだと説明すれば、それまでであり、根拠も見当たらないからだ。

ただしそれはイリアステルについて知らない人から見た場合の話。遊星たちはゴースト騒動やイリアステルについて多少なりとも知ってはいるので、その真の目的が何かはわからずとも、何かを目論んでいるというのはわかっていた。

大会3日目。チームチームラグジュアリーと戦った日から2日経った。

既に本日の第一試合、「チームラグジュアリーvsチームフォビドゥン」が終了したところである。

勝敗はなんと、チームラグジュアリーの勝利。チームフォビドゥンのデッキがエクゾディアデッキである事がわかっていたため、チームラグジュアリーがデッキ対策をし、チームフォビドゥンはやられてしまった。

そして第2試合はいよいよチーム5D・svsチームフォビドゥンである。

龍亞「エクゾディアデッキの対策をしておけば楽勝だね！」

ブルーノ「でも、対策ってどんな事をする？」

午後2時15分。午後4時から試合が始まるのだが、もう既に控室に入り、チームフォビドゥンに対する策を練っているチーム5D・s。チームラグジュアリーの対策はモニターで全てチェックしているものの、チームラグジュアリーの使用する独特なカード群を、持っている訳ではない。

さらに言えば、敵も全く同じ戦術で来るとは、言い切れないのだ  
た。

クロウ「チームラグジュアリーはフォビドウンの効果によるドロー  
を封じる戦法を取ってたな。」

アキ「でもサイドデッキにある？そんなカード？」

ブルーノ「あつ。僕、持ってたかも…。あ、これこれ。」

ピットクルーであっても、Dホイルのライセンスを所有するもの  
は、ライディングデュエルに出場する可能性があるため、デッキと  
サイドデッキを持ち込むことを義務付けられている。

ブルーノは、自分のサイドデッキから「神殿を守る者」というカー  
ドを取り出した。

神殿を守る者

効果モンスター

レベル4/地属性/悪魔族/攻撃力1100/守備力1900

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手プレイ  
ヤーはドローフェイズ以外ではカードをドローする事ができない。

ブルーノ「これなら、スピード・ワールド 2の効果でドローされ  
ることもないよ。」

クロウ「でも1枚入れたくらいで何とかなるもんなのか？」

龍可「入れないよりは、いいんじゃないかしら…?」

と、対策会で盛り上がっているところで、突然控え室内の長机をバ  
ン！と叩く音がした。

…そう、ジャック・アトラスである。

ジャック「さつきから聞いていれば対策対策と…人のデッキを対策

して勝利して、何が楽しい!？」

遊星「ジャック。」

クロウ「確かにお前の言うように、人のデッキを対策して戦ったって、純粋な楽しさはねえかもしれないけど、向こうだって対策してくるに決まってるだろ!？」

ジャック「なんだと!？」

クロウ「だって考えてみるよジャック!向こうはさっき1回負けちまったんだぜ!？もう1回負ければ、決勝には進出できなくなる!って事は、全力で俺たちを潰しに来るに決まってるじゃねえか!」

元々ジャックは究極のエンターテイメントを求めるデュエリスト。無論、WRGP運営側からしてみれば、デュエルが盛り上がるため、その様な姿勢でデュエルしてくれるのは嬉しい限りである。そもそもこのWRGPが開催された理由も、

「大々的にデュエル大会を開催する事により、近年の大会におけるデュエルの、相手への対策をする傾向にあるデュエルを変える事ができるのではないか？」

というものである。

ジャック「...。貴様の言いたい事はわかった。だが、対策はお前から2人でやれ。俺はやらんぞ。」

遊星「ジャック。」

だがその言葉を聞いたクロウは、ジャックと同じように机をバンと叩き、立ち上がった。

憤っているのか、顔に血が回り、真っ赤になっている。

クロウ「いい加減にしろよジャック!お前のデュエルがパワープ

レイなのかなんなのか知らねえけど、それじゃ奴らは倒せねえんだよ！！エクゾディアを揃えられたら、どうすんだよ！？」

ジャック「ええい黙れクロウ！俺もそこまで身勝手ではないぞ！！」  
クロウ「え？」

彼らしくない発言の流れに、クロウだけでなく、他のチームメンバーも驚いていた。

ジャック「俺はデッキを改造したのだ。パワーデッキはパワーデッキでも、速さを追及した、速攻のパワーデッキを作った。これで奴がエクゾディアを揃えるより先に、ライフポイントを0にできる！」  
クロウ「なに…？」

ジャック「それに貴様ら、よく考えてみる。対策をしたからと言って、負ける確率が0になる訳ではあるまい。それならば、俺の速攻のパワーデッキと、同じではないか。慣れないデュエルスタイルで戦う方が、自殺行為だと思わないか？クロウ。お前がブラックフェザーをデッキから抜き、ヘンテコなカードを使い、それで勝てるのか？」

意外にも考えているのだなと「あー。」と、チームメンバーは頷いていた。

ジャック「なんだそのリアクションは！？」

結局ジャックの意見も取り入れて、遊星、クロウはモンスター以外のスピードスペルと罠カードで、チームフォビドゥンへの対策を行った。



MC「さあ、注目のカード、チーム5D・Sバーサスチームフォビドゥンの戦いだあー!!」

両チームのメンバーがレーン、ピットブースに着き、いよいよデュエルが始まるうとしてしている。

牛尾「相手はエクゾディアデッキだが…大丈夫なのか？」

深影「アトラス様のパワーがあれば、余裕よ！」

チームフォビドゥンは三連戦だが、まるで疲れが見えない。それどころか、また例によって、薄気味悪い笑みを浮かべている。

もう後がないチームフォビドゥン。しかし、その表情からは、恐怖を感じ取ることができない。

恐ろしいチームであろう。

そして今、シグナルが青に変わった。

MC「ライディングデュエル、アクセラレーション!!!」

各車一斉にスタートし、第一コーナーに差し掛かった。最初にコーナーに入ってきたのは遊星。しかしチームフォビドゥンのチームリーダー、エービは遊星にあっさりと追いついてしまう。

遊星（なんだと？こいつのDホイールのエンジンは、一体！？）

エービ「フッフッフツ………おわッ!？」

コーナー出口で追い抜かれそうになったところで、クロウがエービのDホイールに突っ込み、バランスを崩させた。

クロウ「先攻はやらねえよ、エクゾディア野郎!!」

遊星「すまないクロウ。」

6人「デュエル!!!」

不動遊星：LP 4000

ジャック：LP 4000

クロウ：LP 4000

VS

エービ：LP 4000

シーデ：LP 4000

イーフ：LP 4000

ジャック「俺のターン！（6）俺は手札から、ツイン・ブレイカーを攻撃表示で召喚！」

ツイン・ブレイカー

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 戦士族 / 攻撃力1600 / 守備力1000

このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、もう1度だけ続けて攻撃する事ができる。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ジャック「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」（4）

エービ「私のターン！（6）私はカードを3枚伏せて、ターンエンド。」（3）

クロウ「俺のターン！俺はBF - 蒼炎のシユラを召喚！さらにカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

BF - 蒼炎のシユラ

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻撃力1800 / 守備力1200

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時自分のデッキから攻撃力1500以下の「BF」と名のついたモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

シーデ「私のターン！（6）私は手札から、パワー・ジャイアントを特殊召喚！」（4）

パワー・ジャイアント

効果モンスター

レベル6 / 地属性 / 岩石族 / 攻撃力2200 / 守備力0

このカードは手札からレベル4以下のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚することができる。この方法で特殊召喚した場合、手札から墓地へ送ったモンスターのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。また、このカードが戦闘を行う場合、そのダメージステップ終了時まで自分が受ける効果ダメージは0になる。

シーデ「このカードは、手札からレベル4以下のモンスターを1体墓地に送って、特殊召喚できるのだ。そしてそのモンスターのレベル分、このカードのレベルがダウンする。私はレベル2のパワー・サプライヤーを墓地に送ったため、パワー・ジャイアントのレベルは…4となる。」

パワー・ジャイアント：レベル6 レベル4

クロウ「へっ、そいつを待ってたぜ！罨カード発動！罨谷の淵！」

あんどく

罨谷の淵

通常罨

相手が攻撃力2000以上のモンスターを召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。

相手の手札を1枚、ランダムに墓地に送る。

MC「おおーっと！エクゾディアデッキの対策カードが早速でたぞーっ！！！」

クロウ「さあ、エービ！手札を1枚、ランダムに捨てな！！！」

クロウのDホイールのディスプレイ上には、3枚のカードが映し出された。もちろんこれは、エービの手札であり、クロウが真ん中のカードを押すと、エービのDホイールに連動し、手札フォルダの中央のカーソルが光った。光ったところにある手札が選ばれているという事である。

エービ「では私はこのカードを墓地に送るとしよう……。」

相変わらずの無表情である。ポーカーフェイスなのか、それともいくら手札が減らされても、増やす自信があるのか……いずれにせよ、チーム5D'sにとって、いささかの動揺も見せない事が、エクゾディアを捨てさせることができなかつたというふうに思わせたのだ。

シーデ「私はカードを1枚セットし、ターン終了だ！」(3)

遊星「俺のターン！俺は手札から、シールド・ウィングを守備表示で召喚し、ターンエンドだ！」(5)

シールド・ウイング

効果モンスター

レベル2/風属性/鳥獣族/攻撃力0/守備力900

このカードは1ターンに2度まで、戦闘では破壊されない。

イーフ「私のターン！（6）私はカードを2枚セットし、ターンエンド。」（4）

チームフォビドゥンは、例によって1ターンで大量の、6枚のカードをセットした。

伏せられているカードが多ければ多いほど、プレッシャーになるものだが…。

氷室（奴らは…まだ何かを狙ってそうだが…。）

ジャック「俺のターン！（5）」

5Ds：SPC1

FOB：SPC1

ジャック「俺は手札から、チューナーモンスター、トップ・ランナーを召喚！エービー！まずは貴様から片付けてやる！そうすれば、エクゾディアがデッキにない2人だけでは、勝ち目はないわ！レベル4のツイン・ブレイカーに、レベル4のトップ・ランナーをチューニング！」

王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！

紅蓮の炎の中から、赤き龍、レッド・デーモンズ・ドラゴンが姿を現した。ジャック・アトラスの象徴たるモンスターである。

MC「おおーっと！わずか2ターンでレッド・デーモンズを召喚したあ！圧倒的パワーを見せてくれ、ジャック・アトラス！」  
ステファニー「ジャックウーー！！」

ジャック「くらえエービ！レッド・デーモンズ・ドラゴンで、ダイレクトアタック！アブソリュート・パワー・フォース！！」  
エービ「無駄だ、畏カード発動！攻撃の無力化！！」  
ジャック「なに！？」

攻撃の無力化によって、レッド・デーモンズ・ドラゴンの攻撃が渦に吸い込まれ、無効化されてしまった。

ジャック「ええい、小賢しい真似を！だが畏カード、斬殺の使徒を発動！」

### 斬殺の使徒

#### 通常畏

自分のターンでのみ発動する事ができる。相手の手札をランダムに1枚破壊してゲームから除外する。それが畏カードだった場合、お互いの手札の畏カードを全てゲームから除外する。

ジャック「さあ、エービ！くらええ！」

エービ「フツ、除外したカードは…これだ…。」(1)

罨カードだった場合、さらに除外する効果があるためか、エービは全てのプレイヤーに、斬殺の使徒で除外されたカードを見せた。

遊星・ジャック・クロウ「!?!」

なんと、除外したカードは…封印されしエクゾディアだった。

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

封印されしエクゾディア

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力1000 / 守備力1000

このカードと「封印されし者の右足」「封印されし者の左足」「封印されし者の右腕」「封印されし者の左腕」が手札に全て揃った時、デュエルに勝利する。

<次回の最強カード>

アフター・ゲイザー

通常罨

?

第11話 - 除外されたエクソディア!?

チーム5D's

・SPC1

ジャック・アトラス

・LP4000

・手札4枚

・(モンスター) レッド・デーモンズ・ドラゴン(ATK3000)

・(魔法・罫) なし

クロウ・ホーガン

・LP4000

・手札4枚

・(モンスター) BF・蒼炎のシユラ(ATK1800)

・(魔法・罫) なし

不動遊星

・LP4000

・手札5枚

・(モンスター) シールド・ウイング(DEF900)

・(魔法・罫) なし

チームフォビドゥン



・ S P C 1

エービ

・ L P 4 0 0 0

・ 手札 1 枚

・ (モンスター) なし

・ (魔法・罫) 2 枚

シーデ

・ L P 4 0 0 0

・ 手札 3 枚

・ (モンスター) パワー・ジャイアント (ATK2200)

・ (魔法・罫) 1 枚

イーフ

・ L P 4 0 0 0

・ 手札 4 枚

・ (モンスター) なし

・ (魔法・罫) 2 枚

クロウ「封印されしエクゾディアを除外した!？」

ジャックの罫カード、斬殺の使徒により、エービの手札にあったエクゾディアが除外されてしまった。再びエクゾディアを手札に組み込むギミックは、今までのデュエルを見る限りチームフォビドゥンにはない…。

会場にいたほとんどが、チーム5D・sの勝利が確約されたと思っただろう。  
だが…チーム5D・sのメンバーは、油断はできないと思っていたのだ。

もう既に一敗してしまっているチームフォビドゥンには、笑っている余裕など無いハズなのだから…。

遊星「…。」

ジャック（奴らには何か別の目的があるのか？）

ジャック「俺はこれで、ターンエンド！」（4）

イービ「私のターン！」（2）

5Ds：SPC2

FOB：SPC2

イービ「私はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」（1）

クロウ「俺のターン！」（5）

5Ds：SPC3

FOB：SPC3

クロウ「俺は手札から、BF・漆黒のエルフェンを召喚！」（4）

BF・漆黒のエルフェン

効果モンスター

レベル6 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻撃力2200 / 守備力1200

自分フィールド上に「BF」と名の付いたモンスターが表側表示で存在する時、このカードはリリースなしで召喚する事ができる。このカードの召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター1体の表示形式を変更する。

クロウ「漆黒のエルフェンは上級モンスターだが、自分の場にブラックフェザーが存在する場合、リリースなしで召喚できるぜ！さらにこのモンスターの召喚に成功した時、相手フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更する！俺はパワー・ジャイアントを守備表示にするぜ！」

パワー・ジャイアント：守備力0

クロウ「漆黒のエルフェンでイーフ！てめえにダイレクトアタックだ！」

イーフ「ぐうううっ！！！」

イーフ：LP4000 LP1800

漆黒のエルフェンの爪から放たれた烈風により、イーフのDホイールが左右に揺れる。  
だがクロウには、イーフがトラップカードに手を掛けたのが見えた。チームフォビドゥンの伏せカードは合計で5枚ある。そう簡単にはやらせてくれないのはわかっていたのだが。

イーフ「罨カード発動！ダメージ・コンデンサー！このカードは戦闘ダメージを受けた時に発動する事ができる！手札を1枚捨て、デ

ツキから受けたダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！」

クロウ「チッ。面倒なカードを伏せていやがったぜ。」

ダメージ・コンデンサー

通常罠

自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する。受けた戦闘ダメージ以下の攻撃力を持つモンスター1体を自分のデッキから表側攻撃表示で特殊召喚し、その後デッキをシャッフルする。

イーフ「出でよ！グラヴィティ・ビートル！」（3）

グラヴィティ・ビートル

効果モンスター

レベル5 / 地属性 / 昆虫族 / 攻撃力2000 / 守備力1900

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。このカードが相手からの攻撃対象となった時、このカードを攻撃したモンスターを守備表示にする事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

また、自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、相手に500ポイントのダメージを与える事ができる。

クロウ「攻撃力2000か…。だったら蒼炎のシュラで、パワー・ジャイアントを攻撃！」

シーデ「くっ…。」

クロウ「まだだぜ！蒼炎のシュラの効果発動！相手モンスターを戦

闘によって破壊した時、デッキから攻撃力1500以下のBF1体を特殊召喚する！俺はBF - 疾風のゲイルを特殊召喚！」

BF - 疾風のゲイル

チューナー / 効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻撃力1300 / 守備力400

自分フィールド上に「BF - 疾風のゲイル」以外の「BF」と名の付いたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にすることができる。

クロウ「疾風のゲイルで、シーデにダイレクトアタック！」

シーデ「ぐうっうっ！」

クロウ「よっしゃ！攻撃が通ったぜ！」

シーデ：LP4000 LP2700

クロウ「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（3）

シーデ「BF - 疾風のゲイル…モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にする効果を持つモンスターか…。私のターン！」（4）

5DS：SPC4

FOB：SPC4

シーデ「私は罫カード、ライジング・サモンを発動！」

ライジング・サモン

通常罫

手札からレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は1500ポイントアップし、エンドフェイズに破壊される。

シーデ「私はパワー・デーモンを特殊召喚！」(3)

パワー・デーモン

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2300 / 守備力0

自分のターンのスタンバイフェイズ時に発動する。このカードを守備表示にして、相手フィールド上の表側守備表示モンスター1体を表側攻撃表示にする。この効果を使用したターン、このカードの表示形式を変更する事はできない。

パワー・デーモン：攻撃力2300 攻撃力3800

ジャック「攻撃力3800だと!？」

マッド・デーモンの色違いのようなモンスターが膨らみ、大きくなっていく。

シーデ「そして手札から、パワー・ビートルを召喚！」

パワー・ビートル

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻撃力2000 / 守備力1700

自分フィールド上にこのカード以外の攻撃力2000以上のモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った時、自分フィールド上に存在するモンスター1体を守備表示にし、そのモンスターの守備力を0にする。

シーデ「パワー・デーモンで、BF - 疾風のゲイルを攻撃！」

遊星・ジャック「クロウ！」

クロウ「お前が強力モンスターである疾風のゲイルを攻撃する事はわかってたぜ！畏カード、緊急同調！」

MC「おおーっと！ここで緊急同調！バトルフェイズにシンクロ召喚を行うカードだあーっ！」

クロウ「レベル4の蒼炎のシュラに、レベル3の疾風のゲイルをチユーニング！」

疾風のゲイルがパワー・デーモンの攻撃をかわし、3つの星となり、そこから3つの輪となり蒼炎のシュラを囲み、一閃の光となった。

黒き旋風よ！天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！BF - アイマード・ウイング！

B F・アーマード・ウイング

シンクロモンスター

レベル7/闇属性/鳥獣族/攻撃力2500/守備力1500

「BF」と名のついたチューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを1つ置く事ができる(最大1つまで)。

相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで0にする。

だがバトルフェイズ中に相手の場のモンスターの数が変化した場合、巻き戻しが発生し、相手モンスターに攻撃しなおすことができる。攻撃を取りやめる事もできる。

緊急同調によって現れたアーマード・ウイングに、気圧され気味であるシーデ。

ここまで表情をあまり変えなかったチームフォビドウンだが、ここに来てやっと表情が変わったかと捉えたチーム5D'sだった。

シーデ「チツ…。ならば漆黒のエルフェンを攻撃！」

クロウ「ぐあああっ！」

クロウ：LP4000 2400

遊星「大丈夫か？クロウ！」



クロウ「ああ…。まだまだ余裕だぜ…。」

シーデ「パワー・ビートルではアーマード・ウィングは撃破できない。ならば…ターンエンド！」(2)

ライジング・サモンの効果で特殊召喚されたモンスターはエンドフェイズに破壊されるため、パワー・デーモンは膨れた状態からそのまま弾け飛んだ。

遊星「いくぞ！俺のターン！」(6)

5 D S : S P C 5

F O B : S P C 5

遊星「Sp・エンジェル・バトンを発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドローし、手札を1枚、墓地に送る！」

Sp・エンジェル・バトン

通常魔法

自分用スピードカウンターが2つ以上ある時に発動する事ができる。自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札を1枚墓地に送る。

遊星「俺は手札から、ボルト・ヘッジホッグを墓地に送る！そしてチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」

デブリ・ドラゴン

チューナー/効果モンスター  
レベル4/風属性/ドラゴン族/攻撃力1000/守備力2000  
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力500以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。  
このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル4以外のモンスターでなければならない。

エービ（来るか…？）

遊星「レベル2のシールド・ウイングとレベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

集いし願いが、新たに輝く星となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

MC「おおーっと早くもスターダスト・ドラゴンの登場だあーっ！」

チーム5D・sの3体のシンクロモンスターの登場に、会場からは大きな歓声が聞こえる。

もはや勝利はチーム5D・sのものだと思う人ばかりで、5D・sコールさえ聞こえてくるのは、Dホイラー達にもわかる。

だが、不動遊星はデュエルが終わるまで、油断はしないデュエリストである…。

遊星「いけるか…？だがここは臆せず攻める！スターダスト・ドラ

ゴンで、エービにダイレクトアタック！シューティング・ソニック  
！」

シューティング・ソニックは、エービに向かって放たれる。だがエービは相変わらず、不気味な笑みを浮かべていた。

エービ「畏カード発動！地縛霊の誘い！」

地縛霊の誘い

通常畏

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。攻撃モンスターの攻撃対象はこのカードのコントローラーが選択する。

エービ「このカードにより、私は攻撃対象を、グラヴィティ・ビートルに変更する！」

イーフ「さらにグラヴィティ・ビートルの効果発動！攻撃対象となった時、攻撃したモンスターを守備表示にする！」

遊星「なに！？」

観客席で、氷室がチツと舌打ちをした。その横では矢薙のじいさんが「ありゃ、攻撃をやめちゃったよ？」と不思議そうに言っている。

氷室「ああ。攻撃したモンスターが守備表示になると、攻撃は中断されちまうんだ。」

天兵「それじゃスターダスト・ドラゴンの攻撃は通らないのか？」

スターダスト・ドラゴン：守備力2000

遊星（くっ。なかなかのチームワーク。エクゾディアがいなくなっても、奴らは別の戦う手段を用意しているという事なのか？）

イービ（フツ。こんなものはまだまだ序の口にすぎない…。）

遊星「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」（3）

イーフ「私のターン！」（4）

5 D S : S P C 6

F O B : S P C 6

イーフ「フフフ…ハハハハッ！」

ジャック「な…なんだ？」

クロウ「なにがおかしいんだよ。」

イーフ「私は…いや、我々はこの時を待っていたのだ！」

シーデ「その通りだ！」

遊星「何だと!？」

イーフがイービに合図をすると、イーフは魔法・罠カードゾーンに手をかけた。

イーフ「永続罠、トライアングル・シンクロ・ケイジを発動！」

遊星「トライアングル…」

ジャック・クロウ「シンクロ・ケイジ!？」

トライアングル・シンクロ・ケイジ

永続罠

フィールド上にシンクロモンスターが3体以上存在する時に自分フィールド上のシンクロモンスター以外の表側表示モンスター1体を選択して発動する事ができる。フィールド上のシンクロモンスター

を3体までゲームから除外する。このカードがフィールド上に表側表示で存在しなくなった時、または選択したモンスターがフィールドを離れた時、除外したシンクロモンスターを全て元に戻す。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在しなくなった時、選択したモンスターを破壊する。

カードイラストからマジックハンドが3つ現れ、スターダスト・ドラゴン、BF-アーマード・ウイング、レッド・デーモンズ・ドラゴンの3体の首根っこを掴み、そのままカードの中に引きずりこんでしまった。

ジャック「な!？」

クロー「アーマード・ウイング!！」

遊星「スターダスト!?! どういう事だ!?!」

イーフ「フフフ!これはシンクロモンスターを捕える檻だ。これにより、お前たちのシンクロモンスターは、私のグラヴィティ・ビートルを倒さない限り、フィールドに戻ってこないぞ!」

トライアングル・シンクロ・ケイジにより、チーム5D'sの場はガラ空きとなってしまうた。

イーフ「さらにグラヴィティ・ビートルの効果により、相手に500ポイントのダメージを与える!くらすえ、遊星!」  
遊星「ぐああああっ!」

不動遊星：LP4000 LP3500

イーフ「そしてグラヴィティ・ビートルで、ジャック！貴様にダイレクトアタック！」  
ジャック「ぬうっ！」

ジャック：LP4000 LP2000

遊星「シンクロモンスターを捕える…シンクロキラーなのか!？」  
イーフ「フフフ…お前たちが調子に乗ってシンクロモンスターを大量に召喚するのを待っていたのだ！」

イーフ「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」(3)  
ジャック「貴様…よくも…！俺のターン…！」(5)

5Ds：SPC7  
FOB：SPC7

ジャック「レッド・デmons・ドラゴンを…よくも…！ならばグラヴィティ・ビートルを片付けてくれよう！俺は手札から、ビッグ・ピース・ゴーレムを通常召喚！」(4)

ビッグ・ピース・ゴーレム：攻撃力2100

ジャック「このカードは相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、リリースなしで召喚できる。そしてSP・クローン製造を発動！」

## Sp・クローン製造

### 通常魔法

自分用スピードカウンターが5つ以上ある時に発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター以外のレベル5以上のモンスター1体を選択し、そのモンスターと同じ元々の種族・属性・レベル・攻撃力・守備力を持つ「クローントークン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。このターンのエンドフェイズに、自分フィールド上に存在する「クローントークン」を破壊する。「Sp・クローン製造」は1ターンに1度しか発動できない。

ジャック「1回目の攻撃は守備表示にされて無効になるんだっただな！？ならば2回攻撃すればいい！くらえ！クローントークンで、グラヴィティ・ビートルを攻撃！」

クローントークンである事をわかりやすくするためか、スケルトン状態のビッグ・ピース・ゴーレムの形をしたクローントークンが、グラヴィティ・ビートルを攻撃する。

イーフ「無駄だ！グラヴィティ・ビートルの効果で、トークンを守備表示にする！」

ジャック「それはよめている！今度こそ終わりだ！ビッグ・ピース・ゴーレムで、グラヴィティ・ビートルを攻撃！パワー・プレッシャー！！」

イーフ「フツ。バカめ…グラヴィティ・ビートルは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されないのだ！」  
ジャック「な…！？なんだとっ！？」

イーフ：LP1800 LP1700

クロウ「これじゃ3体以上のモンスターで攻撃しなくちゃダメじゃねえか！」

ジャック「だが貴様らにもうエクゾディアがない以上、そのような急場ごしらの戦術しかない！貴様らの敗北など、目に見えているわ！カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」（2）

その瞬間、クロントークンが粉々に砕け散った。

6人は間もなく、ホームストレートに帰ってくる。先頭にいるのは遊星、次いでジャック、クロウ、エービ、シーデ、イーフとなっているが、後ろから迫り来る脅威は、まだ感じ取れないチーム5Dsであった。

遊星（だが、ジャックの言うとおり、あの戦術では、エクゾディアの戦術が崩壊した時のフォローにはなっていない…。一体どうするつもりなんだ？）

エービ「私のターン！」（2）

5Ds：SPC8

FOB：SPC8

エービ「来たか…。私はここで伏せられたカードをオープンさせる！」

遠回しな物言いと、これまでにない程のハキハキした声を出した事に、注意が集まった。

エービ「アフター・ゲイザー！」



クロウ「アフター・ゲイザー？」

エービ「私の場にモンスターが存在せず、相手フィールド上に攻撃力2000のモンスターがいる場合、その内1体をリリースし、自分のデッキから、カウントダウン・キッドを特殊召喚する！」

シーデのパワー・ビートルがリリースされ、エービのDホイールの目の前に、小さなりモコンを持ち、銀色のハットを目深に被った少年が現れた。

ハット以外にも、下半身、上半身、共に銀色であり、非常に奇抜である。センスない。

カウントダウン・キッド

効果モンスター

？

ジャック「なんだ、コイツは!？」

エービ「フッフッフッ…さあ、ショーの始まりだ!」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

アフター・ゲイザー

通常罫

相手フィールド上に攻撃力2000のモンスターが存在する時に発動する事ができる。

相手フィールド上に存在する攻撃力2000のモンスター1体をリ

リリースし、自分の手札・デッキ・墓地から「カウントダウン・キッド」1体を特殊召喚する。

<次回の最強カード>

カウントダウン・キッド

効果モンスター

レベル10 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力5000 / 守備力5000

?

第11話 - 除外されたエクソディア!? (後書き)

わかりやすいと思ってモンスターや魔法・罨カードの効果を書きま  
したが、面倒くさがって一字一句正確に書かない事があります。

効果を間違えない程度に書きますのでご了承ください(汗)

第12話・捕らわれのシンクロモンスターとカウントダウン・キッド

チーム5D's

・SPC8

ジャック・アトラス

・LP2000

・手札2枚

・(モンスター)ビッグ・ピース・ゴーレム(ATK2100)

・(魔法・罫)1枚

クロウ・ホーガン

・LP2400

・手札3枚

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)なし

不動遊星

・LP3500

・手札3枚

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)2枚

チームフォビドゥン

・SPC8

## エービ

- ・LP4000
- ・手札2枚
- ・(モンスター)カウントダウン・キッド(ATK500)
- ・(魔法・罫)1枚

## シーデ

- ・LP2700
- ・手札2枚
- ・(モンスター)なし
- ・(魔法・罫)なし

## イーフ

- ・LP1700
- ・手札3枚
- ・(モンスター)グラヴィティ・ビートル(ATK2000)
- ・(魔法・罫)トライアングル・シンクロ・ケイジ) / 1枚

全身銀色の少年は、会場に向かってダミ声で「ハロー！」と言った。声を話すモンスターは珍しいので、人気があるものだが、チーム5 D・s含め、会場の皆には、カウントダウン・キッドというカードを知らないようだった。

ジャック「カウントダウン・キッド…？見た事のないモンスターだな…。」

ピットブースでは、ブルーノがパソコンでインターネットを使い、色々調べているのか、キーボードを操作するカタカタという音が響いている。

龍亞「ねえ、あのカード、何なのさ!？」

ブルーノ「待つてよ!今調べているんだから…。」

インダストリアルイリユージョン社のホームページからデュエルモンスターズのデータベースについて調べているのだが、検索フォームに「カウントダウン・キッド」と入れて検索しても、検索結果は0件と表示されている。

龍可「そんな!」

アキ「限定カードなんじゃないかしら。シグナーの龍のカードとかは、載っていないんでしょう?」

ブルーノ「いや、載ってるよ。」

アキ「えっ!？」

世界に1枚しかないカードのハズだが、「スターダスト・ドラゴン」のページはちゃんと存在する。

それだけ強力なデータベースなのであるが…。

クロウ「って、攻撃力500かよ!？」

ジャック「そんなものでは、このジャック・アトラスは倒せんぞ。」

エービ「フツ、バカめ!カウントダウン・キッドの効果発動!このカードの攻撃力は、ゲームから除外されたシンクロモンスターの数×1000ポイントアップする!」

ジャック「なんだと!？」

カウントダウン・キッド：攻撃力500 攻撃力3500

遊星「攻撃力3500!？」

エービ「クロウ！残念だがお前のターンは回ってこないようだ！カウントダウン・キッドのダイレクトアタック！」

ジャック「クロウ！」

カウントダウン・キッドがクロウのDホイールの目の前に現れ、シヨットガンを持ち出し、クロウに突き付け、「アディオス」とそつと言ったが…。

クロウ「させるかよ！」

カウントダウン・キッド「…っ!？」

黒い羽の一撃により、カウントダウン・キッドはよろけ、後ろに下がった。

エービ「何っ!?!どういう事だ!？」

クロウ「へっ!BF-熱風のギブリの効果発動!相手がダイレクトアタックをしてきた時、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる!」

BF-熱風のギブリ：守備力1600

熱風のギブリが、カウントダウン・キッドの一撃を庇い、唸り声をあげて、砕け散った。

クロウ「ありがとな、熱風のギブリ…。」

エービュ「フツ。このターンは生き延びたか…私はこれで、ターンエンド！」(1)

クロウ「今度は俺のターンだぜ!!」(3)

5 D S : S P C 9

F O B : S P C 9

クロウ(スピードカウンターを10個溜めて、あの檻を破壊しなくちやな…)。

クロウ「俺は手札から、B F - 精鋭のゼピュロスを召喚！」(2)

B F - 精鋭のゼピュロス(アニメ版)

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻撃力1600 / 守備力1000

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に存在するカード1枚を手札に戻して発動する。このカードを墓地から特殊召喚し、自分は400ポイントダメージを受ける。

クロウ「モンスターがいねえじゃねえか、シーデ！お前にダイレクタアタックだ！」

シーデ「くっ…。やるな…。」

シーデ：LP2700    LP1100

クロウ「強がりもそこまでだぜ！お前から倒してやる！カードを1



枚伏せて、ターンエンド！」「(1)  
シーデ「私のターン！(3)」

5 D S : S P C 1 0

F O B : S P C 1 0

ジャック「フツ！さあ足掻いてみせる！1人ずつ倒してやるぞ！」

シーデ「愚かな…ジャック・アトラス。」

ジャック「何だと!？」

シーデ「もう既に私の役目は終わりつつある。我々の最強モンスター、カウントダウン・キッドが召喚されたのだからな。」

ジャック「何…?」

シーデ「フツ…チームで勝利する事こそが、我々の狙いなのだ。」  
クロウ「どういう意味だ!？」

エービ「我々はこのデュエルでエクゾディアを揃えるつもりは毛頭なかったのだよ！」

堂々と種明かしをしてしまうチームフォビドゥンに、会場にいる人たちは啞然としている。

遊星「なんだと?」

イーフ「我々はわざとチームラグジュアリーに敗北したのだ！」

ジャック「なに?」

チームラグジュアリーの控え室で、机に思い切りガラスコップを叩きつけたのはサファイアだった。

サファイア「俺たちに負けたのがわざとだと!？」  
トパーズ「負け惜しみか…?」

イーブ「我々の戦術はこうだ…、まず初戦でエクゾディアというかなりのインパクトを持ったモンスターでチームヴォルケーノを叩き潰す。その後、我々と戦うチームは必ずエクゾディア対策をする。」

イーブ「そこでエクゾディア対策をしてくる1チーム目にはわざと負けるのだ。」

クロウ「そんな事して、お前らがお得な訳ねえだろ。3試合中3回勝つのがいいに決まってるじゃねえか。」

シーデ「愚かな。確実に3回勝利する方法を探すのは無理難題。確実に2回勝利し、決勝に駒を進める事を我々は第一目標としたのだ。」

ジャック「意外に慎重だな。」

イーブ「わざと負けた場合、お前たちチーム5D・sは我々の後がないことを知り、全力でエクゾディアの対策に出ると思った訳だ。」

それで中途半端になったデッキを叩き潰す事など、造作もないことだった。」

遊星「お前たちは、むしろ俺たちに対策をして欲しかったという訳か…?」

チーム5D・sのDホイールのモニターには、奥歯をギリツと噛みしめたイーブの表情が確認できた。

イーブ「しかし思わぬ誤算があったな。お前たちは大した対策をしなかったという事だ。」

ジャック「フツ！自分のデッキを崩壊させてまでする対策に、何の意味があるというのだ?」

シーデ「その非合理的な発想こそ、我々の決勝進出の妨げとなりそ

うだった訳だ。」

クロウ「おい、なりそうだったって何だよ？」

イーフ「もうカウントダウン・キッドが召喚されてしまった。念には念を入れ、デッキに入れておいた切り札モンスターだが、このモンスターで決着をつけるのも悪くはない。そのカウントダウン・キッドの絶対的な能力の前に、お前らは屈する事になるのだ。」

遊星「絶対的な能力…だと…?」

シーデ「私は手札から、パワー・オーガスを攻撃表示で特殊召喚！カードを1枚セットし、ターンエンドだ！」（1）

パワー・オーガス

効果モンスター

レベル8 / 地属性 / 悪魔族 / 攻撃力0 / 守備力0

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードはシンクロ素材とする事はできない。

遊星「俺のターン！（4）」

5DS : SPC11

FOB : SPC11

シーデ「罨カード、自爆特攻を発動！」

自爆特攻

通常罾

相手のスタンバイフェイズに発動する事ができる。自分フィールド上に存在するレベル8以上で攻撃力が1000以下のモンスター1体をリリースし、自分は2000ポイントのダメージを受け、全ての相手ライフポイントを半分にする。

シーデ「これにより、パワー・オーガスをリリースし、お前たちのライフポイントを半分にする！最も、私のライフポイントは0になるがな…。」

クロウ「何だつて！？何て戦術を…、ぐあああつ！」

ジャック「おのれ！自滅とは卑怯なっ！」

MC「おおーっと！ここでまさかの自爆！しかしシーデ、チーム5D・sのライフポイントを大きく削ったぞ！」

不気味な笑いを浮かべながら、シーデの黒いDホイールがピットへと向かって行った。

脱落はしたものの、チーム5D・sにとってはかなりの痛手となった。

ジャック：LP2000      LP1000

クロウ：LP2400      LP1200

不動遊星：LP3500      LP1750

遊星「くっ…これでは、スピード・ワールド 2の効果を受けたらまずい。だが、まずはシンクロモンスターを取り戻す事からだ！スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを10個取り除き、フィールドのカードを1枚破壊する！俺はスピードカウンターを10個取り除き、グラヴィティ・ビートルを破壊！」

5Ds：SPC11 SPC1

遊星号の後方から放たれた閃光がイーフのDホイールの目の前にいるグラヴィティ・ビートルに向かう。

イーフ「お前がグラヴィティ・ビートル自身を狙ってくる事は読めていたぞ。グラヴィティ・ビートルを撃破すれば、それによってトライアングル・シンクロ・ケイジを破壊する事ができるからな！だがその考えは読めている。永続罠、安全地帯を発動！」

安全地帯

永続罠

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターは相手の効果の対象にならず、戦闘及び相手の効果では破壊されない。また、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

イーフ「このカードにより、グラヴィティ・ビートルは破壊されない！」

遊星「しまった！」

MC「不動遊星！ここでまさかのスピードカウンターの無駄打ち！ジャック「大丈夫だ遊星。まだデュエルは終わってないぞ！」

遊星「ああ。俺は手札から、チューナーモンスター、ジャック・シンクロンを攻撃表示で召喚！そして手札から、ジャック・サーバントを特殊召喚！」（2）

ジャック・サーバント

効果モンスター

レベル4/地属性/機械族/攻撃力1500/守備力1000

自分フィールド上に「ジャック」と名の付いたモンスターが表側表示で存在する場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。

遊星「レベル4のジャック・サーバントに、レベル3のジャック・

シンクロンをチューニング！」

集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光射す道となれ！シンクロ召喚！出でよ、ジャック・アーチャー

ジャック・アーチャー

シンクロモンスター

レベル7/地属性/戦士族/攻撃力2300/守備力2000

「ジャック・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。

選択したモンスターをゲームから除外する。この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手

フィールド上に戻る。

エービ「ほう…ジャンク・アーチャーか…。」

遊星「ジャンク・アーチャーの効果により、お前のモンスター、カウントダウン・キッドを除外する！デイメンジョン・シユート！」

ジャンク・アーチャーが矢を射るが、カウントダウン・キッドはヘツ、と言った後真上にジャンプしてそれを躲した。

エービ「カウントダウン・キッドの効果発動！このカードを対象とするフィールド上で発動した魔法・モンスター効果を無効にし、破壊する！」

遊星「なんだと！？」

カウントダウン・キッドがジャンク・アーチャーの矢を避けた後、拳銃を持ち出し、ジャンク・アーチャーを撃ち抜いた。

遊星「ジャンク・アーチャー！くっ…。ターンエンド。」（2）  
クロウ「遊星。」

壁モンスターがいない遊星を見て、不気味な笑みを浮かべたイーフは不気味な笑みを浮かべたまま、ゆっくりとデッキからカードをドロートした。

イーフ「私のターン！」（4）

5 D S : S P C 2

F O B : S P C 1 2

イーフ「私はグラヴィティ・ビートルの効果で、ジャック！貴様に500ポイントのダメージを与える！」

ジャック：LP1000 LP500

イーフ「さらに私は手札から、ツイン・マーダーを攻撃表示で召喚！」

ツイン・マーダー

効果モンスター

レベル5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻撃力1800 / 守備力200

自分フィールド上に攻撃力2000以上のモンスターが存在する場合、このカードはリリースなしで召喚する事ができる。このカードが戦闘によってモンスターを破壊した時、相手フィールド上にモンスターが存在する場合、このカードはもう一度だけ続けて攻撃する事ができる。

二人組のスナイパーライフルを構えた男たちが、イーフの前に現れる。

カウントダウン・キッドのように、帽子を目深に被り、素顔は隠している。

イーフ「ツイン・マーダー！不動遊星に止めを刺すがいい！」

遊星「そうはいかない！畏発動！ロスト・スター・ディセント！」

イーフ「なに？」



スナイパーライフルの弾丸が、先ほど撃破されたジャンク・アーチャーを貫通し、遊星への直接攻撃を防いだ。  
ジャンク・アーチャーが呻いていたのを見た遊星は、少し苦い顔をしていた。

遊星「すまない…ジャンク・アーチャー。」

ロスト・スター・ディセント  
通常罠

自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を選択し、自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、レベルは1つ下がり守備力は0になる。また、表示形式を変更する事はできない。

ジャンク・アーチャー：守備力2000 守備力0

イーフトゥイン・マードアのモンスター効果発動！モンスターを戦闘で破壊した時に相手フィールドにモンスターがいる場合、もう一度だけ続けて攻撃する事ができる！BF-精鋭のゼピュロスに攻撃  
！」

クロウ「ゲッ！…ぐあああっ！」

クロウ：LP1200 LP1000

イーフトゥ。安全地帯の効果により、グラヴィティ・ビートルは直接攻撃する事はできない。カードを1枚セットし、ターンエンド

！」(2)

ジャック「俺のターン！」(3)

5 D S : S P C 3

F O B : S P C 1 2

ジャック(カウントダウン・キッドの攻撃を受ければ、ビッグ・ピース・ゴーレムとの攻撃力の差の分の1400ダメージを受け、俺は負ける。だが、俺がここですべき事を考えると…)。

ジャック「俺はカードを1枚伏せ、バイス・バーサーカーを攻撃表示で召喚！」

バイス・バーサーカー

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力1000 / 守備力1000

このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、そのプレイヤーに2000ポイントダメージを与える。また、このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで2000ポイントアップする。

ジャック「まずはビッグ・ピース・ゴーレムで、ツイン・マörderを攻撃！パワー・プレッシャー！」

ビッグ・ピース・ゴーレムが両手を広げ、ツイン・マörderの2人組を一気に踏みつぶした。

イーフ：LP1700 LP1400

ジャック「そしてバイス・バーサーカー！カウントダウン・キッドを攻撃！」

イービ「なんだと？攻撃力3500のカウントダウン・キッドに攻撃するつもりなのか？」

同じく両手を大きく広げて襲い掛かるバイス・バーサーカーを、カウントダウン・キッドは手に持っている拳銃で撃ち抜き撃破し、その一直線上にいたジャックのDホイールにも弾丸を当てた。

もちろん実際にジャックが被弾する訳ではないが、烈風により、ジャックのDホイール、ホイール・オブ・フォーチュンは大きく横に揺れた。

ジャック「ぐああああ！」

ジャック：LP500 LP0

クロウ「ジャック！お前！」

遊星「ジャック！」

MC「おおーっとジャック・アトラス！ここでカウントダウン・キッドに攻撃し、まさかの自滅！！！」

ジャックの敗北の仕方に、目を丸くした者は多く、ジャック・アトラスの応援に駆け付けている人々も例外ではなかった。

ステファニー「そんなあ。ジャックウー！」

深影「バカね！アトラス様が何の考えもなしに自滅するようなお方だと思ってるの！？」

カーリー「そうよ！何かあるに決まってるんだから！」

MC「だが時間が0になるまでは、バトルフェイズが続いている！ライフポイントは尽きてしまったが、ここでカードを発動する事はできるぞおー！」

すると持ち時間が0になる前に素早くトラップカードに手をかけた。

ジャック「このジャック・アトラスが自滅する訳なかるう！貴様らを少しでも地獄に近づけてくれるわ！畏発動！スピード・グローブ！」

スピード・グローブ

通常畏

自分のモンスターの攻撃によって自分のモンスターが戦闘によって破壊された時に発動する事ができる。その時に受けた戦闘ダメージ300ポイントにつき1つ、相手の「スピード・ワールド」と名の付いたカードに乗っているスピードカウンターを取り除き、戦闘によって受けたダメージの半分の数値分のダメージを相手に与える。

ジャック「俺の受けたダメージは2500ポイント！よって貴様らのスピードカウンターを8つ取り除く！」

イーフ「我々のスピードカウンターを8つ取り除くだと！？」

ジャック「さらに、俺の受けた戦闘ダメージの半分を相手に与える！1250ポイントのダメージを…エービ！貴様に与える！」  
エービ「チツ。一矢報いたか。」

エービ：LP4000    LP2750

クロウ「ジャック！敵は、絶対取るからな！」

ピットブースに向かうジャックを見送る遊星とクロウ。ジャックの敗北により、2対2、人数的には互角の状況となった。

エービ「私のターン！」（2）

5DS：SPC4

FOB：SPC5

エービ「カウントダウン・キッドの効果発動！自分のスタンバイフェイズに、カウントダウンカウンターを1つ乗せる。」  
遊星「カウントダウンカウンターだと？」  
クロウ「まだ何かあるってのか？」

エービ「私はさらに、スピード・ワールド 2の効果を発動！スピードカウンターを4つ取り除き、手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！」

FOB：SPC5    SPC1

エービ「遊星！800ポイントのダメージを受けるがいい！」  
遊星「ぐああっ！」

不動遊星：LP1750 LP950

エービ「さて、これで勝利への方程式が完成した。」  
クロウ「なんだと？」

エービ「カウントダウン・キッドの効果発動！カウントダウンカウンターを取り除く事で、全てのプレイヤーに取り除いたカウントダウンカウンター1つにつき1000ポイントのダメージを与える！」  
遊星「なんだと？」

クロウ「俺たちのライフは共に1000以下！！」

エービ「フツ。終わりだ…。」

カウントダウン・キッドが銃を構えたが、フツとカウントダウン・キッドの銃が手元から消えてしまった。

エービ「なに！？これでは撃てない！？」

龍亞「何が起こったの！？」

クロウ「遊星！！」

遊星「俺は手札のエフェクト・ヴェーラーの効果が発動した！」  
（  
1）

エフェクト・ヴェーラー

チューナー/効果モンスター

レベル1 / 光属性 / 魔法使い族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。

この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

遊星「これにより、カウントダウン・キッドの効果は無効になったぞ！」

クロウ「ナイスだ遊星！」

エービ「しかもカウントダウン・キッドの効果が無効になったせいで、攻撃力が500になってしまったか。だが攻撃はできる！カウントダウン・キッドで、クロウ！貴様にダイレクトアタックだ！」  
クロウ「くそつ。」

クロウ：LP1000    LP500

エービ「どの道次のターンでお前たちは終わりだ！ターンエンド！」

(2)

カウントダウン・キッド：攻撃力3500

クロウ「俺のターン！(2)」(Sp・ハイスピード・クラッシュ)

5Ds：SPC5

FOB：SPC2

ピットブースに着き、ヘルメットを外しているジャックを見たクロ

ウは、自分のためだけでなく、チームのために戦ったジャックの負けを無駄にしない、必ず勝利を手にする心の中で誓った。

クロウ（ハイスピード・クラッシュ…。こいつを使えば、トライアングル・シンクロ・ケイジを破壊して、シンクロモンスターを取り返せる！だが、まだエービの場にはカードが1枚伏せられてる。エービはあのカードをさっきからずっと温存してやがる。ひよっとしたら、カードを破壊から守るカードなんじゃ…？）

半信半疑の状態だが、もはやクロウは手段を選んでいる場合ではない。手札フォルダに置いてある、ハイスピード・クラッシュを手にとった。

クロウ「…Sp-ハイスピード・クラッシュを発動！自分用スピードカウンターが2つ以上ある時、俺の場のカード1枚と、フィールドのカード1枚を破壊する！」

クロウの場には伏せカードが1枚あるため、そのカードを破壊し、フィールドのカードを1枚破壊するというのだ。

クロウ「俺の伏せカード、BF-アンカーを破壊して、お前の、トライアングル・シンクロ・ケイジを破壊する！今度こそ、俺たちのシンクロモンスターを返してもらおうぜ！」

イーフ「愚かな。罠カード発動！チェーン・プロテクター！」

突然鎖がチェーン・プロテクターのイラストの部分から現れ、トライアングル・シンクロ・ケイジをX字に取り囲み、ハイスピード・クラッシュを無効化した。

クロウ「…！！！」



イーフ「チェーン・プロテクターによって、トライアングル・シンクロ・ケイジは破壊されなくなった！」

チェーン・プロテクター

通常罨

フィールド上に表側表示で存在する魔法・罨カード1枚が魔法・罨効果モンスターの効果の対象となった時、そのカードを選択して発動する事ができる。選択したカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手の魔法・罨・効果モンスターの効果では破壊されない。

エービ「ハハハハハ！これで我らの勝利は確実な物となった！」

クロウ「クツ。タ…ターンエンド。」（1）

イーフ「私のターン！」（4）

5Ds：SPC6

FOB：SPC3

イーフ「私はスタンバイフェイズ時に、グラヴィティ・ビートルの効果を発動し、クロウ！貴様のライフポイントを0にしてやるぞ。」  
クロウ「ぐあああつ！ゆ…遊星っ！」

クロウのDホイールが左右に揺れ、バランスを崩しかけたところで、ピットブースへと駆け込んだ。

MC「チーム5D's！まさかの2人連続の敗北！これでチーム5D'sは不動遊星ただ1人となり、ライフポイントも、わずか95

0ポイントとなってしまうた！」

イーフ「手札は1枚のみ。場には伏せカードが1枚。しかも先ほどからずっと伏せているのにも関わらず、お前はそのカードを使わなかった。つまり使えないカードなんだろうな。お前の負けだ。私はこれで、ターンエンド！」(4)

遊星「俺は、負ける訳にはいかない…。俺のターン！」(2)「

5 D S : S P C 7

F O B : S P C 4

ここでチームフォビドウンの2人を倒せなくては、敗北するというのはわかっている。イービを倒しても、グラヴィティ・ビートルの効果で、ライフが0になる。逆にシーデを倒しても、カウントダウン・キッドの効果で、ライフが0になる。そう思うと、遊星はドロ―したカードを見る事が怖かったのだ。このドロ―が、ほとんどの場合、地獄へと足を踏み入れるドロ―となると思い…。

だが、少しでも右手を内側に傾けると、そのカードが見えてしまう。

遊星(カード枠は…緑色…?)

「Sp-」という文字が見えた瞬間、その右手を素早く内側に傾け、そのカードを確かめた。

そして、微笑した遊星…。

遊星「俺は手札から、S p -スピード・サイクロンを発動！」

S p -スピード・サイクロン

通常魔法

？

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

カウントダウン・キッド

効果モンスター

レベル10 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力500 / 守備力500

このカードは通常召喚できない。「アフター・ゲイザー」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力・守備力はゲームから除外されたシンクロモンスター1体につき1000ポイントアップする。このカードを対象とするフィールド上で発動した魔法・効果モンスターの効果を無効にし、それを破壊する。自分のスタンバイフェイズ時に一度だけ、このカードにカウントダウンカウンターを1個乗せる。自分のメインフェイズにこのカードに乗っているカウントダウンカウンターを全て取り除く事で、取り除いた数×1000ポイントのダメージを全てのプレイヤーに与える。

<次回の最強カード>

S p -スピード・サイクロン

通常魔法

？

### 第13話 - 決着!?

チーム5D's

・SPC7

ジャック・アトラス

・LPO

・(モンスター)ビッグ・ピース・ゴーレム(ATK2100)

・(魔法・罫)1枚

クロウ・ホーガン

・LPO

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)なし

不動遊星

・LP950

・手札2枚

・(モンスター)なし

・(魔法・罫)1枚

チームフォビドゥン

・SPC4

エービ

- ・LP2750
- ・手札3枚
- ・(モンスター)カウントダウン・キッド(ATK3500)
- ・(魔法・罫)なし

シーデ

- ・LPO
- ・(モンスター)なし
- ・(魔法・罫)なし

イーフ

- ・LP1400
- ・手札4枚
- ・(モンスター)グラヴィティ・ビートル(ATK2000)
- ・(魔法・罫)トライアングル・シンクロ・ケイジ( ) / 安全地帯( )

遊星「俺はSp・スピード・サイクロンを発動！」

Sp・スピード・サイクロン

通常魔法

以下の効果から1つを選択して発動する。

- ・自分用スピードカウンターを6つ取り除き、フィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊する。

・手札を1枚捨て、フィールド上の魔法・罫カードを1枚破壊する。

遊星「俺は手札を1枚捨てる効果を選ぶ！」(0)

イーフ「ほう。」

エービ「…。」

遊星「俺たちはトライアングル・シンクロ・ケイジを破壊しようとして必死だったが、どうやらそれ以前に、あのカードを破壊すればよかったんだ。俺は、安全地帯を破壊する！」

イーフ「しまった！」

グラヴィティ・ビートルがいきなり爆散した。会場からは、おおーっという歓声が沸き起こる。

ブルーノ「安全地帯が破壊された事により、その効果でグラヴィティ・ビートルが破壊されたんだね！」

遊星「これでトライアングル・シンクロ・ケイジは破壊され、戻ってこい！俺たちのシンクロモンスター！」

檻から解放された3体のシンクロモンスター、スターダスト・ドラゴン、レッド・デーモンズ・ドラゴン、BF・アーマード・ウィングが、宙を舞った。

ただしもう既にジャックとクロウは敗北しているため、レッド・デーモンズ・ドラゴンとBF・アーマード・ウィングはジャックとクロウのフィールドにいるものの、遊星がコントロールする事はできない。

イーフ「おのれ…。」

遊星「スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを7つ取り除く事で、デッキからカードを1枚ドロウする！」（1）

5DS：SPC7 SPC0

遊星「そしてトラップ発動！シンクロ・キャプチャー！」

シンクロ・キャプチャー

通常罠

相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。選択したシンクロモンスター1体のコントロールをエンドフェイズまで得る。この効果でコントロールを得たモンスターはリリースする事はできず、シンクロ素材とする事もできない。

遊星「俺はジャックのレッド・デーモンズ・ドラゴンのコントロールを得る！」

エービ「だが、それでは我々のうち1人のライフは残る。フツ…まだ我々のデュエルは終わっていないという事だ。」

ジャック「遊星！」

ピットブースにいたるジャックはピットブースにおいてあるマイクを無理矢理奪い取り、スイッチを入れ、声をあげた。

ジャック「罠カード発動オ！！プレゼント・シンクロ！！」

プレゼント・シンクロ

通常罠

元々の持ち主が自分であるシンクロモンスターが相手フィールド上

に表側表示で存在する時に発動する事ができる。  
フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体のコン  
トロールを別のプレイヤーに移し替える。

ジャック「これは本来、俺のシンクロモンスターが奪われた時のた  
めにとつておいたカード！俺はレッド・デーモンズが奪われた事に  
より、アーマード・ウィングを遊星の場に送る！」  
クロウ「やるじゃねえか、ジャック！」

イーフ「な…なんだと…？」

遊星「いくぞ！アーマード・ウィングで、イーフにダイレクトアタ  
ック！ブラック・ハリケーン！」

風を拳に集めたアーマード・ウィングは、その風の消えないうちに、  
イーフのもとに向かい、強烈な一撃をくらわせた。

イーフ「ぐわあああ！バ…バカな…！？」

イーフ：LP1400 LP0

遊星「そして、レッド・デーモンズ・ドラゴンで、カウントダウン・  
キッドを攻撃！アブソリュート・パワー・フォース！」

MC「除外されたシンクロモンスターがいなくなった事で、カウ  
ントダウン・キッドの攻撃力は500に戻ってしまったぞーっ！」

イービ「ぐわあああ！」

イービ：LP2750 LP250



遊星「フツ…。スターダスト・ドラゴン！シューティング・ソニックー！」

エービ「バ…バカな…！私の、完璧な計画が…！うわあああ！」

エービ：LP250 LP0

MC「ついに決着！やはりチーム5D・Sは強かったー！チームラグジュアリー戦、チームフォビドゥン戦を勝利し、決勝トーナメント進出確定だーっ…！！！」

龍可「やったわ！」

龍亞「よっしゃーっ！」

アキ「やったわね、遊星！」

会場ではまたしてもチーム5D・Sコールが起こっている。最も早く決勝トーナメント進出に駒を進めたチームであるから、それだけ興奮するものなのだろう。

気が付けば、夕日が沈む時刻となっていた。チーム5D・Sは、この夕日を忘れる事はないのだろう。

(シーンチェンジ)

龍亞「うわゝ、重いよゝ、助けてよゝ、龍可あゝ。いや、いけない！俺は龍可を守らなくちゃいけないんだっ！」

龍可「そうそうー！」

龍亞の両手には、ドミノマーケットと書かれたレジ袋が2つあり、その片方のレジ袋からは、お茶やジュースなどを含む2? ペットボトルが5本ほど見え、もう片方には、牛肉やらピーマンやら玉ねぎなどの食材が入っているようだ。

対して、龍可の手にはカップアイスとアイスボックスが入った袋のみ。

龍亞「って、それとこれとは関係ないだろーっ！」

龍可「まあまあ、早く帰らないと、アイスが融けるでしょ？」

遊星、ジャック、クロウは表彰式を終えた後、Dホイールのメンテナンスを行っており、ブルーノもそれに同行。アキは寿司を出前で頼んでいるため、ガレージにいないてはならない。よってこの2人が買い出しに行ったという訳だ。

龍亞「ううう…。ん？あれは…？」

龍可「どうしたの、龍亞？」

路地裏に通りがかったところで、龍亞には右方向から男4人が話しているのが見えた。1人は全身真っ白というような服装だが、それと対照的に、3人は全身真っ黒という服装である。

しかし龍亞はそれよりも重要な事に気づいた。

龍亞「あれは…。」

龍可「喧嘩かしら…？」

龍亞「ストームだよ！」

龍可「ストームさん!？」

龍亞「一緒に話しているのは…。」

黒いフードの下から、困惑した表情が見える。見えるのは困惑した表情だが、龍亞が思い出したのは、黒い服装の男の、不気味な笑みだった。

龍亞「チームフォビドゥン!？」

龍可「ええっ?…ほ…本当ね…。」

ストーム「おい、どうやってエクゾディアを手に入れたんだと聞いているんだ?」

イービ「だから何度も言わせるな。私は、カードパックで手に入れたのだ。」

シーデ「どうして信じられないのだ?」

ストーム「お前たちは怪しすぎる。」

イービ「信じようが信じまいが勝手だが、この通り、イラストの右下には番号があるだろう?カードパックの番号が…。」

実物を出されては、信じないわけにはいかなかったストーム。確かにゴールドパックの番号がふられている。

イービ「知らないのか?ゴールドパックというものがあって、黄金期を築き上げたカード達が収録されたパックが存在するのだ。」

ストーム「そんな事は知っている…。」

イービ「用は済んだか?」

ストーム「まだだ。じゃあ、カウントダウン・キッドはどうなんだ?」

シーデ「…!!」

突然気圧されてしまったチームフォビドゥン。そうなったところに、ストームはつけこんだ。

ストーム「限定カードなのか？だったらカードナンバーが付いてないものもあるが、どこで手に入れたんだ？」

イービ「デュエル大会で優勝して、手に入れたのだ。」

ストーム「嘘をつくな。俺は大会事情には詳しいぞ。」

イービは思わず舌打ちをしてしまい、ストームの言ったことが図星である事を決定づけてしまった。

ストーム「インダストリアルイリジョン社や海馬コーポレーション出のカードではないな？」

シーデ「別の会社…なんだ。」

ストーム「もういい。俺が聞きたいのは、次元統括者というものを知ってるかという事だ？」

「次元統括者」という言葉が出た瞬間、チームフォビドゥンの目の色が変わった。龍亞たちにもその言葉は聞こえたものの、首をかしている。

龍亞「なんだろね、次元統括者って…？」

龍可「さあ…。」

龍可が不意にアイスポックスを手に取り、1回ふると…不思議な事に、ジャリジャリという氷の音がしない事に気が付いた。その瞬間、龍可の顔が青くなった。

龍可「龍亞！大変！アイス融けてるわ！」

龍亞「えっ！大変だ！急いで帰ろう！」

2人が慌ててガレージに向かって走って行った。

イーフ「次元統括者…。」  
エービ「まさか、お前は…?」  
ストーム「ああ、お前らの読み通りだ。」

ジャック「遅かったな！龍亞、龍可！」  
ブルーノ「道に迷ったのかと思つて、心配したよ。」  
龍可「ゴメンなさい。龍亞が余計なもの買つし、道端でストームと  
チームフォビドウンが話をしてるのを龍亞が見かけて。」  
龍亞「龍可だつて一緒に盗み聞きしたじゃんか！」

アキ「盗み聞きなんて、しちゃダメよ。」  
遊星号にカバーをかけ終えた遊星が、工具のセットを持ってやつて  
きた。

遊星「ストームとチームフォビドウンが…?」  
クロウ「おもしれえ組み合わせだな。あいつら、友達だったのか？」  
龍亞「いや、そういう風じゃなかったんだよ。なんてか、こう…。」  
必死に伝えようと手を動かして、意思が相手に伝えられない龍亞  
を見た龍可は、呆れながら言った。

龍可「エクゾディアは本物なのか?とか、あと、次元統括者って知  
つてるか?とか、聞いてたわ。」  
龍亞「あ！そうそう!」  
アキ「次元統括者?」

ジャック「なんだそれは…？」

クロウ「カードの名前かなんかじゃねえのか？まあいずれにせよ、俺たちには関係のない話だと思うぜ。あいつら同士の話なんだからよ。」

アキ「まあ…そうね。」

冷凍庫の中に買ってきたアイスを入れようとしたブルーノが、アイスの感触に驚いて叫んだ。

ブルーノ「あああつ！！このアイス融けてるよ！！！」

ブルーノがアイスボックスを指しながら叫んでいるのを見たジャックは、龍亞に詰め寄った。

ジャック「龍亞…なぜ俺の頼んだアイスボックスが融けているの…？」

龍亞「あはは…。だから、ストームの話聞いてたらさ…。」

龍可「あたししーらないっつと…。」

クロウ「ジャック、そんなに怒るなよ。他のアイスはどうなんだ？ブルーノ「他のは、融けてなさそう。」

クロウ「ああ…そう。」

ジャック「なぜ俺のだけなのだ！龍亞！今日と言っ今日は許さん！」

龍亞「うわあああ！ジャック！そんな怒らないでよお〜」

ジャックが龍亞のパーカーのフードを掴みあげ、耳元で「許さん！」と怒鳴っていると…。

アキ「ジャック！龍亞！遊んでないで、パーティーの準備しなさい！」

ジャック「フン！言われんでもするわ！」  
龍亞「はぁーい。」

遊星（ストーム…。次元統括者とは、一体なんなんだ？）

こうして、チーム5D'sの決勝トーナメント進出を祝したパーティーが、遊星たちのガレッジで行われることとなった。  
だが、イリアステルに加え、次元統括者。また面倒なモノが1つ増えてしまったのかもしれないと、遊星は頭を抱えていた…。

<今日の最強カード>

Sp-スピード・サイクロン

通常魔法

以下の効果から1つを選択して発動する。

- ・ 自分用スピードカウンターを6つ取り除き、フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊する。
- ・ 手札を1枚捨て、フィールド上の魔法・罠カードを1枚破壊する。

<次回の最強カード>

スターダスト・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル8 / 風属性 / ドラゴン族 / 攻撃力2500 / 守備力2000  
チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。





第13話 - 決着！？（後書き）

とりあえずWRGPの予選までは書き終えました。なんかキャラ設定でも書いたりするかな？って、ほとんど原作キャラだから別にか（笑）

## 第14話 - 新たなる刺客!?

午後10時。ハイウェイでは一台のDホイールが駆けている。

だがそのDホイールはコーナーを曲がり終えると、ハイウェイを降りて、公道に出た。

そしてDホイールは街灯の前で停まり、Dホイーラーはヘルメットを取って、首を左右に振った。

遊星は何本も立ち並ぶ街灯を見つめながら、考えていた。謎のDホイーラーが言い、見せてくれたアクセルシンクロについて…。

遊星（アクセルシンクロ…。俺のデッキで、機皇帝を打ち破る事のできる唯一の方法…。）

遊星「ストーム。そういう能力を持った機皇帝というモンスターがいるんだが、お前だったらどう対処する？」

ストーム「俺かい？それなら、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍に決まってるだろ！シンクロモンスターにばかり捕らわれているから、勝てないのさ！」

ジャック「おいストーム。そういう言い方はよせ。俺たちは、限られた範囲のカードで、戦ってきているのだ。」

ストーム「あ、そうか。スマンスマン。」

遊星「だったら、アクセルシンクロしかないか…。」

と考えていると、前方から白いDホイールが全速でやってきて、遊

星の目の前に止まった。

遊星「なに!?!」

かなり速いスピードを出していたのだが、咄嗟に止まったところを見ると、Dホイラーの技術は相当なものだというのが、伺える。

白いフードを被り、全身が真っ白である男は、ヘルメットを取り、微笑した。

遊星「お前は!?!」

ブラシド「不動遊星!久しぶりだな。」

遊星「久しぶり!?!だと?」

ブラシド「フツ、お前とは一度デュエルをした事があるのだ。」

遊星「俺が、お前と!?!」

ブラシド「フツ。これで思い出すだろうか?」

と言うとブラシドは右腕についているデッキケースに左手を伸ばし、そのデッキの一番上にあつたカードを抜き、遊星に見せた。

その瞬間、遊星の表情に焦りか、恐怖らしき何かが見えた!?!。

遊星「これは!?!機皇帝ワイゼル!?!」

ブラシド「そう。やっと思い出したか。俺がゴーストを操り、機皇帝を使っていたのだ!赤き龍の力によって妨害され、デュエル自体は敗北してしまつたがな!?!。」

遊星「貴様、何という事を!?!」

ブラシド「さあ、デュエルだ不動遊星!俺は今度こそ貴様を葬る!シンク口召喚を滅亡させるために、邪魔な者は全て消し去ってくれ

る！」

自分の手が震えていることに、遊星は気づいた。だがここで引くわけにはいかない。アクセルシンクロが何かわかっていなくとも、シンクロキラーに対しての対策も用意している、そう自分に言い聞かせ…

遊星「いいだろう！そのデュエル、受けて立つ！」

だがその瞬間、プラシドがやってきた方向から、もう一台のDホイールがこちらに向かってきた。

プラシド「ん！？」

遊星「なに！？」

？「私も混ぜて欲しいな。」

オーカー色のDホイールが停車し、そのDホイーラーがヘルメットを取る。

Dホイーラーは金髪であり、おおよそ40歳程の知り合いのおじさまという感じであった。

気高さ、自信を持ち合わせたような風格であろうか。

遊星「なに？」

プラシド「何だ貴様は？」

？「私は次元統括者のユニイン。それだけは名乗っておこう。今日はほんの挨拶に来ただけだからね。」

プラシド「次元統括者…？何だそれは？」

ユニイン「次期にわかる。さあ、早速だがデュエルしてもらおうか…。君たちはデュエルするつもりだったのだろう？」

プラシド「フン、貴様などに用はない。どうしてもというのなら、

不動遊星を片付けた後に、貴様を片付けてやる。」

ユニイン「そうはいかない。私は、デュエルで、君たちにそれぞれの運命を理解してもらったためにやってきたのだから…。」

遊星「俺たちの運命を…。」

ブラシド「なんだと？」

ユニインの意味深な発言を素直に飲み込めずにいる遊星とブラシドだったが、そこでユニインが再び口を開いた。

ユニイン「そう。そのためにはこのバトルロイヤル形式でデュエルを行わなくてはならないのだ。」

遊星「バトルロイヤル形式で…ライディングデュエルか…。」

ブラシド「いいだろう。どこの馬の骨かわからん奴にやられる俺ではない。」

そういうとブラシドは彼のDホイール、T・666《テリブルオーメン》に跨り、エンジンをかけ始めた。

ブラシド「不動遊星！貴様もこのデュエルで木端微塵にしてやろう！」

遊星「お前らの好きにはさせないぞ！」

ユニイン「そうこなくてはな…。ゆくぞ！」

3台のDホイールが、ほぼ同時にスタートした。このままデュエルを開始してはスタートの順番で不利有利があるためか、第一コーナーを曲がると、3人が一直線上に並び、声を揃え、デュエルを開始する。

3人「フィールド魔法、スピード・ワールド 2！セット・オン！」  
Dホイール「デュエルモード・オン！」

3人「ライディングデュエル、アクセラレーション！！！！」

最初に飛び出したのはユニインであり、そのスピードで、第一コーナーを曲がり切った。

ユニイン「フツ。」

遊星・プラシド「何だと！？」

遊星「くっ！」

プラシド「チツ、二番手は俺がもらっぞ！」

遊星「させるか！」

2台のDホイールが同時にコーナーに入った。遊星が内側、プラシドが外側を走行しており、スピード的にはほぼ互角であるものの、遊星のDホイールでコーナーからこれ以上の速度で脱出しようとする壁に激突するだろうという不安があり、段々とプラシドに追い抜かれていく…。

そこに、謎のDホイーラーと戦った時を思い出した。

遊星（あの時…。）

遊星の脳裏には、コーナーを猛スピードで脱出した謎のDホイーラーの事が浮かんだ…。

そう、いつまでも恐れているのは、速さを得る事も、目の前のDホイーラー1人を倒す事も、いや、先攻を取る事もできない。

逆境には強い、それが主人公か…。

遊星「うおおおっ！」

ブラシド「何！？自爆する気が…！？」

遊星のDホイールが、急に速度を上げ、コーナー脱出を図る。遊星号が、壁を擦ったのを遊星は感じ取ったが、そんな事はもう、遊星の眼中にはない。

紙一重で遊星が先攻を取った。

ブラシド「チツ。」

ユニイン（あの速度でコーナーを抜けたか…。）

3人「デュエル！」

不動遊星：LP4000

ブラシド：LP4000

ユニイン：LP4000

254

遊星（奴の言った、未来を見せるデュエルとは、一体？）

ユニインは自分の金髪の髪を右手で一かきし、デッキからカードをドロ―した。

ユニイン「私のターン！（6）カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

（5）

遊星「なに！？カードを1枚伏せただけだと……………」

ブラシド「手札事故か？」

遊星「次は俺だ、俺のターン！（6）」

不動遊星：SPC1  
ブラシド：SPC1  
ユニオン：SPC1

遊星「俺は蒼弩隼を通常召喚！(5)」

ブルーエクスペンス・ファルコン  
蒼弩隼

チューナー/効果モンスター

レベル2/風属性/ドラゴン族/攻撃力800/守備力800

このカードの召喚に成功した時、手札からレベル4以下のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚することができる。このカードは風属性シンクロモンスター以外のシンクロ召喚の素材には出来ない。

遊星「そしてさらにその効果で、手札からスター・ブライト・ドラゴンを特殊召喚！」(4)

スター・ブライト・ドラゴン

効果モンスター

レベル4/光属性/ドラゴン族/攻撃力1900/守備力1000  
このカードが特殊召喚に成功した時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外のモンスター1体を選択し、エンドフェイズまでモンスターのレベルを2つ上げる事ができる。

遊星「スター・ブライト・ドラゴンの効果で、蒼弩隼のレベルを2つ上げる！レベル4のスター・ブライト・ドラゴンに、レベル4となつた蒼弩隼をチューニング！」



集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

ユニオン「1ターン目からスターダスト・ドラゴンか。張り切っているようだね。」

ブラシド「機皇帝の糧となるシンクロモンスターが来たか。」

遊星「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」(3)

遊星（俺が1ターン目にスターダストを出したのは、単に力で押しきるためじゃない。ブラシドが召喚する機皇帝ワイゼルは、ワイズコアがカード効果で破壊されたら出現する。スターダストで、ワイズコアの破壊を防ぐ！）

ブラシド「俺のターン！（S p -ハイスピード・クラッシュ）」(6)

不動遊星：S P C 2

ブラシド：S P C 2

ユニオン：S P C 2

ブラシド「俺はワイズ・コアを召喚！さらに手札からS p -ハイスピード・クラッシュを発動。自分の場のカード1枚と、相手の場のカードを1枚ずつ破壊！」

ワイズ・コア

効果モンスター

レベル1/闇属性/機械族/攻撃力0/守備力0

このカードがカード効果で破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊して、自分のデッキ・手札・墓地から「機皇帝ワイゼル」「ワイゼルト」「ワイゼルA」「ワイゼルG」「ワイゼルC」を1体ずつ特殊召喚する。

遊星「機皇帝ワイゼルは出させない！スターダストの効果発動！このカードをリリースし、フィールド

のカードを破壊する魔法・罫・効果モンスターの効果を無効にする！ヴィクテム・サンクチュアリ！」  
ユニオン「ほう。」

スターダスト・ドラゴンが一筋の閃光に姿を変え、ハイスピード・クラッシュを包み込み、破壊した。

ハイスピード・クラッシュの発動を無効にした事により、ホッと一息ついた遊星だったが、プラシドのデュエルは、そこまで甘いものではなかった。

プラシド「ハンツ！そんなに機皇帝が嫌か？ならば見せてやる！Sp・ハイスピード・クラッシュを再び発動！スピードカウンターが2個以上ある時、自分のカード1枚と、フィールドのカードを1枚破壊。俺はワイズ・コアと、ユニオン！キサマのセットされたカードを破壊する！」

遊星「なに！？もう1枚あるだと！？」

プラシド「そしてワイズ・コアが破壊された時、手札・デッキから機皇帝ワイゼル、ワイゼルト、ワイゼルA、ワイゼルG、ワイゼ

ルCを特殊召喚する！合体せよ、機皇帝ワイゼル！」

### 機皇帝ワイゼル

効果モンスター

レベル1 / 闇属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードの攻撃力・守備力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ワイゼル」・「グランエル」・「スキエル」と名のついたモンスターの攻撃力・守備力分アップする。1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備することができる。このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。「」と名のついたモンスターは自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。また、自分フィールド上にこのカードが表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターは、攻撃をする事ができない。

### 《ワイゼルT》

レベル1 / 闇属性 / 機械族 / 攻撃力500 / 守備力0

自分フィールド上に「」と名の付いたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

### 《ワイゼルA》

レベル1 / 闇属性 / 機械族 / 攻撃力1200 / 守備力0

自分フィールド上に「」と名の付いたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

### 《ワイゼルG》

レベル1 / 闇属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力1200

自分フィールド上に「」と名の付いたモンスターが表側表示で存

在しない場合、このカードを破壊する。  
自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、このカードに攻撃対象を変更することができる。

《ワイゼルC》

レベル1 / 閻属性 / 機械族 / 攻撃力800 / 守備力800

自分フィールド上に「」と名の付いたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

このカードは相手のカードの効果では破壊されない。

機皇帝たちが合体し、人間のような形となった。その姿に、遊星は再び戦慄を覚えた。

遊星「くっ…機皇帝ワイゼル…。」

ユニイン「ほう。これが神から授かった物が。」

ブラシド「ターンエンドだ！」(3)

遊星「スターダストは、自身の効果で墓地に存在するならエンドフェイズ時に復活する！」

ユニイン「私のターン！」(6)

不動遊星：SPC3

ブラシド：SPC3

ユニイン：SPC3

ユニイン「さて、このターンから攻撃が可能となる。どう戦つかね？カードを3枚伏せ、ターンエンド。」(3)

不動遊星：SPC4  
ブラシド：SPC4  
ユニオン：SPC4

遊星「モンスターを召喚しないのか？俺のターン！（4）行け、スターダスト・ドラゴン！ユニオンに直接攻撃だ！」  
ユニオン「罠カード発動！湾曲・ヴェンディング！攻撃したモンスターの攻撃を、別のモンスターに変更する！」

湾曲・ヴェンディング  
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。攻撃対象となるモンスターは、自分が選択する。この効果によって選択したモンスターがこの戦闘によって破壊されなかった場合、自分のデッキからカードを1枚ドロース、その後手札を1枚デッキの一番上におく。

遊星「なに！？」  
ユニオン「攻撃対象を機皇帝ワイゼルに変更する！」  
遊星「攻撃力が、互角！？」

その瞬間、機皇帝ワイゼルの左腕が光り、シューティング・ソニックを受け止めた。

ブラシド「ワイゼルGの効果発動！攻撃対象をこのカードに変更する！」

ユニオン「フツ。2体とも消え去る、という事はなかったようだな。私は湾曲・ヴェンディングの効果で、カードをドロ―し、手札1枚をデッキの一番上におかせてもらう。」

遊星「レベル・ステイラーを守備表示で召喚し、ターンエンド。」

(3)

レベル・ステイラー：守備力0

プラシド「俺のターン！」(4)

不動遊星：SPC5

プラシド：SPC5

ユニオン：SPC5

プラシド「貴様、ワイゼルを破壊しようとした罪は重いぞ。ワイゼルG3を召喚！」

ワイゼルG3

効果モンスター

レベル3 / 閻属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力2000

?

カタツムリのような恰好をしたワイゼルG3から手が伸び、機皇帝ワイゼルの体と合体した。

遊星（機皇帝ワイゼル の効果で、スターダストを捕獲するつもりか？だが、俺の場にはスター・シフトが伏せられている。これでワイゼル の効果を回避するぞ！）

ブラシド「まずは機皇帝ワイゼル の効果発動。1ターンに1度、シンクロモンスターを吸収する事ができる！これで攻撃力5000となった機皇帝で貴様らにとどめを刺してやろう！」

遊星（今こそ、このリバース・カードを！）

遊星がリバースカードを発動させようとした所で、右方向からユニインの声が聞こえた。

ユニイン「カウンター罠発動！エフェクト・カース。」

エフェクト・カース  
カウンター罠

相手ターンのメインフェイズ1で発動する事ができる。効果モンスターの効果が発動した時、その効果を無効にする。このカードによって効果の発動を無効にされたモンスターは、このターンに自分が選択した相手フィールド上のモンスター1体を攻撃しなくてはならない。また、このカードを発動したターンのバトルフェイズ中、相手は罠カードを発動する事はできない。

遊星・ブラシド「!？」

ユニイン「効果モンスターの効果が発動した時その効果を無効にし、

………モンスター同士を、強制戦闘させる！」

遊星・ブラシド「なんだと!？」

機皇帝の胸部の「」のマークが一度は緑色に光り、触手が出たが、エフェクト・カースの発動によって、触手が胸部に引っ込んでしまい、シンクロモンスターの吸収は失敗に終わった。

ブラシド「チツ。シンクロモンスターを吸収できなかっただど!?」  
遊星「ユニイン…。一体何を!?!」

ユニイン「別に君を助けた訳ではないよ遊星。ブラシド。君のワイゼルG3は攻撃対象になった時にその攻撃を無効にする。つまり君のバトルフェイズ中に自分から攻撃する際は当然発動しない!」  
ブラシド「くつ。」

強制戦闘が開始されれば、攻撃力が2500同士のスターダスト・ドラゴンと機皇帝ワイゼルは共に破壊されてしまう。だが、第三者のユニインは、何の影響も受けない。

戦わずして、相手を疲弊させる…

気が付けば、機皇帝ワイゼルが右手を振り上げて、スターダスト・ドラゴンに突進している。

だがこのまま黙って負ける訳にはいかないと、遊星はトラップカードに手をかけた。

遊星「罠カード発動!スター・シフト!自分フィールド上のシンクロモンスター1体をデッキに戻し、同じレベルのシンクロモンスター1体を特殊召喚する!」

ユニイン「フツ!残念だが、エフェクト・カースの効果で、バトルフェイズ中に罠カードは使えない。」

遊星「何だと!?!」



スターダスト・ドラゴンの反撃、シューティング・ソニックを受けた機皇帝ワイゼルはボロボロになるが、それでも右手を振り上げ、ボロボロの状態でスターダスト・ドラゴンの首を掻っ切った。

相打ちとなったのだ。

遊星「スターダスト！」

ブラシド「くっ。俺の機皇帝ワイゼルが……………」

ユニンは「フフフ…」と笑いながら、続けてもう1枚のトラップカードに手をかける。

ユニン「さらに罠発動。ジェノサイド・ウェーブ！」

ジェノサイド・ウェーブ

通常罠

シンクロモンスターが戦闘によって破壊されたターンに発動する事ができる。このカードを発動したターンに戦闘によって破壊されたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値分のダメージを、このターンに戦闘によって破壊されたモンスターをコントロールしていたプレイヤーに与える。

ユニン「シンクロモンスターが破壊された時、このターン戦闘で破壊されたモンスターのコントロールにこのターン戦闘で破壊された全てのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

ブラシド「なんだと？」

遊星「機皇帝は攻撃力が0だが、スターダストの攻撃力は2500

「！  
遊星・プラシド「ぐああっ！」

不動遊星：LP4000 LP1500  
プラシド：LP4000 LP1500

ユニインのフィールドにカードはなくなっただが、ユニインは素早くディスプレイの「Cemetery」と書いてある所にタッチし、リストの中から「Sp-Hispeed・クラッシュ」によって破壊されたあるトラップカードを選び、「Activate」という所を押した。

遊星「何!？」

ユニイン「墓地のミラージユ・ヴェールの効果だ!このカードを外し、デッキの一番上を確認する。確認したカードが罠カードだった場合、そのカードを発動する!」

ミラージユ・ヴェール

通常罠

自分のデッキの一番下のカードを確認する。確認したカードが罠カードだった場合、その罠カードを発動する事ができる。また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外して、自分のデッキの一番上のカードを確認する。確認したカードが罠カードだった場合、その罠カードを発動する事ができる。このカードがフィールド上で発動した場合、ゲームから除外される。

ブラシド「フツ……………そう都合良く罨カードであるハズが……………！」

遊星「あっ！」

ユニオン「そう。さっき発動した罨カード、湾曲・ヴェンディングの効果で、デッキの一番上と手札1枚が入れ替わったな。という事は……………どういう事だかわかるかね？」

遊星「まさか、デッキの一番上に罨カードを……………？」

ユニオン「そうだ。罨カード発動！ジェノサイド・ウェーブ！」

遊星「2枚目!？」

ブラシド「なんだと!？」

ユニオン「終わるがいい……………。」

遊星・ブラシド「うわあああああ!！」

不動遊星：LP 1500 0

ブラシド：LP 1500 0

ユニオン「フツ……………。口ほどにもない…。期待して損をしたという奴か…。」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

スターダスト・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル8/風属性/ドラゴン族/攻撃力2500/守備力2000  
チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターが発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

< 次回の最強カード >

TG - パワー・グレイディエーター WAX - 1000

レベル5 / 地属性 / 戦士族 / 攻撃力2300 / 守備力1000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードの種族は機械族としても扱う。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

## 第14話・新たなる刺客！？（後書き）

テックジーナスにしましては、名前はアニメのように型番を付けるようにしたいと思います。アニメのストーリーが被っているという事で…。

効果にしましては、OCG+アニメみたいな感じかな…。

とりあえずどついう形であれ統一はいたします。

## 第15話・人探しのデュエリスト達

遊星「ぐわああああっ!」

プラシド「うおおあああ!」

不動遊星：LP0

プラシド：LP0

ユニオン：LP4000

オーカー・ブラウンのDホイールが停止し、ユニオンはヘルメットを取って、2人を一瞥した。

ユニオン「フツ、これが未来だ。」

遊星とプラシドは転倒してしまい、2人はDホイールを起こし、ユニオンに疑問を投げかけた。

プラシド「未来だと?」

ユニオン「そう。君たちの未来は、こういう事となって終わるのだ。」

遊星「どういう意味だ!?!」

ユニオン「今のデュエル、私は手出しをしたが、ほんの少し。にもかかわらず君たちは敗北した。勝手に自滅したのだ。」

遊星「勝手に自滅だと!?!お前の畏カードに…!」

ユニイン「しかし機皇帝も、シンクロモンスターもなければ、君たちは負けなかった。君たちは自らを滅ぼしていく…それを忘れないでいて欲しい。」  
プラシド「なに!？」

そう言い終わると、ユニインはヘルメットを再び被り、Dホイールに乗って、颯爽とどこかへ行ってしまった。

遊星「くっ。」

プラシド「面倒な奴がまた現れたか…。だが不動遊星。貴様を倒すのはこの俺だ。奴如きに負けてもらっては困るぞ…。」

遊星「お前は、次元統括者について何か心当たりはないのか？」

プラシド「あんな奴らは知らん。俺はイリアステルの使者だからな。」

遊星「イリアステル!やはり機皇帝はイリアステルと関係があったか。」

プラシド「俺の名はプラシド、一応覚えておくがいい。まあ、貴様もいずれ、俺に葬られる事になるがな!」

遊星「どういう事だ?」

プラシド「フツ…次期にわかる!さらばだ、不動遊星!」

プラシドもまたヘルメットを被り、颯爽とどこかへ行ってしまった。

遊星(くっ、イリアステルに加えて次元統括者…。どちらも何か明確にわからないのに…)。

(シーンチェンジ)

一方、別の地点では一台のDホイールがハイウェイに入っていった。単輪であり、先端が異様に長いDホイール。パープルのようなカラ

ーリングでもあった。

Dホイーラーは焦燥感に駆り立てられたようで、物凄いスピードでハイウェイを走行している。

?「遊星…。」

だがそこで、右方向の合流するゲートからも物凄い勢いで大型のDホイールがやってきたのがそのDホイーラーには見えただため、衝突を防ぐため、Dホイールを左に傾けた。

?「くつ！」

大型のDホイールはハイウェイの隅に寄り、停車した。パープルのDホイールもまた、そこに停車をした。

そしてそのDホイーラーはサンングラスを外さずに、最初に口を開いた。

ブルーノ「どういうつもりだ?故意にやったんだな?」

?「ああん?このカルタツグ様にぶつかつたといて…そいつは、言いかりつて奴だろうが…。」

ブルーノ「それならばそれでも良い。」

と言って、ブルーノはヘルメットを着けたが

カルタツグ「おい、俺は今人探しをしてるんだ。」

ブルーノ「人探し?」

カルタツグ「ああ。金髪のおっさんで茶色っぽいDホイールに乗った男なんだがよ…。知らねえよな?」

ブルーノ「私は知らないな。」

カルタツグ「そうかい。」



カルタツグ（こいつ…ひよっとすると…。）

大柄で煙草を吸っているカルタツグは、鼻をすすると、ニヤツと不気味な笑いを浮かべた。

カルタツグ「よし、デュエルしようぜ！」

ブルーノ「なんだと？私はお前と同じで、人探しをしているのだ。」

カルタツグはさらにもう1度ニヤツとした。彼は心の中で、「やっぱりな…。」と呟いたのだ。

カルタツグ「まあまあ、俺だって探してるよ。けどさ、デュエルしてりゃ、見つかりやすいだろ？夜の11時だし、ハイウェイは空いてるしさ。」

その気味の悪い笑みで、ブルーノはカルタツグが何かを考えているのではないかという事を察した。遊星が誰かと戦っているような感じが自分の中にはあるのだが、カルタツグにもそれがああり、カルタツグには遊星が誰とデュエルしているのかわかるのかもしれないと思ったのだ。

ブルーノ「いいだろう。そのデュエル、受けて立つ！」

カルタツグ「そうこなくちな。」

2人「デュエル!!!」

ブルーノ : LP4000

V S

カルタツグ：LP4000

カルタツグ「さあ、俺から仕掛けたからな。俺のターンでいくぜ！俺のターン！（6）俺はグレイヴ・キーパーを守備表示で召喚！」

グレイヴ・キーパー

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力0 / 守備力2000

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、戦闘によって破壊されたモンスターは墓地へは行かず、持ち主のデッキに戻る。その後デッキをシャッフルする。

273

カルタツグ「これでターンエンド。」（5）

ブルーノ「まずは手堅く様子見か…。私のターン！」（6）

ブルーノ：SPC1

カルタツグ：SPC1

ブルーノ「私は手札からチューナーモンスター、TG-ストライカーを特殊召喚！（5）」

TG-ストライカー WA-01

チューナー/効果モンスター

レベル2/地属性/機械族/攻撃力800/守備力0

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードは、機械族としても扱う。機械族を対象にした自分の魔法・罠カードの効果はこのカードが受ける時、このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、「T G - ストライカー WA - 01」1枚を自分のデッキから手札に加える事ができる。

ブルーノ「そして私は手札から、T G - ワーウルフを特殊召喚！」  
4」

T G - ワーウルフ BW - 03

効果モンスター

レベル3/闇属性/獣戦士族/攻撃力1200/守備力0

自分フィールド上にレベル4以下のモンスターが特殊召喚された時、このカードは手札から自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードは、機械族としても扱う。機械族を対象にした自分の魔法・罠カードの効果はこのカードが受ける時、このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。このカードが破壊された時、「T G - ワーウルフ BW - 03」1枚を自分のデッキから手札に加える事ができる。

ブルーノ「レベル3のT G - ワーウルフに、レベル2のT G - ストライカーをチューニング！」

リミッター解放レベル5、ブースター注入120%、リカバリーネットワーク、レンジ修正！オールクリア！GO、シンク口召喚！カモン！TG-パワー・グラディエイター！

TG-パワー・グラディエイター WAX-1000：攻撃力2300

ブルーノ「パワー・グラディエイターで、グレイヴ・キーパーを攻撃！全てを貫く閃光！マシンナイズ・スラッシュ！」  
カルタツグ「ぐわっ！へっ、やるじゃねえか。」

カルタツグ：LP4000 3700

カルタツグ「ん？俺のライフポイントが減っている！？」  
ブルーノ「TG-パワー・グラディエイターは守備表示モンスターを攻撃した時、相手に貫通ダメージを与える！私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」(2)

早くもカルタツグにダメージを与えたブルーノだが、油断はしていない。まだまだデュエルは始まったばかり、何が起きるかはわからないのだ。

カルタツグ「へえ、テックジーナスねえ…。俺のターン！」(6)

ブルーノ：SPC2

カルタツグ：SPC2

カルタツグ「俺は手札から、デブリボールを守備表示で召喚！」

デブリボール

効果モンスター

レベル2 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力1900

？

カルタツグ「さらにリバースカードを2枚セットして、ターンエンドだ。(3)」

ブルーノ(デブリボールか…)。

ブルーノ「私のターン！(3)」

ブルーノ：SPC3

カルタツグ：SPC3

ブルーノ「私はTG-パワー・グラディエイターで、デブリボールを攻撃！マシンナイズ・スラッシュ！」

パワー・グラディエイターが斧を振り下ろし宇宙にあるようなデブリの欠片がボール状についているデブリボールを攻撃する。

しかしデブリボールが破壊された事に、カルタツグは笑みを浮かべていた。

カルタツグ：LP3700 LP3300

カルタツグ「デブリボールの効果発動！戦闘で破壊された時、相手フィールド上のモンスター1体を手札に戻し、そのモンスターのレベル×300ポイントのダメージを与える！」

ブルーノ「それは読んでいる！カウンター罠、TGX-EENを発動！」

TGX-EEN

カウンター罠

自分フィールド上に表側表示で存在する「TG」と名の付いたモンスター1体が相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の対象となった時に発動する事ができる。対象となった「TG」と名の付いたモンスター1体を破壊し、自分の墓地か手札からレベル4以下の「TG」と名の付いたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

ブルーノ「私はこの効果で、パワー・グラディエーターを破壊する！」

カルタツグ「そんなことあ読めてるんだぜ！？カウンター罠発動！  
カウンター・カウンター！」

カウンター・カウンター

カウンター罠

カウンター罠の発動を無効にし、それを破壊する。

これで両者の伏せカードは共に1枚ずつ無くなり、お互いに残り1枚ずつとなったが、ブルーノの思惑は外れてしまったのだ。

ブルーノ「しまった！これでは！！」

パワー・グラディエーターが光の粒となって消え、ブルーノのエクストラデッキに戻る。シンクロモンスターは手札に戻る効果を受け、手札には加わらず、エクストラデッキに戻るのだ。

カルタッグ「そしてお前はデブリボールの効果で、1800ポイントのダメージを受けてもらっぜ！」

ブルーノ「ぐっ！」

ブルーノ：LP4000 LP2200

ブルーノ「私はTG-ストライカーを守備表示で召喚し、ターンエンド！（2）」

TG-ストライカー WA-01：守備力0

カルタッグ「俺のターン！（4）」

ブルーノ：SPC4

カルタッグ：SPC4

カルタッグ「俺は手札から、ハイパーハンマーヘッドを召喚！」

ハイパーハンマーヘッド

効果モンスター

レベル4/地属性/恐竜族/攻撃力1500/守備力1200

このモンスターとの戦闘で破壊されなかった相手モンスターは、ダメージステップ終了時に、持ち主の手札に戻る。

カルタッグ「さらに手札からS p - デッドストライクを発動！」

ブルーノ「デッドストライクだと!？」

S p - デッドストライク

通常魔法

自分用スピードカウンターが4つ以上ある時に発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで1000ポイントアップする。また、このターンのみ、そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値分の戦闘ダメージを相手に与える。このカードを発動する場合、選択したモンスター以外の自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃によって相手に与える戦闘ダメージは0になる。

カルタッグ「これによって、ハイパーハンマーヘッドの攻撃力は2500になり、貫通能力を得た！」

ブルーノの場にいるT G - ストライカーの守備力は0であるため、この攻撃が通れば、カルタッグの勝利となる。



カルタッグは完全に獲物を捕らえるまでの最後の仕上げのような感じでかかっており、舌なめずりを1回した。

カルタッグ「覚悟はいいか！いくぜ！ハイパーハンマーヘッドで、TG - ストライカーを攻撃！」

ブルーノ「そうはいかない！畏発動！TG1 - EM1！」

突然、ハイパーハンマーヘッドとTG - ストライカーの場所が入れ替わり、バトルが中断された。

カルタッグ「なんだと？」

TG1 - EM1

通常畏

相手フィールド上に存在するモンスター1体と、自分フィールド上に表側表示で存在する「TG」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターのコントロールを入れ替える。

ブルーノ「これによって私とお前のモンスターが入れ替わった。だがバトルフェイズになっても、TG - ストライカーは守備表示！バトルは行えない！」

カルタッグ「おもしれえじゃねえか。俺はこれでターンエンドだ！

(2)「

ブルーノ「私のターン！」(3)「

ブルーノ : SPC5

カルタッグ : SPC5

一方遊星は、すっかり遅くなってしまったと呟き、ユニオンとプラシドの言った事を思い返し、その意味深な発言について考えていた。もちろん、Dホイールに乗りながらであるが…。

ふと顔を右の方に向けると、ハイウェイから光が見えるのがわかった。

そこをよく見ると、「Duel lane」と書いてあるのが見えたので、誰かがデュエルをしているのかと思ったが、遊星もデュエリストなので、この時間帯に誰が一体どんなデュエルをしているのか気になり、帰路の途中だという事もあり、そちらの方にDホイールを進ませた。

遊星（一体誰なんだ？）

しばらく進むと、紫色の単輪のDホイールが見えた。その瞬間、遊星の脳裏には1人のDホイーラーの姿が浮かび上がった。

遊星（あのDホイール！…それにあのモンスター！まさか！）

ブルーノ「今度はこちらの番だ！私は手札からTG・ラッシュ・ライノを召喚！（2）」

TG・ラッシュ・ライノ BE-04

効果モンスター

レベル4/地属性/獣族/攻撃力1600/守備力800

このカードが攻撃する場合、ダメージステップの間このカードの攻

撃力は400ポイントアップする。このカードは、機械族としても扱う。機械族を対象にした自分の魔法・罠カードの効果はこのカードが受ける時、このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「TG ラッシュ・ライノ」1枚を手札に加える事ができる。

ブルーノ「ハイパーハンマーヘッドで、TG - ストライカーを攻撃！」

カルタツグ「ケツ。お前のモンスターなのに…容赦ねえな。」  
ブルーノ「安心しろ！TG - ストライカーは破壊されても、同名カードをデッキから手札に加えさせる！破壊されたのはお前の場だが、墓地で発動する効果だ。私の墓地に送られたため、デッキからTG - ストライカーを手札に加えるぞ。」(3)

攻撃の手を緩めないブルーノ。カルタツグは焦っている表情でもないため、ブルーノはまだ何かあると思いい、慎重にならざるを得ないが、ここは攻撃あるのみと言い聞かせ、

ブルーノ「TG - ラッシュ・ライノで、ダイレクトアタック！TG - ラッシュ・ライノは、相手に攻撃する場合、攻撃力が400ポイントアップする！」

カルタツグ「そう簡単にはいかせるかよ！永続罠発動！跳躍の風！」

跳躍の風

永続罠

？

カルタツグ「このカードは……！？」

ブルーノ「何だ!？」

その瞬間、2人の間に、一台の黒いDホイールが割って入ったのが確認できた。

そしてさらに2人が後ろを見ると、そこには、いくつもの黒い恐怖があるのだった。

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

TG - パワー・グラディエイター WAX - 1000

レベル5 / 地属性 / 戦士族 / 攻撃力2300 / 守備力1000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードの種族は機械族としても扱う。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

<次回の最強カード>

跳躍の風

永続罫

?

## 第16話 - 絶対的な自信を打ち砕くモノ

前に出た2台のDホイールはブルーノとカルタツグのDホイールの目の前に位置し、後ろの2台のDホイールはブルーノとカルタツグのDホイールの真後ろに位置した。

ブルーノ「ン!?」

カルタツグ「なんだこいつら!?!」

咄嗟の出来事に驚いたカルタツグは、加えていた煙草を落としてしまった。

ブルーノ「お前たちは、ゴースト!!!」

ゴースト×4「我々もデュエルに入れてもらおう!」

カルタツグ「邪魔すんじゃねえ!俺は今こいつとデュエルしてるんだよ!」

ゴーストA「そうはいかない。我々と強制的にデュエルしてもらう!バトルロイヤルモード・オン!」

ゴーストB「いくぞ!」

カルタツグ「ヘッ、面倒くせえ奴らだぜ。」

イリアステルの三皇帝はその様子を例のイスから見ていた。

ルチアーノ「キャーッハッハッ! プラシドがやられたってのにゴーストが勝てる訳ないじゃん!」

プラシド「黙れルチアーノ!これは遊星をおびき寄せるためのエサだ!」

ホセ「果たしてそううまくいくものか...?」

投げかけられた疑問に対し、ブラシドは舌打ちをしつつ答えた。

ブラシド「どういう意味だ、ホセ!？」

ホセ「…。」

ホセは特に言葉をかけず、唸ったままだった。

ゴーストA「私のターン!私はA・O・J ガラドホルグを召喚!」

A・O・J ガラドホルグ

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 機械族 / 攻撃力1600 / 守備力400

光属性モンスターと戦闘を行う場合、ダメージステップの間この力

ードの攻撃力は200ポイントアップする。

ゴーストA「私はこれで、ターンエンドだ!」

ゴーストB「私のターン!私は手札から、A・O・J サウザンド・

アームズを召喚!そして、A・O・J サウザンド・アームズで、

こうげ……………!？」

ブルーノ「ん!？」

カルタツグ「あ!？」

その瞬間、後方から、パッシングするDホイールが目に入った。ブルーノとカルタツグの後ろにいる2体のゴーストがそのDホイールを囲んだ。

ゴーストC「……不動遊星！」

遊星「お前たちは、ゴースト！」

ブルーノ「遊星！」

遊星「お前は、あの時の……！！！」

遊星からすると、この状態のブルーノはブルーノだとわからない。前に一度デュエルをしたことがあるのだが、それがブルーノである事は、遊星にはわからなかったのだ。

そもそも当時はメカニツクのブルーノとは知り合っていないのだが……。

カルタツグ（不動遊星……）

不気味な笑いを浮かべたカルタツグは、Dホイールの加速を落とし、遊星の隣にやってきた。

カルタツグから遊星に近寄ってきたのだが、声をかけたのは遊星が先だった。

遊星「お前は？」

カルタツグ「俺の名前はカルタツグ。俺は今人探しをしてんだ。なあお前、金髪のおっさん、知らねえか？茶色っぽいDホイールに乗ってるんだけど……。」

その事を聞いた瞬間、遊星の脳裏にはロゼラスの姿が浮かんだ。だが、遊星が少しでも表情を変えると、それを察したカルタツグが、再び気味悪く微笑んだ。

カルタツグ「知ってそうだなあ……。」

遊星「……。」

カルタツグ「ちなみに名前はユニイン……。」

遊星「ユニイン！お前は、奴の仲間…！？」

カルタツグ「ほう…。やっぱり知ってたか。とすると、お前はあいつと戦った後だな？」

遊星「あ…ああ。」

ブルーノ「ど、どういう事だ？遊星！」

ゴーストB「私のターンを続けさせてもらう！」

ブルーノ「チッ！」

人が話をしている最中に割り込んで来るなど言わんばかりに、ブルーノがデルタ・イーグルを思い切りゴーストのDホイールにぶつけた。

ゴーストB「のわっ！」

ゴーストBのDホイールが大きく後退し、A・O・J サウザンド・アームズと共に闇の彼方に消え去った。

カルタツグ「おいおい…デュエルしろよ…。じゃあ、不動遊星！俺とデュエルしな。」

遊星「なに？俺とデュエル？」

カルタツグ「おう。俺はユニインと会うはずだったんだが、お前のせいでユニインがいなくなっちゃったからな。その分だよ。」

遊星「くっ…。」

遊星（だが、もしこいつが次元統括者の仲間で、そいつに俺が勝てば、シンクロモンスターの未来の正しさを証明できるかもしれない。やるしかない。）

遊星「いいだろう。そのデュエル、受けて立つ！」

ブルーノ「遊星！ゴーストは私に任せろ！」

遊星「すまない。頼むぞ！」



カルタッグ「そうこなくつちな。」

そう言うと、カルタッグと遊星がゴースト集団に大差をつけて、離れていった。

カルタッグ「ちなみに、俺サマの名前はカルタッグってんだ。よろしくな、不動遊星！」

遊星「くっ……。いくぞ！カルタッグ！」

2人「デュエル！！」

不動遊星 : LP4000

VS

カルタッグ : LP4000

カルタッグ「さあ遊星！お前からでいいぜ！」

遊星「俺のターン！（6）俺は手札から、トライクラーを召喚！（5）ターンエンド！」

トライクラー : 守備力300

カルタツグ「オレサマのターン！（6）」（跳躍の風）

不動遊星　：SPC1

カルタツグ：SPC1

カルタツグ（跳躍の風か…さっきは結局使えず仕舞いだったからな…。）

カルタツグ「俺は手札から、ヒュージ・アントを召喚！」

ヒュージ・アント

効果モンスター

レベル4/地属性/昆虫族/攻撃力1500/守備力1400

自分フィールド上に存在する表側守備表示モンスター1体をリリースする。このカードはこのターン、相手プレイヤーに直接攻撃をする事ができる。

カルタツグ「ヒュージ・アントで、トライクラーを攻撃！」

ヒュージ・アントがトライクラーをひと思いに噛み砕いた。ソリット・ビジョンとはいえ、なかなか衝撃を与える光景であろう。

遊星「だが、トライクラーの効果で、デッキからヴィークラーを特殊召喚！」

ヴィークラー：守備力200

カルタツグ「また壁モンスターか。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」(4)

遊星「俺のターン！」(6)「

不動遊星 : S P C 2

カルタツグ : S P C 2

遊星「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」(5)「

妙に消極的な遊星を見たカルタツグは、手札があまり良くないのではないかと思つたが、遊星の表情からすれば、何かを企んでいるという事は、如実にわかる事だった。

カルタツグ「カードを1枚伏せただけ？それで何とかなるとでも？」  
遊星（俺が何かを企んでいるのはバレているだろう。だがそれが具体的に何なのか、奴にはわかるものか？）  
カルタツグ「俺のターン！」(5)「

不動遊星 : S P C 3

カルタツグ : S P C 3

カルタツグ「俺は手札から、バウンド・イーターを召喚！」

バウンド・イーター

効果モンスター

レベル2 / 闇属性 / 昆虫族 / 攻撃力1000 / 守備力1200

このカードをリリースする事で、相手フィールド上に表側表示で存

在するシンクロモンスター1体を持ち主のエクストラデッキに戻す。  
この効果は、このカードが召喚・特殊召喚に成功したターンには使  
用できない。

カルタツグ「さあて、そのヴィークラーを、バウンド・イーターで  
攻撃！」

遊星「ぐあつ。だが、ヴィークラーの効果で、アンサイクラーを特  
殊召喚！」

アンサイクラー

通常モンスター

レベル1/地属性/機械族/攻撃力1000/守備力1000

トライクラー、ヴィークラーを兄に持つ三男坊のアンサイクラー。

カルタツグ「だがこれで壁モンスターは一掃だ！さあ、いけ！ヒュ  
ージ・アント！」

遊星「そうはいかない！罨発動！くず鉄のかかし！」

発動した罨のイラストからボロボロになったかかしが現れ、ヒュー  
ジ・アントの攻撃を弾き返した。

だがあまり痛くないことの表れなのか、ヒュージ・アントは前足で  
頭をポリポリとかいていた。

カルタツグ「へっ。くず鉄のかかしじゃ、痛くもかゆくもねえみた  
いだぜ？」

遊星「たとしても、くず鉄のかかしは、発動を終えても、フィール  
ドに再セットされる罨カード！1ターンに1度、攻撃を止める事が  
できるぞー！」

カルタツグ「確かにそいつは厄介だけどな…。ターンエンド！(4)

「  
遊星「よし、アンサイクラーが残ったぞ。俺のターン！(5)」

不動遊星　：SPC4

カルタツグ：SPC4

遊星「俺は手札からチューナーモンスター、デブリ・ドラゴンを召喚！」

デブリ・ドラゴンが現れ、天を仰ぎつつ、雄たけびを上げる。小さい体ながら、ドラゴンはドラゴン。龍の仲間なのである。

遊星「デブリ・ドラゴンの召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚する！来い！トライクラー！」

トライクラー：レベル3

カルタツグ「なるほど。デブリ・ドラゴンのレベルは4で、トライクラーはレベル3、アンサイクラーはレベル1…お前の狙いは…。」  
遊星「そう。レベル3のトライクラーと、レベル1のアンサイクラーに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

集いし願いが、新たに輝く星となる。光射す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダスト・ドラゴン！

スターダスト・ドラゴン：攻撃力2500

光の輪となったデブリ・ドラゴンと、星となったトライクラー、アンサイクラーから更なる輝きが出でて、スターダスト・ドラゴンへとなった。いつもにも増して、スターダスト・ドラゴンが張り切っているようにも見える。

遊星「そうだ。俺はスターダスト・ドラゴンで、未来を切り開く！行け！スターダスト・ドラゴン！バウンド・イーターを攻撃！シューティング・ソニック！」

カルタツグ「ぐっ！」

カルタツグ：LP4000      LP2500

カルタツグ「チッ。デカいの、喰らっちゃった。」

遊星「よし。俺はこれで、ターンエンド！（4）」

一つの事柄が自分の思い通りになる毎に、「よし」と喜ぶ遊星を見たカルタツグは、「ハッ」と言っ...

カルタツグ「お前...ユニインに負けたんだな？」

遊星「な...!!」

カルタツグ「お前のデュエルを見てるとわかるぜ。焦ってるのがよ...。その焦りは、ユニインに負けたところから来てんだな...？」

遊星「くっ...。」

カルタツグ「図星のようだな。仕方ねえか、ユニインはつええからな。俺のターン！（5）俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

（4）

不動遊星      : S P C 4      6

カルタツグ：SPC4 6

遊星「お…俺のターン！（5）」

遊星は、自分の心臓に右手を当てた。心臓の「ドク…ドク…」という鼓動を、自分の手から感じ取った。そこから感じ取れるものは、鼓動以外にも、ユニインに敗北し、そこから来る焦燥感、ユニインというデュエリストに対する戦慄、そして自分たちの未来が破滅するのではないかという不安というものがあつた…。

だが右隣に走っているカルタツグの大型Dホイールを見ると、デュエルをしているという現実引き戻される。そう、今はデュエルをしている。カルタツグに勝たなくてはならないんだ。

今ドロしたカードを、震えている右手を心臓から離して、恐る恐る確認する…。

遊星（マックス・ウォリアー！よし、これなら！）

遊星「俺はマックス・ウォリアーを召喚！（4）」

マックス・ウォリアー

効果モンスター

レベル4 / 風属性 / 戦士族 / 攻撃力1800 / 守備力800

このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が400ポイントアップする。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、次の自分のスタンバイフェイズ時までこのカードのレベルは2になり、元々の攻撃力・守備力は半分になる。

遊星（伏せカードが2枚ある…。だが、大丈夫だ。万が一モンスターを破壊するような効果を持つカードだった場合、スターダスト・ドラゴンの効果を使えばそれを無効にできる！そうなった場合、このターンで決着は着けられないが、先ほどの奴のターンで、奴はモンスターを召喚しなかった。ならば次のターンでモンスターをドロ―されない限り、俺の勝利は確約されている！）

以上が遊星の心境である。

遊星はいつになくスターダスト・ドラゴンに絶対的な信頼を置いている。その訳は、ユニインとのデュエルで、スターダスト・ドラゴンが無残に散っていったから、それがたまたまであると、遊星が強く信じているからかもしれない。

カルタツグ（…。）

遊星「いくぞ！マックス・ウォリアーで、ヒュージ・アントを攻撃！スウィフト・ラッシュュ！」

カルタツグ「チツ。破壊されちまったか。」

マックス・ウォリアー：レベル2 / 攻撃力900

遊星「そしてスターダスト・ドラゴン、ダイレクトアタック！シューティング・ソニック！」

だが遊星には、カルタツグが気味悪く微笑んだのが見えた。

カルタツグ「その時を待っていたぜ！永続畏発動！跳躍の風！」



## 跳躍の風

永続罨

自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊されたターン、相手モンスターへの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。1ターンに1度だけ、モンスター1体の直接攻撃を無効にし、相手フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す事ができる。相手フィールド上に存在するモンスターがゲームから除外された場合、このカードを破壊する。

カルタツグ「この効果によって、スターダスト・ドラゴンの攻撃を無効にして、スターダスト・ドラゴンを手札に…エクストラデッキに戻すぜ！」

遊星「なんだと！？エクストラデッキに…！？」  
カルタツグ「確かにスターダスト・ドラゴンの効果は強力だぜ…。けどな、その効果には盲点がある。それは破壊効果にしか対応してねえってとこだよ！」

遊星「しまった…！」  
カルタツグ「さあ消えな！スターダスト・ドラゴン！」

跳躍の風によって、スターダスト・ドラゴンが吹き飛ばされてしまい、その姿は光の粒となって遊星のエクストラデッキに眠った。

遊星「スターダスト・ドラゴンが…。」  
カルタツグ「ぬるいんだよ。スターダスト・ドラゴンなんてな…。」

スターダストがフィールドを離れた瞬間、遊星はこのデュエルにも負けてしまうのではないかという焦りを覚えると同時に…

スターダスト・ドラゴンが、究極のモンスターには程遠い事も覚え  
た。

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

跳躍の風

永続罨

自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊された  
ターン、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動することができる。  
1ターンに1度だけ、モンスター1体の直接攻撃を無効にし、相手  
フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す事ができる。  
相手フィールド上に存在するモンスターがゲームから除外された場  
合、このカードを破壊する。

<次回の最強カード>

?

## 第17話・度重なるピンチの果てに…

不動遊星

- ・LP4000
- ・手札4枚
- ・（モンスター）マックス・ウォリアー（ATK900）
- ・（魔法・罫）1枚
- ・SPC6

カルタツグ

- ・LP2500
- ・手札4枚
- ・（モンスター）なし
- ・（魔法・罫）1枚／跳躍の風（ ）
- ・SPC6

遊星とカルタツグのDホイールが並んでいる時、Dホイールのエンジン音以外は、何一つ音が聞こえてこない。スターダスト・ドラゴンが跳躍の風で吹き飛ばされてしまったことは、遊星に、焦りと恐怖を垣間見させた。

カルタツグ「スターダストなんてな、ぬるいんだよ。」  
遊星「くっ…スターダストへの過信が、自分の足許を救ったという事なのか？」

カルタツグ「そういう事だ。」

遊星（……スターダスト・ドラゴンは、幾度となく俺のピンチを救ってくれた。それだけじゃない。アキのピンチを救ったのも、スターダスト・ドラゴン。それが……こうも簡単に……。）

いつになく遊星はスターダスト・ドラゴンがフィールドを離れた事に、焦りを覚えていた。

スターダスト・ドラゴンはそのモンスター効果によってカード効果による破壊を無効にできるため、そう都合良くはやられないだろうと、過信していたのだが、「手札に戻す」という盲点を突かれた事によって、遊星の希望は、間もなく絶望へと変わろうとしていた。

だがその時、遊星の右側から遊星を呼ぶ声がした。

そう、カルタツグである。

カルタツグ「おい！ターンエンドなのか!？」

遊星「あ……ああ。ターン、エンド。」

遊星の手札にはトラップカードがあったのだが、そのままターンを終了した。

カルタツグ「俺のターン！」（5）

不動遊星 ……SPC7

カルタツグ ……SPC7

カルタツグ「俺は手札から、istring・ハンターを攻撃表示で召喚！」

ストリング・ハンター：攻撃力1600

カルタツグ「マックス・ウォリアーを攻撃！ストリング・ウェーブ！」

ぼんやりしている遊星だが、ストリング・ハンターが迫っているのを目にし、我に返ると、トラップカードに手をかけた。

遊星「トラップ発動！くず鉄のかかし！」

カルタツグ「無駄だ！カウンター発動！ストレイン・ブレイク！」

ストレイン・ブレイク

カウンター罠

手札の罠カードを1枚墓地に送って発動する。フィールド上で効果を発動した罠カードの効果の発動を無効にし、それを破壊する。

カルタツグ「手札の罠カードを1枚捨てて、トラップの発動を無効にして破壊！（3）消える！くず鉄のかかし！」  
遊星「なんだと！？マックス・ウォリアー！！！」

不動遊星：LP4000 3300

カルタツグ「ストリング・ハンターのモンスター効果発動！相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、このカードの攻撃力は400ポイントアップする！」

ストリング・ハンター：攻撃力1600 攻撃力2000

カルタツグ「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」（1）

あの伏せられたカードも、自分のモンスターを手札に戻すカードなのではないかと、不安になる遊星だったが、自分にある選択肢はドロ以外ないと思い、デッキに手を延ばす。

遊星「俺のターン！」（5）

不動遊星：SPC8

カルタツグ：SPC8

遊星「俺はロード・ランナーを守備表示で召喚！カードを2枚伏せて、ターンエンド！」（2）

ロード・ランナー

効果モンスター

レベル1/地属性/鳥獣族/攻撃力300/守備力300

このカードは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない。

遊星「ロード・ランナーは、攻撃力1900以上のモンスターとの

戦闘では破壊されない！今、ストリング・ハンターの攻撃力はその効果によって2000までアップしている！これなら、ロード・ランナーを破壊する事はできないぞ！」

カルタツグ「へっ…オレサマの前で姑息な戦術は通用しないぜ！」

一方、ブルーノは、ゴースト5体とデュエルをしている。先ほどまでは3体だったが、増援として2体のゴーストが現れ、5体となったのだ。

ブルーノのフィールドには、TG・ワンダーマジシャンと、TG・パワー・グラディエイターが存在しており、ゴーストの内1体のタインであるようで、A・O・J アンリミッターの効果が発動したところである。

ブルーノ … LP 2400

ゴーストA … LP 4000

ゴーストB … LP 2300

ゴーストC … LP 1100

ゴーストD … LP 800

ゴーストE … LP 400

ゴーストE「フッ。A・O・J スパイラル・モーターは、このカード以外のA・O・Jが私のフィールドに存在し、相手のフィールド

ドに光属性モンスターがいる場合、直接攻撃をする事ができる！」

A・O・J スパイラル・モーター：攻撃力2400

ゴーストE「A・O・J アンリミッターの効果により、スパイラル・モーターの攻撃力は2倍となっている。これで終わりだ。」  
ブルーノ「畏発動！強制脱出装置！」

### 強制脱出装置

#### 通常畏

フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

ブルーノ「これでスパイラル・モーターを手札に戻すぞ！」  
ゴーストE「なんだと……。くっ、ターンエンド！」  
ブルーノ「私のターン！」（2）

ブルーノ：SPC8

ブルーノ「スピード・ワールド 2の効果発動！手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！」

ブルーノ：SPC4

ブルーノ「お前のライフは残り800だったな！終わりだ！」  
ゴーストD「なっ！ぐわあああああ！」



ゴーストD：LP800 LP0

ブルーノ「そしてもう一度、スピード・ワールド 2の効果を発動し、お前のライフは残り400だな！お前もここで終わりだ！」

ブルーノ：SPCO

ゴーストE「うわあああ！」

ゴーストE：LP400 LP0

ブルーノ「そして私はTG・パワー・グラディエイターで、ダイレクトアタック！マシンナイズ・スラッシュ！」

ゴーストB「うわあああ！」

ゴーストB：LP2300 LP0

ブルーノ「TG・ワンダーマジシャンで、ダイレクトアタック！マシンナイズ・ソーサリー！」

ゴーストC「うわあああ！」

ゴーストC：LP1100 LP0

快刀乱麻の如く、次々とゴーストを撃破していくブルーノ。1vs5の状況ながら、それを一気に1vs1に持っていく姿では、メカニックのブルーノと同一人物だと、想像できない程だろう。

プラシド「こ…こいつは一体何者だ…。」

ルチアーノ「プラシドよりかは弱いつて事だね！」

プラシド「くっ…。」

ブルーノ「私はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」(1)

~~~~~

カルタッグ「オレサマのターン！」(2)

不動遊星：SPC9

カルタッグ：SPC9

カルタッグ「俺は手札から、デブリボールを召喚！」(1)「

デブリボール

レベル2 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力1900

このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され、墓地へ送られた時、このカードを破壊したモンスターを手札に戻し、そのレベル×300ポイントのダメージを、相手に与える。

しかしデブリボールの体が青く光っておらず、表示されているのが攻撃力であるため、遊星はデブリボールが攻撃表示で召喚された事に気づく。

遊星「攻撃表示だと？」

カルタツグ「そして罠カード、ダイレクトストライクを発動！」

ダイレクトストライク

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するレベル3以下のモンスター1体を選択する。選択したモンスターの攻撃力は600ポイントアップし、このターンのみ、相手に直接攻撃する事ができる。この効果で攻撃力がアップしたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に破壊され、その守備力分のダメージを受ける。

カルタツグ「これでデブリボールはダイレクトアタックができるぜ。」

遊星「だが、ダイレクトアタックをしても、俺に与えられるダメージは600ポイント。しかしお前は、1900ポイントのダメージを受ける。割に合わないコンボだとは思わないのか？」

今の発言が、遊星の「プレイングミスによって、希望を掴んだ。」という思いを念押しするような発言であった事をすぐにわかったカルタツグは、ポケットから煙草を取り出し、ライターで火をつけ、一服吸ってから、ハッハッハッハッ！と天を仰いで笑い始めた。

遊星「なに？」

カルタツグ「へッ！とんだロマンチスト…じゃねえや。とんだオポチュニストだな！おめえは俺のタクティクスにビビってよ、このデユエル、負けるかもしれねえと思っただろ？そんなくらいお前を追いつめているこの俺が、ここでプレイングミスをやらかすはずねえだろ！」

自分の心が読まれているのではないかと思うくらい、遊星は更なる焦りを覚えた。

カルタツグ「いくぜ、バトル！デブリボールで、ダイレクトアタック！」

光り輝いているデブリボールが、遊星の所に飛んでくるが、突如強風がデブリボールを襲い、退けた。

遊星「なんだと？」

カルタツグ「そう驚くなよ。跳躍の風の効果だけ！モンスターのダイレクトアタックを無効にして、フィールドのモンスター1体を手札に戻す！」

遊星「な！？」

つまり、跳躍の風の、「モンスターのダイレクトアタック時」が、自分のモンスターでも可能という事であることを生かしたコンボである。こうなると、当然、手札に戻されるのは…

遊星「ロ…ロードランナー！？」

カルタツグ「さあ手札に戻してもらっせロードランナー。ロードランナーは攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘じゃ、破壊できねえからな。そしてさらにこの永続罠も発動させてもらっせ。永続

罨、バウンド・フォッグ！」

バウンド・フォッグ

永続罨

フィールド上のモンスターが手札に戻った時に発動する事ができる。相手フィールド上のモンスターが持ち主の手札に戻った時、相手に400ポイントのダメージを与える。

遊星「なにつ！ぐわっ！」（2 3）

不動遊星：LP3300 LP2900

「クエー」と叫びながらロードランナーが手札に戻ったのを見た遊星は、ストリング・ハンターが自分の元に突撃してくる事がわかった。

カルタッグ「壁モンスターは消え失せた。ストリング・ハンターで、ダイレクトアタック！」

遊星「ぐわああああッ！」

不動遊星：LP2900 LP900

カルタッグ「ストリング・ハンターの効果発動！さらに攻撃力が400ポイントアップするぜ！」

ストリング・ハンター：攻撃力2400

カルタツグ「そしてこれで止めた。スピード・ワールド 2の効果発動！手札のスピードスペル1枚につき、相手に800ポイントのダメージを与える！」

カルタツグ：SPC9 SPC5

カルタツグ「消え遊星！」

遊星「ぐわあああ！」

不動遊星：LP900 LP100

まだスピードカウンターが5つ残っているため、もう1度スピード・ワールド 2の効果を使用し、遊星を倒そうとしたところで遊星がトラップカードに手をかけた。

遊星「罠発動！ダメージ・イナクティブ！」

ダメージ・イナクティブ

通常罠

自分が効果ダメージを受けた時に発動する事ができる。次の自分のターンのエンドフェイズまで、自分が受ける全てのダメージを0にする。

遊星「これで、スピード・ワールド 2の効果をもう1回使っても、このターンは、俺の息の根を止める事はできないぞ！」  
カルタツグ「しぶてえな、遊星。だったら、Sp・モンスター・ブー  
ーストを発動！」

Sp・モンスター・ブースト

通常魔法

自分用スピードカウンターが5つ以上ある時に発動する事ができる。  
自分フィールド上のレベル4以下のモンスター1体を墓地に送り、  
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

カルタツグ「デブリボールを墓地に送り、カードをドロー！」(2)  
遊星「ここでデブリボールを墓地に送る事で、ダイレクトストライ  
クのダメージを無効にするのか。」

カルタツグ「そういう意味もあるが…さらに良いカードを引いたぜ。  
Sp・スピード・フォースを発動！」

Sp・スピード・フォース

通常魔法

自分用スピードカウンターが4つ以上ある時に発動する事ができる。  
次の自分のターンのスタンバイフェイズまで、自分フィールド上の  
カードは、相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されない。

カルタツグ「これでどうだ？何をどうやっても、お前は勝てねえん

だよ！カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（0）  
遊星（俺の手札は、3枚：ボルト・ヘッジホッグ、ロードランナー、ビッグ・ワン・ウォリアー。どうすればいい。次のターン、モンスターを壁モンスターを召喚し、凌ぐか…？いや、奴がスピードスペルを引いたら、そこで全て終わりだ。）

絶望の淵に立っている遊星に、誰かが声をかける。その声に、遊星が振り向くと…。

ブルーノ「遊星！まだ諦めるのは早いぞ！」

遊星「お前…！ゴーストは、倒したのか？」

ブルーノ「ああ。どうという事はなかった。」

すごい、と遊星が呟くと、カルタツグが一服してから、口を開いた。

カルタツグ「あ？お前か、どうした？俺らはまだデュエルしてるんだ。お前とのデュエルは、こいつのが終わったらにするから、待ってるよな。」

ブルーノ「いや、それはなさそうだ。」

カルタツグ「あん？」

僅かに微笑んだブルーノを見たバックミラーで見たカルタツグは、煙草をポイ捨てしてからそう聞いた。

ブルーノ「お前は遊星に敗北するだろうという事だ。」

遊星・カルタツグ「!？」

デュエルの状況がわかっていないのかと言わんばかりにアツハツハツハツ！と大笑いしだしたカルタツグは、口を大きく開けると同時にもう一本取り出した煙草を落としてしまった。



カルタツグ「とんだお笑い草だなあ！オレサマがこの状況で、負ける！？」

遊星「俺も、残念だが勝てる望みは薄いと思うんだ。」

ブルーノ「遊星、自信を持って！お前は、幾度となく困難に打ち勝ってきたのだろう！？」

なぜ知っているのかと思った遊星だったが、もはやそんな事は遊星にとってはどうでもよかった。

彼にはもう闘争心がほとんど残っていない。

遊星「だが、今回はダメなんだ。俺のデュエルでは、俺の切り札スターダスト・ドラゴンでは…。俺に、手は残されていないんだ。奴のコンボは…」

そこまで言ったところで、ブルーノが遊星の横に並んできて、「遊星！」と叫んだ。

ブルーノ「遊星。君の力はそんなものじゃない。」

遊星「お前…。」

ブルーノ「遊星、アクセルシンクロだ。」

遊星「アクセル…シンクロ…。」

その言葉により、遊星の脳裏にはその男、ブルーノとのデュエルが蘇った。

遊星「消…消えた！」

ブルーノ「遊星。君はスターダスト・ドラゴンの力では勝てないと言った。ならば、進化するしかない。遊星。アクセルシンクロをやり遂げるしかないぞ！」

遊星「くっ…。だが、俺はここで負けるわけにはいかない。やるしかないんだ。アクセルシンクロを…。」

ブルーノ「遊星。いいか、無心になるんだ。心に焦りがあれば、アクセルシンクロは間違いなく失敗する。」

2人が何を話しているのか、カルタツグからは聞こえないようだが、カルタツグにとってはそんな事はどうでも良く、とにかく早く決着をつけたかった。

カルタツグ「おいおい。どうでもいいけど、早くしな。何を考えようが、ドロ―はするんだぜ！」

遊星「ああ…待たせたな。ドロ―…。」(4)

不動遊星 ……SPC10

カルタツグ……SPC6

遊星「Sp…スピード・フォースの効果で、このターン、奴のフィールドのカードは破壊できない。ならば…スピード・ワールド 2の効果発動！スピードカウンターを7つ取り除き、デッキからカードを1枚ドロ―する！」(5)

不動遊星：SPC3

カルタツグ「さあ、望みどおりのカードは引けたかな？もつとも、このターン生き延びられるかっていうカードだな…。」

遊星「俺は、手札のモンスターカードを1枚、墓地に送る！俺は、ボルト・ヘッジホッグを墓地に送り、手札からチューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚！」（3）

クイック・シンクロン：攻撃力700

遊星「そしてフィールドにチューナーがいる場合、墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する！」

ボルト・ヘッジホッグ：攻撃力800

遊星「さらに俺は、手札のレベル1のモンスター、ロードランナーを墓地に送り、手札からビッグ・ワン・ウォリアーを特殊召喚！」

（1）

ビッグ・ワン・ウォリアー：レベル1

遊星「レベル1のビッグ・ワン・ウォリアーと、レベル2のボルト・ヘッジホッグに、レベル5のクイック・シンクロンをチューニング！」

集いし希望が、新たな地平へ誘う。光射す道となれ！シンクロ召喚！  
！駆け抜ける！ロード・ウォリアー！

ロード・ウォリアー

シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 戦士族 / 攻撃力3000 / 守備力1500

「ロード・シンクロン」+チューナー以外のモンスター2体以上  
1ターンに1度、自分のデッキからレベル2以下の戦士族または機  
械族モンスター1体を特殊召喚することができる。

遊星「俺はロード・ウォリアーの効果発動！ロード・コーリング！  
1ターンに1度、デッキからレベル2以下の戦士族または機械族モ  
ンスターを特殊召喚できる！来い！チューナーモンスター、モノ・  
シンクロン！」

モノ・シンクロン：レベル1

遊星「そして手札から、チューニング・サポーターを通常召喚！レ  
ベル1のチューニング・サポーターに、レベル1のモノ・シンクロ  
ンをチューニング！」

集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光射す道となれ！シンク  
ロ召喚！希望の力、シンクロチューナー！フォーミュラ・シンクロ

ン！

フォーミュラ・シンクロン：攻撃力200

カルタツグ「フォーミュラ・シンクロン？見たことないモンスターだな。それに、シンクロチューナーだと？」

遊星「チューニング・サポーターの効果発動！このカードがシンクロ素材となった時、デッキからカードを1枚ドローする！そしてもう1枚！フォーミュラ・シンクロンの効果で、デッキからカードを1枚ドローする！」（0 2）

カルタツグ「一気に2枚ドローだと？」

まるで機械のように、遊星は次々と動作を行っていく。さらに、カルタツグが驚いているのも無視し、トラップカードに手を掛けた。

遊星「畏発動！スター・シフト！自分フィールド上のシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、戻したモンスターと同じレベルを持ったモンスターを、自分のエクストラデッキから特殊召喚する！」

カルタツグ「同じレベルと言う事は…レベル8？まさか！？」

遊星「そうだ。レベル8のシンクロモンスター。今再び、俺に力を貸してくれ！スターダスト・ドラゴン！！」

紺色の空から、ロード・ウォリアーとバトンタッチするかのようになり、スターダスト・ドラゴンが舞い下りた。

カルタツグ「またやられに来たか。スターダスト・ドラゴン。」

遊星「これで…準備は整った。いくぞ！」

遊星のDホイールが、一気に加速し、そのタイヤからは、火花が飛び散っている。その横から、ブルーノは何も言わずに見ている。

だが、ブルーノには、ヘルメット越しに遊星が冷静でない、少なくとも、初めてのアクセルシンクロで、成功するか、失敗するか、それを考えて焦っているというのがわかった。

遊星「くっ…まだ、スピードの限界はッ！」

カルタツグ「おいおい…どこへ行くんだ？」

遊星「ア…アクセル…シンクロオオオオーツ！」

遊星の咆哮が、夜のハイウェイに轟いたものの、何も起こらなかった。フィールドにはスターダスト・ドラゴンと、フォーミュラ・シンクロンがいるのみ。

カルタツグ「おい遊星。こけおどしかよ。焦らすなよなあ…。」

遊星「くっ…。」

ブルーノ「アクセルシンクロに失敗したか。やはり、付け焼刃だったのか…。いや、それでも、フォーミュラ・シンクロンを召喚する事は成功したんだ。ならば、アクセルシンクロもできるハズだ。」

遊星「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（1）

カルタツグ「おいおい。もうおしまいなのかい？俺のターン！（1）

┌

不動遊星 : S P C 4

カルタツグ : S P C 7

カルタツグ「さあ遊星。これで終わりにしてやるよ。手札から、フライング・ワームを召喚！」（0）

フライング・ワーム

効果モンスター

レベル3 / 風属性 / 昆虫族 / 攻撃力800 / 守備力1200

このカードは相手に直接攻撃する事ができる。このカードが直接攻撃を宣言した場合、バトルフェイズ終了時に、このカードを破壊する。

カルタツグ「フライング・ワーム！遊星にとどめを刺せ！ダイレクトアタック！」

遊星「くっ…頼む。例えアクセルシンクロでなくとも…トラップ…発動！緊急同調！」

緊急同調

通常罫

このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する。

遊星「これにより、シンクロ召喚を行う！」

ブルーノ「なるほど。それなら！」

遊星「いくぞ！レベル8のスターダスト・ドラゴンに、レベル2のフォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

集いし星の結晶が、新たな進化の扉を開く。光射す道となれ！シン

クロ召喚！生来せよ！シューティング・スター・ドラゴン！

カルタツグ「な…！これは…！」

シューティング・スター・ドラゴン：攻撃力3300

（次回へ続く）

<今日の最強カード>

フォーミュラ・シンクロン

シンクロ/チューナー

レベル2/光属性/機械族/攻撃力2000/守備力1500

チューナー+チューナー以外のモンスター1体

1ターンに1度だけ、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

<次回の最強カード>

シューティング・スター・ドラゴン

アクセルシンクロモンスター

レベル10/風属性/ドラゴン族/攻撃力3300/守備力2500

「スターダスト・ドラゴン」+シンクロモンスターのチューナー1体

このカードのシンクロ召喚は、相手ターンでも行う事ができる。1

ターンに1度、自分のデッキの上からカードを5枚確認し、その中

のチューナーの数だけ、このカードは攻撃する事ができる。「フイ

ールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンス

ターの効果が発動した時、その発動を無効にし破壊する事ができる。

相手ターンに1度、このカードをゲームから除外する事で、相手モ

ンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。この効果を発動する

ために除外したこのカードは、この効果を適用したターンのエンド



フェイズ時に自分フィールド上に戻る。

第17話・度重なるピンチの果てに…（後書き）

アニメとは、シューティング・スター・ドラゴンを手に入れるきっかけが違いますが、そこは私が考えたものです。

ちなみに、ジャックのスカーレット・ノヴァ・ドラゴンは、そのまま同じ経緯で手に入れようかと思っています。

なお、アニメともOCGとも違う小説版の効果を持ったモンスターが登場しますが、よろしく願います。

## 第18話・生来せよ！シューティング・スター・ドラゴン！

### 不動遊星

- ・LP100
- ・手札1枚
- ・（モンスター）シューティング・スター・ドラゴン（ATK3300）
- ・（魔法・罫）なし
- ・SPC4

### カルタツグ

- ・LP2500
- ・手札0枚
- ・（モンスター）ストリング・ハンター（ATK2400）/フライング・ワーム（ATK800）
- ・（魔法・罫）跳躍の風（）/バウンド・フォッグ（）/1枚
- ・SPC7

シューティング・スター・ドラゴン：攻撃力3300

遊星「…来てくれたか。シューティング・スター・ドラゴン。」

アクセルシンクロでは召喚する事ができなかったシューティング・スター・ドラゴンを、緊急同調の効果で、特殊召喚した遊星の額が汗でぬれている事は、ヘルメット越しであつてもわかった。

ブルーノ「…。」

カルタツグ「だが、フライング・ワームは直接攻撃ができるモンスター。ダイレクトアタックで、決着をつける！うおおおお！」

遊星「シューティング・スター・ドラゴンの、効果発動！相手ターンに1度だけ、このカードを除外し、攻撃を無効にする事ができる！」

カルタツグ「なんだと!？」

シューティング・スター・ドラゴンがフィールドを離れて、光の粒となった。するとフライング・ワームは何か弾かれ、カルタツグのDホイールの前に戻った。

遊星「そして、跳躍の風の効果で、フィールドのモンスターが除外された時、破壊されるんだっただな！」

カルタツグ「な!なんだと!?!俺の、跳躍の風があっ!」

跳躍の風には、モンスターが除外された時に破壊されてしまうというデメリットを持っている。

その効果により、ようやく跳躍の風はフィールドから消えた。

カルタツグ「だが遊星!これでお前のフィールドはガラ空き!終わりだ!ストリング・ハンターで、ダイレクトアタック!ストリング・ウェーブ!」

遊星「俺は手札の、ジャンク・ディフェンダーの、効果発動!このカードは、相手が直接攻撃を宣言してきた時に、手札から特殊召喚する事ができる!」

ジャンク・ディフェンダー：守備力1800

カルタツグ「なに！？構わねえ！やれえっ！」

遊星「くっ！」（0）

ブルーノ「何とかこのターンは凌いだようだな、遊星。」

カルタツグ「スピードカウンターは…残しておくか。スピード・ワールド 2 のダメージ効果が発動できるかもしれねえからな。俺はこれで、ターンエンド！」（0）

遊星「このエンドフェイズ、シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！シューティング・スター・ドラゴンは、自身の効果で除外している場合、エンドフェイズにフィールドに特殊召喚される！」  
カルタツグ「な…なんだと？だがここで畏発動！チェーンソー・シールド！」

チェーンソー・シールド

通常畏

フィールドのモンスターが除外されたターンに発動する事ができる。このカードは発動後装備カードとなり、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。装備モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、装備モンスターは1ターンに3度まで、戦闘では破壊されない。

カルタツグ「これで、ストリング・ハンターの攻撃力は2900になり、1ターンに3度まで、戦闘では破壊されない！これで凌いでおめえに止めを刺すスピードスペルを引き当てやるぜ！さらにフライング・ワームの効果で、フライング・ワームは破壊される！」  
遊星「俺の…ターン！（1）」

不動遊星　：SPC5  
カルタツグ：SPC8

遊星のフィールドにはシューティング・スター・ドラゴンがいるのみで、手札は1枚、「ガントレット・ウォリアー」があるのみ。次のカルタツグのターンで、万が一スピードスペルをひかれた場合、遊星のライフは、スピード・ワールド　2の効果で0になってしまう。

だが、風と1つになって手に入れた、自分の気持ちに伝えてくれたシューティング・スター・ドラゴンを裏切る訳にはいかなかった。

遊星は、シューティング・スター・ドラゴンのテキストを読み、自分のデッキの一番上に、指をかけた。

遊星「俺は、シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！自分のデッキの一番上からカードを5枚めくり、めくった中にあるチューナーモンスターの数だけ、このカードは攻撃する事ができる！」  
カルタツグ「シューティング・スター・ドラゴンの効果は複数回攻撃か…それも運頼みだが…。」  
遊星「頼む。みんな…力を貸してくれ…。」

もうそろそろ朝になるというところで、遊星は皆に力を貸してほしいと願う。

遊星達の絆の象徴…そう、赤き竜の痣を見ながら、遊星は仲間たちを信じた。

遊星のガレージでは、早起きのクロウが水道水を飲みながら腕の痣が光っているのがわかった。

クロウ「遊星！…ジャック！ジャック！起きろよ！」

ジャック「何だクロウ…？まだ5時だぞ…。…これは、赤き龍の痣！遊星が、戦っているのか！」

同じように、アキ、龍可も、それを感じ取っていた。

アキ「遊星…。頑張つて。」

龍可「龍可、これつて…。」

龍可「うん。遊星が戦っているんだわ。」

遊星「まず1枚目！チューナーモンスター、ターボ・シンクロン！そして2枚目！チューナーモンスター、デブリ・ドラゴン！3枚目！チューナーモンスター、ロード・シンクロン！4枚目！チューナーモンスター、エフェクト・ヴェーラー！」

鬼神のようなドロで、次々とチューナーを引き当てる遊星を見たカルタツグは、さすがに驚いている。カルタツグの開いた口は、当分塞がりそうにない。

カルタツグ「な…なんだ、コイツは…！？」

遊星「そして5枚目！チューナーモンスター、ハイパー・シンクロン！」

遊星の背中に集まった赤き龍の痣が繋がり、シューティング・スター・ドラゴンが、天を仰いで咆哮をあげる。朝日を背にしながら…。

ブルーノ「これが、赤き竜の力…。」

カルタツグ「な…なんだと…!?!?」

遊星「いくぞ! シューティング・スター・ドラゴンで、ストリング・ハンターを攻撃!」

シューティング・スター・ドラゴンが、5つに分かれ、その分身がストリング・ハンターを攻撃する。

カルタツグ「ぐわあああ!」

カルタツグ：LP 2500      LP 2100

遊星「2回目の攻撃!」

カルタツグ「ぐううう! だがチェーンソー・シールドの効果で、破壊されない!」

カルタツグ：LP 2100      LP 1700

遊星「3回目の攻撃!」

カルタツグ「どわああ! だが、1ターンに3度までは、戦闘では破壊されない!」

カルタツグ：LP 1700      LP 1300



遊星「4回目の攻撃！」  
カルタツグ「チッ！」

カルタツグ：LP1300    LP900

とうとうチェンソー・シールドと共にストリング・ハンターが破壊され、残る攻撃目標は、カルタツグ自身のみとなった。

カルタツグ「くっ…！」

遊星「いくぞ！最後の攻撃！シューティング・スター・ドラゴン！スターダスト・ミラージュ！」

カルタツグ「ぐわああああ…！！！！バカな！この俺が！こちらの世界の人間に…！」

カルタツグ：LP900    LP0

しかしそこで突然謎の光が見え、カルタツグのDホイールが爆発した。

遊星「なに！？」

ブルーノ「カルタツグ…！」

すでにカルタツグのDホイールを抜かしていた遊星とブルーノは、Uターンし、Dホイールが爆発した方へ進んだ。

遊星「カルタツグ！」

しかし煙がはけたところに目をやると、そこには何もなかった。カルタッグのDホイールも、カルタッグ自身も……

遊星「……どういう事だ。まさか……」

ブルーノ「いや、おそらく逃げたのだろう。シューティング・スター・ドラゴンの攻撃で、爆発が起きたとは思えない。」

遊星「……」

その言葉を聞くと、遊星はサングラスのブルーノを見て、1つ尋ねた。

遊星「あんたは、一体何者なんだ？俺の味方、いや、チーム5D、Sの味方なのか！？」

ブルーノ「私はただ、平和を願う1人の市民……とでも言うっておこう。」

遊星「……？」

意味深な発言を最後に、ブルーノは自身のDホイールで颯爽とハイウェイを駆け抜けていった。

遊星「……」

その様子を見ていたイリアステルの三皇帝は、沈黙していたものの、ルチアーノがまず口を開いた。

ルチアーノ「キャーッハッハッハッ！プラシドお！お前なんか目じゃないね！」

プラシド「黙れ！奴も不動遊星も、この俺が倒す！ルチアーノ、ホセ！お前たちの出番はないぞ！」

ホセ「そつだといいがな…。」

ブラシド「なに？どついう意味だ！？」

ホセ「…。」

ブラシド「おい、聞いているのかホセ！」

~~~~~

龍亞「遊星！」

午後4時、デュエルアカデミアが終わつた頃なのか、遊星のガレージに、龍亞と龍可がノックもなしに入つてきた。

遊星「龍亞、龍可。どつしたんだ？」

龍亞「遊星遊星！あのさー！」

龍可「…。」

龍亞「あのさあのさ…！…！…！あのさあのさ！」

興奮しているせいか、「あのさ」としか言わない龍亞に、龍可の顔がしかめっ面になつたのを見た遊星は、内容を察したのか、「赤き竜の痣が、光つたのか？」と聞いた。

すると龍亞も龍可も、「あつ」と言うが、疑問を先に投げかけたのは、龍亞だつた。

龍亞「どつしてそれを知つてるの！？」

遊星「俺が、デュエルをしていたからな。」

龍可「そつだつたの！」

龍亞「それで、勝つたの！？」

遊星「ああ。相手はかなり強かつたが…それに俺は…」

と言ったところで、遊星の背後からブルーノの「わあっ！」という声と皿を割った「ガシャーン」という音が聞こえた。

龍亞「ブ…ブルーノ？」

龍可「またお皿割ったの〜！？もう〜。」

ブルーノ「ご…ごめん。」

ジャック「貴様…。お皿1枚買うのにも、金がかかるのだぞ！」

クロウ「お前が言えるセリフじゃねえだろうが！」

アキ「みんな！こんにちは！」

遊星「アキ。すまない。ごちゃごちゃしていて。」

アキ「もう、慣れてるわ。にぎやかなのも、好きになってきたし。」

アキは、皮肉で言っているのではない。それは目を見ればわかる事だった。アキには、遊星たちに対して恩がある。自分の心を救ってくれた。サイコデュエリストである自分の心を、救ってくれたのだ。そんな遊星に対し、アキの心は自然と、傾いていた。

アキ「あの…遊星。」

遊星「ん？どうした、アキ？」

しかしこういう時に限って、空気も読めずに誰かがやってきたりするもの。

ガレージの扉が開いている事に気が付いた人物が、「遊星！」という声を上げた。

アキ「え…？」

遊星「？」

？「よう。久しぶりだな。」

遊星「お前は…雑賀！」

雑賀という男は、旧サテライトで、情報収集や電気系統直しなどを  
して、なんでも屋をやっている男である。サテライトがシティと統  
一された後も、相変わらずなんでも屋をやっているそうだ。

最近ではWRGPで忙しかったため、遊星達は雑賀どころか、雑賀が住ん  
でいるマーサハウスにすら行っていないという事を、雑賀を目の当  
たりにして、遊星は再認識した。

遊星「最近は、顔を出す事もできなくてすまない。」

雑賀「いや、お前らも忙しいってのは、俺だってわかっているさ。」

遊星「どうしたんだ？わざわざガレージに来てもらって。」

ブルーノ「お…お客さん？」

初対面であるブルーノは、雑賀に対して、指5本で指しながら、遊  
星に聞いた。

遊星「ああ、紹介しよう。雑賀、ブルーノだ。チーム5D・Sのメ  
カニックを…」

と言いかけたところで、雑賀が遮って答えた。

雑賀「知ってるさ。お前らはチーム5D・Sは、かなり有名になっ  
てきているからな。チームメイトの顔と名前は知っているさ。」

ブルーノ「ああっ。どうも。性格には、大好きブルーノちゃん、な  
んだけどね。」

ジャック「…。」

ブルーノ「痛っ！ジャック！暴力反対！」

何があつたのかは、大体察しがつくと思う。

雑賀「今日ここに来たのはな、実は紹介したい人がいて…。」  
遊星「紹介したい人…？」  
？「俺の事だ。」

と言ってガレージに入ってきた人物は、ジャックと同じくらいの背の高さで、黒いチノパンに白をベースとした柄シャツ、その上に赤と黒のチェックの上着を羽織っていた。チツクな雰囲気を漂わせる。

マクラレーン「俺の名前はマクラレーン。チーム5D・sにとつちやあ、初めましてだな。」

遊星「ああ…よろしくな。」

2人は握手を交わし、挨拶を終え、「早速重い話で申し訳ない。時間がないもので」と言って、マクラレーンは切り出した。

マクラレーン「お前らのうち5人…赤き竜の痣というものを…持っているんだな？」

アキ「赤き竜の痣!？」

龍可「それを、知ってるなんて!？」

龍亞「でもさ、フォーチュンカップで遊星とジャックが戦った時には赤き竜が出てきたじゃん。知ってても珍しくないんじゃないの？」

ジャック「いや、赤き竜を見たものはたくさんいるが、赤き竜の痣が、俺たちの腕にある事を知っている者は、そう多くはないだろう。」

「  
と言って、ジャックは腕にある赤き竜の痣を、マクラレーンに見せた。」

マクラレーン「思ったよりも簡単に見せてくれるんだな。てつきり警戒したかと思っただが…」

遊星「いや、雑賀が連れてきた人だ。それはないと思ったんだ。」  
雑賀「へへっ、嬉しいこと言うなよ遊星。マクラーレンは俺と同じ情報屋でな。裏の社会を回りに回っていて、情報売って、生計を立ててるんだとよ。ある日いきなり、俺の家に電話をかけてきて、チーム5D・sに会えないものかって、な。」  
龍可「私たちに…?」  
雑賀「しかしお前たちの事情は、地縛神と戦った時からよくわかっている。そういうお前らに、またいつ刺客が来るかわからねえから、マクラーレンには理由を聞いたんだ。」

遊星「なるほど。その理由が…」  
クロウ「赤き竜の痣だったって訳か。」  
マクラーレン「いいや、そうじゃない。」

チーム5D・sのメンバーは一斉にマクラーレンの方を見て、えっ？と言った。

雑賀「シグナーであるお前たちに、新たなる脅威が迫っている事を教えようと思っただけらしい。」

遊星「新たなる…脅威?」

龍可「イリアステルの事かな?」

マクラーレン「いいや、違う。イリアステルよりも、恐らく恐ろしいものだ。」

心当たりがあった遊星は、目を見開き、その心当たりの名前を口にした。

遊星「次元統括者か…?」

アキ「ああ。この前言ってた…」

マクラーレンは一瞬動揺したようだったが、彼は首をゆっくり横に振った。

マクラーレン「これは正確に言えば組織名とかではないんだが……。」「クロウ」組織とかじゃないのかよ？」

マクラーレン「ヒドウンシリーズだ。」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

シューティング・スター・ドラゴン

アクセルシンクロモンスター

レベル10/風属性/ドラゴン族/攻撃力3300/守備力2500

シンクロモンスターのチューナー1体+「スターダスト・ドラゴン」

このカードのシンクロ召喚は、相手ターンでも行う事ができる。1ターンに1度、自分のデッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーの数だけ、このカードは攻撃する事ができる。「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罫・効果モンスターの効果が発動した時、その発動を無効にし破壊する事ができる。相手ターンに1度、このカードをゲームから除外する事で、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。この効果を発動するために除外したこのカードは、この効果を適用したターンのエンドフェイズ時に自分フィールド上に戻る。

<次回の最強カード>



ダブル・ホーンズ・ドラゴン  
シンクロモンスター  
?

## 第19話・ヒドウンシリーズ

マクラーレン「ヒドウンシリーズだ。」

遊星「ヒドウンシリーズ？」

ジャック「なんだそれは？」

マクラーレン「名前の通り、秘伝のシリーズ。カードのカテゴリだ  
と思ってくればいい。」

龍亞「なんだか強そうなカードたちに聞こえるね。」

マクラーレン「ああ。確かに強力なカードを持つものは多い……。だ  
が……」

と言って、マクラーレンは顎に指を掛け、しばらくの間をおいた。

マクラーレン「それらは、いわゆる、闇のカードなんだ。」

アキ「闇のカード!？」

クロウ「またかよ!もう飽きたぜ……。」

マクラーレン「この闇のカードは、インダストリアル・イリュージ  
ョン社のペガサス会長が作り出したものだった。」

その言葉を聞いた瞬間、闇のカードの騒ぎに飽き飽きしていたクロ  
ウとジャックの視線が、マクラーレンに注がれた。無論、他の人た  
ちも、驚いてはいたが。

ジャック「なんだと!？」

ブルーノ「ペガサス会長つて、デュエルモンスターの生みの親の  
……。」

マクラーレン「ああ。ペガサス会長も、そのつもりはなかったそう

だ。ペガサス会長はただ単に、強力な効果を持ったカードを数枚作成し、世界中の宝のようなカードにしようとした…。だが…」

マクラーレンがしばらく黙ったので、「だが？」と、アキが聞き返すと…

マクラーレン「だが、そのカードは、闇の力を持つカードだったんだ。」

ジャック「なぜだ？」

マクラーレン「その理由は不明だが、一説によれば、世界に1枚しかないカード群だから、らしいが…。」

クロウ「それで、そのヒドウンシリーズが危ないってのか？」

マクラーレン「そう。今は世界のあちこちに封印されていると聞く…。」

龍亞「全部で何枚あるの？100枚、1000枚、10000枚！？」

興奮しながら聞く龍亞を見た龍可は、またしても呆れた。日常では、龍亞の事を、ドジで、見切り発車だと思っっている龍可だが、いざと言う時には、頼れる兄として、思っているのだった。

マクラーレン「全部で14枚だ。」

龍亞「14枚！？少ないじゃん！」

少々残念がっている龍亞を見たマクラーレンは、手で髪を弄った。

マクラーレン「なぜ14枚か…わかるか？」

龍亞「え？そんな事言われても…。」

遊星「全ての種類のカードに1枚ずつ…だな？」

マクラーレン「さすがは遊星だな。」

龍亞「全ての種類のカードに1枚ずつ…?」

龍亞の疑問に、マクラーレンは長々と説明を始めたが、簡単に言うなれば…全ての種類というのは…

通常モンスター、効果モンスター、融合モンスター、儀式モンスター、シンクロモンスター

通常魔法、装備魔法、永続魔法、速攻魔法、儀式魔法、フィールド魔法

通常罫、永続罫、カウンター罫

という事で、これに1枚ずつ、つまり全てを合わせて14枚なんだそうだ。

マクラーレン「まだ隠されたヒドウンシリーズがある事は目に見えているが…恐ろしい効果を持ってしていると聞く…。」

クロウ「わざわざ忠告してくれたって訳か、ありがとよ!でも、心配はいらないぜ!俺たちはどんなカードが来ようとも、絶対に勝つて見せるんだからな!」

自信たっぷりに言うクロウ。あながち、有難迷惑だと言わんばかりの物言いに聞こえなくもないと感じたマクラーレンは、鼻で軽く笑った。

マクラーレン「お前、俺の言いたいことがそれだけだと思っているのか?」

クロウ「なに?」

マクラーレン「全てのヒドウンシリーズを集め、世界中のどこかに存在すると言われる地下神殿というところに行き、その石板にカードを収めると…世界が破滅するらしい。」

龍亞「なんだって!？」

クロウ「おいおい冗談はやめてくれよ。世界が破滅するって、あまりにも抽象的すぎるだろ!」

しかしマクラーレンは、目を閉じて首を横に振った。

マクラーレン「いやいや俺も、ヒドウンシリーズの事を教えてくれた人から、こうとしか聞かされていないんだ。」

遊星「ヒドウンシリーズの事を教えた人…。」

マクラーレン「そこで、お前たちがヒドウンシリーズを持つデュエリストと戦う時、そのデュエリストに勝って、ヒドウンシリーズを回収して欲しい!」

龍可「ヒドウンシリーズを探せって事?」

マクラーレン「そうじゃない。あくまでヒドウンシリーズを持つデュエリストと戦ったら…だ。」

ブルーノ「でも、どのカードがヒドウンシリーズかなんてわからないよ。」

マクラーレン「そう言われると思って、コイツを持ってきた。」

彼はズボンのポケットから、約5cm四方の黒い物体を取り出した。

遊星「これは…?」

マクラーレンは遊星にその物体を手渡すと、「ノートパソコンを開くように、開けてみてくれ」と言う。遊星は折りたたまれたものを展開するような感じで開けると…

遊星「ポケットコンピュータか？」

ジャック「カードデータベース？」

マクラーレン「そう。インダストリアルイリユージョン社に許可を頂いた。DDデュエルモンスターズ・データベースというもので、このコンピュータを使えばあらゆるカードを検索できる。」

遊星「という事は、ここに引つかからなかったカードは…」

マクラーレン「それはヒドウンシリーズである可能性が高い。」

アキ「可能性が高いって…確実にやないの？」

マクラーレン「いや、お前たちが知っているカードの中にも、このDDには検索できないカードもある。」

遊星「なんだと？」

マクラーレン「地縛神を倒し、ダークシグナーの危機から平和を救ったカードと言われている、セイヴァー・スター・ドラゴン。」

遊星「…。」

キーボードでセイヴァー・スター・ドラゴンと打ちこんで検索してみても、検索ヒット数は0となっている。

ジャック「これではよくわからないではないか！」

マクラーレン「だが、これで、ヒドウンシリーズでなくとも、普通ではないカードを認識する事ができるようになった。」

遊星「ああ。すまない。」

マクラーレン「じゃあ、今日のところは俺はこれで失礼する。WR

GP、頑張ってくれよな。」

雑賀「俺もこれで帰るぜ。じゃあ、みんな。頑張れよ…。」

そう言つて、2人ともガレージを後にした。

龍亞「なんだかともない事になっちゃったね。」

遊星「ああ。だが、まずは奴らを…イリアステルを…倒さなくては

…。」  
アキ「でも、ヒドウンシリーズも探さないと、いけないのよね。」  
ジャック「ヒドウンシリーズは世界中に散らばっているのなら、カードコレクターなどが目を光らせて狙っているかもしれない。」  
龍可「あるいは他のデュエリストの手に渡ったところを横取りしようって作戦もあり得るわ。」

ブルーノ「誰か知り合いにカードコレクターでもいればなあ…。」

皆がうーんと首をかしげて考えていると、ガレージの扉からノックする音が聞こえた。

押し売りを断るのはクロウの仕事、ノックに答えるのは、クロウだった。

クロウ「マクラーレンか？忘れ物でもしたのか？」

クロウが扉を開けると、そこに立っていたのは、奇抜な衣装を身にまとった、ストームだった。

ストーム「よう。みんな！」

アキ「ストーム！」

ストーム「突然でわりいが、今日は、宣伝しに来たのさ！」

と言って、ストームが宣伝を始めると、龍亞が「そうだ！」と言って、自分の手をポンと叩いた。

ストーム「な…なんだ龍亞？人の話は最後まで聞け！」

龍亞「ストームって、カードコレクター！？」

遊星・ジャック・クロウ「おい、龍亞！」

唐突な質問に、ストームが戸惑うかと思った遊星たちだったが、ス

トームはむしろ困惑した表情は見せず、笑顔を見せてくれた。

ストーム「ああ！そうだぜ！俺は結構なカードコレクターでな……。」「  
龍亞「やっぱり！」

龍可「へえ〜。」

ストーム「世界で5本の指には入るカードコレクターさ！」

クロウ「自分で言うなよ。」

ジャック「だったら早速聞くんが……」

ストーム「待て！俺の話が先だろうがー！」

ジャック「貴様の話は後だ！大事な話なのだ！」

ストーム「なんだと！俺からこのガレージに入ってきたんだぞーっ  
！」

ジャック「俺のターンだ！」

ストーム「いいや、俺のターンだ！」

2人のやりとりを見ているチーム5D・Sのメンバーの顔は、いつの間にか笑顔になっている。

ジャック「な…なんだ貴様ら。」

クロウ「漫才やるにはいいコンビじゃねえか。」

ジャック「なんだと！クロウ！貴様っ！」

ストーム「へっ！俺のターンはもらったぜ！」

ジャック「チッ！」

ストーム「明日、俺のWRGPシングル戦をやるんだ。是非、俺が勝つところを見に来てくれよ！」

遊星「ああ。それなら知ってるぞ。」

その台詞に、呆気にとられたストーム。彼は思わず「ヘッ？」という言葉を発してしまった。



遊星「WRGPのホームページを見てトーナメント表をチェックしておいたからな。」

ストーム「シングル戦も!? 遊星。さすがだぜ〜!」

ブルーノ「いや、シングル戦は、チーム戦の横に書いてあるからさあ…。見えたって言うか。」

アキ「ブルーノ。そういう事は言わないの。」

ストーム「ううう…。お前ら、誰か個人戦には出ないのか?」

ジャック「俺たちは出ないな。キッズ戦に出る奴がいるからな。」

と言って、ジャックは龍亞のいる後方へ親指を立てて、彼を指した。

龍亞「そうそう! オレ!」

龍可「もう、龍亞。無理言っただけで出場させてもらったんだからね!」

チーム戦に既に参加しているメンバーについては、個人戦がキッズ戦のうちいずれか1つに1人のみが参加可能となっているので、龍亞1人がキッズ戦に参加しているのだ。

遊星「それで、どうしてお前がカードコレクターなのかを聞いたのには、理由があつて。」

ストーム「理由だと?」

ジャック「お前、ヒドウンシリーズというものを知っているか?」

ストーム「ヒドウンシリーズ…だと?」

その言葉を聞いた瞬間、ストームの明るい雰囲気、トーンダウンしたのが、明白にわかった。

ジャック「知っているんだな?」

ストーム「知っているも何も…1枚持つてるからな。」

遊星「なんだって!？」

ストーム「じゃあ、証拠を…」

と言って、デッキケースからそのヒドウンシリーズを出しかけたところで、手を止めたストーム。

ストーム「やっぱりやめだ。よし、龍亞。デュエルしよう。」

龍亞「俺!？」

ストーム「キッズ戦も個人戦の一種だ。って事は俺と同じラインにいる。だから勝負だ!」

龍亞「…何だかよくわからないけど、やるぞ!」

アキ「どういう事?いきなりデュエルって…」

ストーム「わからんか?このデュエルで、ヒドウンシリーズを俺に召喚させることができれば、ヒドウンシリーズを見れるのさ。」

遊星「なに?」

龍亞「そんな!」

ストーム「まあ、俺は真剣に勝負する。明らかにヒドウンシリーズを出そうとしたりなんてことはしない。必要になって、場にカードが揃っているなら、使ってやる。」

龍亞「じゃあヒドウンシリーズを見れないでデュエルが終わっちゃうこともあり得るじゃん!」

ストーム「そういうこつた!…だが…」

アキ「…?」

ストーム「お前は俺にヒドウンシリーズを出させようだなんてことは、思わない事だ。真剣にデュエルしろよ。」

龍亞「そ…そんなのわかってるさ!」

ストーム「だつたらいいんだけどな…」

そう言つて、2人はデュエルディスクをセットし、デッキをシャッフルし、手札を5枚持ち、構えた。

2人「デュエル！」

ストーム：LP4000

VS

龍亞　　：LP4000

龍亞「ストームのデッキはドラゴンデッキかあ、強そう。俺のターン！（6）俺は手札から、D・ボードンを守備表示で召喚！」

D・ボードン

効果モンスター

レベル3 / 地属性 / 機械族 / 攻撃力500 / 守備力1800

このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

・攻撃表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「D」と名のついたモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃することができる。

・守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の「D」と

名のついたモンスターは戦闘では破壊されない。

龍亞「ターンエンド！」(5)

龍亞(守備力1800なら、そう簡単には超えられないぞ。)

ストーム「俺のターン！」(6)俺は手札から、アックス・ドラゴニユートを召喚！」

アックス・ドラゴニユート

効果モンスター

レベル4/闇属性/ドラゴン族/攻撃力2000/守備力1200  
このカードは攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示となる。

ストーム「さらに俺は手札から、マグネドラゴを特殊召喚！」

マグネドラゴ

チューナー/効果モンスター

レベル1/地属性/ドラゴン族/攻撃力400/守備力1200  
自分フィールド上にレベル4のモンスターが召喚された時、手札からこのカードを特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚された時、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体のレベルを1つ下げる。また、このカードが表側表示で存在する限り、自分は攻撃する事ができない。

ストーム「こいつの効果で、アックス・ドラゴニユートはレベル3になったぞ。いくぞ！レベル3のアックス・ドラゴニユートに、レベル1のマグネドラゴをチューニング！」

金色の双角を持ちし竜よ、驕れる輩を、その力を持って葬り去るがいい！シンクロ召喚！槍殺せよ！ダブル・ホーンズ・ドラゴン！

ボデイは白。角は金色。顎髭を持ち、青い瞳も持つ、と言った具合に、気高い風格を持つ竜である。とてもレベル4で攻撃力2300とは思えない。その姿に、龍亞は戦慄を覚えたが…

ストーム「いけ！ダブル・ホーンズ・ドラゴン！ダブル・ホーンズ・ドライブ！」

龍亞「うわああああ！ポードン！」

ストーム「どうだ！！」

龍亞「でも攻撃力2300なら、倒してみせるぜ！」

ストーム「ほう…：そうかい。だったら、倒してもらおうじゃないの！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」（3）

龍亞「俺のターン！（6）」

ジャック「大丈夫なのか、龍亞は…？」

遊星「いや、大丈夫だ。龍亞は、龍可を守る事を通じ、デュエリストとしてもまた、強くなってきたに違いない。」

龍亞はつつい調子に乗ってしまう所があるため、デュエルタクテクイクスについても、不安がられているところもある。

龍亞「いくぜ！俺はD・スコープンを攻撃表示で召喚！」

D・スコープン：攻撃力800

龍亞「攻撃表示のスコープンは、手札のディフォーマーを特殊召喚できる効果を持つ！来い！D・ビデオン！」

D・ビデオン：レベル4

龍亞「レベル4のビデオンに、レベル3のスコープンをチューニング！」（4）

世界の平和を守るため、勇気と力をドッキング。シンクロ召喚！愛と正義の使者、パワー・ツール・ドラゴン！

ストーム「パワー・ツール・ドラゴンか…」

パワー・ツール・ドラゴン：攻撃力2300

龍亞「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動！パワー・サーチ！デッキから装備魔法を1枚、手札に加えることができる！」  
ストーム「何だ…何を手札に加えた？」

龍亞「これだ！装備魔法、チューナーチャージャー！」

チューナーチャージャー

装備魔法

1ターンに1度だけ、自分の墓地に存在するチューナー1体を除外する事で、装備モンスターの攻撃力は、そのモンスターの攻撃力分だけアップする。

龍亞「俺はD・スコープンを除外して、攻撃力を800ポイント上げるぞ！」

ストーム「ほう…」

パワー・ツール・ドラゴン：攻撃力2300 攻撃力3100

龍亞「パワー・ツール・ドラゴンの攻撃！クラフティ・ブレイク！」  
ストーム「無駄だ！ダブル・ホーンズ・ドラゴンの効果発動！ダブル・ホーンズ・バスター！」

龍亞「え！？」

ストーム「このカードは、相手モンスターの攻撃宣言時、自分フィールド上にセットされた魔法・罠カードを1枚見せる事で、その攻撃を無効にする。俺は、この魔法カード、デストラクション・インシュランスを見せる。」

龍亞「そんな！伏せカードを見せるだけで攻撃を無効にできるなんて！」

ダブル・ホーンズ・ドラゴンの角の一撃で、パワー・ツール・ドラゴンは大きく後退してしまった。

ストーム（さ、ヒドウンシリーズを俺に出させるまでに至るかな？）

（次回へ続く）

<今日の最強カード>

ダブル・ホーンズ・ドラゴン

シンクロモンスター

レベル4 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻撃力2300 / 守備力1000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

相手モンスターの攻撃宣言時、自分フィールド上にセットされた魔法・罠カード1枚を相手に見せる事で、その攻撃を無効にする。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

<次回の最強カード>

シャドー・リゾネーター

チューナー / 効果モンスター

レベル2 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2000 / 守備力1900  
?



## 第20話 - 2体の竜の攻防！パワー・ツールvsダブル・ホーンズ

龍亞

- ・LP4000
- ・手札4枚
- ・（モンスター）パワー・ツール・ドラゴン（ATK3100）  
+）
- ・（魔法・罫）チューナーチャージャー（+）

ストーム

- ・LP4000
- ・手札3枚
- ・（モンスター）ダブル・ホーンズ・ドラゴン（ATK2300）
- ・（魔法・罫）1枚

龍亞「伏せカードを見せるだけで、相手の攻撃を止められるなんて…。」  
ストーム「強いだろう？もつとも、それ以外の効果は持っていないがな。」

龍亞「だったら、カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（3）  
ストーム「俺のターン！（4）：チューナーチャージャーの効果は永続的か…。しかもパワー・ツール・ドラゴンは、装備魔法を墓地に送る事で、破壊を免れる効果を持っていやがる。だったら…どうするか…」

パワー・ツール・ドラゴンを前に、考え込んでいるストームを見ると、龍亞はなんだか得意げな気持ちになっている事に、龍可は気が付いたようだ。

龍亞「へへへ…悩んでる悩んでるうっ！」

龍可「龍亞！調子に乗らない！そんなんじゃ、すぐやられちゃうよ！」

龍亞「大丈夫大丈夫！龍可。みんなも…まあ、見てなって！」

ストーム「決めたぜ！モンスターを裏側守備表示！」

裏側モンスター：守備力？

ストーム「カードを2枚伏せて、ダブル・ホーンズ・ドラゴンを守備表示にし、ターンエンド！」（1）

遊星「モンスターを伏せて、カードを2枚伏せた…？」

龍亞「へへっ、パワー・ツールの前じゃ、しょうがないよ！俺のターン！（4）」（マシーナリー・ピッチ）

ドロウしたカードを見た龍亞は、更なる笑みを浮かべる。とても嬉しそうで、無邪気だが…

クロウ「何を引いたんだ？」

龍亞（マシーナリー・ピッチだ！これで…俺の勝ちだーっ！）

マシーナリー・ピッチ

通常罫

自分フィールド上にレベル5以上の機械族モンスターが表側表示で存在する時に発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在する機械族以外のモンスター1体を破壊して、相手に1500ポイントのダメージを与える。

龍亞（これでこれで…コンボを決めて…とにかく…よくわかんないけど、俺の勝ち！）

龍亞「俺はパワー・ツール・ドラゴンの効果を発動！パワー・サーチ！なーっにつかな、なーにかな！？今度は…これ！！（5）」（巨大化）

龍亞（巨大化かあ…じゃあしようがないなあ。）

龍亞「パワー・ツール・ドラゴンで、裏側モンスターを攻撃！これで…もう1枚伏せカードを見せてくれないかなあ…。」

ジャック「また攻撃が止められるぞ、龍亞。」

遊星「いや、奴の狙いは…まずい！龍亞！」

龍亞「え！？」

ストーム「間抜けめ！メタモルポットのモンスター効果発動！」

龍亞「メタモルポット！？」

メタモルポット

レベル2 / 地属性 / 岩石族 / 攻撃力700 / 守備力600

リバーズ：お互いの手札を全て捨てる。その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドロウする。

ストーム「さあ、手札を全て捨ててもらおうかな。もちろん、今パ

ワー・ツール・ドラゴンの効果で手札に加えたカードも、このターンのドローフイズで、お前がにやにやしなからドローしたカードもだー!!」

龍亞「そ…そんな…。」

自分の行動が浅はかであったことに、ようやく気づいた龍亞。自分の自信のあるコンボを打ち碎かれた時ほど、自信を失うものは瞬間はない。

ストーム「そして、お互いに、手札が5枚になるまで、ドロー! まあまあ龍亞。お前の手札が無くなった訳じゃないんだから、落ち込むなよ。」(5)

龍亞「う…うん。(5)ターン…エンド。」

ストーム「すっかり戦意喪失か?俺のターン、ドロー!(6)リバー・スカードオープン! 装備魔法、デストラクション・インシュランスを発動!」

デストラクション・インシュランス

装備魔法

装備モンスターが破壊された時、装備モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える。

ストーム「さらにもう1枚、リバースマジック発動! ツイン・ショック・バスター!」

ツイン・ショック・バスター

## 通常魔法

自分フィールド及び相手フィールド上に魔法カードが表側表示で存在する時に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するカード1枚と、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

ストーム「この効果で、俺のダブル・ホーンズ・ドラゴンと、お前のチューナーチャージャーを破壊する！」

天を仰ぎ、ダブル・ホーンズ・ドラゴンが苦しそうに呻いた後、破裂した。

ジャック「装備魔法を破壊するために、自分のシンクロモンスターを破壊しただと？」

ストーム「そうよ。だが、デストラクション・インシュランスの効果を受けてもらうぜ、龍亞！」

龍亞「うわああああ！」

龍亞：LP4000 LP2850

ストーム「まだこれで終わりじゃねえぞ！罨カード発動！シンクロ・リバーズ！」

龍亞「シンクロ・リバーズ!？」

遊星「奴のデッキはシンクロデッキなのか？」

ストーム「そうよ。俺のデッキはドラゴンを主体としたシンクロデッキじゃないんだぜ。」

龍亞「そんな！だってこの前遊星と戦った時は…」

ストーム「言ったる？俺は世界でも5本の指に入るカードコレクター

「だって。デッキだって、日替わりさっ！シンクロ・リバースの効果で、破壊されたシンクロモンスターを特殊召喚する！」

シンクロ・リバース

通常罫

このターンにカード効果で破壊されたシンクロモンスター1体を墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。

ストーム「さあ蘇れ、ダブル・ホーンズ・ドラゴン！」

ダブル・ホーンズ・ドラゴン：攻撃力2300 攻撃力3300

ストーム「これでパワー・ツール・ドラゴンの攻撃力を上回ったぜ。行け！ダブル・ホーンズ・ドラゴン！ダブル・ホーンズ・ドライブ！」

アキ「龍亞！」

龍亞「そううまくやらせるか！罫カード発動！ディフォーマーD・ヘビーウォール！」

D・ヘビーウォール

永続罫

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。手札の「D」と名の付いたモンスター1体を墓地に送る事で、その攻撃を無効にする。その後、自分のデッキからレベル4以下の「D」と名の付いたモンスター1体を手札に加える事ができる。この効果を2回使った場合、このカードを破壊する。

龍亞「この効果で、手札のD・チャッカンを墓地に送って、デッキから、D・モバホンを手札に加えるぞ！」

ストーム「ほう。そう簡単にはやらせてくれないか。俺はメインフェイズ2で、チューナーモンスター、シャドー・リゾネーターを準備表示で召喚。」

シャドー・リゾネーター

チューナー/効果モンスター

レベル2/闇属性/悪魔族/攻撃力200/守備力1900

？

ストーム「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(4)

龍亞「俺のターン！(6)もうこれ以上好きにはやらせないぞ！D・モバホンを攻撃表示で召喚！」

閉じられた携帯電話が開き、ガシャンガシャンと音を立て、開かれた携帯電話となり、手足も生えた。

龍亞「D・モバホンの効果発動！ダイヤル・オン！」

モバホンの腹部(?)にあるダイヤルがピポピポという音を立てて1から順番に点滅し、やがてダイヤルナンバー2のところで、光が止まった。

龍亞「2だ！」

ストーム「という事は、2枚めくるんだな。そしてその中に…」

と言いかけたところで、龍亞がより大きい声を上げ、ストームの発言を遮った。

龍亞「俺に言わせてよーっ！ストーム！」

ストーム「そうかいそうかい。わかったわかった。」

龍亞「その中に、Dと名の付いたレベル4以下のモンスターがいる場合、召喚条件を無視して1体だけ特殊召喚できるんだ！」

めくったカード：リミッター解除/D・ステープラン

龍亞「よーし！俺はD・ステープランを攻撃表示で特殊召喚！」

D・ステープラン

効果モンスター

レベル4/地属性/機械族/攻撃力1400/守備力1000

このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

- ・攻撃表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は他のモンスターを攻撃対象に選択できない。このカードが戦闘によって破壊された場合、このカードを破壊したモンスターの攻撃力は300ポイントダウンする。

- ・守備表示：このカードは戦闘では破壊されない。このカードが攻撃された場合、そのダメージ計算後に相手フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して守備表示にし、このカードの表示形式を攻撃表示にする。

龍亞「まだまだいくよーっ！手札から速攻魔法、D・ギャザーを発



動！」

D・ギヤザー

速攻魔法

自分フィールド上に「D」と名の付いた表示形式が同じモンスターが表側表示で2体以上存在する場合に発動する事ができる。手札から「D」と名の付いたレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚する。

龍亞「この効果で、D・ラジオンを攻撃表示で特殊召喚！」（3）

D・ラジオン

効果モンスター

レベル4 / 光属性 / 雷族 / 攻撃力1000 / 守備力900

このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

・攻撃表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「D」と名のついたモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

・守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「D」と名のついたモンスターの守備力は1000ポイントアップする。

ジャック「おお！龍亞のフィールドにディフォーマーが3体に、パワー・ツール・ドラゴン！」

遊星「龍亞。すごいぞ！」

龍亞「へへへ〜！どんなもんよ〜！しかもラジオンの効果で、自分の場のディフォーマーの攻撃力は800ポイントアップする！」

D・ラジオン：攻撃力1000 攻撃力1800  
D・モバホン：攻撃力100 攻撃力900  
D・ステープラン：攻撃力1400 攻撃力2200

ストーム「だが、俺の場にはダブル・ホーンズ・ドラゴンがいる！そのモンスター効果で攻撃を無効にすれば、お前は俺のシャドー・リゾネーターを破壊する事はできても、ダブル・ホーンズ・ドラゴンは倒せないぜ。」

龍亞「だったら、パワー・ツール・ドラゴンの効果だ！パワー・サーチ！遊星は、信じれば必ずデッキは答えてくれるって、言ってた！だから…ドロー！」（4）  
ストーム「信じれば…必ず答えてくれる…だと？」

ストームが奥歯をギリツと噛みしめていて、苦い表情をしているのが皆には見えた。

遊星「…？」

龍亞「来た！装備魔法、ダブルツールD&Cを発動！」  
ストーム「な…何だと!？」

龍亞「これを、パワー・ツール・ドラゴンに装備する！」

## ダブルツールD&C

### 装備魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「パワー・ツール・ドラゴン」または「D」と名のついたレベル4以上の機械族モンスターにのみ装備可能。それぞれのターンで以下の効果を適用する。

・自分のターン：装備モンスターの攻撃力は1000ポイントアップする。装備モンスターが攻撃する場合、バトルフェイズの間だけ

攻撃対象モンスターの効果は無効化される。

・相手のターン：相手は装備モンスター以外のモンスターを攻撃対象に選択できない。装備モンスターと戦闘を行った相手モンスターを、そのダメージステップ終了時に破壊する。

龍亞「これで、パワー・ツール・ドラゴンの攻撃力は3300にアップする！」

アキ「すごいじゃない、龍亞！」

龍可「なんだかんだで、龍亞つて、やっぱり強いのね…。」

龍亞「パワー・ツール・ドラゴンで、ダブル・ホーンズ・ドラゴンを攻撃！クラフティ・ブレイク！」

攻撃力こそ同じだが、パワー・ツール・ドラゴンは、装備魔法を墓地に送れば、破壊を免れる効果がある。

ストーム「くそっ、ダブル・ホーンズ・ドラゴンの効果発動！自分のセットされたカードを見せる事で…」

龍亞「そんなもん効かんよーっ！ダブルツールD&Cの効果で、バトルするモンスターの効果を無効にするんだよーっ！」

ストーム「ぐわあああ！」

ダブル・ホーンズ・ドラゴンが、ダブルツールD&Cと共に砕け散った。

龍亞「よし！これで後の全てのモンスターの攻撃を通せば、大ダメージだ！D・ステープランで、シャドー・リゾネーターを攻撃！」

ストーム「ぐわっ！」

ブルーノ「これでストームの場に、壁モンスターがいなくなった！」

龍亞「D・モバホンで、ダイレクトアタック！」

ストーム「チイツ！」

ストーム：LP4000 LP3100

龍亞「そして、D・ラジオンでも攻撃！ストラップ・シュート！」  
ストーム「どわっ！」

オーバーリアクションであるのか、ストームはわざと自分の背中を壁に叩きつけた。

龍亞「えっ!?!」

遊星「どうした、ストーム!?!」

龍可「龍亞!D・ラジオンって…闇のカードなんじゃ!?!」

ストーム「いいや。ちよつとしたエンターテイメントさ…。あーあ。

俺の白いチノパン、汚れちまったじゃねえか。」

龍亞「自分でやったんじゃないか！」

ストーム：LP3100 LP1300

ストーム「くつ、なかなか効いたぜ…。やってくれるじゃないか。」

龍亞「俺だって、負ける訳にはいかないんだ!チーム5D'sの一員なんだ!俺は、ヒドウンシリーズを出させて、ヒドウンシリーズをやっつけるんだ!」

ストーム「そうかいそうかい…俺がヒドウンシリーズを出せるのかもわかんねえのに…。強引だな。でもそうして欲しいんなら…できる限りその声には答えたい。だってもう俺のライフ1300しかない

いからな。やられちまうし……」

龍亞「じゃあ、出してくれるの？」

ストーム「だあかあ……自分の望むような手札が必ず来るわけじゃないだろ？」

龍亞「でも、信じれば、デッキは必ず答えて……」

ストーム「そんな事はねえ！！ドローなんてものは……所詮運なんだ！！」

その一言が、ガレージ中に轟いた。普段は冷静で、明朗な彼が、声を荒げた事に、周囲は驚かすにはいられなかった。

遊星「ストーム……」

龍亞「まあ、そりゃ……運の部分もあるんだろうけど……ま、いいや！

……カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（2）

ストーム「俺のターン！（5）俺は手札から魔法カード、死者蘇生を発動！」

死者蘇生

通常魔法

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して、自分フィールド上に特殊召喚する。

ストーム「蘇れ、シャドー・リゾネーター！」

シャドー・リゾネーター：守備力1900

ストーム「そして魔法カード、復讐の刻ときを発動！」（3）

復讐の刻

通常魔法

前のターンに破壊され墓地へ送られたモンスター1体をコントロールのフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、攻撃する事はできない。

ストーム「復活せよ。ダブル・ホーンズ・ドラゴン！」

ダブル・ホーンズ・ドラゴン：攻撃力3300

龍亞「うわあああ！また出た！で…でも！この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃できないんだよね！」

ストーム「ああ…だが…俺の狙いは攻撃じゃないぜ。」

龍亞「え!？」

ストーム「レベル4のダブル・ホーンズ・ドラゴンに、レベル2のシャドー・リゾネーターをチューニング！」

札を操りし者よ、捧げられた魂の許に現れるがいい！シンクロ召喚！出でよ、伝説の占い師 - ガルゾ！

伝説の占い師 - ガルゾ

シンクロモンスター

レベル6 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力2000 / 守備力2100  
チューナー + チューナー以外のモンスター1体

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚する事はできない。手札

のチューナー1体を捨てる事で、自分のデッキからカードを2枚ドロウする。この効果を使用したこのカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分は攻撃する事ができない。「伝説の占い師 - ガルゾ」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在する事はできず、「伝説の占い師 - ガルゾ」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

龍可「まさか…これが…？」

アキ「ヒドウン…シリーズ!？」

光の中から現れたのは、机の上の少し汚れた水晶玉をじーっと見て座っているだけで、猫背で、白髭を垂らした、占い師の風格がまるでない人物だった。ちなみに言っていると、ガルゾの頭は禿髪である。

ストーム「そう!こいつがヒドウンシリーズ…っておい!」

ジャック「お前ら、このカード見たことがないのか?ガルゾは、手札を交換する効果を持っているんだぞ?」

龍亞「しかもパワー・ツール・ドラゴンに勝てないじゃん!手札がよっぽど悪いんだ…。」

ストーム「舐めてもらっては困るな龍亞。俺はただ手札を交換するためだけにこいつを召喚した訳じゃないぞ。」

龍亞「え!？」

ストーム「俺は墓地の、シャドー・リゾネーターの効果を発動!」

シャドー・リゾネーター：攻撃力200

ジャック「なるほど。シャドー・リゾネーターは、シンクロ素材になった場合、墓地から特殊召喚でき、レベルが1となる効果を持つ。つまり奴の狙いは…」

ストーム「そうだ。俺がわざわざシャドー・リゾネーターを復活させた理由は、このターンにもう1回シンクロ召喚を行うからさ。その前に、ガルゾの効果を使って、手札のチューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを墓地に送って、デッキからカードを2枚ドロ―！」(3 4)

クロウ「なんだか、ジャックの使いそうなカードも入ってんな。」「ジャック「なるほど。ダーク・リゾネーターを使っているのか。奴はよくわかってるな。種族を統一したデッキではなく、シンクロ召喚を積極的に行うデッキなのか？」

ブルーノ「でも、出してるのって、ダブル・ホーンズ・ドラゴンと伝説の占い師 - ガルゾだけだよな？」

クロウ「そうだな。自分のデッキを使いこなせてないんじゃないかねえのか、ストーム？」

ボソツと言ったつもりだったが、その声はどうやらストームにも聞こえていたようであり、ストームはクロウに向かって大声で返した。

ストーム「心配はいらんぞ、クロウ！その証拠に、このデッキの切り札、ヒドウンシリーズを見せてやるからさ…。」

アキ「な…なんですって!？」

遊星「ヒドウンシリーズを見せる!？」

その言葉を聞いた瞬間、皆は固唾をのんで見守るような形となった。その空気の静けさは、まるで、このガレージには誰もいないのではないかと思わせるような、沈黙感だった。

ストーム(…いい緊張感だぜ。)

ストーム「リバースカードオープン！速攻魔法、スター・チェンジヤーを発動！」



スター・チェンジャー

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、以下の効果から1つを選択して発動する。

- ・そのモンスターのレベルを1つ上げる。
- ・そのモンスターのレベルを1つ下げる。

ストーム「これで、俺の場のシャドー・リゾネーターのレベルは1から2となった。レベル6の伝説の占い師・ガルゾに、レベル2のシャドー・リゾネーターをチューニング！」

はるか古より受け継がれし伝家の宝刀よ、目覚めの時は来た。我に力を与えよ！シンクロ召喚！真実を、我が元に、Mystic Sphere！

龍亞「うわああ！なんだ!？」

遊星「何の光!？」

アキ「ま…眩しい!」

光り輝く球体が、天井から舞い降りてきた。ゆっくりと舞い降りた球体は、ストームの目の前で、動きを止めた。

ストーム「これが俺の切り札。ヒドウンシリーズである、Mystic Sphereよ。」

ジャック「ミステイク・スフィア…だと?」

ストーム「じゃあちよつくら見せてやる。Mystic Sphereの効果発動！ミスティック・チェンジ！」

光輝く球体が、ぐちゃぐちゃと闇と混ざり合い、その闇に吸い込まれ、闇の中に消え去った。

アキ「消えた！？」

ストーム「いいや…。」

するとすぐに、その闇の中から、黒い帽子をかぶり、黒い衣装を身にまとった悪魔らしきモンスターが出現した。見方によっては魔女にも見えなくはないか…

その姿を見るや否やすぐにクロウが声をあげた。

クロウ「あのモンスター！！ブラッド・メフィスト！！！」

遊星「ほ…本当だ！！！」

ジャック「バカな。あのカードは現実に被害を及ぼすからと、もう全て回収されたはずでは！」

ブルーノ「でも、どうしてブラッド・メフィストが出てくるの…？ミスティック・スフィアは…どこに…。」

ストーム「これが…Mystic Sphereの効果さ。」

<今日の最強カード>

シャドー・リゾネーター

チューナー/効果モンスター

レベル2/闇属性/悪魔族/攻撃力200/守備力1900

このカードがシンクロ召喚の素材となって墓地に送られた時、この

カードを自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードのレベルは1となる。

以下、大体見当はついているかもしれませんが、待ちきれない方のために、Mystic Sphereの効果の全文を記載しておきます。

なお、あとがきに関しましても、Mystic Sphereについての事が書かれておりますので、次の話まで見たくない場合は、下は読まない方が良いでしょう!!!

< 次回の最強カード >

Mystic Sphere

ヒドウンシリーズ/シンクロモンスター

レベル8 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力? / 守備力?

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度だけ、自分のエクストラデッキからシンクロモンスター1体を除外し、除外したシンクロモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体の名前を宣言する事ができる。このカードの攻撃力・守備力は除外したモンスターとエンドフェイズまで同じ数値になり、名前・レベル・属性・種族・効果は宣言したシンクロモンスターとエンドフェイズまで同じになる。このカードの戦闘によって発生する相手への戦闘ダメージは0になる。また、このカード

がフィールド上に表側表示で存在する限り、  
このカードの効果で宣言したモンスターと同名のモンスターを宣言  
する事はできない。

第20話・2体の竜の攻防！パワー・ツールvsダブル・ホーンズ（後書き）

どうです、Mystic Sphereの効果？

壊れカードだと思いませんか？

このカードさえあれば地球上のあらゆるシンクロモンスターを使う事ができますよ。

多分このカードがあればストームは何かしらの方法で1ターンキルしたりとかできてしまうかもしれませんが、そういう事はしらないと思います。

ですから、「このモンスターを宣言してれば勝ってたんじゃない？」とか言うのは、どうしましょうかね…。

ストーム、相当なカードコレクターだからカードの知識も豊富だし…。

そうだ！いつそそんなカードなかったって事にすればいいわ！ダイク・ダイブ・ボンバーとか（笑）

マジメな話、そういう状況になったら、エクストラデッキにカードがなくなったらかにしようかなと思います（笑）

## 第21話・切り札の中の切り札

龍亞

・LP2850

・手札2枚

- ・(モンスター) パワー・ツール・ドラゴン(ATK2300) / D・ステープラン(ATK2200) / D・モバホン(ATK900) / D・ラジオン(ATK1800)
- ・(魔法・罫) D・ヘビウォール) / 1枚

ストーム

・LP1300

・手札4枚

- ・(モンスター) Mystic Sphere(ATK?)
- ・(魔法・罫) なし

ストーム「これが、Mystic Sphereの効果さ。」

遊星「どういう…事だ…?」

ストーム「1ターンに1度だけ、シンクロモンスターの名前を宣言する事ができる。俺が宣言したのは、このブラッド・メフィスト。」

クロウ「宣言したシンクロモンスターになれるってのか!? インチキ効果もいい加減にしろ!」

Mystic Sphere: 攻撃力2700

遊星「だがおかしい。」

ジャック「何がだ、遊星？」

遊星「いや、ブラッド・メフィストの攻撃力は…2800のハズなんだが…」

ストーム「さすがは不動遊星だな。そう、確かにブラッド・メフィストの元々の攻撃力は2800だ。だが、ミスティック・スフィアは、シンクロモンスターの名前を宣言するだけじゃそのモンスターにはなれないんだ。エクストラデッキから、宣言したモンスターと同じレベルのシンクロモンスターを除外する必要があるのさ。そしてこのカードの攻撃力・守備力は、除外したシンクロモンスターと同じになる！」

龍可「…という事は…除外したシンクロモンスターの攻撃力は2700だったって事？」

ストーム「そういう事だ。俺が除外したのは…コイツだ。」

除外したカードは墓地にはいかなかったため、自分のジャケットの胸ポケットに入れたカードを取り出した。

そのカードは、シンクロモンスター、メンタルスフィア・デーモンだった。

アキ「メンタルスフィア・デーモン！」

龍亞「あれって、デイヴァインの切り札だよね!？」

ブルーノ「ええ!?!あれ持ってるの!いいなあ!あれって、レアカードなのに…。」

ストーム「アルカディアム・ブメントの2階のカード屋にあるカードパックって、ほとんどサイキック族モンスターのカードしか入ってないパックなんだよ。それでこれも当てた訳。」

アキ「そんな！アルカディアムーブメントに入れたの！？」  
ストーム「まあ、そうでもしないと、カードコレクターはできない  
る？」

と言つて、ストームはメンタルスフィア・デーモンを再び胸ポケットに入れて、握りこぶしを作り、「ブラッド・メフィストの効果発  
動！」と叫んだ。

龍亞「来る！？」

ストーム「1ターンに1度だけ、相手フィールド上に存在するカー  
ド1枚につき、相手に300ポイントのダメージを与える事ができ  
る！くらえっ！」

ブラッド・メフィストは不気味な笑いを浮かべながら手に赤い光弾  
を持ち、それを龍亞に投げつけた。

龍亞「うわあああ！」

ストーム「貴様のフィールドにあるカードは6枚！よって1800  
ポイントのダメージを受けてもらう！」

龍亞：LP2850    LP1050

龍亞「ライフが…あつという間に逆転！？」

ストーム「D・ステープランの効果で、俺はステープラン以外を攻  
撃する事はできない。ならばブラッド・メフィストで、ステープラ  
ンを攻撃！カースド・ブラッド！」

ブラッド・メフィストはステープランの前まで進むと、至近距離で



大量の血を吐いた。

アキ「これを受けたら、ライフが450に!？」

ストーム「いや、安心しろ! Mystic Sphereの効果により、相手に与える戦闘ダメージは0になるからな。」

龍亞「そうはさせない! 罨発動! デイフォーム!」

デイフォーム

通常罨

自分フィールド上に表側表示で存在する「D」と名の付いたモンスターが攻撃対象となった時に発動する事ができる。その攻撃を無効にし、攻撃対象となった「D」と名の付いたモンスターの表示形式を変更する。

ステープランがブラッド・メフィストの吐き出した大量の血を避け、ホチキスの形に変形した。

ストーム「チツ。やるじゃないか。攻撃を躲したか。」

龍亞「よし! 凌いだぞ! このターンが終われば、ブラッド・メフィストは元の姿に戻るんでしょ?」

ストーム「ああそうさ。カードを2枚伏せて、ターンエンド。」  
(2)

Mystic Sphere: 攻撃力2700 攻撃力0

龍亞「もうミスはできないんだ。ここで一気にいかないと…俺のターン!」  
(3)

しかしストームのフィールドには2枚の伏せカードがあるため、龍亞もドロしてすぐには、モバホンの効果を使い、ダイヤルオンする訳にはいかなかったが、攻撃を防がれた時の事を考え、モバホンの効果を使わざるを得ないと考えた。

龍亞「ダイヤル、オン！」

出た目：3

龍亞「やった！3だ！」

めくったカード：D・インパクトリターン/D・コード/D・カメラン

龍亞「D・カメランだ！このカードは強力な効果を持っているんだぞーっ！俺はD・カメランを守備表示で特殊召喚！」

D・カメラン  
効果モンスター

レベル2/光属性/機械族/攻撃力800/守備力600

このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。

- ・攻撃表示：このカードが戦闘によって破壊された時、自分の手札・墓地に存在する「D・カメラン」以外の「D」と名のついたレベル4以下のモンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

- ・守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「D」と名のついたモンスターを魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にする事はできない。

龍亞「これで、俺のディフォーマーは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならない！これで攻撃を通しやすくなったぜ！そしてパワー・ツール・ドラゴンの効果発動！パワー・サーチ！デッキから装備魔法を1枚手札に加える！」（4）

デュエルディスクのオートシャッフル機能により、龍亞のデッキがシャカシャカと音を立てシャッフルされ、一番上のカードがディスクから飛び出た。

龍亞「今度は…？」

しかし手札に加えたカードを見るや否や、龍亞はそのカードを、真剣な表情で手札に加えた。

ストーム（何だ？一体何を手札に加えた…？）

龍亞「ステープランを攻撃表示にして、Mystic Sphereの守備力は0！だったら一番攻撃力の低いモバホンで、Mystic Sphereを攻撃！」

ストーム「モンスターが5体もいて、賑やかなこった。だが罠発動！永続罠、聖なる砦・ミラーフォート！」

聖なる砦・ミラーフォート

永続罠

相手モンスターの攻撃宣言時、その攻撃を無効にする事ができる。この効果を使用した場合、この効果で攻撃を無効にしたモンスターの攻撃力分だけ、このカードにフォートカウンターを乗せる。このカードに乗っているフォートカウンターが5000個を超えた場合、このカードを破壊し、デッキからカードを1枚ドローする。

D・モバホンのその小さな手から繰り出されたパンチだったが、鏡の城が盾となり、代わりに攻撃を受けた。モバホンは鏡に思い切り拳をぶつけたせいか、かなり痛そうにしている。モンスターにだって、意思はあるのだろう。

龍亞「そんな！どういう事！？」

ストーム「ミラーフォートは、モンスターの攻撃を無効にして、そのモンスターの攻撃力分だけ、フォートカウンターを乗せるのさ。つまり無効にしたモバホンの攻撃力、900分だけ、このカードにカウンターが乗るぜ。」

フォートカウンター：900

ストーム「そしてフォートカウンターが5000個を超えたら、このカードは破壊されるって訳だ。」

龍亞「じゃあ、攻撃力の合計が5000になるまで攻撃を無効にできるって事！？」

ストーム「大体そんなところだ。さあ、お前のフィールドのキャメランは守備表示だから攻撃はできないが、まだラジオンとステープラン、それにパワー・ツール・ドラゴンの攻撃が残ってるぜ！」

龍亞（ラジオンの攻撃力は1800でステープランは2200。それにパワー・ツール・ドラゴンは2300。）

しばらく考えると、龍亞は手を挙げて「ストーム！」と、声を張った。

龍亞「1つ、お願いがあるんだけど…？」

ストーム「なんだ？」

龍亞「電卓使ってもいい…?」

ストーム「あ…ああ。」

クロウ「おいおい龍亞。」

龍可「それくらい計算くらいしなさい！大体、電卓使つてると、頭バカになつちやうわよ！」

やかましい龍可の声が響く。説教くさいことを言われると、余計にやかましく聞こえるもの。

龍亞「うるさいな、龍可！電卓はデュエリストにとっての必須アイテムなのっ！」

龍亞（攻撃力の合計は…6300かあ…。でも、2体のモンスターで攻撃しても、ミラーフォートは壊れないし…結局は3体で攻撃しなくちゃいけないだよね。）

龍亞「だったら、パワー・ツール・ドラゴンで、Mystic Sphereを攻撃！クラフティ・ブレイク！」

この時誰もがストームはミラーフォートの効果を使用すると思っていたが、ストームは自分の手をもう1枚の罠カードに延ばした。

ストーム「罠発動！シンメトリー・シールド！」

シンメトリー・シールド

永続罠

このカードは発動後装備カードとなり、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。装備モンスターが相手からの攻撃対象になった時、装備モンスターを守備表示にして、その

モンスターの守備力を攻撃したモンスターの攻撃力と同じにすることができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。装備カードとなったこのカードが装備モンスターが破壊される以外の方法でこのカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

ストーム「これで、パワー・ツール・ドラゴンの攻撃力、2300と、Mystic Sphereの攻撃力が同じになる！」

龍亞「そんな！それじゃ、倒せないじゃん！」

ストーム「そうだ。攻撃モンスターの攻撃力が守備モンスターの守備力を、上回らなくちゃいけないからな！」

龍亞「ううう…でも、俺のフィールドには5体のモンスターがいるんだ。大丈夫さ。ターンエンド！」(4)「

ストーム「俺のターン！(3)俺は再び、Mystic Sphereの効果を発動するぜ！」

アキ「今度はどのモンスターになるつもり!？」

ストーム「俺はレベル5のシンクロモンスター、マジカル・アンドロイドをエクストラデッキから除外し、俺はレベル5の、ヘル・ツイン・コップを宣言！」

球体の姿をしていたMystic Sphereが、双頭のモンスター、ヘル・ツイン・コップに姿を変えた。

Mystic Sphere：攻撃力0 攻撃力2400

遊星「これは、牛尾の持っているカード!？」

ストーム「これはセキュリティの知り合いから貰ったって訳よ!デュエルチェイサーズには必須のカードなんだってさ。」

アキ「じゃあその人にとつても必要なんじゃないか？」

ストーム「2枚あるからくれたつて訳さ！さあいくぜ！龍亞！お前、肝心な事を忘れてるんじゃないのか？」

龍亞「肝心な事つて…？」

龍亞の背中に悪寒が走った。ストームの表情により、ストームが勝利を確信しているかのように思えたからである。自分の場には5体のモンスターがいるのに、と龍亞は思っているのだ。

龍亞「俺の場には5体のモンスターがいるんだぞ！」

ストーム「確かに。だが、お前のモンスターはキャメラン以外全て攻撃表示！つまりお前にダメージは与えられるつて事さ。さらに言えば、お前のライフは残り1050ポイント。」

龍亞「でもっ！ステープランの効果で、ステープラン以外のモンスターは攻撃できないし、それに、D・ヘビウォールだってあるし、それにそれに！Mystic Sphereはダメージを与えられないんでしょ！？」

ストームの発言に対し、かなり動揺している龍亞だったが、それでも龍亞の言っている事は正しい。と、デュエルを見ている人たちはウンウン、と頷いている。

ブルーノ「それは龍亞の言うとおりだよ。」

ストーム「ハッ。そんなことはわかってるぜ。俺の狙いはコレさ！手札からシンクロ・トルーパーを召喚！」

遊星「シンクロ・トルーパーだと！？」

シンクロ・トルーパー

効果モンスター

レベル3/地属性/機械族/攻撃力？/守備力？  
デュエル中に1度だけ、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター1体を選択して発動する。このカードの攻撃力・守備力は選択したモンスターの攻撃力・守備力と同じ数値になり、このカードが表側表示で存在する場合、選択したモンスターの効果を1度だけ使用する事ができる。

ストーム「シンクロ・トルーパーの効果で、俺はヘル・ツイン・コップと同じ攻撃力・守備力を得るぜ。」

シンクロ・トルーパー：攻撃力2400

ストーム「くらえ！Mystic Sphereで、ステープランを攻撃！」

ヘル・ツイン・コップの格好をしたMystic Sphereは、ポケットから拳銃を取り出し、ステープランを撃ち抜いた。

ストーム「ステープランの効果で、攻撃力は300ポイントダウンするが、ヘル・ツイン・コップの効果は、モンスターを戦闘で破壊した時、攻撃力を800上げてもう1度だけ続けて攻撃する事ができる。くらえっ！今度はD・ラジオンを攻撃！」

ヘル・ツイン・コップ：攻撃力2400 攻撃力3200

龍亞「わあああっ！」

ストーム「ラジオンがいなくなった事で、お前のディフォーマーの



攻撃力が下がる。」

D・モバホン：攻撃力900 攻撃力100

モバホンの攻撃力が100になってしまったのをわかったチーム5  
D'sの顔は、青ざめていた。

アキ「まずいわ！龍亞！」

ストーム「そして、シンクロ・トルーパー！D・モバホンを攻撃！  
龍亞「まだこいつが残ってる！D・ヘビーウォールの効果発動！手  
札のD・クロツクンを捨てて、攻撃を無効にする！そしてその後、  
自分のデッキからレベル4以下のディフォーマー、D・ラジカツセ  
ンを手札に加える！（4）」

効果を2回使い切ったD・ヘビーウォールは破壊された。

ストーム「まだ手札にディフォーマーが残っていやがったのか。カ  
ードを1枚伏せて、ターンエンド！」（1）  
龍亞「俺のターン！（5）」

龍亞は再びパワー・ツール・ドラゴンの効果を使おうとしたが…

ストーム「させるかよ！畏カード発動！デッドリー・トルネード！」

そのカードを発動した瞬間、チーム5D'sの面々の目が丸くなっ  
た。なぜか…。

ブルーノ「デッドリー・トルネード!？」

クロウ「あれって、プレミアカードじゃねえかっ!！」

ジャック「効果が強く、販売枚数を控えたと言われる…。」

デッドリー・トルネード

通常罫

スタンバイフェイズに発動する事ができる。フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター以外のモンスター1体をリリースし、フィールド上に存在する全てのモンスターを墓地に送る。このカードは発動後墓地に送られず、ゲームから除外される。

ストーム「そうさ！こいつは俺のカードの中でもかなりのプレミアなもの！シンクロモンスター以外のモンスターをリリース！俺の場のシンクロ・トルーパーをリリースし、くらえっ！」

大きな漆黒の竜巻が現れ、Mystic Sphere、D・キヤメラン、パワー・ツール・ドラゴンが飲み込まれた。龍亞は驚愕しているのだが、その状況に驚愕していると言うよりかは、自分のヒドンシリーズまでも飲み込んでしまうようなストームのプレイングにである。

龍亞「そんな！自分のヒドンシリーズまで飲み込んだじゃうの！？」  
ストーム「ああ。こいつはよく頑張った。確かにMystic Sphereはヒドンシリーズで、強力なモンスターだが、これ以上フィールドにいてもらっちゃ困るモンスターがいるのよ。」

と言って、人差し指で竜巻に飲み込まれつつあるパワー・ツール・ドラゴンを指さした。

龍亞「パワー・ツールが!？」

ストーム「ああ。パワー・ツール・ドラゴンの効果は非常に強力なんだ。毎ターン、装備魔法を手札に加えられちゃ、たまらねえからな。」

龍亞「そんな…。でも、だからって、自分のヒドウンシリーズを墓地に送る必要なんて…」

ストーム「デッドリー・トルネードは切り札だったのさ。切り札つてのは、時と場合によって、変わるもんだ。」

臨機応変なデュエルこそが、真のデュエルであると、ストームは言う。確かに切り札を出す事もデュエルなかもしれない。しかしそれでは勝利する事はできない、とも、言う。

ストーム「デュエルつてのは…多分、勝利が…全てなんだ。」

龍亞「勝たなくちゃいけないって事だよな。」

ストーム「そういう事だ。」

龍亞「…。」

ストーム「俺はMystic Sphereに装備されていた、シンメトリー・シールドの効果で、カードを1枚ドロ―!(2)さあ龍亞、デュエルを続けよう。」

龍亞「でも俺、保険をかけておいたのさ!」

デュエル観戦者とストームが声を揃えて「保険?」と言った。

龍可「龍亞が保険だなんて、珍しいわね。明日は雨かしら…?」

相変わらずの龍可の皮肉に、龍亞は口を尖らせた。

龍亞「龍亞!俺だって、成長してるんだもん!俺は装備魔法、デ

ンジャラスツールH&Pを発動！」

デンジャラスツールH&P

装備魔法

？

龍亞「墓地のパワー・ツール・ドラゴンを特殊召喚して、このカードを装備する！」

ストーム「ほう。」

遊星「なるほど。パワー・ツール・ドラゴンがやられても、この装備魔法で特殊召喚ができる、という訳か。」

パワー・ツール・ドラゴン：攻撃力2300

龍亞「そしてさらに、デンジャラスツールH&Pで、パワー・ツール・ドラゴンの攻撃力は1000ポイントアップする！」

パワー・ツール・ドラゴン：攻撃力3300

龍亞「そしてパワー・ツール・ドラゴンで、ダイレクトアタック！」

デンジャラスツールH&Pを装備したパワー・ツール・ドラゴンが、そのハンマーを振り上げ、かかって来た。

ストーム「だが俺の場には、聖なる砦・ミラーフォートがあるぜ！攻撃モンスターの攻撃を無効にし、このカードに、その攻撃力分だけフォートカウンターを乗せる！」

フォートカウンター：900 4200

龍亞「それはわかってるさ！デンジャラスツールH&Pの効果発動！装備モンスターが攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に、相手フィールドの魔法・罫カードを1枚破壊する！俺は聖なる砦・ミラーフォートを破壊！」

パワー・ツール・ドラゴンのハンマーの一撃により、鏡の砦が粉々に砕け散った。これでストームを守る盾はなくなり、次のターンにモンスターを召喚しなくては、ダイレクトアタックを受ける状態となってしまった。

ストーム「チツ。」

ジャック「龍亞。かなり強くなったな…。」

クロウ「ヒドウンシリーズの入ったデッキに勝てるかもしれないぜ！」

ストーム「だが、デンジャラスツールの効果で、お前は通常召喚ができなくなる。保険というよりは、諸刃の剣の方が、言い方としては適切だったんじゃないか？」

龍亞の額に汗が伝わり、その汗は顎から垂直に垂れた。冷や汗…というものか。

アキ「そうなの？」

龍亞「知ってたの？せっかく最新のカードで、みんなには誰にも言っていないで驚かそうとしてたのに。」

ストーム「残念だったな。俺が知らないカードなんて、そうそうないんだぜ。」

しかし龍亞はカードの知識がいくらあろうと、『デュエルで勝てな

くては意味がない』と言ったのはストーム本人だと自分の心に言い聞かせ、自分を落ち着かせた。

龍亞「俺はこれで、ターンエンド！（４）」

ストーム「俺のターン！（３）…来た！」

ドローしたカードを見た瞬間、ストームはフツフツ…と静かに笑い始めた。あまりに静かに笑っているため、龍亞は戦慄している。

龍亞「え…ど…何を引いたのさ…？」

ストームはゆっくりと目を閉じ、口元を緩ませ、「ヘッ」と言った後、目をカッと見開いた。

ストーム「俺の、真の切り札よ！いや、マイ・フェイバリットカードって奴か。」

遊星「マイ・フェイバリットカード…？」

その瞬間遊星の脳裏には、ある一つの光景が蘇った。いや、遊星だけではなかった。そこにいた、遊星とストームのデュエルを見た者全てに…。

遊星「まさか…あのカードを…！？」

ストーム「手札から、魔法カード、シンクロ・コンヴオークを発動！」

シンクロ・コンヴオーク

通常魔法

自分の墓地に存在するシンクロモンスター2体を選択して特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、攻

撃力は0なり、このターンのエンドフェイズに破壊される。

ストーム「これによって、俺の墓地からMystic Sphereと、ダブル・ホーンズ・ドラゴンを特殊召喚する！」

アキ「シンクロモンスターが2体…？」

ブルーノ「でも、効果は無効になって、攻撃力は0になるし、何に使うのかな…？」

クロウ「アレしかねえよ。」

ストーム「そう。俺はこいつらを…リリースする！」

龍亞「えっ!？」

2体のシンクロモンスターが光の粒となって天に消え、そこから、龍のシルエットが浮かび上がった。

龍亞「あ…この…モンスターは…!？」

ストーム「見せてやるう。幻想などではない。俺の持つ、最強カ-

ド…。出でよ!青眼の白龍!  
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン

天井から、ブルーアイズがゆっくりと、姿を現して来た。

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍：攻撃力3000

龍亞「…。青眼の白龍。」

ストーム「まさかこいつが出てくるとは思ってなかったって顔をしてやがるな、龍亞！」

龍亞「あ…。」

ストーム「さあ、龍亞。覚悟はできてるか？行け!パワー・ツール・

ドラゴンを攻撃！滅びのバースト・ストリーム！」

パワー・ツール・ドラゴンは、装備しているピッケルで、攻撃を防いだ。

龍亞「パワー・ツール・ドラゴンは、装備魔法を墓地に送る事で、破壊を無効にできるんだ！耐えてくれ！パワー・ツール・ドラゴン！」  
ストーム「だがダメージは受けてもらおうか。」

龍亞：LP1050 LP350

龍亞「そしてデンジャラスツールH&Pの効果で、装備モンスターを破壊したモンスターを破壊するんだ！」

ピッケルが一直線にブルーアイズに飛んできて突き刺さり、ブルーアイズは破壊された。

龍可「ブルーアイズが！」  
アキ「倒せたわ！すごい、龍亞！」

だが歓喜の声を聞いたストームは、すぐにより大きな声をあげた。

ストーム「悪いがそれは計算済みだ！」  
遊星「何だと!？」  
ストーム「リバーカードオープン！速攻魔法、デーモンとの駆け引きを発動！」

ブルーノ「デーモンとの駆け引きだっ!？」



デーモンとの駆け引き

速攻魔法

レベル8以上の自分フィールド上のモンスターが墓地へ送られたターンに発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「バーサーク・デッド・ドラゴン」1体を特殊召喚する。

龍亞「えっ!？」

ストーム「自分フィールド上のレベル8以上のモンスターが墓地に送られた時、俺の手札から、バーサーク・デッド・ドラゴンを特殊召喚する!」(0)

バーサーク・デッド・ドラゴン：攻撃力3500

龍亞「そんな!？」

バーサーク・デッド・ドラゴン

効果モンスター

レベル8 / 闇属性 / アンデット族 / 攻撃力3500 / 守備力0

このカードは「デーモンとの駆け引き」の効果でのみ特殊召喚が可能。相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃が可能。自分のターンのエンドフェイズ毎にこのカードの攻撃力は500ポイントダウンする。

遊星「バカな!？ブルーアイズが本命じゃなかったのか!？」

ストーム「デュエルは常に流動的なのさ。それがわからなければ、

お前らはWRGPで勝てないぞ。」

龍亞「…！」

ストーム「さあ、バトルフェイズ中に特殊召喚したモンスターは攻撃が可能だ。とどめだ、龍亞。パワー・ツール・ドラゴンに攻撃！フル・カラストロファイ！」

龍亞「わあああああ！！」

龍亞：LP350 LP0

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

Mystic Sphere

ヒドウンシリーズ/シンクロモンスター

レベル8/光属性/機械族/攻撃力？/守備力？

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

1ターンに1度だけ、自分のエクストラデッキからシンクロモンスター1体を除外し、除外したシンクロモンスターと同じレベルのシンクロモンスター1体の名前を宣言する事ができる。このカードの攻撃力・守備力は除外したモンスターとエンドフェイズまで同じ数値になり、名前・レベル・属性・種族・効果は宣言したシンクロモンスターとエンドフェイズまで同じになる。このカードの戦闘によって発生する相手への戦闘ダメージは0になる。また、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードの効果で宣言したモンスターと同名のモンスターを宣言する事はできない。

< 次回の最強カード >

ワールド・エンチャント

効果モンスター

レベル4 / 水属性 / 水族 / 攻撃力1600 / 守備力1200

手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体にアイスカウンターを1つ置く。このカードの攻撃力は、フィールド上に存在するアイスカウンターの数×300ポイントアップする。

## 第22話・WRGP個人戦！ストームVSチリー（前書き）

今さらだけど、〈次回の最強カード〉のコーナー、見るとネタバレになっちゃうかもしれませんので、よろしくお願いします（笑）

私が考えたオリカだと、そうはならないんですけど、次回のデュエルの予定全部まで考えてる回ってなかなかないんで。申し訳ございません。

## 第22話・WRGP個人戦！ストームVSチリ

龍亞「うわああああ！」

バーサーク・デッド・ドラゴンの一撃により、龍亞のライフポイントは0となった。龍亞はその暴風により、吹き飛ばされてしまった。

アキ「すごい…。」

クロウ「ヒドゥンシリーズなんて関係なしに強いんだな。」

ストーム「そうじゃねえと、ヒドゥンシリーズを持つてる資格はないからな。遊星。今回のデュエルを通じて、一つお前らに言いたい事があるんだ。」

その言葉を聞くと、遊星は首を傾げた。

遊星「言いたい事…？」

ストーム「そう。この先ヒドゥンシリーズを持つ者と、お前らは必ず戦う事になるだろう。だが、決して屈したりするな。ヒドゥンシリーズだって1枚のカード。必ず弱点はある。」

龍可「ストームの、Mystic Sphereにも…？」

ストーム「ああ。龍亞はそれに気づいてたぜ。」

龍亞「えっ？」

自分ではわかっていない龍亞を見て、ストームは笑って続けた。

ストーム「Mystic Sphereはそのターンのエンドフェイズまでしか効果が持続しないんだ。だから攻撃を凌がれたりすると、次の相手ターンでやられる可能性が高い。龍亞はそれに気づい

てた。」

確かにそのような状況にはなったが、それでもシンメトリー・シールドや聖なる砦・ミラーフォートを使って攻撃を凌いでいたストームを考えると、ストームはかなりのデュエリストだと、改めて認識した遊星たちだった。

ストーム「ま、そういう訳よ。いいか。倒せないカードなんてないんだ。じゃあ、俺明日個人戦に出場するから、見に来いよ！そんなやあな！」

ストームが勝手に遊星のガレージのシャッターを開けて、金色のDホイール「ザ・ゴールド」を発進させ、颯爽と駆けて行った。

遊星「おい、ストーム！」

ジャック「フツ。速い奴だ。」

アキ「どうかしたの、遊星？」

遊星「いや、ストームは、なぜ俺たちが絶対にヒドウンシリーズを持つ者と戦う事になるって、言ったのかと思つて……。」

アキ「確かに……。」

クロウ「緊張感を高めるためじゃねえのか。自分の話を蔑ろにされたくないからって。」

何かが引つかかる、と遊星は考えていた。この頃色々な事があり過ぎて、少し整理できてないだけなのか、と自分を心の中で言い聞かせる事とした。

~~~~~

MC「さあっ！いよいよ始まったWRGP個人戦！チーム戦でエントリーしているDホイラーたちも、エントリーせずに個人戦のみをエントリーしているDホイラーたちも、その闘志の限り、全力でぶつかり合おうっ！」

やはりチーム戦が醍醐味であるせいか、個人戦はチーム戦に比べて観客が少なく、さらに時間帯も夜の19時と、ナイトゲームとなっている。しかしネオ童美野町の夜景は綺麗であるというので、夜景ついでに見に来る人たちもなかなかにいる。

MC「さあ！まずはDホイラーの入場だっ！大会の出場経験こそない新人Dホイラーだが、噂によればかなりのカードコレクターと言われる。ストーム！」

選手入場口から出てきたストームが、歓声に応じて手を大きく振る。

ストーム「よおっ！ありがとうっ！」

アキ「こういうの、慣れてるのかしら、ストーム。」

遊星「経歴によれば、あいつはデュエルアカデミア中等部・高等部の時、演劇部だったらしい。」

龍亞「そーなの！？」

クロウ「じゃあパフォーマンスの豊かなデュエルを見せてくれたりしてな！」

しかし「パフォーマンスの豊かな」という言葉を聞いた瞬間、ジャックの耳がピクリと動き、フン！と言った。

クロウ「ん？どしたジャック。」

ジャック「何でもないわ！」

クロウ「あ。さてはお前、エンターテイメントを語るにやまだ早い！とか思ってたんだろ。これだからジャックは…。」

ジャック「ええい、うるさいクロウ！奴はエンターテイメントのデュエルはできんだ！」

MC「そしてその対戦者は、スカンディナビア大会で準優勝をした実力派デュエリスト、チリーだ！スカンディナビア大会では氷デッキで勝ち進んだと聞くんが、今回のデッキは一体！？」

選手入場口からは、水色と青の混じったライディングスーツを着た若い女性がゆっくり出てきた。

チリー「これがWRGPの熱気って奴ね。私の氷が溶けちゃいそう！」

勝気な女の子という様子であり、ストームに向かって、「負けないわよー！」と言って、手を銃の形にして、ストームを撃ち抜いた。

ストーム（氷デッキか…。いいだろう。）

遊星「氷デッキ。一体どんなデュエルをするんだ？」

ジャック「奴はかなりの腕のデュエリストだ。ストーム…勝てるのか…？」

クロウ「ストームだって相当強いぜ。こりゃ、いいデュエルが見れるぜ。」

龍亞「どんなデッキを使うのかな…。」

龍可「いや、大会ではメインデッキとサイドデッキの枚数が決められてるからそんな幾つものデッキを使う事は無理だと思うけど…。」



と会話をしているうちに、ストームの金色のDホイールと、チリーの白い下地に青と水色のストライプのDホイールがスタート地点に着き、今、シグナルが青に変わった。

MC「ライディングデュエル、アクセラレーション！」

ザ・ゴールドは第一コーナーで大きく膨らんだが、その内側をチリーのDホイールは抜けて行こうとした。

MC「おおっ！先攻はチリーか！？」

チリー「もらった！」

ストーム「させるか！」

しかしアウト・イン・アウト走法により、チリーのさらに内側をストームが切り抜けて行き、先攻を取ったのはストームとなった。

チリー「やるわね。」

ストーム「俺だって、Dホイールだからな。」

チリー「フツ。いくわよ！」

2人「デュエル！！」

ストーム：LP4000

VS

チリー : LP4000

ストーム「俺の先攻、ドロー！（6）チューナーモンスター、ダーク・リゾネーターを守備表示で召喚！」

ダーク・リゾネーター

チューナー/効果モンスター

レベル3/闇属性/悪魔族/攻撃力1300/守備力300

このカードは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されない。

ストーム「カードを3枚伏せて、ターンエンド！」（2）

クロウ「あいつ何だかジャックみたいなデュエルすんなあ。」

ジャック「よくわかっている。」

ウンウン、とジャックは一人で頷いている。満足そうだ。

チリー「3枚の伏せカード。でもね、アタシには通用しないよっ！アタシのターン！」

ストーム : SPC1

チリー : SPC1

チリー「私はゴールド・エンチャントを攻撃表示で召喚！（5）」

コールド・エンチャント

効果モンスター

レベル4 / 水属性 / 水族 / 攻撃力1600 / 守備力1200

手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体にアスカウンターを1つ置く。このカードの攻撃力は、フィールド上に存在するアスカウンターの数×300ポイントアップする。

MC「おおっと氷のモンスター！やはり今回も、氷デッキで攻めるのかーっ！」

チリー「当たり前でしょ！氷以外のデッキは、アタシには合わないわ！私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」(3)

ストーム「俺のターン！」(3)

ストーム：SPC2

チリー：SPC2

ストーム「あいつも伏せカードが2枚もある。だったら、俺はダイク・リゾネーターをリリースして、カイザー・グライダーをアドバンス召喚！」(2)

カイザー・グライダー

効果モンスター

レベル6 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻撃力2400 / 守備力2200  
このカードは同じ攻撃力を持つモンスターとの戦闘では破壊されない

い。このカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上のモンスター1体を持ち主の手札に戻す。

チューナーがリリースのために使われたのにもいささか驚いた会場だったが、金色の龍、カイザー・グライダーの格好の良さに見入っ  
てしまうデュエリストもいた。

チリー「攻撃力2400だつて？」

ストーム「さあ行け！カイザー・グライダー！ゴールデン・バースト！」

チリー「そうはいかないわ！トラップカード発動！ブリザード・フィールド！」

ブリザード・フィールド

通常罠

？

チリー「この効果で、手札の水属性モンスター1体、を捨てて、攻撃モンスターを破壊するわ！」（2）

カードイラストに描かれた吹雪がカイザー・グライダーを包み込み、破壊した。

ストーム「カイザー・グライダー！だが、カイザー・グライダーは破壊された時、フィールドのモンスター1体を手札に戻す！消えて  
もらおう！コールド・エンチャント！」

破壊されたカイザー・グライダーが残像のような形で現れ、その翼でコールド・エンチャントを吹き飛ばした。

チリー「ああっ！よくもやったわねーっ！」

ストーム「転んでもタダでは起きないのさ！俺はこれで、ターンエンドー！」(2)

余裕そうな表情をしているが、コールド・エンチャンターはレベル4のモンスターであり通常召喚が可能のため、その場凌ぎにしかなくていい。とは言え、カイザー・グライダーの効果は任意で発動できるものではなく、また任意だったとしても、使わざるを得ない状況だったのだが…。

チリー「アタシのターン！」(4)「

ストーム：SPC3

チリー：SPC3

チリー「アタシは再び、コールド・エンチャンターを召喚！」(3)  
ストーム「来るか!？」

しかしストームがそう言うのと同じくらいに、チリーはトラップカードに手を掛けた。

チリー「罠発動！ブリザード・レイン！」

ストーム「何だと?」

ブリザード・レイン

通常罠

フィールド上に存在するカード1枚につき1個、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に、アイスカウンターを乗せる)

この効果で乗せられるアイスカウンターの数、最大5個まで。

チリー「フィールドにあるカード1枚につき1個、コールド・エンカウンターにアイスカウンターを乗せる！」

MC「ストームのフィールドには伏せカード3枚、そしてチリーのフィールドには発動しているブリザード・レインと、それにコールド・エンカウンター2枚！合計5枚だぞーっ！」

ストーム「効果を最大限に活かしたって訳か！」

雷のようなものが降り注ぎ、コールド・エンカウンターに集まっていく。

チリー「そして、コールド・エンカウンターは、アイスカウンター1つにつき1個、このカードの攻撃力が300ポイントアップする！」

コールド・エンカウンター：攻撃力1600 攻撃力3100

ジャック「攻撃力3100!?」

クロウ「やべえ、この攻撃を受けたら、一気にライフが900に…！」

チリー（でもストームの場には伏せカードが3枚あるわね…。ここはどうするかが問題よね。コールド・エンカウンターの効果を使って、手札1枚と引き換えにアイスカウンターを乗せれば、手札全てを使ってアイスカウンターに変えれば、攻撃力は4000になれる。それで攻撃が通れば、ワンターンキル！でも、失敗すれば、私のフィールドにカードはなくなって、コールド・エンカウンターもいなくなる。）

この状況で、コールド・エンチャントの効果があつている以上、ストームも、ワンターキルを選んでくるのかもしれないと思つてはいたが、もしも自分がチリーならば、そんな事はしない。伏せカード3枚を隠せずに攻撃するのはよくある事だが、自分の場にカードがなくなつてしまつては、勝機もなくなる。

チリー（このまま攻撃したら、あいつのライフは900残る。そっか！）

チリーは自分の手札をじつと見た後、コーナを左に曲がり、体勢を整え、手札を1枚掴んだ。

チリー「コールド・エンチャントの効果発動！手札を1枚捨てて、このカードにアイスカウンターを乗せる！アタシは1枚だけ、捨てるわ！」（2）

龍亞「1枚だけなの？」

アキ「ワンターキルの戦術が、ハイリスクだと考えたのかしら。」

コールド・エンチャント：攻撃力3400

チリー「さ、戦いの準備は整つたわ！コールド・エンチャントで、ダイレクトアタック！」

コールド・エンチャントから放たれた氷の礫を誰もがトラップで防ぐだらうと思つたが、その予想は大きく外れた。

ストーム「ぐわあああああ！」

ストームのDホイールは大きく横に揺れ、チリーのDホイールに追いつかれてしまった。

ストーム：LP4000 LP600

MC「ストーム、まさかの直撃っ！これでライフポイントは600！」

ジャック「何だと!？」

クロウ「防御用のカードはなかったのかよ!？」

だがモニター映像をよく見ると、ストームの口元が緩んでいるのがわかった。

遊星「いや……」

ストーム「なるほどな……。お前が手札を1枚しか捨てなかった理由は、スピード・ワールド 2の効果で、俺に止めをさせるライフにするためか……。だがその中途半端な攻撃で、俺に切り札を出させる結果となっただけだな……。」

チリー「この期に及んで強がり?」

ジャック「切り札?」

ブルーノ「まさか、この場面で……!？」

ストーム「手札を1枚捨て、(1)畏発動!ダメージ・コンデンサー!」



ダメージ・コンデンサー

通常罠

自分が戦闘ダメージを受けた時、手札を1枚捨てて発動する事ができる。

その時に受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスター1体をデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

チリー「ダメージ・コンデンサー！？私が与えたダメージは…3400！！」

ストーム「一撃で仕留めていればよかったのにな！俺が呼ぶのは、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン攻撃力3000の、来い！青眼の白龍！」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍：攻撃力3000

快晴の空から、一筋の青白い光とともにブルーアイズが降臨し、会場を沸かせた。公の場でブルーアイズを召喚するのは初めてであり、会場の人々は驚きを隠せずにいたが、中にはあれがコピーカードではないかと疑問視する者もいた。

MC「ブルーアイズ…ホワイトドラゴン…！？」

観客「おい、コピーカードじゃねえのか！？ブルーアイズは伝説のモンスターで、世界に3枚しかなくて、海馬瀬人しか持ってないんじゃないのかよ！？」

MCはマイクを外し、運営委員会の人々にあれがコピーカードかどうかを調べるようにこっそりと促した。

チリー「そんな…バカな…!?」

ストーム「確かにな。だが伝説を作るのは1人じゃない! たった今、このストームが…デュエルモンスターズの歴史に名を残した!」

アキ「歴史に名を残したって…自分で言う台詞じゃないでしょ。」

運営委員会に調べてもらい、あれがコピーカードではないという事がわかったMCは、再びマイクを取った。

MC「今運営委員会に調べてもらったが、あれはコピーカードではないぞーっ!!! 真正銘の青眼の白龍だーっ!」

ストーム「当たり前よ! しかもこれはインダストリアルリユージョン社のペガサス名誉会長から直々にいただいたんだぜーっ!」

会場内にはまだ疑っている人もいるようだが、大部分はその言葉を信じていた。目の前で本物の青眼の白龍ブルーアイズ・ホワイトドラゴンである事に変わりはないのだ。

ブルーアイズがチリーに向かって吼え、チリーは一瞬たじろぐものの、すぐさまフンツ! と鼻で笑った。

チリー「何よ! 攻撃力は3000で、コールド・エンチャンターには及ばないじゃない!」

ストーム「確かにな…。だが、ただ自慢するただけにブルーアイズを召喚したと思ってるのかお前は…?」

チリー「うっ…。確かに…。でも、どうせハツタリなんでしょう?

これで、ターンエンド!」(2)

ストーム「俺のターン!」(2)

ストーム：SPC4  
チリー：SPC4

ストーム「俺の狙いは、これだ！Sp-ハーフ・シーズを発動！」

Sp-ハーフ・シーズ  
通常魔法

自分用スピードカウンターが3つ以上ある場合に発動する事ができる。

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力を半分にし、ダウンした攻撃力の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

ストーム「これで、コールド・エンチャントの攻撃力は半分になる！」  
チリー「そんな！」

コールド・エンチャント：攻撃力3400 攻撃力1700

ストーム：LP600 LP2300

ストーム「そして青眼の白龍で、コールド・エンチャントを攻撃  
フルアイズ・ホワイトドラゴン  
！」

滅びのバースト・ストリーム!!!

チリー「きゃあああああ!」

今度はストームのDホイールに、チリーが抜かされてしまった。

チリー：LP4000 LP2700

ストーム「さあ、俺はこれで、ターンエンド!」(1)

MC「ブルーアイズの一撃によって、チリーのライフは1300ポイント減り、ストームとの差が縮まった!これで、デュエルの行方はわからなくなったぞーっ!」

ジャック「流れはストームにあるな...」

クロウ「でもあいつも結構手強そうだぜ...?」

チリー「アタシのターン!」(3)

ストーム：SPC5

チリー：SPC5

チリー「来た!これよこれ...!この切り札で、あのブルーアイズなんて、倒してやるんだからね!見てなさいよーっ!」

チリー「おーっほっほっほっほっ！」

ストーム「な…何だ？気が触れたか？」

チリー「何よ！失礼ねっ！アタシは今ね、そのブルーアイズを倒せる、切り札を引いたのよ！フッフッフッ…あっはっはっはっ！」

（次回へ続く）

<今日の最強カード>

ワールド・エンチャンター

効果モンスター

レベル4 / 水属性 / 水族 / 攻撃力1600 / 守備力1200

手札を1枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体にアイスカウンターを1つ置く。このカードの攻撃力は、フィールド上に存在するアイスカウンターの数×300ポイントアップする。

<次回の最強カード>

デープ・ドラゴン

効果モンスター

レベル4 / 地属性 / ドラゴン族 / 攻撃力1600 / 守備力1200  
?

## 第23話・ブリザード・コアトルの恐怖

ストーム

- ・LP2300
- ・手札1枚
- ・（モンスター）青眼の白龍（ATK3000）
- ・（魔法・罫）2枚
- ・SPC5

チリー

- ・LP2700
- ・手札3枚
- ・（モンスター）なし
- ・（魔法・罫）なし
- ・SPC5

ストーム「ブルーアイズを倒せる、切り札だっつて？」

チリー「そうよ！ブルーアイズは、このカードで倒すのよ！そのため、下準備をしないとね。私はブリザード・オークを特殊召喚！」

《ブリザード・オーク》

効果モンスター

レベル5 / 水属性 / 獣族 / 攻撃力1900 / 守備力1900

相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚することができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、バトルフェイズ終了時にこのカードを破壊する。

チリー「このカードは、相手の場にのみモンスターがいる時は、手札から特殊召喚できる！そして手札からチューナーモンスター、ブリザード・エンチャントを召喚！」

《ブリザード・エンチャント》

チューナー/効果モンスター

レベル3/水属性/魔法使い族/攻撃力800/守備力800

このカードが水属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚の素材となつて墓地に送られた時、デッキからカードを1枚ドローする。

チリー「そして私は、レベル5のブリザード・オークに、レベル3のブリザード・エンチャントをチューニング！」

氷の世界より出でたる使者よ、穢れ無き聖氷で、全てを洗い流して！シンクロ召喚！凍てつけ、ブリザード・コアトル！

《ブリザード・コアトル》

シンクロモンスター

？

チリー「私はまず、シンクロ素材となった、ブリザード・エンチャントの効果で、カードをドロウするわ！」(2)  
ストーム「ブリザード・コアトル…。見た事のないモンスターだな。」

ジャック「あのストームでさえ知らないカードか。」  
クロウ「無理もねえだろ。カードなんて数えきれない程あるんだからな。」

コアトル、というのは蛇の事だが、その蛇が氷に覆われており、蛇とは思えない風格を表している。

ストーム「だがブリザード・コアトルの攻撃力は2800じゃないか。」

そこでチリーが人差し指を動かしながらチツチツチツ、と言った。

チリー「甘いわね。ブリザード・コアトルのモンスター効果！シンクロ召喚に成功した時、素材となったモンスターの数×200ポイントの攻撃力がアップする！」

ブリザード・コアトル：攻撃力2800 攻撃力3200

ストーム「何！？ブルーアイズの攻撃力を上回った！？」  
チリー「ブリザード・コアトルで、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン青眼の白龍を攻撃！」

大きく口を開けたブリザード・コアトルは、ブルーアイズに素早く



近寄ると、その口から息を吐いた。少量しか吐いていないものの、その吐息で、吹雪が巻き起こっていた。

MC「ブルーアイズ、早くも敗北かーっ!?!」

ストーム「させるか! 罠発動! 炸裂装甲!」  
リアクティブアーマー

リアクティブアーマー  
炸裂装甲

通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体を破壊する。

ストーム「さあ、これでブリザード・コアトルは破壊だぜ!」

チリー「甘いわね! ブリザード・コアトルのモンスター効果発動! このカードを対象とする罠カードの発動を無効にして、破壊する!」  
ストーム「何!?!」

炸裂装甲が砕け散り、そのままブリザード・コアトルの吹雪による一撃がブルーアイズへと通る。ブルーアイズはカチコチに凍ってしまい、ブルーアイズもまた砕け散った。

ストーム：LP2300    LP2100

チリー「やりーっ! ブルーアイズ撃破! カードを1枚伏せて、ターン終了よ!」(1)

ストームの1ターン目にあつた3枚の伏せカードはもう既に1枚と

なっていて、手札も1枚、万策尽きたようにも見えるが、ストームはヘルメットと共に頭を上げ、楽しい表情を見せた。その表情がモニターに映っていたのを見たチリーは、眉に皺を寄せてストームに問いかける。

チリー「何よその表情？」

ストーム「いやいや、やっぱりデュエルはこうでないとな。ブルーアイズを倒してくれないと、面白くないだろ!？」

チリー「そういうの、負け惜しみって言うのよ!」

ストーム「おいおい、まだ負けた訳じゃないんだぜ。デュエルはこつからさ。ドロー!」(2)

ストーム：SPC6

チリー：SPC6

『デュエルはこつから』という台詞を聞くと、会場はストームへの期待からか、再び歓声を上げた。

ストーム「カードを1枚伏せて、ディープ・ドラゴンを守備表示で召喚!」(0)

ディープ・ドラゴン：守備力1200

チリー「ディープ・ドラゴン…?」

深い緑色をし、白い髭を生やしている老いたドラゴンが現れた。あ

まり動きたがらなさそうなイメージで、チリーをじーっと見ている。そのチリーの様子から、ストームは、チリーがディープ・ドラゴンを知らないという事がすぐにわかった。

ストーム（こいつの効果は頼もしいんだぜ。）

ストーム「俺はこれで、ターンエンド！」（0）

龍亞「えーっ！デュエルはこっからとか言いながら、守備モンスターを召喚？反撃、しないのーっ!？」

龍可「そう反撃できる状況じゃないでしょ。よくわからないの？」

チリー「何かありそうだけど、まあいいわ。私のターン！」（2）

ストーム：SPC7

チリー：SPC7

チリー「Sp・エンジェル・バトンを発動！スピードカウンターが2つ以上ある時、デッキからカードを2枚ドロイーして、手札を1枚墓地に送るわ！」（2）」

ストーム「じゃあ手札交換が終わったところで、罠カード発動！アンチ・シンクロ・バイブラー！」

《アンチ・シンクロ・バイブラー》

永続罠

相手フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在する時に発動する事ができる。このカードは発動後モンスターカード（悪魔族・闇・星10・攻0/守2000）となり、自分フィールド上に

表側守備表示で特殊召喚される。1ターンに1度だけ、相手モンスター1体の攻撃を無効にし、相手に600ポイントのダメージを与える事ができる。また、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターは相手のカード効果によっては破壊されない。

ストーム「さあ、これでブリザード・コアトルで攻撃しても無意味だぜ！」

チリー「フツ。甘いわね！ブリザード・コアトルで、アンチ・シンクロ・バイブラーを攻撃！」

またしてもブリザード・コアトルが分厚い書物を持った黒い影のようなモンスターに対し、吹雪攻撃を放つが、アンチ・シンクロ・バイブラーは書物のページを見て呪文を唱え、吹雪攻撃を無効化した。ストーム「何のつもりだ…？600ポイントのダメージを受けてもらうぜ！」

チリー：LP2700      LP2100

チリー「こういつつもりよ！ブリザード・コアトルの効果発動！自分フィールド上の水属性モンスターの攻撃が無効になった時、もう一度だけ続けて攻撃する事ができる！」

ストーム「なんだと!?!」

ジャック「まずいぞ、ストーム！」

チリー「今度こそ終わりよ！」  
ストーム「どわああああ！」

吹雪攻撃により、アンチ・シンクロ・バイブラーはその影の姿を消し、消滅した。

ストーム「くそっ…。」

チリー「さあ、アナタの場にはディープ・ドラゴンと伏せカードがあるだけよ！観念なさい！ターン終了！」

ストーム「まだまだあ！俺のターン！」（1）

ストーム：SPC8

チリー：SPC8

デュエルはこれからだと言ってから2ターンしか経っていない。ストームはそう思っていた。彼はエンターテイメントのデュエルを尊重するデュエリストであるため、パフォーマンスマスも熱いものだが、そう思われるのは、彼にとってはプレッシャーでもあるのだ。

ストーム「おし！まだまだ！SP・エンジェル・バトンを発動！デッキからカードを2枚ドロし、手札を1枚墓地に送る！（1）」  
チリー「あんたもエンジェル・バトンを引いたの！？」

ストーム「ああ。まだ運は俺を見放しちやいなって訳だろ。」

と言ってストームはデッキからカードを2枚ドロする。ドロしたカードは、《SP・スピード・エナジー》、《ダーク・リゾネーター》の2枚。この場面ではもちろん《SP・スピード・エナジー》を選ぶべきだが、彼は《ダーク・リゾネーター》がお気に入りな

のか、しびしびと《ダーク・リゾネーター》を墓地に送った。

ストーム「そして俺は、罠カード、サベージ・サルベージを発動！」

《サベージ・サルベージ》

通常罠

自分の墓地に存在するレベル5以上のモンスター1体を手札に加える。このターンのエンドフェイズまでに、手札に加えたモンスターを召喚・特殊召喚する事ができなかった場合、自分はエンドフェイズにこの効果で手札に加えたモンスターのレベル×100ポイントのダメージを受ける。

ストーム「この効果で、俺は墓地から青眼ブルーアイズ・ホワイトドラゴンの白龍を手札に加える！」

わざとブルーアイズを天高く上げて、今にも召喚すると言わんばかりの勢いだったが、チリーが首を60度程後ろに向けて、声を張ってストームに言う。

チリー「ブルーアイズを召喚するつもり！？でもね、ブルーアイズは8つ星のモンスター！レベルが8以上のモンスターをアドバンス召喚する場合は、リリースが…」

しかしそこまで言われたところで、ストームがそれを遮った。

ストーム「わかってるさ！だから俺は、ディープ・ドラゴンの特殊能力を使わせてもらう！」

チリー「ディープ・ドラゴンの…！？」

ストーム「ディープ・ドラゴンは、レベル8以上のモンスターを生

け贄召喚する場合、2体分の生け贄とする事ができるのさ！」  
チリー「なっ…！」

遊星（生け贄召喚…その言い方は、昔の…。）

ストーム「俺はディープ・ドラゴンを生け贄に…再び現れる！青眼  
ブルーアイズ  
の白龍…！」  
・ホワイトドラゴン

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍：攻撃力3000

チリー「何度現れようと、ブリザード・コアトルで倒してやるんだから！」

ストーム「今度はそうはいかない！SP・スピード・エナジーを發動！」

《SP・スピード・エナジー》

通常魔法

自分用スピードカウンターが2つ以上ある時に発動する事ができる。自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、エンドフェイズまで、自分用スピードカウンターの数×200ポイントアップする。

ストーム「俺のスピードカウンターは8個！よってブルーアイズの攻撃力は、1600ポイントアップする！」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍：攻撃力4600

チリー「攻撃力…4600!?!？」

ストーム「そしてブルーアイズで、ブリザード・コアトルを攻撃！」

滅びのバースト・ストリーム！」

チリー：LP2100 LP700

ブルーアイズの口から放たれた一撃により、長い事フィールドに留まっていたブリザード・コアトルも、やっと姿を消した。

MC「1400ポイントのダメージにより、チリーの残りライフは700！セーフティラインを下回ったぞ！」

ストーム「どうだ！…ん？」

チリー「でもね、これも予定内よ！ブリザード・コアトルのモンスター効果を発動！破壊された時、自分フィールド上にブリザードトークンを2体特殊召喚する！」

ストーム「何だと？」

ブリザードトークン：守備力0

チリーのDホイールの目の前に、氷の結晶のようなものが2つ現れた。攻撃力と守備力は持たないが、なぜだかそのトークンの存在に、何かの脈動を感じるストーム。

ストーム（上級モンスター召喚の布石なのか…？）

ストーム「俺はこれで、ターンエンド！」（0）

チリー「私のターン！」（3）

ストーム：SPC9



チリー : S P C 9

デュエルはストームに分がある。ストームのフィールドにはブルーアイズが存在し、ライフポイントはストームの方が大幅に上回っており、チリーの場には2体のトークン。しかしなぜだか、ストームの表情から緊張が抜けていない。

ストーム「まさか！」

彼の脳裏には、チリーの言った言葉が浮かんだ。

チリー「そう、切り札召喚のための下準備よ！私は2体のブリザードトークンをリリース！」

ブリザードトークンが天高くに昇華し、そこから氷の結晶が降り注いできた。

チリー「ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン青氷の白夜龍を、アドバンス召喚！」

ストーム「な…何だと!?!」

ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン  
青氷の白夜龍 : 攻撃力3000

チリー「さあ、決着をつけましょう、ストーム！あなたのブルーアイズと、アタシのブルーアイス、どっちが強いか…」  
ストーム「ほう…おもしれえ。やってやるぜ！」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

デイーブ・ドラゴン

効果モンスター

レベル4/地属性/ドラゴン族/攻撃力1600/守備力1200  
このカードはこのカードの効果以外で特殊召喚する事はできない。  
このカードをリリースしてレベル8以上のモンスターをアドバンス  
召喚する場合、このカード1体で2体分のリリースとする事ができ  
る。また、このカードが自分の墓地に存在する場合に自分がカード  
をセットした時、墓地に存在するこのカードを表側攻撃表示で特殊  
召喚しなければならない。この効果で特殊召喚したこのカードはフ  
ィールドを離れた場合ゲームから除外される。

<次回の最強カード>

ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン

青氷の白夜龍

効果モンスター

レベル8/水属性/ドラゴン族/攻撃力3000/守備力2500  
このカードを対象にする魔法・罫カードの発動を無効にし破壊する。  
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選  
択された時、自分フィールド上に存在する魔法または罫カード1枚  
を墓地に送る事で、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

## 第23話・ブリザード・コアトルの恐怖（後書き）

ディープ・ドラゴン、全然最強じゃなかったような…

## 第24話 - 激突！青眼の白龍VS青氷の白夜龍！！

ストーム

- ・LP2100
- ・手札0枚
- ・(モンスター) ブルーアイス・ホワイトドラゴン 青眼の白龍 (ATK3000)
- ・(魔法・罫) なし
- ・SPC9

チリー

- ・LP700
- ・手札2枚
- ・(モンスター) ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン 青氷の白夜龍 (ATK3000)
- ・(魔法・罫) なし
- ・SPC9

そびえ立つブルーアイズとブルーアイス。

互いの攻撃力は3000で、共に睨み合っている。

ブルーノ「攻撃力はどちらも3000だっ！」

遊星「だが、このままだと、次に動けるのはストームだな。」  
ジャック「どういう事だ、遊星？」

遊星「お互いのスピードカウンターのは互いに9。次のストームのターンには、お互いのスピードカウンターは10になる。つまり、ストームの方が先に、スピード・ワールド 2の効果で、フィール

ドのカードを破壊できる。」

龍亞「じゃあ、ストームの方が先にブルーアイスを破壊できるんだね！」

クロウ「しかもチリーのライフポイントは700だから、ブルーアイズの攻撃を受け止められないぜ！」

会場の声が聞こえるのか、遊星たちが丁度話をしていた事に対して、チリーが声を張って答えた。

チリー「確かに、このままじゃストームにやられちゃうわね。でも、それはないから大丈夫よ！私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」（0）

自信満々の表情でカードを伏せるチリーに、ストームは戸惑いを覚えるが、トラップがあると知っているようなものなので、特に何も考えず、カードをドローした。そしてスピードカウンターが表示が10となったその瞬間、

チリー「罠カード発動！スピード・ショック！」  
ストーム「何！？スピード・ショックだと！？」

### 《スピード・ショック》

永続罠

「スピード・ワールド」と名の付いたカードに乗っているスピードカウンターを全て取り除く。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「スピード・ワールド」の「お互いのスタンバイフェイズにこのカードにスピードカウンターを1つ乗せる」効果は無効になる。このカードがフィールドを離れた時、このカード発動時に「スピード・ワールド」と名の付いたカードに乗っていたスピ

ードカウンターを元に戻す。

二台のDホイールの速度が一気に落ち、徐行運転かと言うほどの速度となった。

MC「スピード・ショックは、お互いのスピードカウンターを0にしてしまうカード！ライディングデュエルの常識を覆すカードだぞーっ！」

チリー「どう！？これでスピード・ワールド 2の効果は使えないわよ！」

ストーム「確かにな。」

低速故、客席からは「自転車じゃねーんだぞーっ！」や「むしろ三輪車だぜ！」という声も聞こえ、笑いが溢れているが、やがてはこの笑いが罵声に変わってくる事には、ストームは既に気づいていた。

ストーム「早く破壊しないと……。だがスピードスペルは発動する時にスピードカウンターが必要なものばかり。チッ。ターンエンドだ。」(1)

舌打ちをしつつ、手札のSP・パワー・バトンを一瞥した。

チリー「私のターン！」(1)

ストーム：SPCO

チリー：SPCO

チリー「ブルーアイズとブルーアイスが睨み合ってるわね。でも、勝つのはブルーアイスなのよ！何たって、ブルーアイズは通常モンスターで、ブルーアイズは効果モンスター！それでステータスが同じなら、単純に考えてブルーアイズが負けるに決まってるじゃない！」

ストーム「だがブルーアイスにはパワーアップをする効果はない。だったら他のサポートカードなしには、ブルーアイズは倒せない。だろ？」

正論を言うストームに、チリーは「あつ」と口を軽く開ける。

チリー「と…とにかく！勝つのはアタシなの！手札から、ブリザード・ストライカーを召喚！」（〇）

《ブリザード・ストライカー》

ユニオン／効果モンスター

レベル4／水属性／戦士族／攻撃力1000／守備力1700

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の水属性モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、装備モンスターの攻撃力は700ポイントダウンする。（1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

ブリザード・ストライカーが変形し、2本の剣のような形となり、ブルーアイズの肩に装備され、その刃先が青白く光っている。

チリー「これで、ブルーアイスの攻撃力は500ポイントアップするわ！」

ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン  
青氷の白夜龍：攻撃力3500

チリー「いくわよ！ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン！ブルーアイズを攻撃！氷結のブリザード・ストリーム！」

ホワイトナイトドラゴンの口から放たれた吹雪と、ブリザード・ストライカーの刃により、再びブルーアイズが倒れた。

ジャック「何をやっているのだストームは！何度ブルーアイズを墓地に送る気か！？」

ブルーノ「まあまあ…。」

ストーム「やってくれるぜ。またブルーアイズがやられちまうとは…。」

ストーム：LP2100    LP1600

チリー「ブリザード・ストライカーの効果により、装備モンスターの攻撃力は700ポイントダウンするけど、もうブルーアイズはいないし、関係ないわね！ターンエンド！」



ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン  
青氷の白夜龍：攻撃力3500 攻撃力2800

ストーム「またピンチか……。どうすりゃいいかねえ？ま、ドロシてから考えるか。」

モンスターカードを引けなければ負けるかもしれないというのに呑気なのはなぜかと考えつつも、徐行運転のようなスピードでゆっくりとサーキット最後のカーブを左に曲がり、ホームストレートに戻ってくるチリー。

ストーム「ドロー！（2）」

ストーム：SPCO

チリー：SPCO

ストーム「Sp・スピード・ステイールを発動！」（1）

MC「スピード・ステイールだぞーっ！」

チリー「そんな！スピードスペルはスピードカウンターがないと使えないハズじゃ！」

徐行運転により退屈しかけていたデュエルで、意外な手が打たれたため、観客はドツと驚きの声をあげた。

ストーム「残念だったな。こいつは少し特殊なスピードスペルなのよ。」

《Sp・スピード・スタイル》

通常魔法

相手の墓地に存在する「Sp」と名の付いたカード1枚を選択して発動する。選択したカードと同名のカードが自分の墓地に存在する場合、選択したカードの効果を発動する。選択したカードと同名のカードが自分の墓地に存在しない場合、選択した「Sp」と名の付くカードを発動するために必要なスピードカウンターの数だけ自分用スピードカウンターを取り除く事で、その効果を発動する。

ストーム「お前の墓地のスピードスペル1枚の効果を発動できる訳だ。だがそのカードが俺の墓地にない場合は、その発動条件となるスピードカウンターの数だけ俺のスピードカウンターを取り除かなくちゃいけない。」

チリー「でも、アタシもアンタも、スピードカウンターは共にゼロ。という事は……」

ストーム「そう。俺が選択したカードは、俺もお前も既に一度デュエルで使用したカード。俺が選んだのは、Sp・エンジェル・バトン！」

《Sp・エンジェル・バトン》

通常魔法

自分用スピードカウンターが2つ以上ある時に発動する事ができる。自分のデッキからカードを2枚ドローして、その後自分の手札1枚を墓地に送る。

チリー「や……やるわね……。」

ストーム「俺はカードを2枚ドローして、手札のSp・パワー・バ

トン捨てる！（２）」

彼の目が光ったのがチリーにはわかった。何かキーカードを引いたのだろうと思いはしたが、ブルーアイスホワイトナイトドラゴンを前に、なす術はないだろうとたかをくくっていた。

ストーム「俺はカードを１枚伏せる。そして、ディープ・ドラゴンの効果発動！」

またまた観客を引き寄せるような、エンターテイメントのデュエルが繰り出された。ディープ・ドラゴンは、既に数ターン前に墓地に送られているのだった。

龍可「ディープ・ドラゴンって、随分前にやられなかった！？」

クロウ「ああ。墓地にいて発動する効果があるって事だな。」

ストーム「このカードは、俺の場にカードがセットされた時、強制的に特殊召喚される！（１）」

### 《ディープ・ドラゴン》

効果モンスター

レベル4/地属性/ドラゴン族/攻撃力1600/守備力1200

このカードはこのカードの効果以外で特殊召喚する事はできない。

このカードをリリースしてレベル8以上のモンスターをアドバンス召喚する場合、このカード1体で2体分のリリースとする事ができる。また、このカードが自分の墓地に存在する場合に自分がカードをセットした時、墓地に存在するこのカードを表側攻撃表示で特殊召喚しなければならない。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドを離れた場合ゲームから除外される。

ストーム「そして、ディープ・ドラゴンをリリースしてレベル8以上のモンスターをアドバンス召喚する場合、2体分のリリースとする事ができる！」

龍亞「レベル8以上のモンスター!？」

龍可「それってまさか……」

ストーム「俺はディープ・ドラゴンをリリースし……出でよ! ブルーアイズ  
ホワイイトドラゴン青眼の  
白龍!」

2枚目のブルーアイズが現れ、再び会場では歓声が巻き起こった。これによって、9割方ストームに対するブルーアイズについての疑いが晴れた。

チリー「そ……そんな……2枚目だつて!？」

ストーム「そうさ。俺のデッキにはブルーアイズは3枚入っているんだぜ!つまりもう1枚、俺のデッキには残ってるってこつた!!

!そしてブリザード・ストライカーの効果で、ブルーアイズの攻撃力は2700に下がってる!なら、ブルーアイズで、ブルーアイズ・ホワイイトナイトドラゴン青氷の白夜龍を攻撃!」

滅びのバースト・ストリーム!

チリー「きゃつ!でも、ブリザード・ストライカーの効果で、装備モンスターの破壊を無効にするわよ!」

ストーム「だが戦闘ダメージは受けてもらっぜ!」

チリー：LP700 LP400

ストーム「フツ。ブルーアイズとブルーアイズの競い合いに、他のモンスターはいらん。消えてもらうぜ！ターンエンド！」（0）

チリー「くっ…確かにね…。ブルーアイズとブルーアイズの競い合  
いだったわね…。アタシのターン！」（1）

ストーム：SPCO

チリー：SPCO

チリー「…カードを1枚伏せて、ターンエンド！」（0）

特に動揺もせず、カードを伏せたチリーを見たストームは、何かあるのかもしれないと思ったが、自分の手札は0枚、フィールドには伏せカード1枚とブルーアイズ1枚であり、戦術を選んでいる場合ではない。

何気なく、自分がピンチであるのかもしれないと思うストームであったが、ピンチも演出のうちだと、自分に言い聞かせる事にした。

ストーム「俺のターン！」（1）

ストーム：SPCO

チリー：SPCO

互いに睨み合うブルーアイズとブルーアイズ。耳を澄ませば、2体のモンスターは少し唸り声をあげている。その2体のモンスターか

ら出る緊迫感は、会場をも包み込む程。

モンスターの攻撃力・守備力が互角、効果もバトル時のステータスに影響を及ぼすものではないので、魔法・罠による勝負となるのだが、特定のスピードスペル以外のスピードスペルが使えない以上、罠カードによる勝負となるのは確実。

だがもう既に、チリーには切り札が用意されていたのだ…。

そしてもう2ターン。カードを引いては伏せるといふ単純な作業で、ターンが終了していく。

観客席からの歓声もなくなっており、同時に観客席からの緊迫感もない。MCは沈黙感を晒しだしてはいけないという精神で行うものであるが、必死で客を退屈させないようなセリフを探している。

MC「両者睨み合い…。先に動くのはどちらかーっ!？」

龍亞「退屈してきたねえ」。

龍可「ふあゝあ…。」

クロウ「ダメだなお前ら。この緊迫した空気を味わえねえと、立派なデュエリストにはなれないぜ!」

龍亞「え〜。だって、伏せカードをセットするだけじゃーん!」

ジャック「あれがどんな伏せカードなのか、気にならないのか?」

龍亞「そりゃ、そうだけど…。」

ストームの場に伏せカードが2枚。チリーの場にも伏せカードが2枚ある時点で、ストームのターンが終わったところ。

チリー「俺のターン!」(1)

ストーム：SPCO  
チリー：SPCO

ストーム「あの罫カードさえなくなっちまえば…スピードスペルも使えるし、スピード・ワールド 2 の効果だって使えるんだけどな…。まあいいか…」

チリー「さあ、会場のみんな！お待たせしましたーっ！」

チリーが会場に向かって大声を張り上げた事で、会場の人々は面食らった。

ブルーノ「な…何だあ!？」

チリー「この次のターンで、このデュエルは終わりますよーっ！トランプカード発動！ブリザード・エッジ！」

《ブリザード・エッジ》

通常罫

相手ターンでのみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在する水属性以外のモンスター1体の攻撃力は1000ポイントダウンし、このターン攻撃可能な相手モンスターは攻撃しなければならぬ。このカードは発動後デッキに戻す事ができる。

チリー「ブリザード・エッジの効果で、ブルーアイズの攻撃力は1000ポイント下がるわ！」

ストーム「何!？」

チリー「さらに、ブルーアイズは攻撃しなければならないのよ！さあ、かかって来なさい！」

ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
青眼の白龍：攻撃力2000

ストーム「そんな事は御見通しだぜ！畏カード発動！サンダー・エンド・ストリーム！」

《サンダー・エンド・ストリーム》  
通常畏

自分フィールド上にレベル8以上のモンスターが表側表示で存在する時にライフポイントを半分払って発動する。フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する。

ストーム「これでブルーアイズもブルーアイスもいなくなる！サンダー・エンド・ストリーム！」

ストーム：LP2100    LP1050

ストーム「そしてリバーカードオープン！正統なる血統！」

《正統なる血統》

永続畏



自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

ストーム「これで、墓地からブルーアイズを復活させる！」

天から降り注ぐ雷によって消えたブルーアイズが、墓地から特殊召喚された。

ストーム「そしてブルーアイズで、ダイレクトアタック！」

滅びのバースト・ストリーム！

チリー「それを待ってたわ！デュエルはね、いつも二手三手先を考へて行くものよ！よく覚えておくのね！墓地からトラップ発動！ブリザード・フィールド！」

MC「おおーっとここでチリーが墓地から罠カードを発動したぞーっ！あのカードは、序盤で発動されたカードだが…一体どんな効果が秘められているのか っ！？」

クロウ「墓地から発動した罠か！？」

遊星「…。」

ジャック「ストーム、大丈夫なのか？まさか一回戦で負けるはずがないだろうな？」

チリー「ブリザード・フィールドは、ダイレクトアタックが宣言された時、フィールド上の水属性以外のモンスターを全て破壊する効

果を持つ罨よ！さあ、凍てつきなさい、ブルーアイズ・ホワイトドラゴン！」

生還したブルーアイズが、再び氷漬けにされてしまった。このデュエル中、何度ブルーアイズが氷漬けにされただろうか。

ストーム「くっ！ブルーアイズ！おのれ…貴様！」

チリー「怒ってる余裕はないわよ！罨カード発動！ブリザード・リバース！自分の発動した魔法・罨カードの効果によって水属性以外のモンスターを破壊した場合、自分の墓地から水属性モンスター1体を特殊召喚する事ができる！」

ストーム「…。」

チリー「いくわよ！青氷の白夜龍！」  
ブルーアイズ・ホワイトナイトドラゴン

一進一退の攻防だが、それもとうとう終幕に近づきつつある、と会場も悟ったようで、自分の荷物を片付け始めている人たちもいる。

ブルーアイズの攻撃により、ストームが敗北するのだと、思っている人たちも…。

チリー「ブルーアイズでとどめを刺してあげるわ！喜ぶ事ね！！ねえねえ見てる見てる！？お母さん、お父さん、ケンタロウ、私、勝てるわ…！！」

ストーム「おい…。」

チリー「な…何よ…。もうさすがに万策尽きたでしょ！？」

その発言は、チリーの「もう打つ手なしであって欲しい。自分の勝利を確約させてほしい。」という願望から来るものであり、自分に対する言い聞かせでもあった。

ストーム「万策尽きた…ねえ…。それはお前の願望だろ？万策尽きた状態であって欲しいんだろ？」

自分の心が見透かされている事に動揺したチリーだったが…

チリー「そ…そんなの、当たり前じゃない！」

ストーム「俺の手札はまだ1枚あるんだぜ…。カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(0)

いかにも何かあり気な様子でカードを伏せるストームを見た帰りかけている観客は、荷物をゆっくりと足元に下ろし、再びサーキットを見始めた。

MC「ここで伏せカードを伏せたストーム！この伏せカードの存在で、チリーの攻撃判断を鈍らせる！」

ストーム「さあどうした…ブルーアイスで攻撃して来いよ…。」

チリー「…アタシのターン！」(1)

ストーム…SPCO

チリー…SPCO

チリー「イトドラゴンだったらお望みどおり、止めを刺してあげるわ！ブルーアイス・ホウ青氷の白夜龍で、ダイレクトアタック！」

氷結のブリザード・ストリーム！

ブリザード・ストリームがストームにまっすぐ向かう。ストームは、そこでゆっくりとトラップカードに手をかけた。

（次回へ続く）

<今日の最強カード>

ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン  
青氷の白夜龍

効果モンスター

レベル8 / 水属性 / ドラゴン族 / 攻撃力3000 / 守備力2500

このカードを対象にする魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選ばれた時、自分フィールド上に存在する魔法または罠カード1枚を墓地に送る事で、このカードに攻撃対象を変更する事ができる。

<次回の最強カード>

反撃の時

通常罠

このカードを発動したターンは戦闘によって発生する全てのダメージは0になり、モンスターも戦闘によっては破壊されない。自分の墓地に存在するチューナー1体を特殊召喚し、自分のデッキの一番上からカードを3枚めくる。めくったカードの中にレベル5以上のモンスターがあった場合、そのカードを特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、攻撃宣言はできず、このカードを発動した次の自分のターンのエンドフェイ

ズまで自分がシンクロ召喚を行わなかった場合、2000ポイントのダメージを受ける。

第24話・激突！青眼の白龍VS青氷の白夜龍！！（後書き）

更新しないのもアレだと思って焦り、変なところで終わらせてしまいました。

すみません（；ー；）

## 第25話 - 正体不明のチームC!?

ストーム

- ・ LP 1600
- ・ 手札 0 枚
- ・ (モンスター) なし
- ・ (魔法・罫) 1 枚
- ・ S P C O

チリー

- ・ LP 400
- ・ 手札 1 枚
- ・ (モンスター) ブルーアイス・ホワイトナイトドラゴン 青氷の白夜龍 (ATK 3000)
- ・ (魔法・罫) スピード・ショック ( )
- ・ S P C O

チリー「氷結のブリザード・ストリーム!」  
ストーム「罫発動! 反撃の時!」

反撃の時

通常罫

このカードを発動したターンは戦闘によって発生する全てのダメージは0になり、モンスターも戦闘によっては破壊されない。自分の墓地に存在するチューナー1体を特殊召喚し、自分のデッキの一番上からカードを3枚めくる。めくったカードの中にレベル5以上の

モンスターがあつた場合、1体だけ特殊召喚する事ができる。残りのカードはデッキに戻してシャッフルする。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、攻撃宣言はできず、このカードを発動した次の自分のターンのエンドフェイズまで自分がシンクロ召喚を行わなかつた場合、2000ポイントのダメージを受ける。

ストーム「墓地からチューナーを特殊召喚する！蘇れ、ダーク・リゾネーター！」

ダーク・リゾネーター：守備力300

チリー「ダーク・リゾネーターは1ターンに1度だけ、戦闘では破壊されないんだつたわね。まあいいわ。」

ストーム「それだけじゃないぜ！反撃の時の効果で、俺のデッキの上から、3枚のカードをめくるぜ！」

MC「反撃の時の効果でレベル5以上のモンスターがなければ、カードはデッキに戻ってしまう！これはまさに、賭けと言えるカードだぞ！！！」

チリー「デッキを信じてるって訳…？」

ストーム「残念だが、俺にその理屈は通用しない。デッキからカードをめくるってのは、確率から成り立ってるんだ！どんなにデッキを信じていようが、ダメな時だつてあるんだよ！！！」

憤っているのかいないのか、珍しく感情的に叫んでいるストーム。龍亞の頭には、以前にもストームが自分に対して似たような話で怒る場面が浮かび上がっていた。

龍亞「ストームは、何かあつたのかな…？」



遊星「かもしれない。あいつがブルーアイズを持っている理由と、何か関係があるのかもしれない。」

チリー「へえ…よくわかってるじゃない！だったら、さっさとカードを引きなさい！」

ストーム「いいぜ。3枚めくる！」

めくったカード：バイス・ドラゴン/シンメトリー・シールド/青  
アイズ・ホワイトドラゴン  
眼の白龍

チリー「ブルーアイズ…ホワイトドラゴン！？まさか…」

ストーム「いや、ブルーアイズを召喚しても、攻撃ができない。それにレベルが高くて、シンクロ素材にはなりにくい…だったら…俺はバイス・ドラゴンを特殊召喚！」

ジャック「バ…バイス・ドラゴンだと！」

バイス・ドラゴンとダーク・リゾネーター。ジャック・アトラスを髣髴させるフィールドであり、ジャックファンからはブーイングの嵐。

観客「ジャックの真似よ！」

深影「何アトラス様の真似しちやって、許せないわ！」

ストーム「安心しな！俺はレッド・デーモンズは持ってないから、そこまで真似はできないぜ！」

そんなの当たり前だ！という野次が飛んてくる。

チリー「くっ…ターンエンド。どんなシンクロモンスターがでてきても…そう簡単にブルーアイスは倒せない…と思うわ。」  
ストーム「強がってるなあ。俺のターン！」（１）

ストーム：SPCO

チリー　：SPCO

ストーム（引いたカードは…カウンター罠、オーバーウエルム…。仕方ないな…。）

ストーム「チリー。お前のデュエルにはかなり驚かされたよ。」

チリー「そう！当たり前じゃない！だって、スカンディナビア大会準優勝なんだもの！」

ストーム「まさか、俺の真の切り札を出す事になるうとはな…。」

チリー「えっ？」

遊星「真の切り札…！？」

ジャック「まさか！」

ストーム「俺はカードを１枚伏せ、（０）レベル５のバイス・ドラゴンに、レベル３のダーク・リゾネーターをチューニング！」

はるか古より受け継がれし伝家の宝刀よ、目覚めの時は来た。我に力を与えよ！シンクロ召喚！真実を、我が元に、Mystic Sphere！

大々的な大会で、ヒドウンシリーズを観客に晒してしまったストームに、チーム5D'sはもちろん、この3人も、啞然としていた。

ブラシド「な…何だ…。あのシンクロモンスターは!？」

ルチアーノ「Mystic Sphereだつて…?」

ホセ「む…。」

チリー「な…何よ!その球体。眩しいだけで、攻撃力も守備力も0じゃない!」

ストーム「ああ。だがこの球体で、お前にとどめを刺してやる。Mystic Sphereの効果発動!自分のエクストラデッキからレベル8のギガンテック・ファイターを除外して、モンスターカードの名前を宣言する!」

チリー「名前を…!?!」

ストーム「俺は、インフェルニティ・デス・ドラゴンを宣言!」

球体が闇に包まれ、そこから、「インフェルニティ・デス・ドラゴン」が現れた。

龍可「インフェルニティつて…!」

遊星「ああ。あれは鬼柳のカード…!」

MC「どうした事だ!?!このモンスターは、カードデータベースに載ってないぞーっ!」

チリー「な…何なの…!?!」

ストーム「そしてMystic Sphereは、インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果を得ている。手札が0枚の時、相手フィールド上のモンスター1体を破壊して、攻撃力の半分のダメージを

与える！インフェルニティ・デス・プレス！」

灼熱の炎がブルーアイスの体を融かして破壊した。そしてその炎が、チリーを襲う事となった。

チリー「ひっ…きゃあああああ！」

チリー：LP400 LP0

チリーの青いDホイールが停車し、歓声が巻き起こった。

MC「けっっちゃーくー！！ブルーアイズvsブルーアイスの戦いに  
終止符を打ったのは、ブルーアイズではなく、突如現れた正体不明  
のシンクロモンスター、Mystic Sphereだーっ！では  
ここで、ストームにインタビューだーっ！」

ストーム「インタビュー…？」

MC「あのシンクロモンスターの正体は…いかに！？」

ストーム「ハハハ…。それかい…」

と言って、ストームはスポットライトが当たり、客席からもわかりやすい、スタジアムの中央へと移動した。

ストーム「それに関しては秘密さ！今後、またMystic Sphereを使う機会が出てくるだろうから、またそんな時だけ！」  
MC「だそうだ！！またの機会にしようーっ！！！」

チリー「ストーム！」

ストーム「…？」

ストームがヘルメットを取ると、目の前にはふくれっ面をしたチリーがいた。外が寒いからか、頬が赤らんでいるのがよくわかる。

ストーム「ん？」

チリー「負けたわ。まさか、ブルーアイズでなくて、変なモンスターに止めを刺されるとはね。」

ストーム「おいおい。元々俺がブルーアイズを持ってるなんて知らなかった訳だし、ブルーアイズvsブルーアイズなんて、勝手に会場がやり始めただけだろう？ま、俺もその話に乗ったけどな。」

チリー「ま、何にせよ…。アタシの負けね。」

ストーム「そりゃそうだ。」

チリー「ストーム。」

ストーム「ん？」

チリー「負けんじゃないわよ！」

ストーム「おう！任せな」

互いに拳をぶつけ、微笑み合っていた。

その様子を遠目から見ていたチーム5D'sは、次は自分たちが対戦する、このデュエルを通じ、程よい緊張感を体感する事ができた、と思っていた。

~~~~~

決勝トーナメント2日目。午前10時00分。11時30分から遊星たちの試合が始まるため、もう既に控え室に入り、作戦を練っているのだが…

遊星「今日の対戦相手は…チームC…。」

ブルーノ「うん、どういう作戦を立てようか…。」

龍亞「って…。」

ジャック「どういうチームか詳細がわからないだとお!!!」

クロウ「落ち着けよジャック!」

いきり立ってしまったジャックを、クロウが座りながらなだめた。

ジャック「落ち着いていられるか!相手がどんなチームかわからないのでは…。」

クロウ「おいジャック。お前、対策なんていらねえって前に言っただろ。」

ジャック「それはそうだ!だが、相手のチームがどんな奴らなのかくらいは知っておきたいものだ!」

気が付けばジャック1人だけが騒いでいる状態となっている控え室で、周りの人は半ば対策を諦めているのだったが…

龍亞「ジャック。怖いのお?」

ジャック「な…何を言う!俺が対戦相手に恐れをなすなど考えられないのだ!」

遊星「対策は諦めるとしても、ジャックの言うように、どんな相手なのかは知りたいな…。」

ブルーノ「でも、パソコンでいくら調べても出てこないし、WRG P側に聞いても、チームの詳細なんて教えられないはずがないし…。」  
クロウ「どっかの大会で出た奴が、名前変えて出てきてんじゃないかねえのか？」

ジャック「それはないな。トーナメント表での名前は、いわば自分が出場している事を表明するメッセージのようなもの。大会出場者なら、同じチーム名にするはずだ。」

龍可「じゃあ、初出場者…？」

結局、チームCというチームがどんなチームなのか、判明する事もなく、そのままチーム5D's対チームCのデュエルが始まる時刻となり、チーム5D'sはMCに呼ばれ、入場ゲートから入場した。

MC「チーム5D's。今日はどんなデュエルを見せてくれるのかーっ！?!？」

ジャックが会場を見渡すと、1つ、ある事に気が付いた。

ジャック「…？」

カーリー渚の隣にステファニーが座っており、そしてその隣が…空席である事。

ジャック（フツ。アイツはやはり俺のファンには荷が重いという訳か…。）

MC「さあ、そしてチーム5D'sに敵対するチームの入場！チーム、C！」

チームCのメンバーが入場してくる。だが、その光景は、チーム5

D・Sや、観客にとっては、思いもよらぬものとなった。

ジャック「な…お前たちは…!!!」

遊星「っ…!!!」

チームCのリーダーの位置として、先頭に立っていた人物は…

牛尾「よう。チーム5D・S!」

クロウ「う…牛尾!」

龍亞「それに後ろの2人は…」

ブルーノ「風馬さんに、狭霧さん!？」

風馬「おう。お前らと戦えるなんて、光栄だぜ。」

深影「…。」

当然というべきか…その様子を見ていた会場のカーリーとステファニーは、立ち上がって激昂していた。

カーリー「な…何あれっ!?ズルいんだから!」

ステファニー「アタシもチーム組んで出場すればよかったあ…。」

カーリー「何よ。アンタがいると足手まといになって負けちゃうんだから!」

ステファニー「ん!?何か言った!？」

カーリー「言ったんだからあっ!」

深影「アトラス様…。アナタと戦う事になるとは…。」

ブルーノ「プラクティスの時、牛尾さんが戦うかもしれないと言っただけど…。まさか本当だなんて…。」



牛尾「へッ。バカ言っちゃいけねえぜ。俺だってデュエリストだからな。血が騒いだってことよ。」

クロウ「お前ら、チーム名でわかんないようにしていやがって…。」  
牛尾「わかつたら困るだろ？セキュリティがデュエル大会に出場してるってよ…。わかつたら、その期間で犯罪が起こるかもしれないぜ。」

クロウ「でもそのお陰で、対策はできなかったぜ。」

牛尾「心配すんな！俺たちだって、ついさっきまでは仕事してたんだからな。」

アキ「セキュリティの方はいいのかしら？」

風馬「問題ない、と思うぜ。」

例えセキュリティであってもデュエリストはデュエリストなのか、と思うチーム5D・Sであった。

MC「ではそれぞれピットクルーはブースへ、Dホイラーはレーンにスタンバイしてくれーっ！」

牛尾「よし、じゃあ始めるぜ。」

ジャック「チームセキュリティなど、チーム5D・Sの足元にも及ばないことを思い知らせてやるわ！」

クロウ「ってかどうしてチームCなんだ？セキュリティだったらSじゃねえか…？」

牛尾「うっ…。」

~~~~~

ブルーノ「それにしても、牛尾さんと風馬さんはともかく、深影さ

んはどんなデュエルをするんだろっ?」

龍可「意外と強いかもしれないわ。何しろ予選は勝ち上がっているんだから。」

アキ「確かに、それはあるわね…。」

MC「さあ、では準備が整ったところで、デュエルを始めよう!!  
チーム5D・svsチームC!」

シグナル「10…9…8…7…6…」

チアガール「ゴーゴーレッツゴー、ファイトッ、オーツ!」

シグナル「5…4…」

MC「ライディングデュエル!!…アクセラレーション!!…!!」

各車一斉にスタートし、二つのレーンが合流し、6台のDホイールが交じり合う。

牛尾「よし!手筈通りにいくぞ!」

風馬・深影「了解っ!」

クロウ「何だ?」

牛尾を頂点に、風馬と深影を底辺とした三角形を作りだし、フォーメーションを作った。

ジャック「何!?!」

3人の前に三角形がある事により、このままでは牛尾に先攻を取ら

れてしまう。

クロウ「くそつ。やるじゃねえか！だったらこっちだって、くらえ！」

第一コーナーを左に曲がっているとここで、クロウが風馬に、ジャックが深影にぶつかるが、風馬も負けじとクロウを押し戻す。

深影「アトラス様だからって、やらせません！」

風馬「やらせるか！」

ジャックとクロウが弾かれ、2人は安堵するが…

クロウ「今だ！行け、遊星！」

遊星「ああ！」

遊星号が加速し、少し崩れかけた三角形の間を通り抜けて行った。

深影「あつ！」

風馬「しまった！」

牛尾が遊星に並ばれた、と思った瞬間、もう既に遊星に抜かれていた。

牛尾「なにっ！！」

クロウ「残念だったな！こっちだって、フォア・ザ・チームの精神でやってんだぜ！」

風馬「くっ！」

MC「なんと、先攻を取ったのはチーム5D・S！一体どんなデュ

エルを見せてくれるのかーっ!？」

6人「デュエル!!!」

不動遊星：LP 4000  
ジャック：LP 4000  
クロウ　　：LP 4000

VS

牛尾哲　　：LP 4000  
風馬走一　：LP 4000  
狭霧深影　：LP 4000

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

反撃の時

通常罾

このカードを発動したターンは戦闘によって発生する全てのダメージは0になり、モンスターも戦闘によっては破壊されない。自分の墓地に存在するチューナー1体を特殊召喚し、自分のデッキの一番上からカードを3枚めくる。めくったカードの中にレベル5以上のモンスターがあった場合、そのカードを特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効になり、攻撃宣言はできず、このカードを発動した次の自分のターンのエンドフェイ

ズまで自分がシンクロ召喚を行わなかった場合、2000ポイントのダメージを受ける。

<次回の最強カード>

ジャンク・アーチャー

シンクロモンスター

レベル7/地属性/機械族/攻撃力2300/守備力2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターをゲームから除外する。この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

## 第26話・レベルアップを防ぐために！

ジャック「俺の先攻！」（6）

ジャックのドローと共に、戦いの火蓋が切って落とされた。厳密に言えば第一コーナーを奪い合うところから戦いは始まっていたのだが…

ジャック「俺はバスター・ビーストを召喚！」

《バスター・ビースト》

レベル4 / 地属性 / 獣戦士族 / 攻撃力1900 / 守備力1200  
このカードを手札から墓地に捨てる。デッキから「バスター・モード」1枚を手札に加える。

461

ジャック「俺はこれでターンエンドだ！」（5）

牛尾「いきなり攻撃力1900か…張り切ってるな…。俺のターン！（6）俺は手札から、チェイス・スカッドを守備表示で召喚して、ターンエンド！」（5）

チェイス・スカッド：守備力600

クロウ「俺のターン！」（6）BF - 大旗のヴァーユを守備表示で召

喚！」

《BF - 大旆のヴァーユ》

チューナー（効果モンスター）

レベル1 / 闇属性 / 鳥獣族 / 攻撃力800 / 守備力0

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の「BF」と名をついたモンスター1体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「BF」と名をついたシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

クロウ「さらに俺は、カードを2枚伏せて、ターンエンド！」(3)「

風馬「俺のターン！」(6)俺はヘルウェイ・パトロールを召喚！」

ヘルウェイ・パトロール：攻撃力1600

風馬「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」(4)

遊星「俺のターン！俺は手札から、シールド・シンクロンを守備表示で召喚し、ターンエンド！」(5)

《シールド・シンクロン》

チューナー（効果モンスター）

レベル2 / 風属性 / 機械族 / 攻撃力0 / 守備力1850

？

5人のDホイーラーが、パッパッパとデュエルを進めていく。W

RGPでは、観客にスリリングなデュエルを見せるため、テンポも重要となる。運営側からすると、このテンポは理想通りだろう。

ところが…

深影「私のターン！（6）」

ブルーノ「深影さんのターンだ！」

龍可「どんなデュエルをするのかしら…？」

深影はカードをドロし、そのまま手札のカードを眺めている。しかし全くわからないといった表情ではなく、悩んでいるといった感じである。

MC「おおーっとチームCの登録ナンバー3、狭霧Dホイラー、長考かーっ!？」

深影「うーんと…これがこうで…。」

ジャック「深影!！」

深影「ひっ！アトラス様!？」

ジャック「そんな腑抜けた戦い方で、この俺が倒せるとでも思っているのか!？」

深影「も…申し訳ありません!！」

前方を走っていた牛尾が、深影の真横に位置した。

牛尾「深影さんッ！ジャックになんて謝ることはないっすよ！敵ですから!！」

ジャック「何だっ!？ジャック・アトラスをなめてもらっては困るぞ!！」



深影「私は手札から、アリユール・クイーン魅惑の女王LV3を守備表示で召喚！」

《魅惑の女王LV3》

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻撃力500 / 守備力500  
1ターンに1度だけ自分のメインフェイズ時に相手フィールド上のレベル3以下のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる（この効果で装備できる装備カードは1枚まで）。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。  
自分ターンのスタンバイフェイズ時、この効果で装備カードを装備したこのカードを墓地に送る事で、「魅惑の女王LV5」1体を手札またはデッキから特殊召喚する。

遊星「アリユール・クイーンだと!?!」

ジャック「魅惑の女王とは…随分とでしゃばるようになったのだな、深影よ！」

深影「あつ！申し訳ありません！」

牛尾「だあかあらあ…!!」

深影「アリユール・クイーンの効果発動！1ターンに1度、相手モンスター1体を装備できる！私はBF - 大旆のヴァーユを装備します！」

クロウ「な…何だつて!?!」

魅惑の女王が錫杖を振りかざすと、ヴァーユがアリユール・クイーンの後方へと移動した。

クロウ「ああっ！戻ってこいよ、ヴァーユ！」

遊星「しかもヴァーユが装備されている状態で深影のターンを迎えると、アリュール・クイーンがレベル5に進化してしまう！」

深影「カードを2枚伏せて、ターンエンド！」（3）

MC「このジャックのターンから、お互いのチームにスピードカウ  
ンターが溜まる！一体どのようなデュエルが繰り広げられるのだろ  
うかーっ!？」

ジャック「俺のターン！（6）」

5DS：SPC1

セキユ：SPC1

ジャック「フツ！来たな…。深影！魅惑の女王がレベルアップする  
には、貴様のスタンバイフェイズまで魅惑の女王がフィールドに残  
っている必要がある！ならばこのターンで撃破するまでだ！」

牛尾「ジャックの野郎…深影さんを狙うとは卑怯な…。」

ジャック「卑怯もヘチマもあるまい！これはチーム戦！互いのフォ  
ローをしつつ、必要最低限な事は、自分で行う！俺たちと戦って敗  
れたチームは、その部分いずれかが欠けていたのだ！」

わざと会場に響かせるように大仰に言うジャック。自分の言う事こ  
そ正しいと言わんばかりの発言だが、この発言はよくよく考えれば、  
当たり前であった。

ジャック「俺は手札から、マッド・デーモンを攻撃表示で召喚！（

5）」

マッド・デーモン：攻撃力1800

ジャック「マッド・デーモンで、アリュール・クイーン魅惑の女王LV3を攻撃！ポーン・スプラッシュ！」

深影「ア…アトラス様…ト…トラッ…」

風馬「そうはいくか！カウンター罠、発動！攻撃の無力化！」

深影「風馬君！」

《攻撃の無力化》

カウンター罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

ジャック「風馬、貴様！」

風馬「チーム戦だって、言ったのはお前だろ？」

牛尾「風馬…っ。」

ストーム「何だか友達6人で集まってデュエルしてるみてえだな…。」

ジャック「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」（4）

牛尾「俺のターン！」（6）

5DS：SPC2

セキユ：SPC2

牛尾「俺は手札からサーチ・ストライカーを召喚！」

サーチ・ストライカー：攻撃力1600

牛尾「そして俺はチェイス・スカッドを攻撃表示にして……」

チェイス・スカッド：攻撃力1400

牛尾「クロウ！深影さんのお陰で、お前のフィールドにはモンスターがいねえ！一気にダイレクトアタックを叩き込んでやるぜ！くらえ！サーチ・ストライカーの攻撃！クレバー・ストライク！」

サーチ・ストライカーの銃口がクロウに向き、その先が太陽に反射して光る。それを見た観客席のマーサハウスの子どもたちは、慌てて手を口にあてた。

ギンガ「クロウ兄ちゃん！！」

ココロ「ああっ！」

クロウ「ガキどもも見に来てんのか！だったらクロウ様の無様な姿は見せられねえな！リバー・スカードオープン！《聖なるバリア・ミラーフォース》！」

クロウの周囲をレンズ状のバリアが包み、サーチ・ストライカーの攻撃を反射し、サーチ・ストライカー、チェイス・スカッドが破壊された。

《聖なるバリア・ミラーフォース》  
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。

牛尾「ミ…ミラーフォースだとお!?」

MC「クロウのミラーフォースが華麗に決まったあーっ!!牛尾のモンスターは全滅だー!」

深影「牛尾君!何してんの!!!いい気になって攻撃するからでしょっ!」

牛尾「深影さん!あ…すみません。」

クロウ「深影の言うとおりだな!」

牛尾「くそっ、クロウ。覚えてるよ…。俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド!」(4)

クロウ「んでもって俺のターンだぜ!」

5DS:SPC3

セキユ:SPC3

クロウ「ドロー!」(4)俺は手札から、BF・暁のシロツコを召喚!  
!」(3)

BF・暁のシロツコ:攻撃力2000

クロウ「こいつはレベル5のモンスターだが、自分フィールドにモ

ンスターが存在しない場合、手札からリリースなしで召喚する事ができるぜ！」

反撃の時だと、会場のクロウファンはクロウ！コールを轟かせる。チーム5D・sのメンバーの中で最も多くファンを持つのはジャックであるが、クロウもそこその人気を誇る。そのブラックフェザーの強力さ故なのかは定かではないが…

クロウ「さあいくぜ！BF - 暁のシロツコで、ヘルウェイ・パトロールを攻撃！」

風馬「俺のモンスターか！」

クロウ「ああ！次はお前のターンだからな！面倒な事が起きねえうちに、壁モンスターは倒しておくのよ！」

牛尾は自分の魔法・罠ゾーンに手をかけはしたものの、ヘルウェイ・パトロールが攻撃を受けた瞬間には、トラップを発動するようなそぶりは見せなかった。

風馬「ぐわああっ！」

風馬走一：LP4000      LP3600

クロウ「さらに俺は罠カード、BF - アサルト・ブロウを発動！」  
風馬「何っ!？」

《BF - アサルト・ブロウ》

通常罠

自分フィールド上に存在する「BF」と名の付いたモンスターが、相手モンスターを戦闘によって破壊し墓地へ送った時に、自分フィールド上に表側攻撃表示で存在する「BF」と名の付いたモンスター1体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターはこのバトルフェイズでもう一度だけ続けてモンスターに攻撃をする事ができる。

クロウ「この効果で、もう一度モンスターに攻撃を加えるぜ！お前らの場に残っているモンスターは、アリュール・クイーンだけだ！さあ、返してもらうぜ！俺のヴァーユをな！」

暁のシロツコが「うおおお！」と、まるで人間のように声を張り上げ、その拳を、アリュール・クイーンに向かって振りかざした。

牛尾「深影さん！ちくしよ、クロウ！やらせるか！トラツ…」

深影「トラツプカード発動！永続罫、アリュール・トリック！」

牛尾「へっ!？」

《アリュール・トリック》

永続罫

自分フィールド上に表側表示で存在する「アリュール・クイーン魅惑の女王」と名の付いたモンスターが攻撃対象となった時に発動する事ができる。その攻撃を無効にする。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、「アリュール・クイーン魅惑の女王」と名の付いたモンスターを攻撃対象としたモンスターの攻撃力は半分になる。

深影「さあ！これでアリュール・クイーンへの攻撃は無効よ！」

クロウ「何だつて！」

深影「そして、魅惑の女王を攻撃したモンスターの攻撃力は半分になる！」

クロウ「なにい！」

B F - 暁のシロツコ：攻撃力2000 攻撃力1000

クロウ「くそ……。やるな……。ターンエンドだ！」(3)

風馬「俺のターン！」(5)「

5 D S : S P C 4  
セキユ : S P C 4

風馬「クロウ！お前は俺のヘルウェイ・パトロールを倒して満足しているのかもしれないが、それは甘いぜ！」

クロウ「何!？」

風馬「俺は墓地のヘルウェイ・パトロールの効果を発動！墓地から除外して、手札から攻撃力2000以下の悪魔族モンスター1体を特殊召喚する！」

ジャック「ちいっ。クロウの奴。」

クロウ「でもどの道、倒さなくちゃいけなかったろうが!!」

ジャック「それはそうだが……。」

風馬「俺は手札から、ヘルウェイ・ポリスオフィサーを特殊召喚！」

(4)

《ヘルウェイ・ポリスオフィサー》  
効果モンスター

レベル6 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力1900 / 守備力1600



？

クロウ「レベル6で攻撃力1900だと？大した事はねえモンスターだぜ！」

風馬「へへへ…だが攻撃力1900あれば、下級モンスターは片っ端から潰せるぜ！俺はシールド・シンクロンを攻撃！」

遊星「シールド・シンクロンを…！」

影の薄かったシールド・シンクロンだが、そこを風馬は逃していなかった。先ほどのターン、クロウが影の薄かったヘルウェイ・パトロールを逃さずに倒した事により、印象が残り、風馬はシールド・シンクロンに気づく事となってしまったのだ。

ところが、遊星もそれはある程度予測済みなようだ…。

遊星「シールド・シンクロンの効果発動！スピニング・バリア！」

自分の体よりも大きな白銀の盾を持つ戦士が、その場で勢いよく数回転し、ヘルウェイ・ポリスオフィサーの攻撃を弾き返した。

風馬「なにつ！？」

風馬：LP3600    LP3300

《シールド・シンクロン》

チューナー/効果モンスター

レベル2/風属性/機械族/攻撃力0/守備力1850

このカードが召喚・特殊召喚された時、相手は罨カードを発動する事はできない。1ターンに1度だけ、自分フィールド上に表側表示で存在する「シンクロン」と名の付いたモンスターを攻撃対象とした相手モンスターの攻撃を無効にし、相手に300ポイントのダメージを与える事ができる。また、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、「シンクロン」と名の付いたモンスターをシンクロ素材としてシンクロモンスターをシンクロ召喚した時、相手は罨カードを発動する事はできない。

遊星「シールド・シンクロンが表側表示で存在する場合、1ターンに1度だけ、自分フィールド上に表側表示で存在するシンクロンと名の付いたモンスターへの攻撃を無効にし、300ポイントのダメージを与える！」

風馬「そういう事だったのか…。だが、恋愛は程よくしつこく、捜査はとことんしつこくって、言うだろう！だから…」

牛尾「おい風馬!!！」

風馬「えっ!?!」

牛尾「お前、誰からそんな言葉を…?」

風馬「あ…。」

他の上司から教わったのかと気になったので、牛尾が尋ねているだけなのだが、風馬は不思議と悪寒が走る思いがしていた。

深影「私です！」

牛尾「え…!?!?深影さん!?!」

風馬「あちゃー…。こりゃやっちゃった。」

牛尾「俺が聞いてねえ名言が、なんで風馬が知ってやがる!?!風馬

！お前後で覚悟しておけよ！」

風馬「ええっ!?!」

深影「牛尾君！風馬君の邪魔しないの!?!」

デュエルのペースを乱されることは、初心者である深影にとつてみれば、かなりのプレッシャーとなる。あらかじめ決められた段取りでデュエルされている事を前提としているのが初心者であるため、余計な事が起きると、慌ててしまうものなのだ。

しかしその言葉は牛尾の嫉妬心をくすぐるのだが…

牛尾「か…風馬あ…。」

クロウ「おいおい、それで、どうなんだ？捜査がしつこいのが、関係あんのか？」

風馬「あるんだなあ…。ヘルウェイ・ポリスオフィサーのモンスター効果だ！このカードは上級モンスターだが攻撃力が低い。その代わり、常にバトルフェイズで2回攻撃ができる！」

遊星「なに!?!」

風馬「今度こそ、シールド・シンクロンを破壊してやるぜ！」

遊星「シールド・シンクロン!?!」

風馬「そしてヘルウェイ・ポリスオフィサーの効果発動！相手モンスターを戦闘で破壊した時、相手にそのレベル×300ポイントのダメージを与える！」

遊星「ぐわあああっ！」

不動遊星：LP4000 LP3400

風馬「俺のターンはまだ終わっちゃいないぜ！手札からヘル・セキ

ユリティを守備表示で召喚して、カードを1枚伏せて、ターンエンドだ！」(2)

ヘル・セキユリティはチューナーであるため、早いところ片付けたいが、深影のアリユール・クイーンも放つてはおけない、と、頭を抱える不動遊星。しかし今の彼は、カードをドローするしかない。

遊星「俺のターン！」(6)

SDS：SPC5

セキユ：SPC5

遊星「俺は手札から、ジャンク・シンクロンを召喚！」(5)

ジャンク・シンクロン：攻撃力1300

遊星「そして俺は、ジャンク・サーバントを特殊召喚！」(4)

ジャンク・サーバント：攻撃力1500

遊星「このカードは、自分フィールド上にジャンクと名の付くモンスターが存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる！」

ここまで順調に手札からカードを出していった遊星だが、ここで手が止まった。

遊星(深影のフィールドには、アリユール・クイーンがいる。牛尾の場にはモンスターは存在しない。風馬のフィールドには2体のモ

ンスター。どうする…？やはりアリュール・クイーンのレベルアップを防ぐべきか…。牛尾のライフを削るか…。風馬のシンクロ召喚を防ぐか…。( )

彼の目が、一瞬だけ牛尾と合った。ところが牛尾はすぐに目を逸らしてしまった。

遊星「いくぞ！ジャンク・シンクロンで、牛尾にダイレクトアタック！」

その声を聞いた瞬間、牛尾は「セキュリティの尋問をやっておきながら、目を逸らすなんて」と思ったに違いない。

牛尾「ゲツ！俺がよっ！！」

ジャンク・シンクロンの拳が、牛尾の目の前で振るわれ、牛尾が目をつむり、Dホイールが大きく横に揺れた。

深影「牛尾君！！なにやってんの！！一応一番デュエル上手いんでしょ！？」

牛尾：LP4000      LP2700

牛尾「勝負つてのは…時の運なんっすよ。」

アキ「まだ遊星の場にはモンスターが残っているわ！」

龍亞「いつけーっ！遊星！」

ブルーノ「牛尾さん大丈夫かなあ…。」

遊星「ただだぜ牛尾！ジャンク・サーバントで、ダイレクトアタック！」

牛尾「そう何度も攻撃を受けて堪るか！！トラップ発動！セキュリティ・ボール！」

《セキュリティ・ボール》  
通常罠

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体の表示形式を変更する。相手の魔法・罠カードの効果によって、セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に存在するモンスター1体を選択し破壊する。

牛尾「これで、ジャンク・サーバントを守備表示にする！」

しかし牛尾のたった一枚の罠カードが、ここで使われてしまった。この状態でジャックのターンを終えなければならぬのは、彼にとつてとても辛いところだ。ジャックの場にはまだバスター・ピーストとマッド・デーモンが残っているのだから…。

クロウ「遊星！守備表示にされたって構わねえよな！」

ジャック「お前の狙いは…。」

遊星「ああ。いくぞ！レベル4のジャンク・サーバントに、レベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！」

集いし叫びが、木霊の矢となり空を裂く。光射す道となれ！シンク

口召喚！出でよ、《ジャンク・アーチャー》！

ジャンク・アーチャー：攻撃力2300

シンクロ召喚が行われる際の演出というものは、たとえ最上級のモンスターをアドバンス召喚する際でも見られないようなもので、チューナーモンスターが光の輪となり、その輪がチューナーでないモンスターを囲み、チューナーでないモンスターが星となるもの。そしてシンクロモンスターは光の中から現れ、会場を威圧する。

深影「でも、メインフェイズ2でシンクロ召喚を行っても、攻撃はできないハズ！」

ジャック「フツ。基本くらいは勉強したという事か！だが甘いな。」  
遊星「俺の狙いは…これだ！ジャンク・アーチャーの効果発動！デ  
イメンジョン・シュート！」

ジャンク・アーチャーが弓を射て、アリユール・クイーン魅惑の女王へと攻撃した。

深影「アリユール・クイーン魅惑の女王が！？」

遊星「ジャンク・アーチャーの効果で、このエンドフェイズまで、  
アリユール・クイーンを除外してもらおう！」

深影「そんな！」

遊星「ターンエンド！」（4）

すぐにターンエンドしたため、アリユール・クイーンがフィールドに戻ってきた。チーム5D'sのピットブースでは、龍亞が疑問を投げかけている。

龍亞「えっ！？今の、何か意味があったの！？」

アキ「あつたわ。アリュール・クイーンを良く見てみなさい。」

龍亞「アリュール・クイーンを……？………あっ！良く見たら結構美人！」

龍可「そんな事を聞いてるんじゃないの！！」

ボケとツツコミのような双子のやりとりを見たアキとブルーノは、和やかに微笑んだ。

アキ「ふふつ。結構美人かもしれないけど、良く見たら…BF・大旆のヴァーユがいないでしょ？」

龍亞「あ！確かにそうだ！ってことは…装備カードじゃなくなったの！？」

ブルーノ「そうだよ。モンスターに装備されている装備カードは、そのモンスターがフィールドを離れると、墓地に送られるんだ。つまり、ジャンク・アーチャーの効果で少しでも除外されたら、アリュール・クイーンはモンスターを装備した状態じゃなくなるんだ。」

龍亞「でも、何か意味があるの？」

龍可「あるわよ。アリュール・クイーン魅惑の女王がレベルアップするためには、自身の効果で、モンスターを装備してなければならぬの。」

龍亞「って事は…大旆のヴァーユを装備してなくちゃ、レベルアップはできなかつたんだね！」

ブルーノ「そいう事。」

深影「これじゃ…確かにレベルアップできないわ。やっぱり…デッキの調整が不足していたのかしら…。」

すると深影の横に牛尾が並んだ。しかし牛尾は深影の顔を見ている訳ではなかった。



牛尾「大丈夫です。深影さん。レベルアップができないからと言って、デュエルに負けた訳じゃありません！」  
深影「牛尾君……。そうね。今回はチームで勝たなくちゃいけないんだからね。」

風馬「チームセキュリティ、ここからが本番って訳だぜ!!!」

MC「チームC、反撃の時だそうだーっ!!!チームCの戦略やいかに!!!」

牛尾・深影・風馬「チームC……。」

(次回へ続く)

<今日の最強カード>

ジャンク・アーチャー

シンクロモンスター

レベル7/地属性/機械族/攻撃力2300/守備力2000

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターをゲームから除外する。この効果で除外したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

<次回の最強カード>

デーモン・カオス・キング

シンクロモンスター

レベル7 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2600 / 守備力2600  
悪魔族チユナー + チユナー以外のモンスター1体以上  
このカードの攻撃宣言時、相手モンスターの攻撃力・守備力を、バ  
トルフェイズ終了時まで入れ替える事ができる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8832t/>

---

遊戯王5D's-本当の支配者

2011年12月26日01時49分発行